(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第77集

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第11集

下佐野遺跡

Ⅰ地区・寺前地区(2)

縄文時代・古墳時代編②

1989

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第77集

上 越 新 幹 線 関 係
埋蔵文化財発掘調査報告

第 11 集

下 佐 野 遺 跡

Ⅰ地区・寺前地区 (2)

縄文時代・古墳時代編②

1989

群 馬 県 教 育 委 員 会
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
東 日 本 旅 客 鉄 道 株 式 会 社

寺前地区3号方形周溝墓出土壺形土器

小形仿製鏡

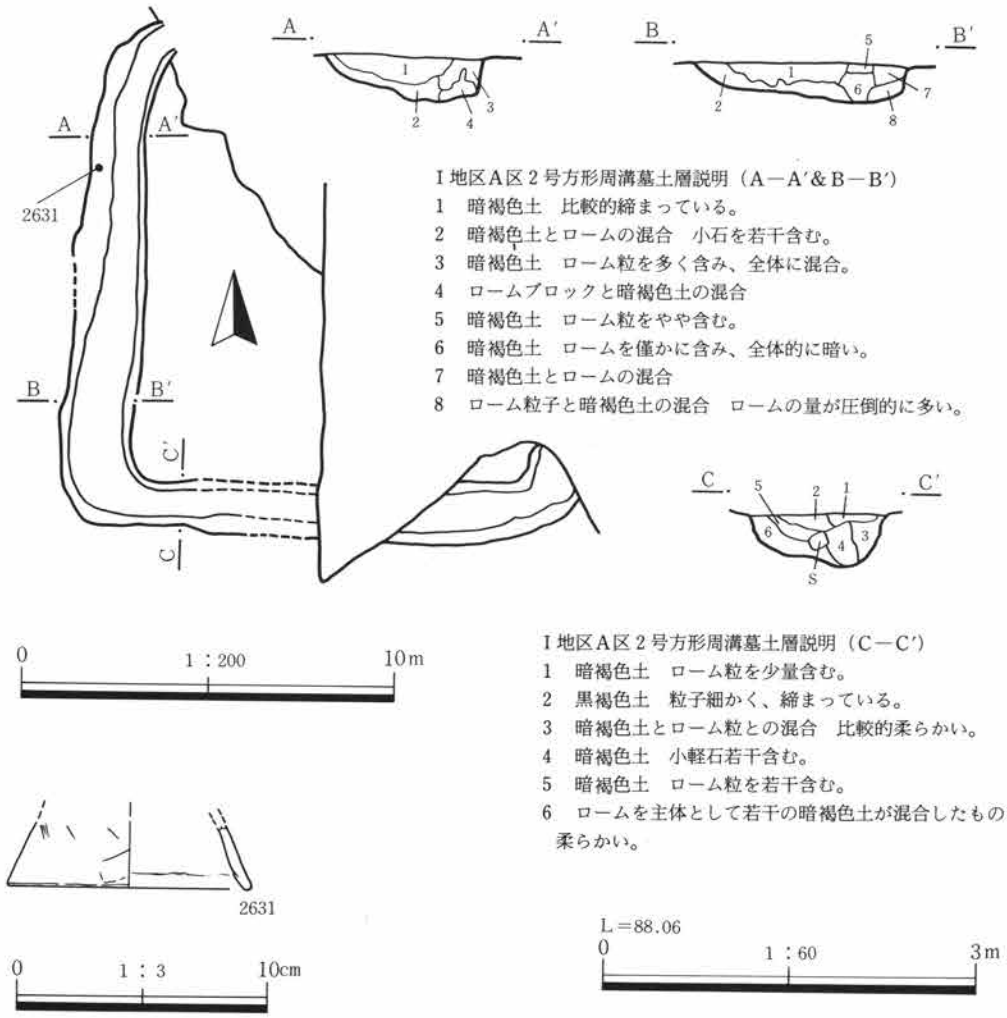
1地区A区4号前方後方形周溝墓出土

Ⅰ地区Ａ区２号方形周溝墓（第210図、第61表）

本方形周溝墓は、約半分が調査区内に存在する。Ａ区１号館跡の堀・５号溝と重複しているが、どの遺構よりも本方形周溝墓の方が古い。

方台部は、東南辺で10.5m、西南辺が推定11.5mでやや隅丸方形となる。主軸はＮ―35°―Ｗである。周溝の幅は、1.3m～1.8mであり、コーナー部がやや狭くなっている部分もある。周溝の堀り方は、内側がやや急で外側は緩やかとなる部分が多い。深さは、30cm～40cmである。

遺物は、周溝底面より約20cm上方から、台付甕の小破片（2631）が出土している。本方形周溝墓の時期は、古墳時代前期と考えられる。（飯塚）



第210図　Ⅰ地区Ａ区２号方形周溝墓遺構・遺物図

第 61 表　Ⅰ地区Ａ区２号方形周溝墓遺物観察表

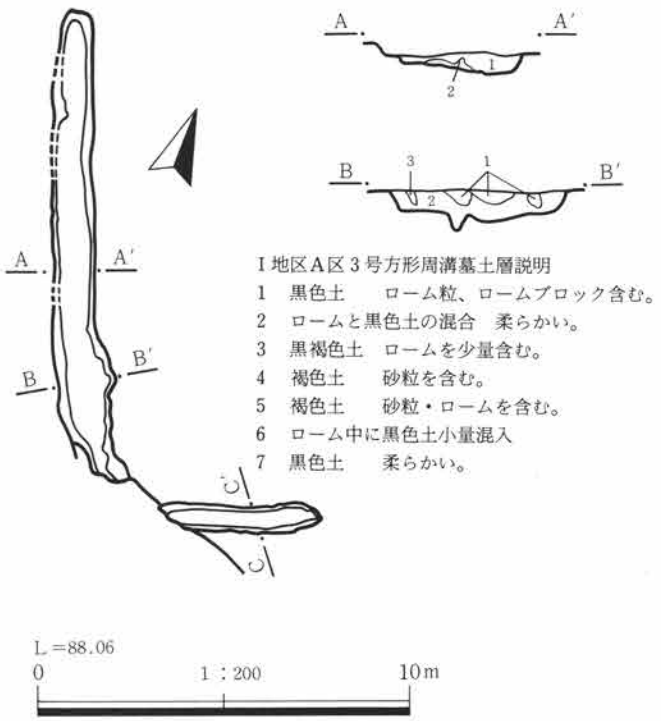
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
2631	台付甕 土師器	器高:(25㎜)口径:—底径:[98㎜]最大径:—台部:1/6残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い褐。	台部折り返し。内外面:なで。	周溝内。

Ⅰ地区Ａ区３号方形周溝墓（第211・212図、第62表）

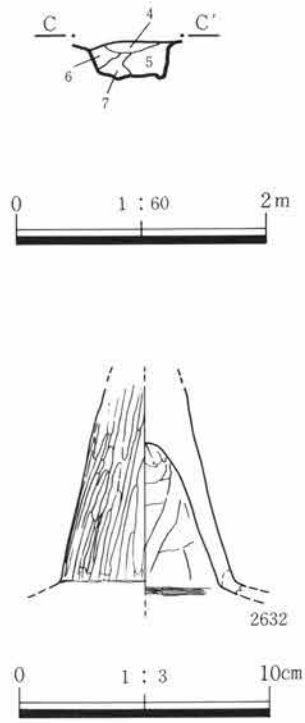
Ａ区４号方形周溝墓の東側約2.5mで確認された。14号住居跡、１号館跡と重複しており、１号館跡の堀によって南コーナーが切られている。周溝は全周しておらず、Ｌ状の溝が検出されたのみである。

規模は、幅が西側周溝で約１m、南側周溝で約60cmであるが、深さはともに約30cmである。なお、西側周溝の走向はＮ—22°—Ｗである。周溝中よりの出土遺物として、高杯脚部（2632）がある。

（飯塚）



第211図　Ⅰ地区Ａ区３号方形周溝墓遺構図



第212図　Ⅰ地区Ａ区３号方形周溝墓遺物図

第 62 表　I 地区A区 3 号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
2632	高杯 土師器	器高:(82㎜)口径:—底径:—最大径:—脚部:¾残	2～3㎜の小石。砂粒を含む。酸化。鈍い褐。	外面:篦磨き。内面:篦削り。	周溝内。

I 地区A区 4 号前方後方形周溝墓（第213～222図、第63表、付図 1 、図版38・39・44～47）

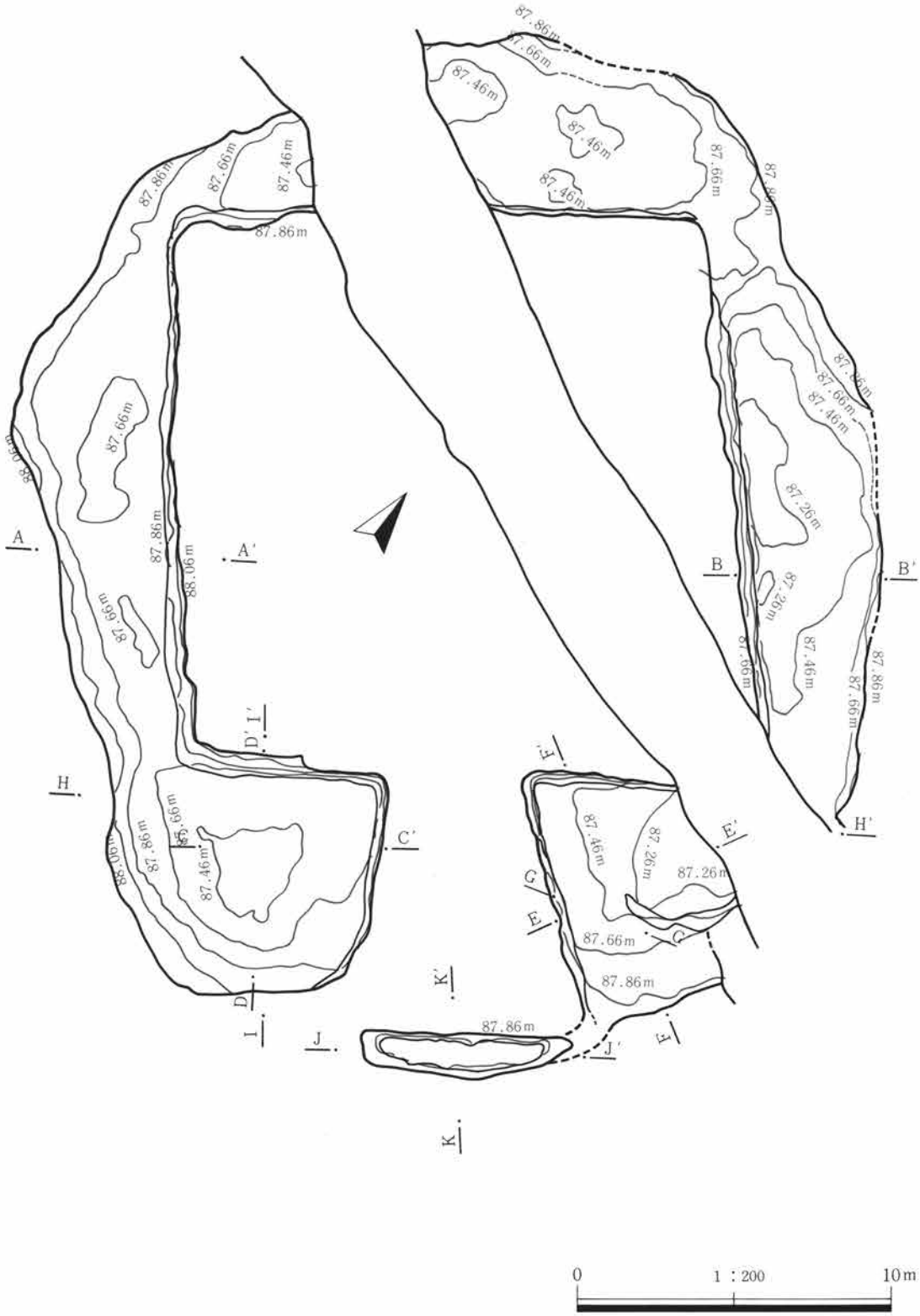
本周溝墓は、前方後方形を呈する。全体の約 3 分の 1 が調査区域外であったが、調査を実施した昭和51年当時においては、特異な形態であり類例も少なかったことや、周溝中より小形仿製内行花文鏡が出土したこと等により、遺構の全容を解明すべく新幹線路線外へと調査範囲を拡張した。他の遺構との関係では、A区 1 号館跡・13号住居跡・18号住居跡・19号住居跡・21号住居跡・25号住居跡・26号住居跡と重複するが、いずれの遺構よりも本方形周溝墓の方が古い。

本方形周溝墓は、後方部の各辺長がまちまちで、コーナーは直角とはならず、方形の相対する辺も平行しない。又、前方部も、左右対象とはならない。ただ一つ併行するのは、後方部後方辺と前方部前端線のみである。この平行する両線に直行する線を主軸として設定すると、主軸は、N—37°—Wとなる。

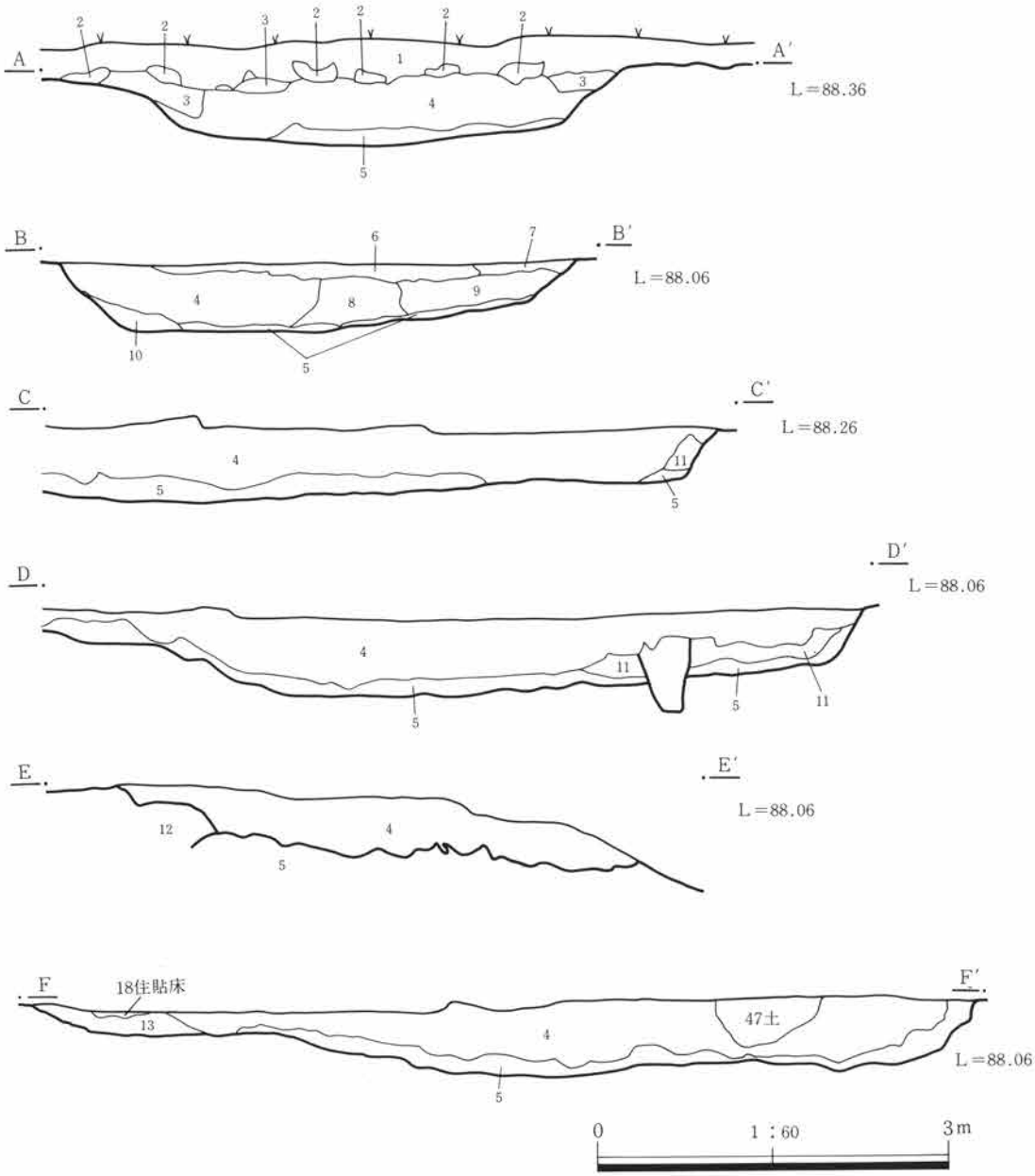
規模は、全長が25.9mである。又、主軸における後方部の長さは17.5m、前方部の長さは8.4mとなる。更に、後方部後方辺の長さは16.8m、後方部前端辺の長さは18.5m、前方部前端の幅は7.1mとなる。

周溝は、後方部においては、各辺の中央付近の幅が最も広く 5 m～5.5mとなるが、コーナー付近においては、2 m～2.5mと狭くなっている。又、前方部側の周溝は、7.5mと最も幅が広くなっている。前方部前端の溝は、ローム上面において約1.4m×約6.7mの長隋円形状を呈するが、本来この溝は、向かって右側部分がローム漸移層までにしか達しない浅い溝によって、右側の周溝部分とつながっていたことが、調査段階初期の表土除去作業時に確認されている。周溝の深さは、前方部前端部分を除くと、70cm～ 1 mである。周溝の幅が広くなっている部分が深く、コーナー部が浅くなっている。なお、前方部前端部分の溝は、最も深い部分で50cmである。周溝の堀り方は、方台部側で急傾斜となり、外側では緩やかとなっている。

本方形周溝墓出土の遺物には、多数の土師器の他に小形仿製内行花文鏡 1 面とガラス小玉 5 個がある。全て周溝中からの出土である。土師器は、周溝のほぼ全域より出土している。土師器の出土レベルは底面より 2 ～ 3 cmから約15cm上方までがほとんどで、それより更に上層に存在する土器には小破片が多い。なお、完形に近い土器や比較的まとまった土器の多くは、底面より 2 ～ 5 cm上方に存在する。土器は周溝全域に存在するものの、比較的まとまった土器は、次の 6 グルー



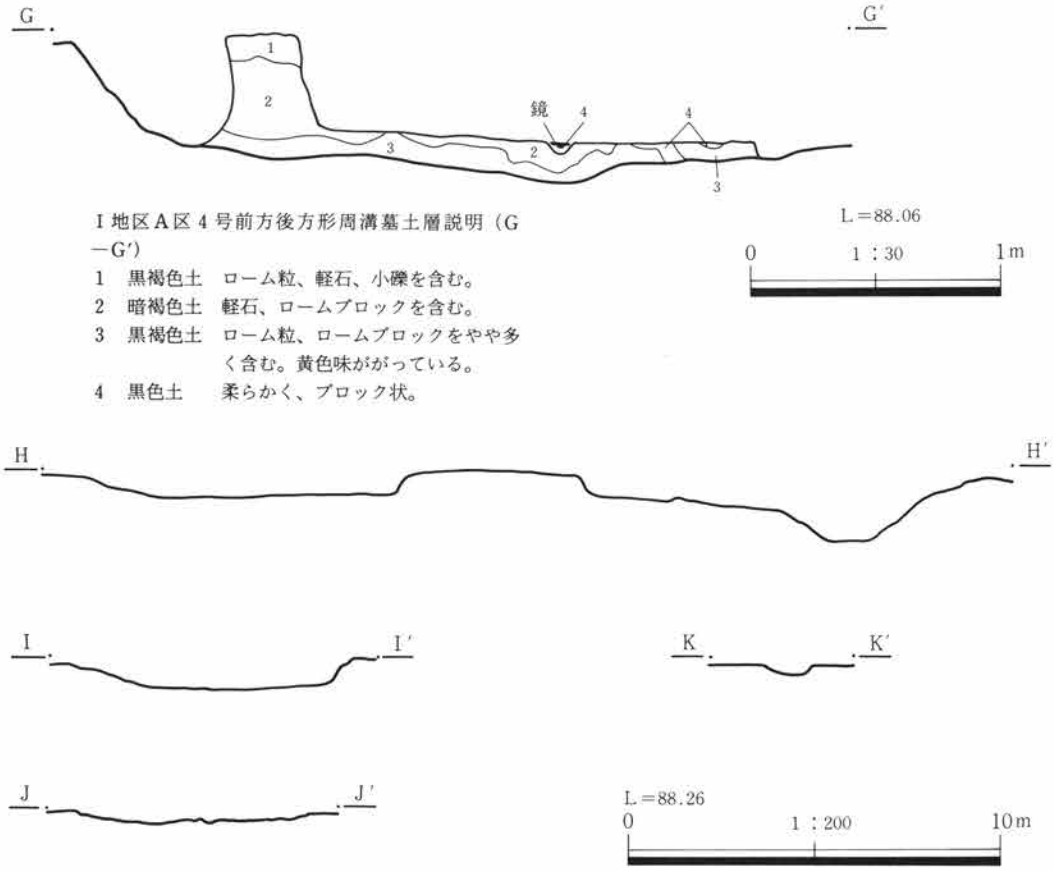
第213図　Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓遺構図(1)



Ⅰ地区A区4号前方後方形周溝墓土層説明（A－A′～F－F′）

1　耕作土
2　A軽石
3　灰褐色土　B軽石を多く含む。
4　黒褐色土　ローム粒、軽石、小礫を含む。
5　黒褐色土　ローム粒、ロームブロックをやや多く含む。黄色味ががっている。
6　褐色土　小石を含む。
7　褐色土　B軽石を多く含む。
8　黒褐色土　軽石、小石を含む。
9　褐色土　ローム粒、ロームブロックを含む。
10　黄褐色土　ローム粒の流れ込み。
11　黒褐色土　ローム小粒を含む。
12　暗褐色土　軽石、ロームブロックを含む。
13　褐色土　柔らかい。

第214図　Ⅰ地区A区4号前方後方形周溝墓遺構図(2)

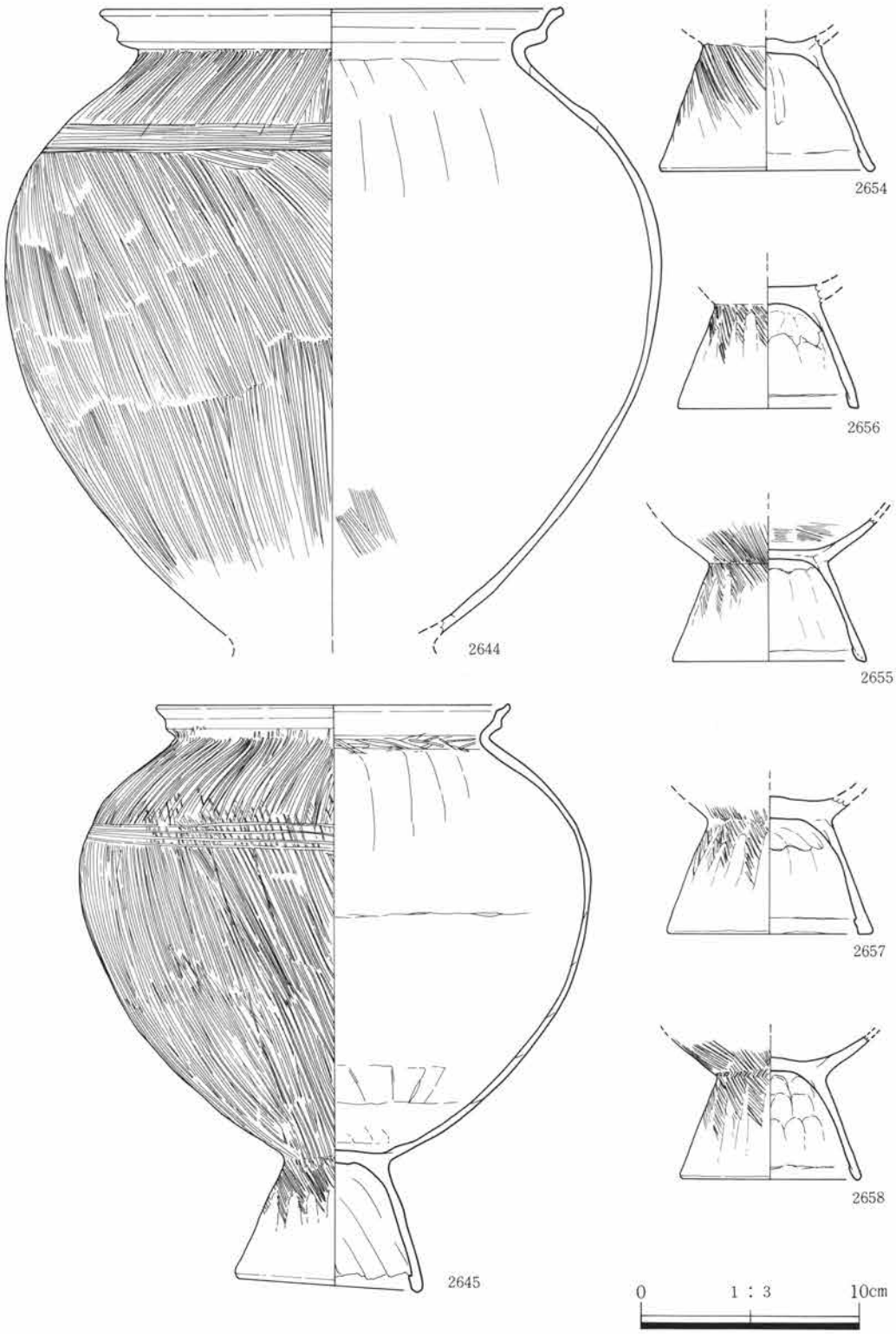


第215図　Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓遺構図(3)

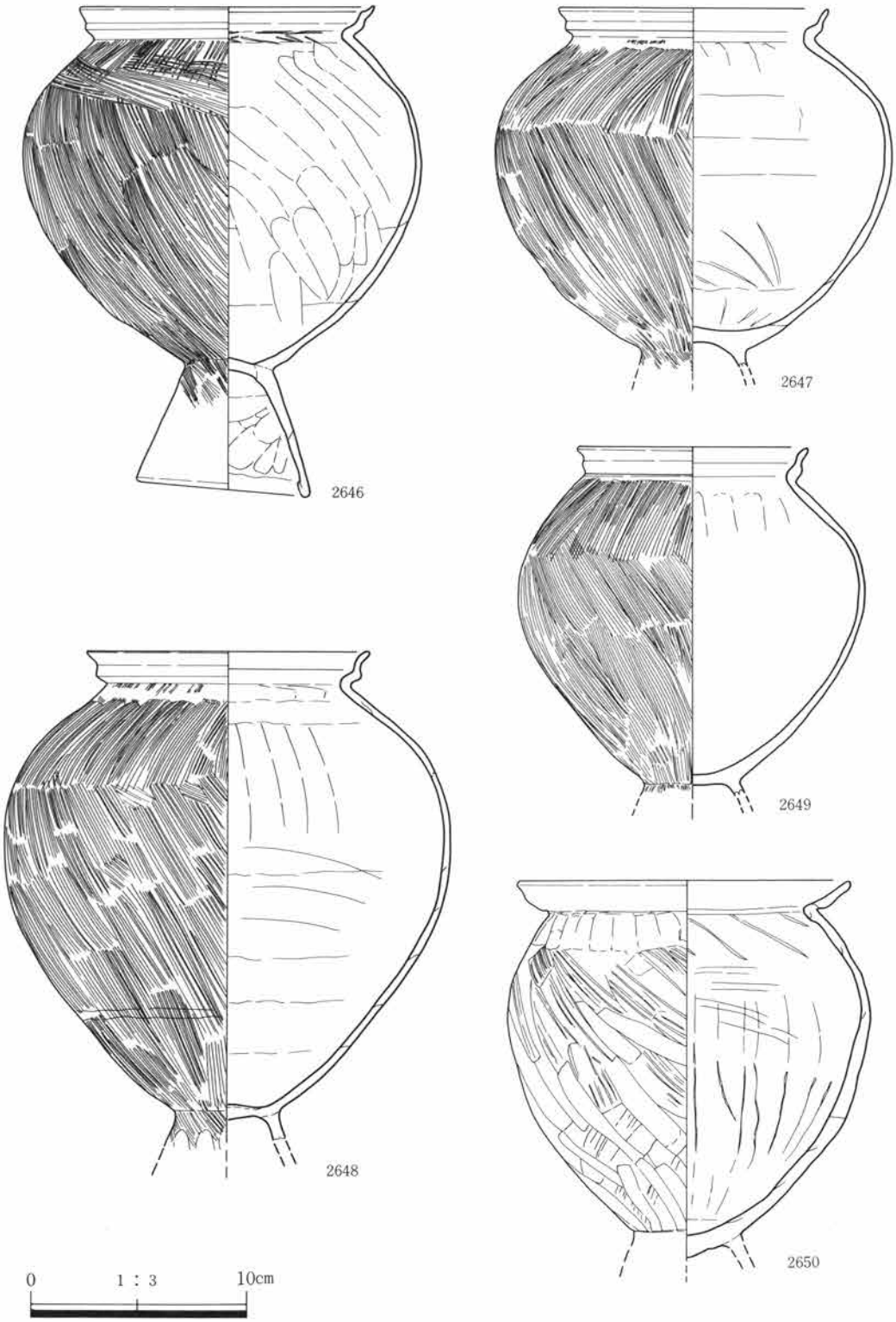
プに分かれるようである。①前方部左側の後方部寄り、②後方部左側周溝の幅の広くなった部分、③後方部後方周溝で中央やや左側、④後方部後方周溝で右側コーナー近く、⑤後方部右側周溝で北側コーナー寄り、⑥後方部右側周溝で中央よりやや前方部寄り。これらの土器グループは、周溝内の最も深く堀り込まれた部分に存在するものもあるが、全体的にはこのような傾向を認めることはできない。又、各グループにおける器種の組み合わせ等の特徴は確認できなかった。

小形仿製鏡は、前方部右側の広い部分よりの出土である。底面より約13cm上方で、鏡面が上になっていた。なお、鏡の存在する部分の下方は、厚さ約５cmほどの柔らかいブロック状黒色土となっている。ガラス小玉は、後方部後方周溝で底面より５～10cm上方よりの出土である。このガラス小玉は当事業団で保管中に紛失した。写真撮影・実測図作成等は実施しておらず、極めて遺憾であるが発見次第何等かの形で発表したいと考えている。

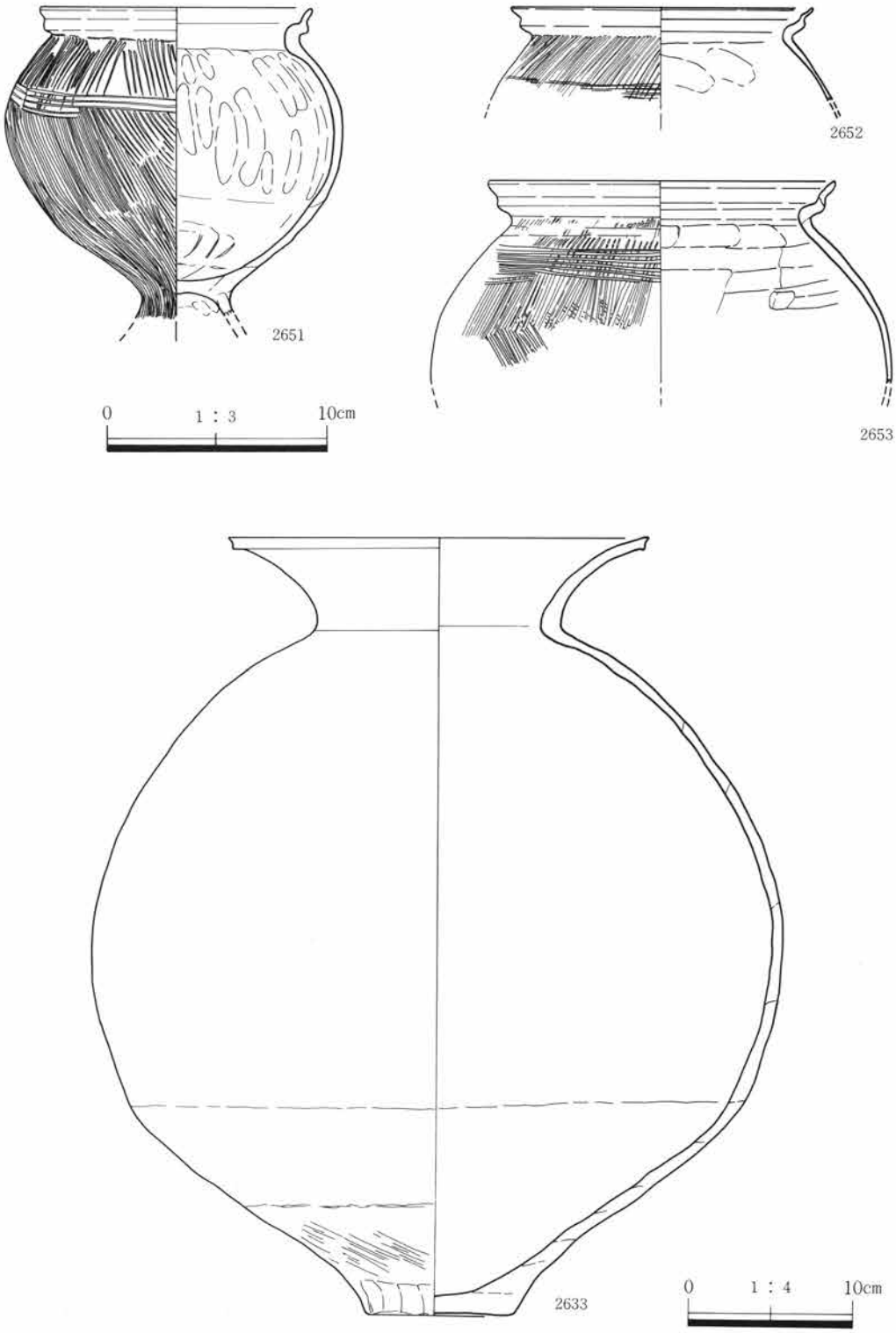
本周溝墓の時期は、出土遺物の様相から古墳時代前期と考えられる。　（飯塚）



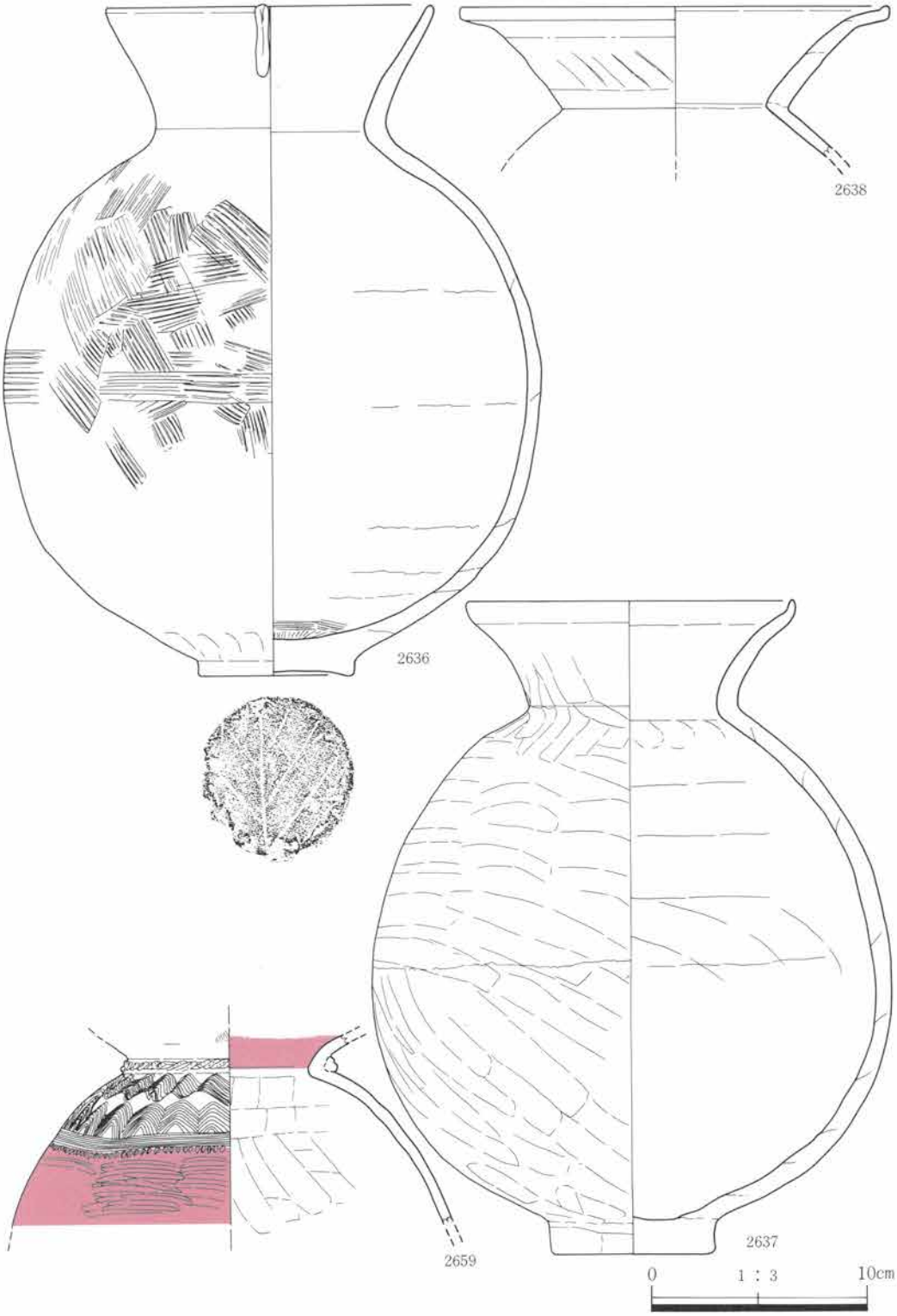
第216図　Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓遺物図(1)



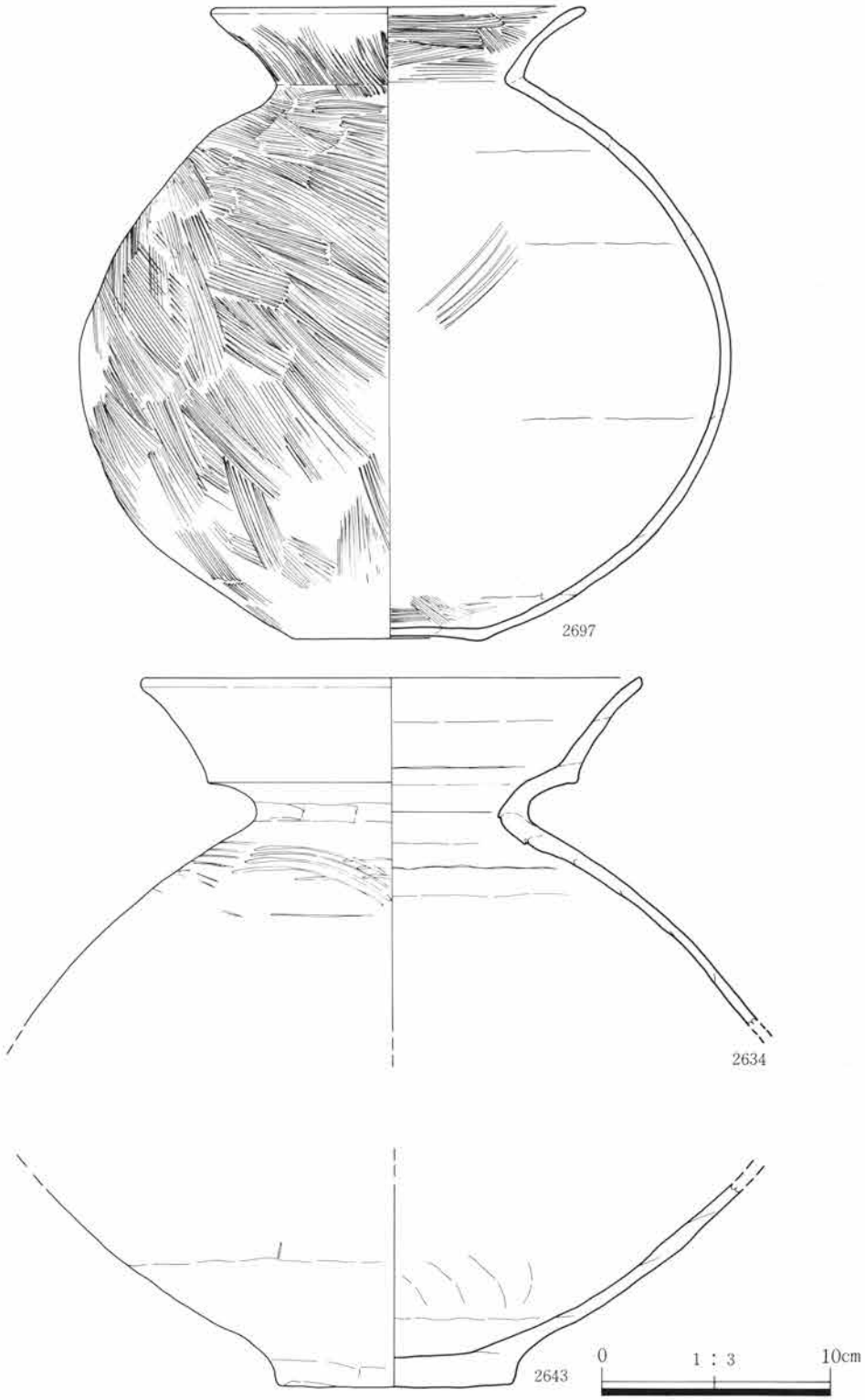
第217図　Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓遺物図(2)



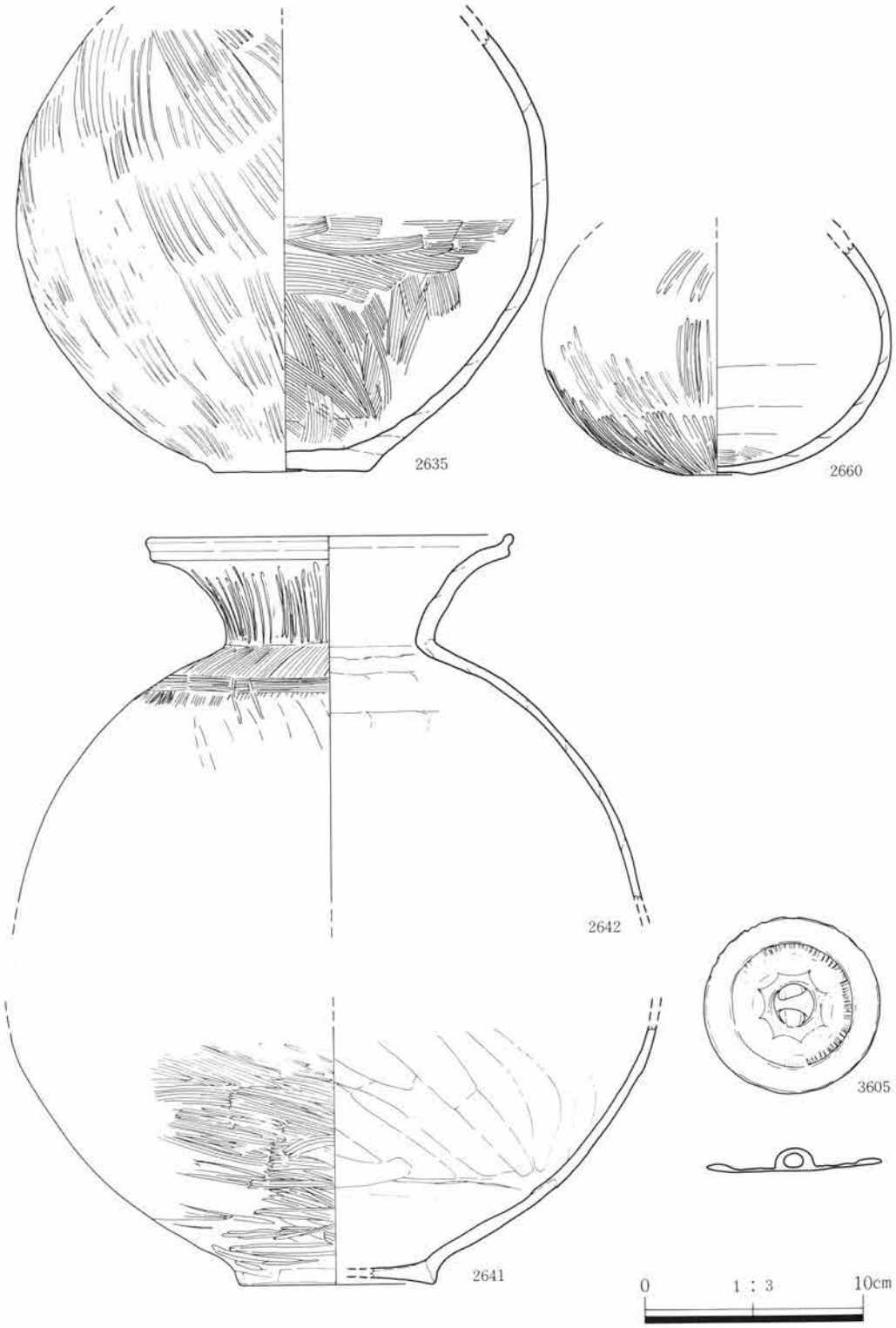
第218図　Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓遺物図(3)



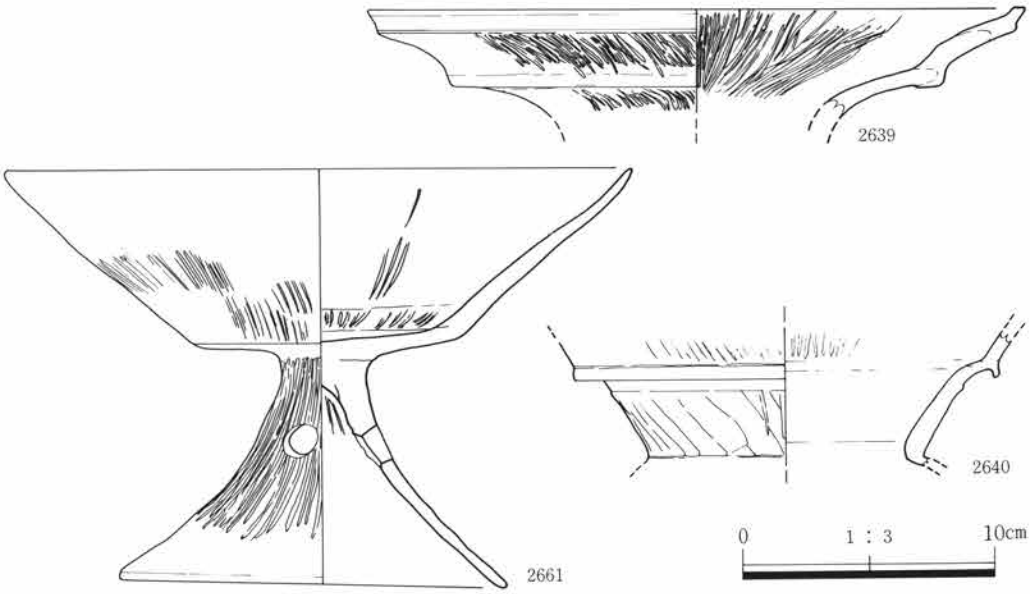
第219図　Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓遺物図(4)



第220図　Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓遺物図(5)



第221図　Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓遺物図(6)



第222図　Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓遺物図(7)

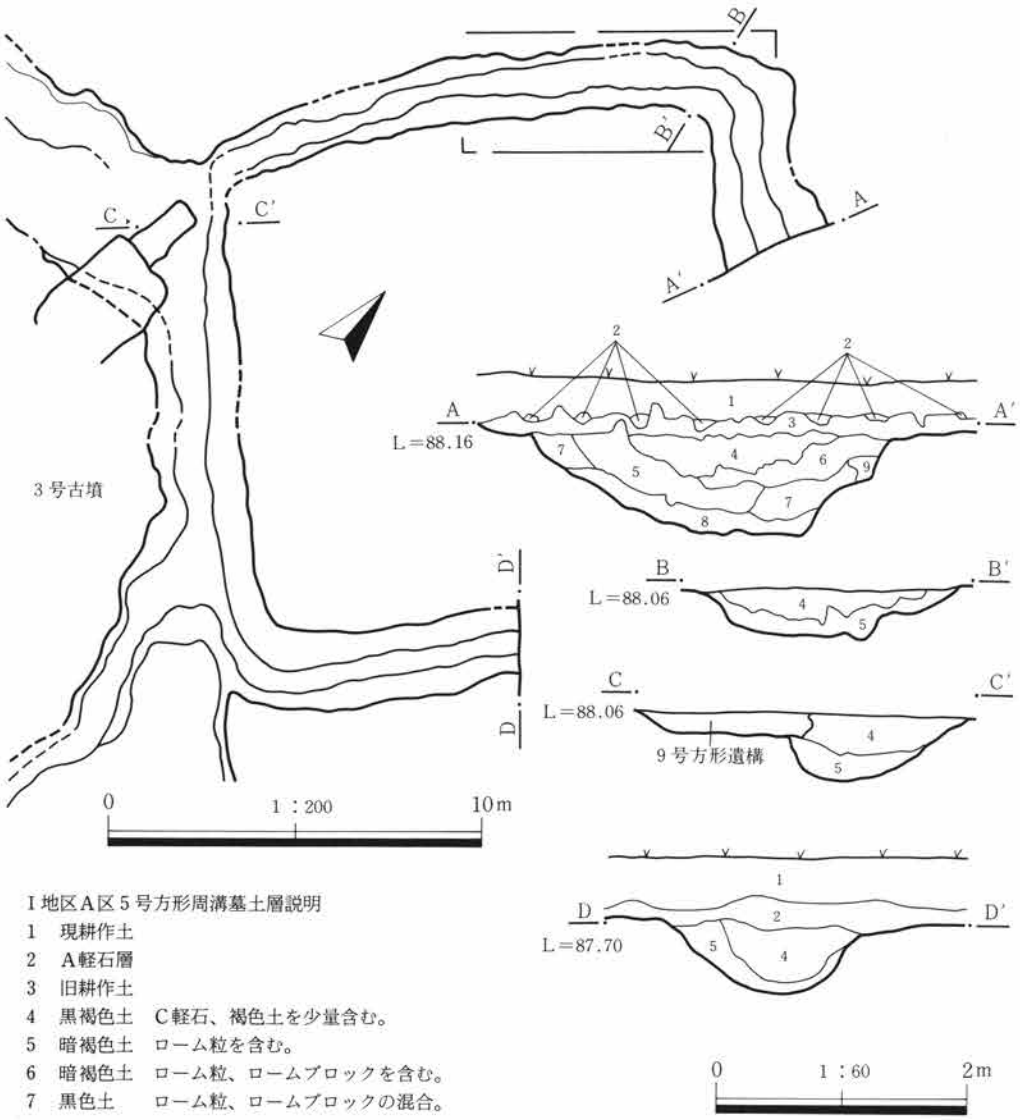
第 63 表　Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
2633	壺 土師器	器高:467㎜ 口径:[254㎜]底径:90㎜最大径:420㎜⅘残	小砂粒を含み、胎土粒子細かい。酸化。やや硬質。橙。黒斑あり。	最大径中央やや下端。ほぼ球形。頸部に、凸帯が存在した形跡あり。外面:篦磨き。内面:なで。	周溝内。
2634	壺 土師器	器高:(150㎜)口径:219㎜ 底径:一最大径:一口縁～体部上端残	小砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い橙。	有段口縁。頸部「U」字状にくびれる。外面:篦削り後、なで。内面:なで	周溝内。
2635	壺 土師器	器高:(200㎜)口径:一底径:72㎜ 最大径:242㎜体部～底部残	径１～２㎜の小石を多く含む。酸化。やや軟質。鈍い褐。	体部球形。外面:篦磨き。内面:体部下端刷毛目。上端:なで。	周溝内。
2636	壺 土師器	器高:307㎜口径:152㎜底径:72㎜最大径250㎜⅘残	径１～２㎜の小石を含む。酸化。軟質。橙。	体部球形。外面:斜め刷毛目。口縁部外面及び内面:横なで。	周溝内。
2637	壺 土師器	器高:300㎜口径:152㎜ 底径:75㎜ 最大径:240㎜ほぼ完形	小砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。体部下端～底部に大きな黒斑あり。	体部球形。口縁端部は、立ち上がる。内外面:なで。	周溝内。
2638	壺 土師器	器高:(69㎜)口径:[198㎜]底径:一最大径:一口縁部～体部上端⅔残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部「く」の字状に立ち上がる。内外面:回転台によるなで。	周溝内。

2639	壺 土師器	器高:(43㎜)口径:[260㎜]底径:一最大径:一口縁部1/5残	砂粒を僅かに含む。酸化。硬質。外面:鈍い橙。内面:灰黄。	有段口縁で大きく外反。内外面:横なで後、縦篦磨き。	周溝内。
2640	壺 土師器	器高:(46㎜)口径:一(頸部径:[110㎜])底径:一最大径:一口縁部1/7残	径2～3㎜の小石を含む。酸化。やや軟質。浅黄橙。	有段口縁。内外面:横なで後、縦篦磨き。	周溝内。
2641	壺 土師器	器高:(115㎜)口径:一底径:[90㎜]最大径:一体部下半～底部1/4残	径2～3㎜の小石。砂粒を含む。酸化。硬質。外面:橙。内面:浅黄橙。	体部は内湾しながら立ち上がる。外面:横篦磨き。内面:横なで。輪積痕あり。	周溝内。
2642	壺 土師器	器高:(166㎜)口径:168㎜底径:一最大径:一口縁部～体部上端残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。淡黄。	口縁部「く」の字状に外反し、口唇端部は立ち上がる。	周溝内。
2643	壺 土師器	器高:(85㎜)口径:一底径:[106㎜]最大径:一体部下半～底部2/3残	砂粒を多く含む。酸化。軟質。外面:橙・黒。内面:黒。	体部は内湾しながら立ち上がる。輪積痕あり。内外面:磨滅調整技法不明	周溝内。
2644	甕 土師器	器高:(280㎜)口径:214㎜底径:一最大径:302㎜口縁～体部2/3残	砂粒を少量含む。酸化。やや硬質。明黄褐。黒斑あり。	「S」字状口縁。最大径体部上端。外面:体部上端より、同一工具による斜め刷毛。横線文・斜め刷毛目の順。内面:なで。	周溝内。
2645	台付甕 土師器	器高:265㎜口径:163㎜底径:86㎜最大径:234㎜ほぼ完形	砂粒を含む。酸化。やや軟質。黄橙。体部に煤付着。	「S」字状口縁。最大径体部上端。台部折り返し。外面:体部～台部上端斜め刷毛後、肩部に横線文。内面:なで。	周溝内。
2646	台付甕 土師器	器高:221㎜口径:136㎜底径:81㎜最大径:一ほぼ完形	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。体部に煤付着。	「S」字状口縁。最大径体部上端。台部折り返し。外面:体部～台部上端斜め刷毛後、肩部に横線文。内面:篦なで。	周溝内。
2647	台付甕 土師器	器高:(164㎜)口径:[124㎜]底径:一最大径:182㎜脚部欠2/3残	砂粒を多く含む。酸化。軟質。鈍い黄橙。外面:煤付着。	「S」字状口縁。最大径体部上端。外面:体部～台部上端斜め刷毛目。内面:なで。	周溝内。
2648	台付甕 土師器	器高:(225㎜)口径:130㎜底径:一最大径:205㎜台部欠	小砂粒を含む。酸化。硬質。橙。	「S」字状口縁。最大径体部上端。外面:体部～台部上端斜め刷毛目。内面:なで。	周溝内。
2649	台付甕 土師器	器高:(158㎜)口径:106㎜底径:一最大径:160㎜台部欠2/3残	小砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。外面煤付着。	「S」字状口縁。最大径体部上端。外面:体部～台部上端斜め刷毛目。内面:なで。	周溝内。
2650	台付甕 土師器	器高:(172㎜)口径:154㎜底径:一最大径:167㎜台部欠	小砂粒を含む。酸化。硬質。外面:煤付着。黄。	口縁部短く、「く」の字状に開く。外面:篦削り後、体部上端の一部に粗い不規則な刷毛目。外面:篦削り後、なで。	周溝内。

2651	台付甕 土師器	器高:(132㎜)口径:121㎜底径:一最大径:152㎜台部欠	小石・砂粒を多く含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。外面:煤付着。	「S」字状口縁。口唇部立ち上がる。外面:比較的粗い刷毛目。肩部に横線文。内面:篦削り後、なで。	周溝内。
2652	甕 土師器	器高:(40㎜)口径:[136㎜]底径:一最大径:一口縁部〜体部上端1/5残	小砂粒を多く含む。酸化。硬質。鈍い黄橙。	「S」字状口縁。外面。斜め刷毛目。肩部に横線文。内面:なで。	周溝内。
2653	甕 土師器	器高:91㎜口径:[156㎜]底径:一最大径:208㎜口縁〜体部上端1/5残	砂粒を含む。酸化。硬質。鈍い橙。	「S」字状口縁。外面:斜め刷毛目。肩部に横線文。内面:なで。	周溝内。
2654	台付甕 土師器	器高:(60㎜)口径:一底径:98㎜最大径:一台部のみ残	砂粒を多く含む。酸化。軟質。鈍い橙。	台部折り返し。外面:上部斜め刷毛。内面:なで。	周溝内。
2655	台付甕 土師器	器高:(74㎜)口径:一底径:[90㎜]最大径:一最下端〜台部2/3残	砂粒を多く含む。酸化。やや硬質。鈍い黄褐。	台部折り返し。外面体部最下端〜台上端刷毛。内面:体部刷毛。台部:なで。	周溝内。
2656	台付甕 土師器	器高:(55㎜)口径:一底径:82㎜最大径:一台部のみ残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い橙。	台部折り返し。外面:上部斜め刷毛。内面:なで。	周溝内。
2657	台付甕 土師器	器高:(62㎜)口径:一底径:95㎜最大径:一台部のみ残	小砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い橙。	台部折り返し。外面:上部斜め刷毛。内面:なで。	周溝内。
2658	台付甕 土師器	器高:(65㎜)口径:一底径:83㎜最大径:一最下部〜台部のみ残	小砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	台部折り返し。外面:上部斜め刷毛目内面:なで。	周溝内。
2659	壺 土師器	器高:(75㎜)口径:一(頸部径:[99㎜])底径:一最大径:一頸部〜体部上端1/4残	砂粒殆ど含まず。酸化。軟質。鈍い黄橙。体部無文部分及び、口縁部内外面に赤色塗彩あり。	頸部に櫛状工具による、きざみをもつ凸帯があり、口縁部は、大きく外反する。外面:体部は上端から波状文・横線文・列点文を有する。体部及び口縁部内外面は、赤彩後、篦磨き。	周溝内。
2660	壺 土師器	器高:(104㎜)口径:一底径:32㎜最大径:[160㎜]体部〜底部2/3残	砂粒を少量含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	最大径体部中央。底部小さくやや凹む。外面:篦磨き。内面:なで。	周溝内。
2661	高杯 土師器	器高:164㎜口径:250㎜底径:158㎜最大径:一完形	砂粒を含む。酸化。軟質橙。	杯部大きく開く。脚部には、3孔を有し、「ハ」の字状に開く。内外面:篦磨き。	周溝内。
2697	壺 土師器	器高:273㎜口径:164㎜底径:85㎜最大径:285㎜ほぼ完形	小砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い黄橙。	最大径体部中央。外面及び口縁部内面:刷毛。体部内面:なで。底部:篦削り。	周溝内。

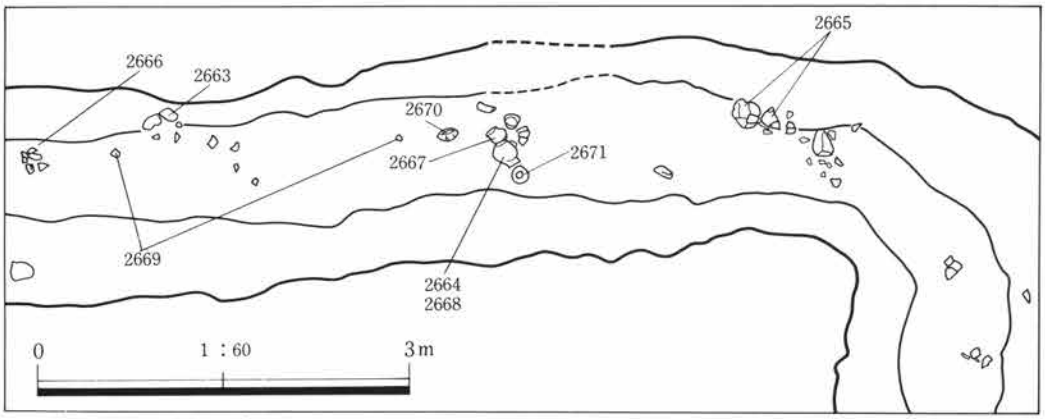
3605	内行花文鏡	面径:80㎜縁厚:２㎜		紐―内行花文帯―櫛歯文帯―素縁。８花文。	周溝内。



Ⅰ地区Ａ区５号方形周溝墓土層説明

1　現耕作土
2　Ａ軽石層
3　旧耕作土
4　黒褐色土　Ｃ軽石、褐色土を少量含む。
5　暗褐色土　ローム粒を含む。
6　暗褐色土　ローム粒、ロームブロックを含む。
7　黒色土　ローム粒、ロームブロックの混合。
　　（斑紋様となっている。）
8　黒色土　７層に固いロームブロックを多く含む。
9　黒褐色土　ロームブロックを含む。

第223図　Ⅰ地区Ａ区５号方形周溝墓遺構図



第224図　Ⅰ地区Ａ区５号方形周溝墓遺物出土状況図

Ⅰ地区Ａ区５号方形周溝墓（第223～226図、第64表、図版48）

本方形周溝墓は、約４分の３が調査区内に存在する。他の遺構との関係では、Ａ区３号井戸・５号井戸・６号井戸と重複するが、これらの遺構よりも本方形周溝墓の方が古い。又、３号古墳の周堀と溝を共有するような形となっているが、この部分の土層断面の観察では、新旧関係は明らかにできなかった。

方台部の形態は、約13m×約13mの隅丸方形に近いが、各コーナーが直角とはならず、全体として歪んでいる。西南壁に併行する線を主軸として設定すると、主軸はN―43°―Wとなる。

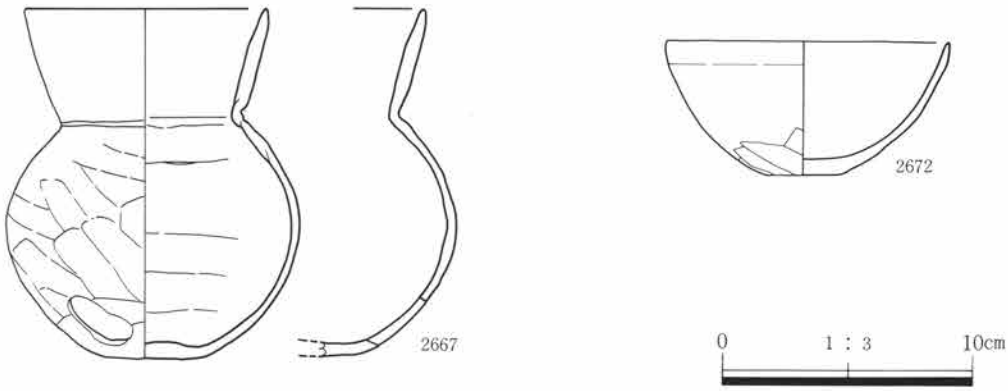
周溝は、幅が1.5m～２mであるが、西北辺はやや狭く、西南辺はやや広くなっている。又、コーナー部では、西側がやや狭くなっているのに対して、南側は狭くはならないという差異がある。周溝の深さは、40cm～70cmである。東北辺が最も多く、北西辺が最も浅くなっている。周溝の堀り方は一様ではないが、U字形となる部分が多い。

遺物は、北西辺周溝の底面より３cm～10cm上方の比較的底面に近い位置から出土している。本方形周溝墓の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。　（飯塚）

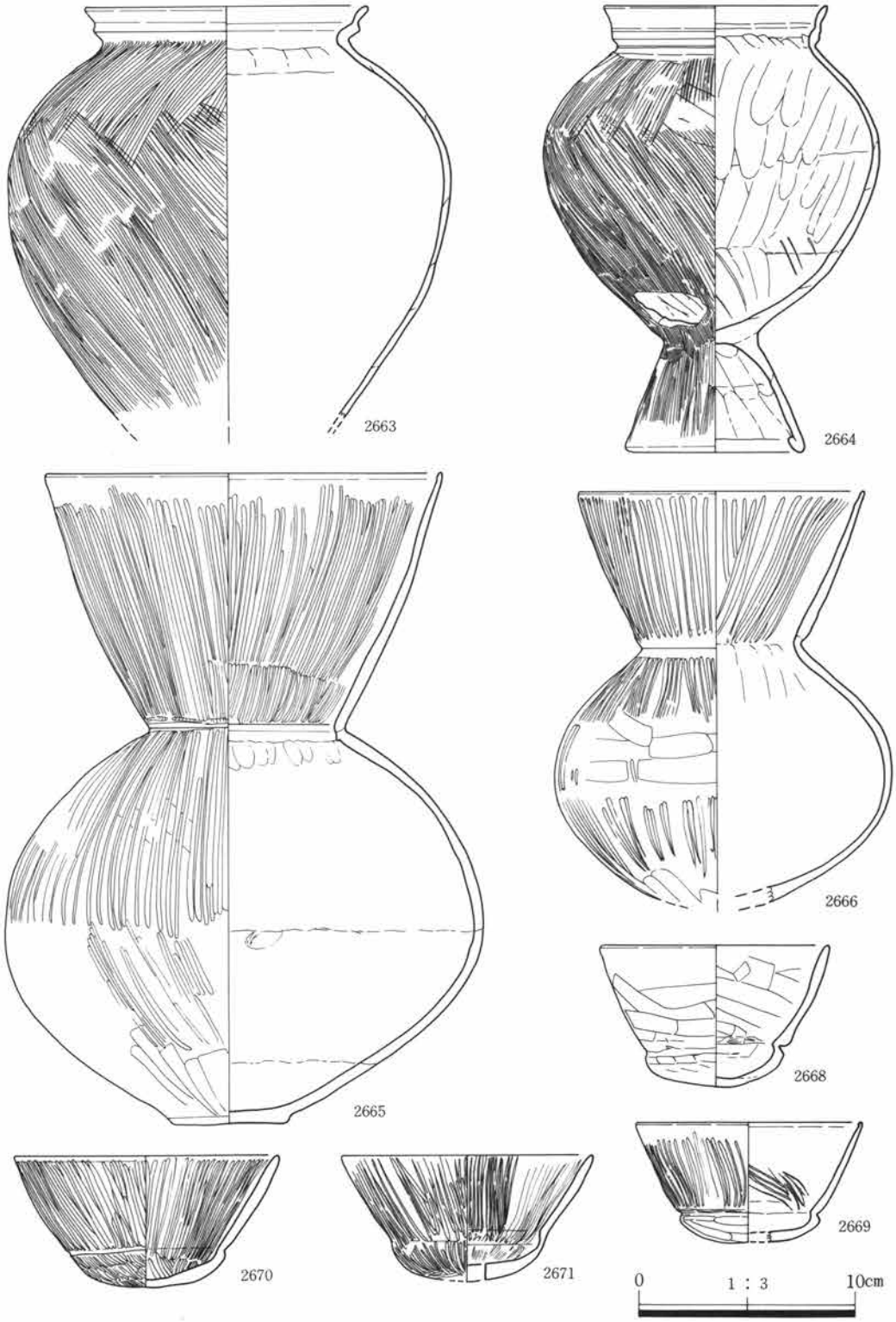
第 64 表　Ⅰ地区Ａ区５号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
2663	甕 土師器	器高:(188㎜)口径:130㎜ 底径:―最大径:205㎜ 口縁～体部⅔残	径１～２㎜の小石、砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い褐。体部に黒斑あり。	「S」字状口縁。最大径は体部上半。外面:全面に斜め刷毛目。内面:なで。	周溝内。

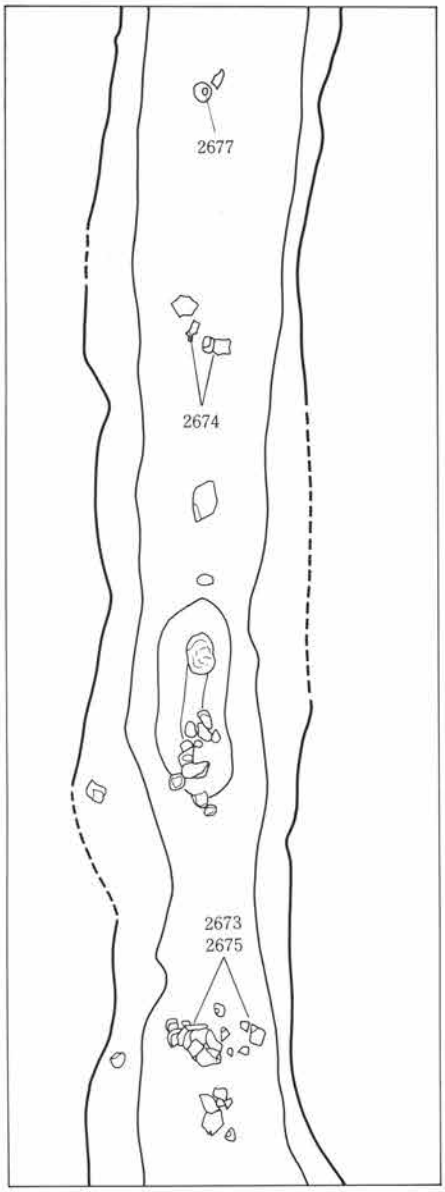
2664	台付甕 土師器	器高:204㎜口径:102㎜底径:83㎜口縁部½欠	砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い橙。	「S」字状口縁。最大径は体部上半。外面:全面斜め刷毛目。内面:なで。台部は折り返し。	周溝内。体部下半に20×30㎜の焼成後穿孔あり。
2665	坩 土師器	器高:297㎜口径:182㎜底径:53㎜最大径:222㎜口縁部一部欠	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	大形で最大径は体部中央。外面:箆削り後、縦箆磨き。内面:口縁部は縦箆磨き。体部はなで。	周溝内。
2666	坩 土師器	器高:(187㎜)口径:132㎜底径:一最大径:155㎜底部欠	砂粒を含む。酸化。やや硬質。明赤褐。	最大径は体部中央。外面:箆削り後、縦箆磨き。内面:口縁部は縦箆磨き。体部はなで。	周溝内。
2667	坩 土師器	器高:138㎜口径:96㎜底径:43㎜最大径:117㎜完形	砂粒を含む。酸化。硬質。鈍い黄橙。	最大径は体部中央。外面:なで。体部下半～底部は箆削り。内面:なで。	周溝内。体部下半に20×25㎜の焼成後穿孔あり。
2668	坩 土師器	器高:65㎜口径:106㎜底径:一完形	径２～３㎜の小石を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	最大径は口縁端部。丸底。外面:なで。底部は箆削り。内面:なで。	周溝内。底部に18×25㎜の焼成後穿孔あり。
2669	坩 土師器	器高:(55㎜)口径:105㎜底径:一全体の⅔残	砂粒を含む。酸化。軟質。橙。	最大径は口縁端部。丸底。外面:縦箆磨き。底部箆削り。内面:横箆磨き。底部なで。	周溝内。
2670	坩 土師器	器高:61㎜口径:122㎜底径:一完形	径２～３㎜の小石を含む。酸化。軟質。橙。	最大径は口縁端部。丸底。外面:縦箆磨き。底部箆削り後、箆磨き。内面:縦箆磨き。	周溝内。
2671	坩 土師器	器高:58㎜口径:116㎜底径:一完形	径２～５㎜の小石を含む。酸化。硬質。鈍い橙。	最大径は口縁端部。丸底。内外面:縦箆磨き。	周溝内。底部に30×50㎜の焼成後穿孔あり。
2672	椀 土師器	器高:53㎜口径:113㎜底径:30㎜ほぼ完形	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	内湾。外面:口縁端部は横なで。体部は箆削り後なで。体部下半～底部は箆削り。内面:横なで。	周溝内。内面赤色顔料付着。

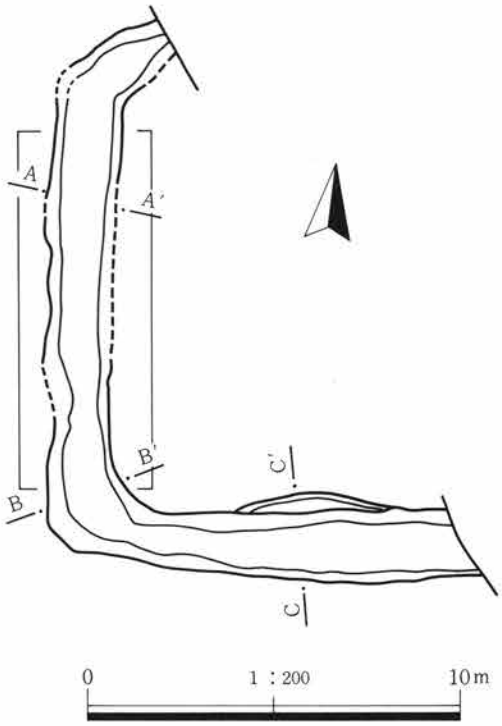


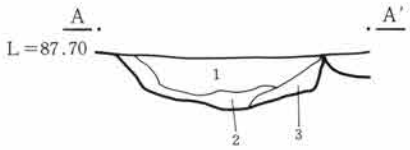
第225図　Ⅰ地区Ａ区５号方形周溝墓遺物図(1)



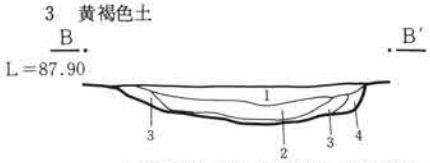
第226図　Ⅰ地区Ａ区５号方形周溝墓遺物図(2)



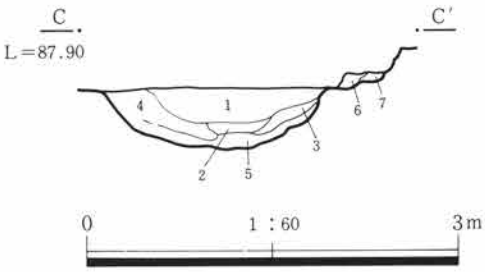




Ⅰ地区Ａ区６号方形周溝墓土層説明（Ａ－Ａ′）
1　黒褐色土　軽石、ローム粒、淡褐色土を含む。
2　黄褐色土　白黄褐色土、黒褐色土を含む。
3　黄褐色土



Ⅰ地区Ａ区６号方形周溝墓土層説明（Ｂ－Ｂ′）
1　褐色土　　軽石を含む。
2　暗褐色土　軽石、ローム粒子を含む。
3　褐色土　　軽石、ロームを含む。
4　黄褐色土　ローム粒を主とし軽石を混合。



Ⅰ地区Ａ区６号方形周溝墓土層説明（Ｃ－Ｃ′）
1　黒褐色土　ローム粒、ロームブロックを含む。
2　黒褐色土　ローム粒小を含む。
3　黒褐色土　ロームブロックを含む。
4　黒褐色土　ロームブロック、ローム粒を含む。
5　黒褐色土　大きめなロームブロックを含む。
6　黄褐色土　褐色土との混合。
7　淡黒褐色土　ローム粒子を含む。

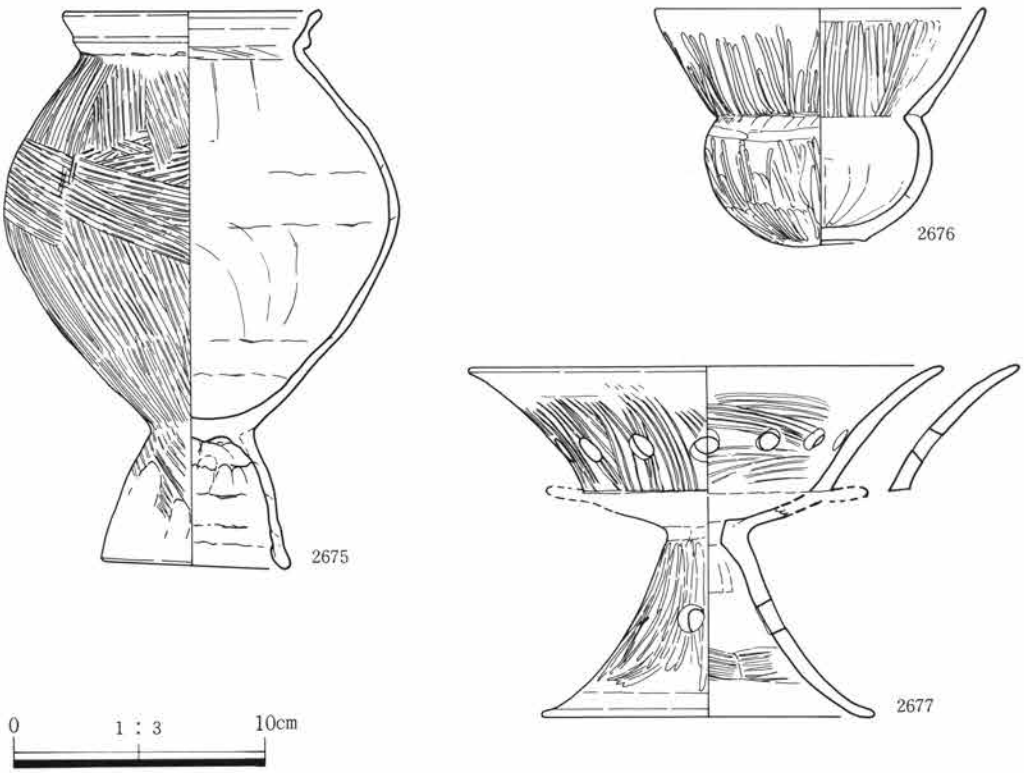
第227図　Ⅰ地区Ａ区６号方形周溝墓遺構図・遺物分布図

Ⅰ地区Ａ区６号方形周溝墓（第227～229図、第65表、図版49）

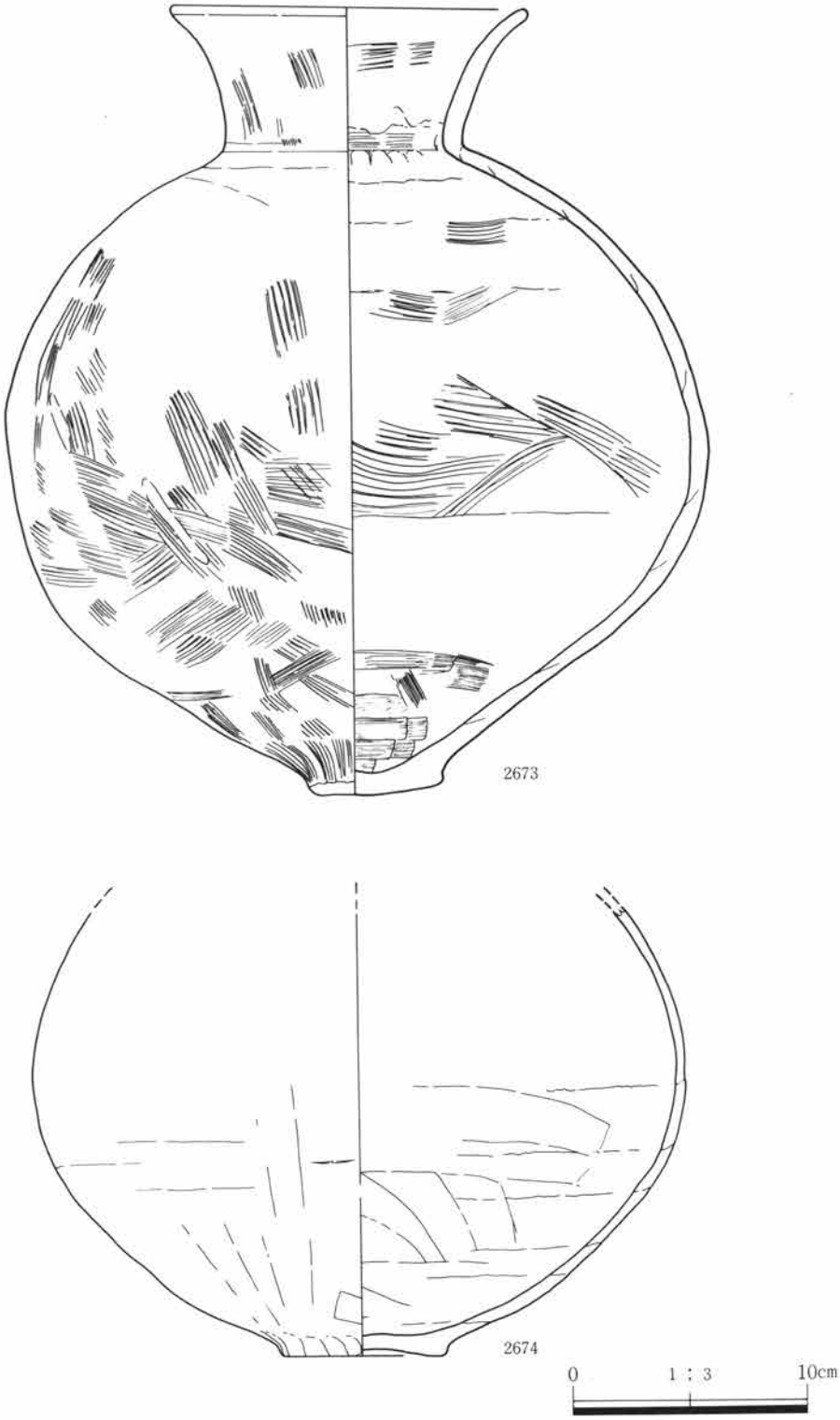
７号方形周溝墓の北東側で検出された。北東半分は調査範囲外であり、周溝は西全部と北西角そして南の半分以上ほどが確認されている。西辺で12・28号溝、217号土坑、南辺で82・84・85号住居跡、周溝と重複する。このうち新旧関係が不明なのは28号溝で、その他は全て新しい。又、周溝の内側に、210～212・220・280号土坑がある。西辺の辺長は約18m、南辺は11m以上あり、周溝の上幅は1.5～1.7m、深さは0.6m以上と考えられる。西辺の走向は、N－7°－Wである。12号溝に切られているためやや不明瞭だが、北西角は鈍角に曲がっており、全体の形状は単純な方形ではない可能性もある。堀り方は断面U字形を呈し、南西角はやや浅くなっている。周溝内には確実に同時期の施設はなく、主体部と考えられるものも不明である。

遺物は、西側周溝のみに見られた。北西角近くで底からやや浮いて壺（2673・74）が、又、やや北より少し浮いて台付甕（2675）・坩（2676）、そして北西角近くで同様に器台（2677）が出土した。いずれも内側より落ちたものと思われる。構築時期は、古墳時代前期と考えられる。

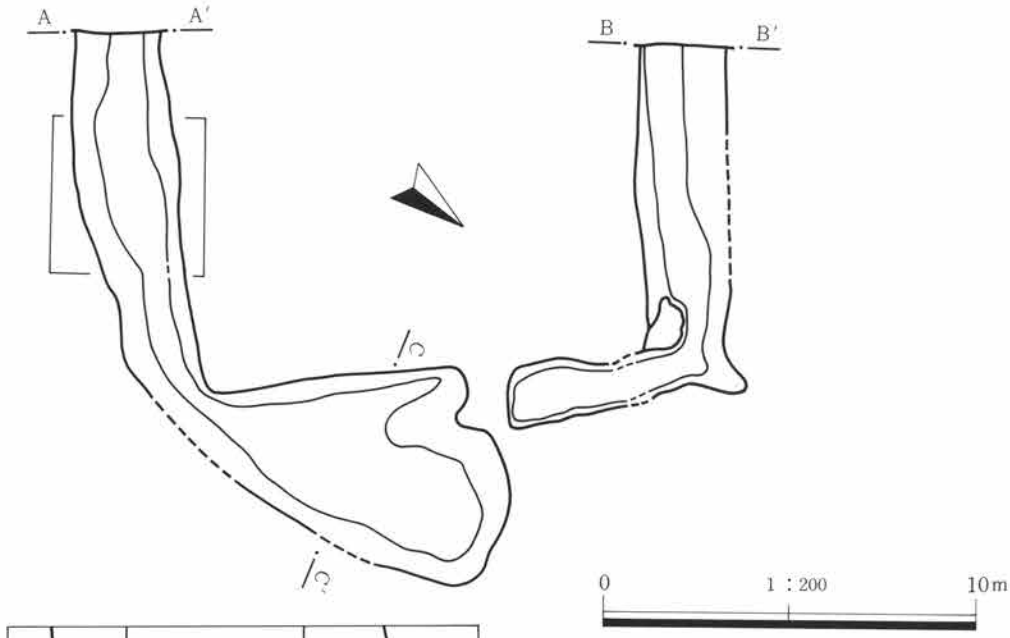
（坂井）

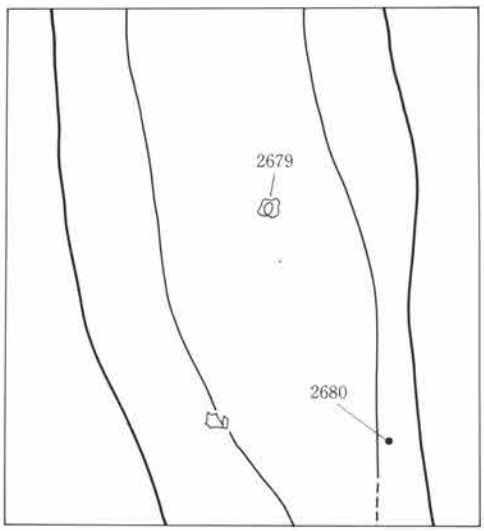


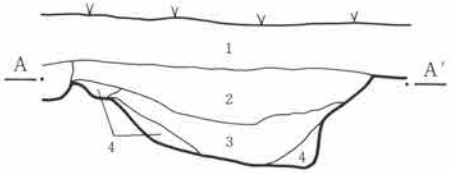
第228図　Ⅰ地区Ａ区６号方形周溝墓遺物図(1)



第229図　Ⅰ地区Ａ区６号方形周溝墓遺物図(2)

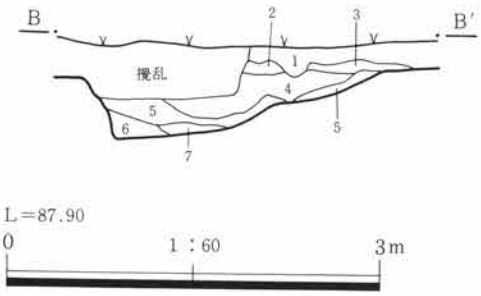






Ⅰ地区Ａ区７号方形周溝墓土層説明（Ａ－Ａ′）

1　褐色土　耕作土
2　暗褐色土　軽石及びローム粒子を含む。
3　黒褐色土　粒子細かく締まり良くやや粘性あり、微少のローム粒軽石を含む。
4　黄褐色土　ローム粒が斑状に混入。



Ⅰ地区Ａ区７号方形周溝墓土層説明（Ｂ－Ｂ′）

1　褐色土　粒子粗く締まりやや弱く径２～３㎜の白色。軽石粒子を混じえる一耕作土層。
2　暗褐色土　粒子細い暗褐色土中に径２～３㎜白色軽石粒子を大量に含む。
3　褐色土　ローム粒子を含む。
4　黒褐色土　Ｃ軽石を含む。
5　暗褐色土　砂を含む。
6　暗褐色砂　暗褐色土を混じえた砂。
7　暗褐色砂　ローム粒子を含む。

第230図　Ⅰ地区Ａ区７号方形周溝墓遺構図(1)

第 65 表　Ⅰ地区Ａ区６号方形周溝墓遺物観察表

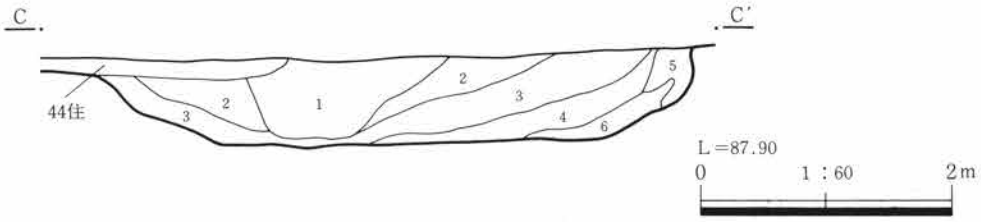
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
2673	壺 土師器	器高:333㎜ 口径:[153㎜]底径:55㎜最大径:300㎜ ほぼ完形。	小石・砂粒を含む。酸化。軟質。褐。黒斑あり。	最大径体部中央。底部小さく不安定。外面:縦及び、斜め刷毛。内面:なで後一部刷毛調整。	周溝内。
2674	壺 土師器	器高:(187㎜)口径:一底径:70㎜ 最大径:一体部½残	砂粒をやや多く含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	最大径体部中央。底部中央凹む。	周溝内。
2675	台付甕 土師器	器高:220㎜口径:101㎜ 底径:74㎜ 最大径:157㎜ほぼ完形	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い褐。	「Ｓ」字状口縁。最大径中央やや上端。台部折り返し。外面:全面斜め刷毛。内面:なで。	周溝内。
2676	坩 土師器	器高:93㎜ 口径:132㎜ 底径:30㎜ 最大径:一口縁部欠	径２～３㎜の小石を含む。酸化。軟質。橙。黒斑あり。	最大径口縁部。外面:縦篦磨き。内面:口縁部縦篦磨き。体部:なで。	周溝内。
2677	器台 土師器	器高:(40㎜)口径:[188㎜]底径:132㎜ 最大径:一器受部下部欠。	径２～３㎜の小石を含む。酸化。軟質。浅黄橙。	受部に多くの小孔を有し、ラッパ状に開く。台部は大きく開き、３孔を有する。外面:縦篦磨き。内面:受部は横篦磨き、台部はなで。	周溝内。受部下部欠失し、台部と接合せず。

Ⅰ地区Ａ区７号方形周溝墓（第230～232図、第66表、図版40・49）

６号方形周溝墓の南西側で検出された。南西側３分の１程度は、調査範囲外となる。北西側で40・41号住居跡と12号溝、北東側で4246号住居跡、南東側で50号住居跡と重複するが、いずれも新しい。又、周溝内側には69号土坑が見られる。６号方形周溝墓とは４ｍしか離れていなく方向も45度ほど異なっているため、時期が異なる可能性がある。北西辺から南東辺までは約17.5mその直交方向は15m以上あり、北西辺・南東辺の走向はＮ－43°－Ｅである。

周溝は、北西側と南東側が、上幅2.2～2.8m深さは0.6～９ｍほどである。北西側周溝は外側に幅40cmほどのテラス状部分が一部に見られ、南東側周溝は外側の立ち上がりが平面的に中央が膨らむ感じがある。北東側周溝は特異な形状を示しており、まず北角よりで周溝が途切れ幅１ｍほどのブリッジ状部分となる。その東側は、平面三角形状を呈し最大幅5.8mを測る。又、底は二方向に分かれる感じがあり、外側に向かう部分が0.6～0.7m、直進する部分がそれより0.2mほど浅い深さとなる。ブリッジの北角よりは、最大幅1.6m、深さ0.2mと浅い。土層堆積状態でも示されているように、この外側に向かう部分は掘り直しと考えられる。掘り方断面形は、前記北西側のテラスを持つ箇所を除けば、Ｕ字形が基本となっている。ブリッジから西側は南西に向かうにつれ深くなるのに対し、東側は東角が浅くそこから次第に深くなっている。主体部と考える施設は不明である。

遺物は少なく、南東側周溝の中央付近で底から20cmほど浮いて土師器坩（2679）が、又、内側

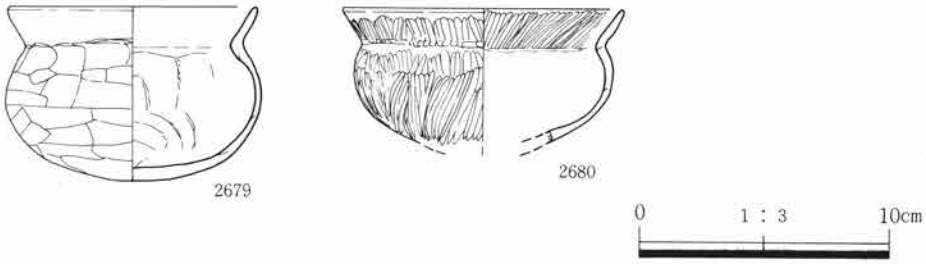


Ⅰ地区Ａ区７号方形周溝墓土層説明（C－C′）

1　黒褐色土　軽石、暗褐色土を含む。
2　黒褐色土　ローム及び軽石。
3　暗褐色土　小礫、軽石、ローム粒含む。
4　褐色土　軽石を含む。
5　褐色土　粒子細かいが締まりやや弱く、微少のローム及び軽石粒子を混じえる。
6　黄褐色土　ローム及び軽石を僅かに混じえる。粒子細かく締まり良く微少の焼土粒子を混入。

第231図　Ⅰ地区Ａ区７号方形周溝墓遺構図(2)

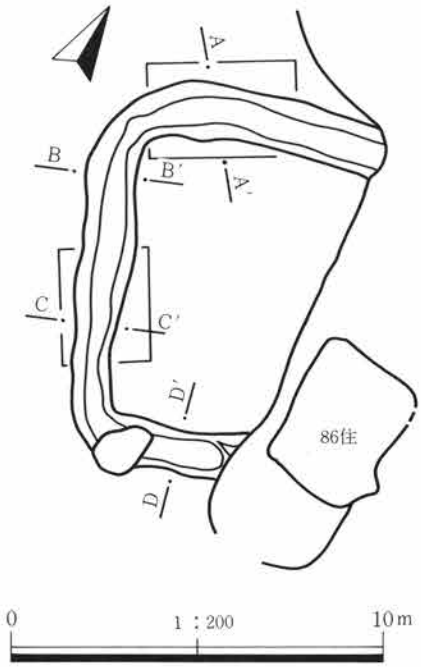
の壁からやや浮いて同坩（2680）が見られただけである。構築時期は、古墳時代前期と考えられる。（坂井）

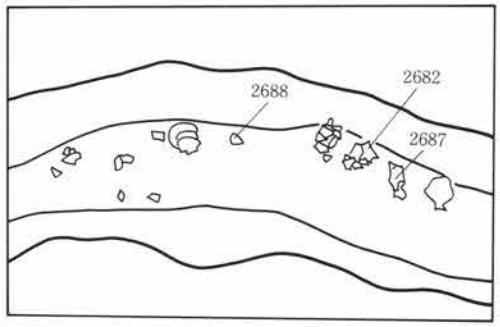


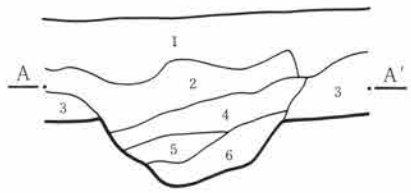
第232図　Ⅰ地区Ａ区７号方形周溝墓遺物図

第 66 表　Ⅰ地区Ａ区７号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
2679	坩 土師器	器高:68㎜口径:100㎜底径:―最大径:―完形	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	口縁部は「く」の字状に立ち上がり、口径と最大径が同じ。外面:体部篦削り。口縁部外面～内面:なで。	周溝内。
2680	坩 土師器	器高:(53㎜)口径:110㎜底径:―最大径:102㎜全体の⅓残	胎土粒子細かく砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄褐。	口縁部は、「く」の字状に立ち上がり、最大径口縁部。外面及び口縁部内面:篦磨き。内面:なで。	周溝内。

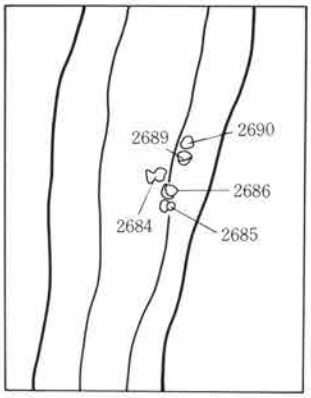


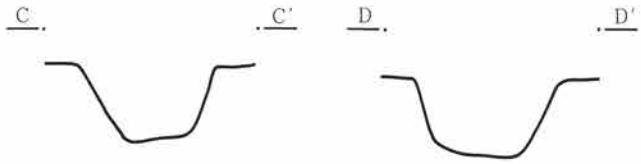




Ⅰ地区Ａ区８号方形周溝墓土層説明

1　表土
2　黒褐色土　Ｃ軽石の二次的な混入あり。
3　暗褐色土　ローム粒、ローム小ブロックを全体に含む。
4　暗褐色土　ローム粒、黒褐色土ブロックを全体に含む。
5　黒褐色土　ローム小粒を僅かに含む。
6　暗褐色土中にロームがやや多く入り込み、全体に混合したもの。





L＝88.00
0　1：60　3m

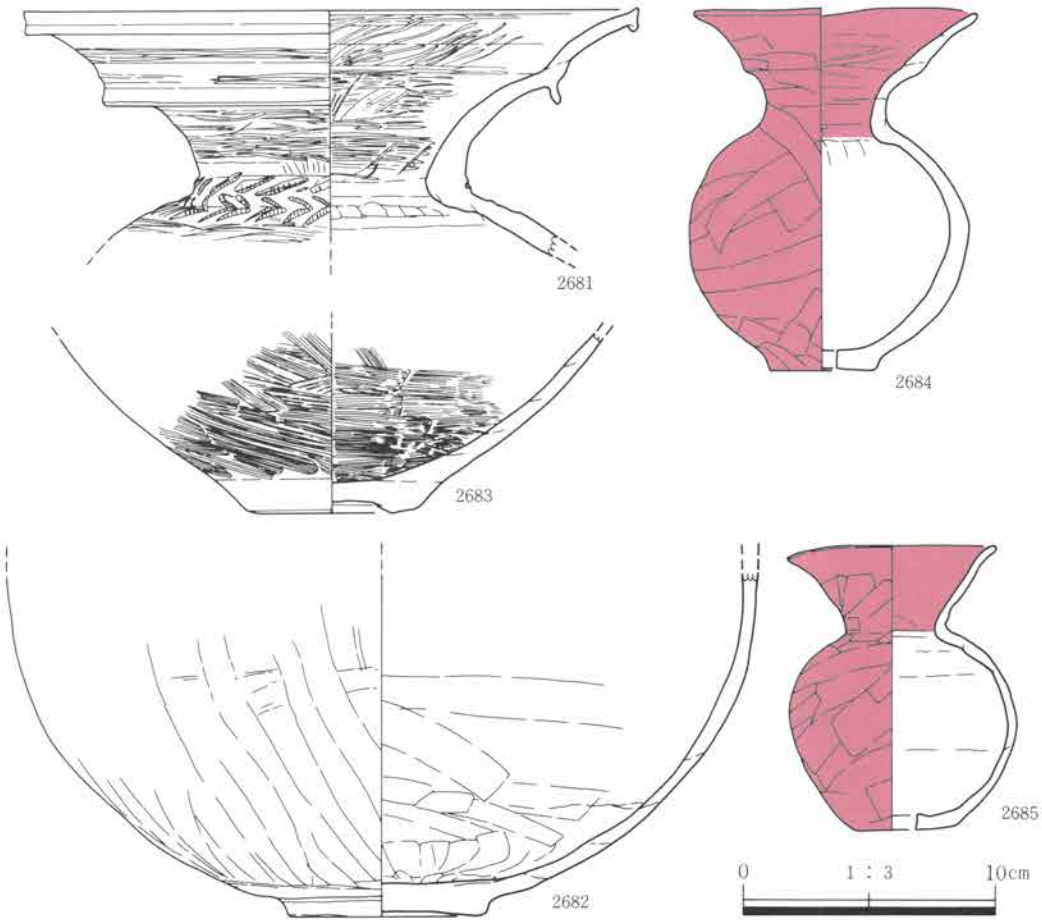
第233図　Ⅰ地区Ａ区８号方形周溝墓遺構図・遺物出土状況図

Ⅰ地区Ａ区８号方形周溝墓（第233～235図、第67表、図版40・45）

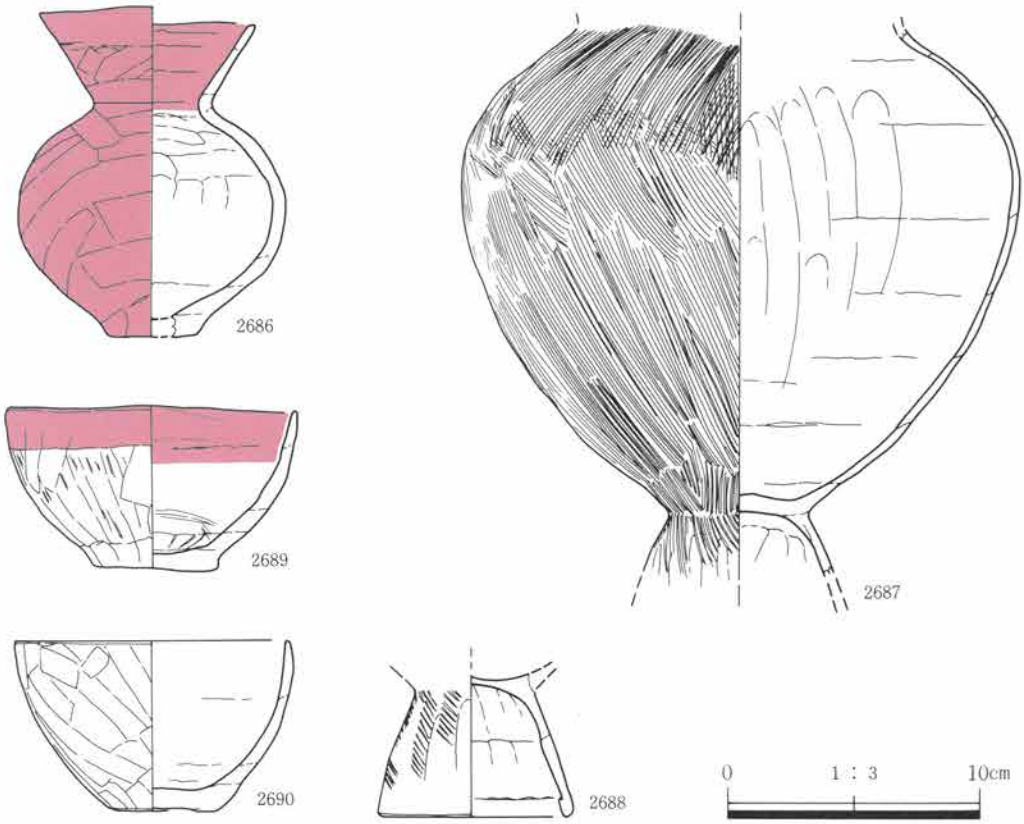
本方形周溝墓は、Ａ区13号溝によって北側部分が削られており、残存するのは全体の約３分の２である。方台部は西側辺が7.2mを測り、コーナー部は隅丸方形を呈し、ほぼ直角に曲がっている。西側辺に併行する線を主軸として設定すると、主軸はＮ－22°－Ｗとなる。

周溝の幅は、1.2m～1.5mである。周溝の深さは約70cmで、逆台形の堀り方を呈する部分が多い。遺物は北側と西側の周溝内より出土している。北側周溝内の遺物は、全て底面より30cm～40cm上方の比較的高い位置に存在した。又、西側周溝においては、底面より４cm～７cm上方より発見された。このうち、小形壺の2685と2686は方台部側壁に立て掛けられたような状態で、同じく小形壺の2684は他の２個体の小形壺と同じように立て掛けられたものが倒れたような状態で出土している。更に2689の鉢は、他の小形壺と一列に並べられていたものであろう。

本方形周溝墓の時期は、古墳時代前期と考えられる。（飯塚）



第234図　Ⅰ地区Ａ区８号方形周溝墓遺物図（１）



第235図　Ⅰ地区Ａ区８号方形周溝墓遺物図（２）

第 67 表　Ⅰ地区Ａ区８号方形周溝墓遺物観察表

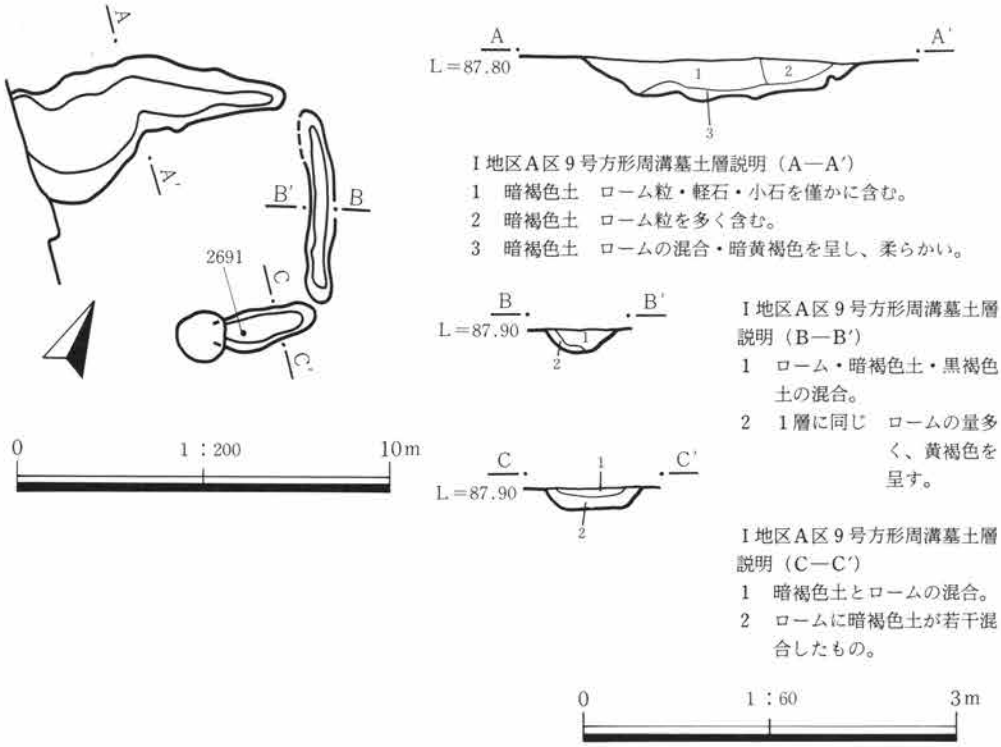
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
2681	壺 土師器	器高:(90㎜)口径:244㎜底径:— 最大径:—口縁部～頸部のみ残	径２～３㎜の小石・小砂粒を含む。酸化。硬質。明赤褐。	有段口縁、大きく外反。頸部に凸帯。凸帯及び、体部上端に櫛歯による羽状文。口縁段部より上は、回転台によるなで。口縁段部～体部は横篦磨き。	周溝内。
2682	壺 土師器	器高:(135㎜)口径:—底径:77㎜最大径:—体部下半のみ残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。明赤褐。	体部は、内湾しながら立ち上がる。外面:縦篦磨き。内面:横なで。	周溝内。
2683	壺 土師器	器高:(70㎜)口径:—底径:67㎜最大径:—体部下端～底部½残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い赤褐。	底部中央に凹み。体部は内湾しながら立ち上がる。外面:横刷毛。内面:なで。	周溝内。

2684	壺 土師器	器高:143㎜口径:112㎜底径:42㎜最大径:一完形	径2～3㎜の小石・砂粒を含む。酸化。軟質。外面及び、口縁部内面:赤色塗彩。	小形。有段口縁。体部球形。底部に径13㎜の焼成前穿孔あり。内外面:なで後、赤色塗彩。	周溝内。
2685	壺 土師器	器高:112㎜口径:82㎜底径:38㎜最大径:一完形	径2～3㎜の小石・砂粒を含む。酸化。軟質。外面及び口縁部内面：赤色塗彩。体部下端に黒斑あり。	小形。口縁部ラッパ状に開く。体部球形。底部に11㎜×15㎜の焼成前穿孔あり。内外面:なで。外面及び口縁部内面:なで後、赤色塗彩。	周溝内。
2686	壺 土師器	器高:130㎜口径:86㎜底径:35㎜最大径:一完形	砂粒を多く含む。酸化。軟質。外面及び口縁部内面:赤色塗彩。	小形。口縁部ラッパ状に開く。体部球形。底部穿孔の有無不明。内外面:なで。外面及び、口縁部内面:赤色塗彩。	周溝内。
2687	台付甕 土師器	器高:(214㎜)口径:一底径:一最大径:221㎜体部～台部⅘残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	最大径体部上端。外面:全面斜め刷毛内面:なで。	周溝内。体部外面:煤付着。
2688	台付甕 土師器	器高:(56㎜)口径:一底径:77㎜最大径:一台部のみ残	砂粒を多く含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	端部折り返し。外面:斜め刷毛。内面:なで。	周溝内。
2689	椀 土師器	器高:64㎜口径:116㎜底径:49㎜最大径:一完形	砂粒を含む。酸化。やや軟質。明赤褐・黒褐。口縁部内外面:赤彩。	体部内湾しながら立ち上がる。外面:縦刷毛後、なで。内面:横なで後、内外面:口縁部赤色塗彩。	周溝内。
2690	椀 土師器	器高:67㎜口径:110㎜底径:44㎜最大径:一¾残	径2～4㎜の小石・砂粒を含む。酸化。軟質。外面:橙。内面:黒。	体部内湾しながら立ち上がる。内外面:なで。	周溝内。

Ⅰ地区A区9号方形周溝墓（第236・237図、第68表、図版50）

本方形周溝墓は、北側の周溝が西側調査区域外へと続いている。他の遺構との重複関係では、A区53号住居跡が本方形周溝墓よりも古く、51号住居跡・88号土坑は本方形周溝墓より新しい。本方形周溝墓の規模は小さく、方台部は不整方形を呈する。北東部辺の長さは約5mであるが、他は明らかではない。周溝は、北側・東側・南側にブリッジを持つ。周溝の幅は一様ではなく、最も広い北東部で3.2m、北東部で約50cmである。なお、北西辺に広くなっている部分があるが、覆土は他の部分と同一である。この広い部分が、構築時から広かったのか、あるいは構築後に広げられたのかについては明らかではない。周溝の深さは、15cm～30cmで、北西部は深く、南東部は浅くなっている。

遺物は、周溝南東部より坩（2691）が出土しているが、底面より約10cm上方である。本方形周溝墓の時期は、古墳時代前期と考えられる。（飯塚）

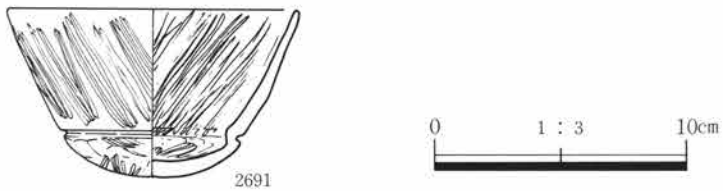


Ⅰ地区Ａ区９号方形周溝墓土層説明（Ａ―Ａ′）
1　暗褐色土　ローム粒・軽石・小石を僅かに含む。
2　暗褐色土　ローム粒を多く含む。
3　暗褐色土　ロームの混合・暗黄褐色を呈し、柔らかい。

Ⅰ地区Ａ区９号方形周溝墓土層説明（Ｂ―Ｂ′）
1　ローム・暗褐色土・黒褐色土の混合。
2　１層に同じ　ロームの量多く、黄褐色を呈す。

Ⅰ地区Ａ区９号方形周溝墓土層説明（Ｃ―Ｃ′）
1　暗褐色土とロームの混合。
2　ロームに暗褐色土が若干混合したもの。

第236図　Ⅰ地区Ａ区９号方形周溝墓遺構図



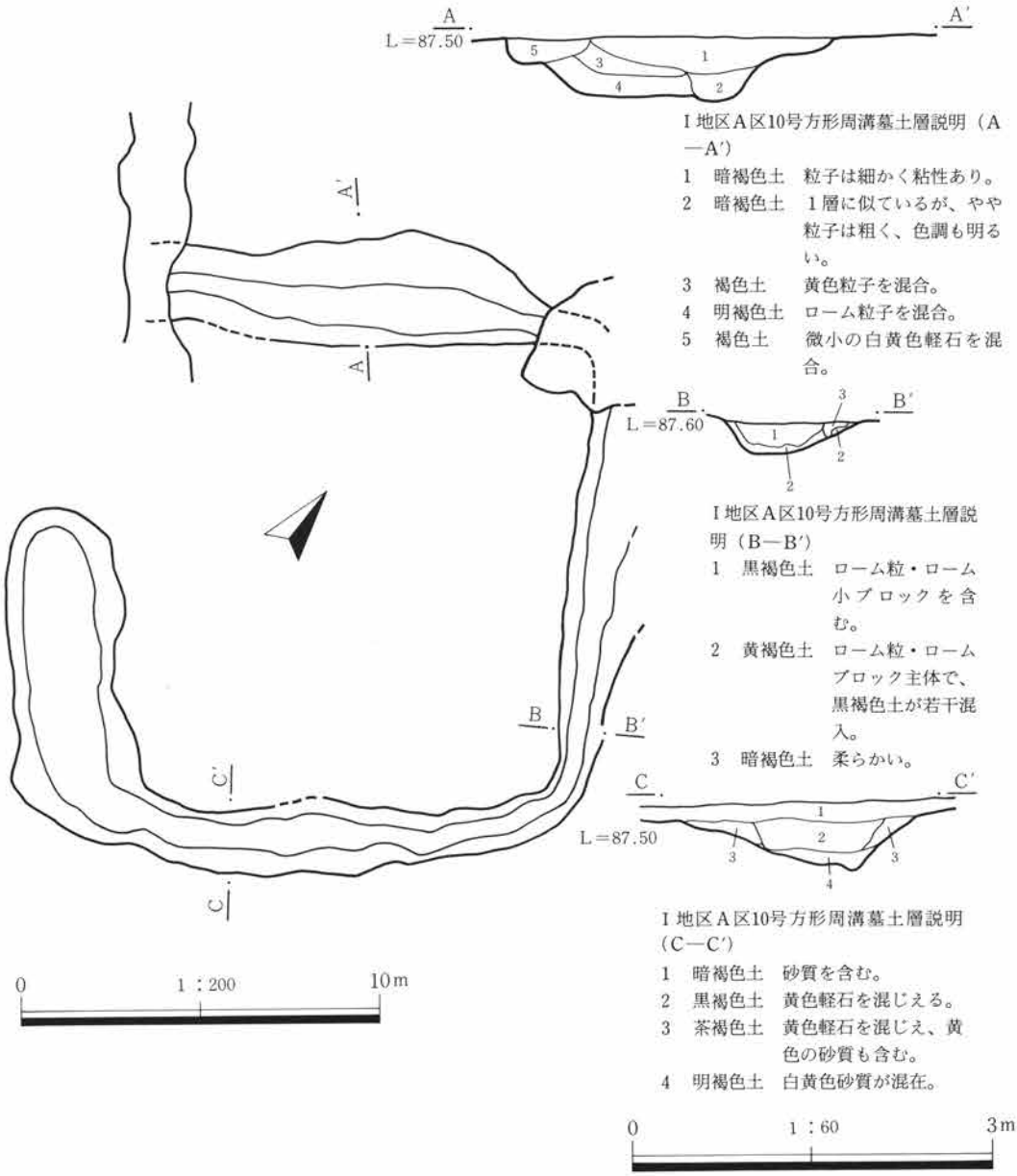
第237図　Ⅰ地区Ａ区９号方形周溝墓遺物図

第 68 表　Ⅰ地区Ａ区９号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
2691	坩 土師器	器高:65㎜口径:116㎜底径:―最大径:―ほぼ完形	小砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部高く丸底。内外面:篦磨き。	周溝内。

Ⅰ地区Ａ区10号方形周溝墓（第238・239図、第69表）

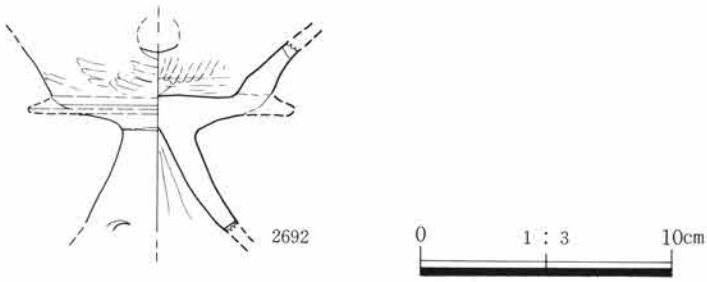
8号方形周溝墓の南東側で検出された。8号方形周溝墓とは4mの距離で接し、南東側の12号方形周溝墓とは13m離れる。多くの遺構との重複がある。北西側では、54・55号住居跡と14号溝、北角では90号住居跡、29号溝、南西側では56～58号住居跡と直接重なっている。又、内側には、59号住居跡、90・111・117・118号土坑が見られる。これらは56～59号住居跡及び111・118土坑が古く、その他は全て新しいと思われる。



第238図　Ⅰ地区Ａ区10号方形周溝墓遺構図

規模は、北西辺から南東辺が約17m、北東辺から南西辺が約18mで、北東辺の走向は、N—28°—Wである。周溝の内側は、南角がやや鈍角に開くため僅かに台形状だが、基本的には一辺が12.5mほどの正方形に近い。周溝幅は、南東側が最も均一で上幅1.8m、その他は13.1mとだいたい中央部分が外に開いた形状を示す。又、南西側は、西角よりが約５m周溝が途切れ、ブリッジ状を呈している。底はいずれも角部分が中央部分より20～30cmほど浅く、断面形は基本的に内側がやや急なU字形である。なお、周溝の土層堆積状況からは、当初の掘り方の埋没後幅を狭くした再掘削を推定しうる。主体部等の施設は不明である。

遺物は少なく、僅かに周溝埋土中から土師器高杯片（2692）が出ただけである。構築時期は、古墳時代前期と考えられる。（坂井）



第239図　Ⅰ地区Ａ区10号方形周溝墓遺物図

第 69 表　Ⅰ地区Ａ区10号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
2692	高杯 土師器	器高：—口径：—底部：—最大径：—杯部下半～脚部上半残	小砂粒を含む。酸化。鈍い黄褐。脚の一部を除いて煤付着。	杯部は外反気味に立ち上がり、脚部は、「ハ」の字状に開く。	周溝内。

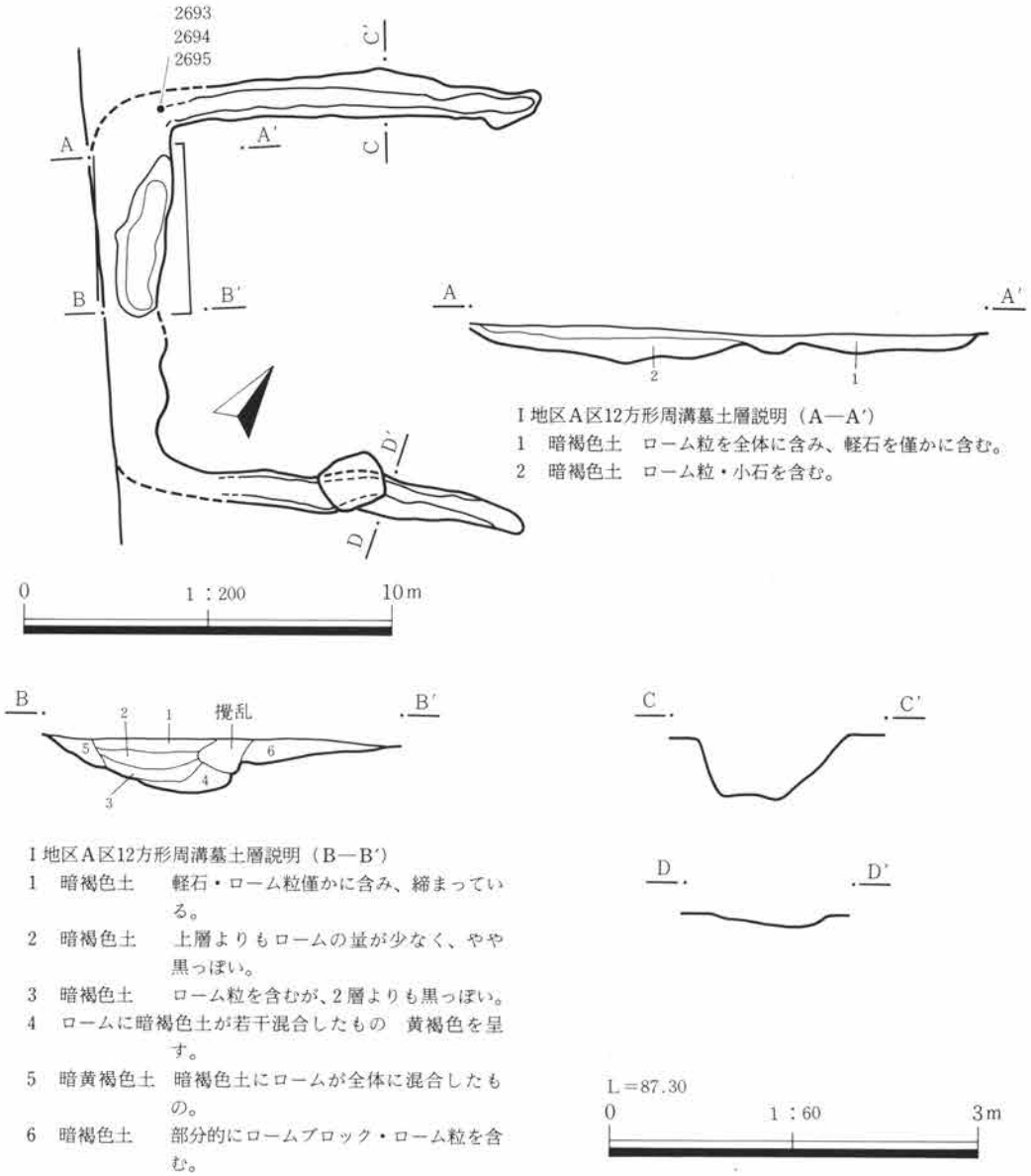
Ⅰ地区Ａ区12号方形周溝墓（第240・241図、第70表、図版51）

本方形周溝墓は、南西部の一部を除いてほぼ全域が調査区内に存在する。他の遺構との関係では、Ａ区５号掘立・６号掘立・115号土坑と重複しており、本方形周溝墓の方が古い。

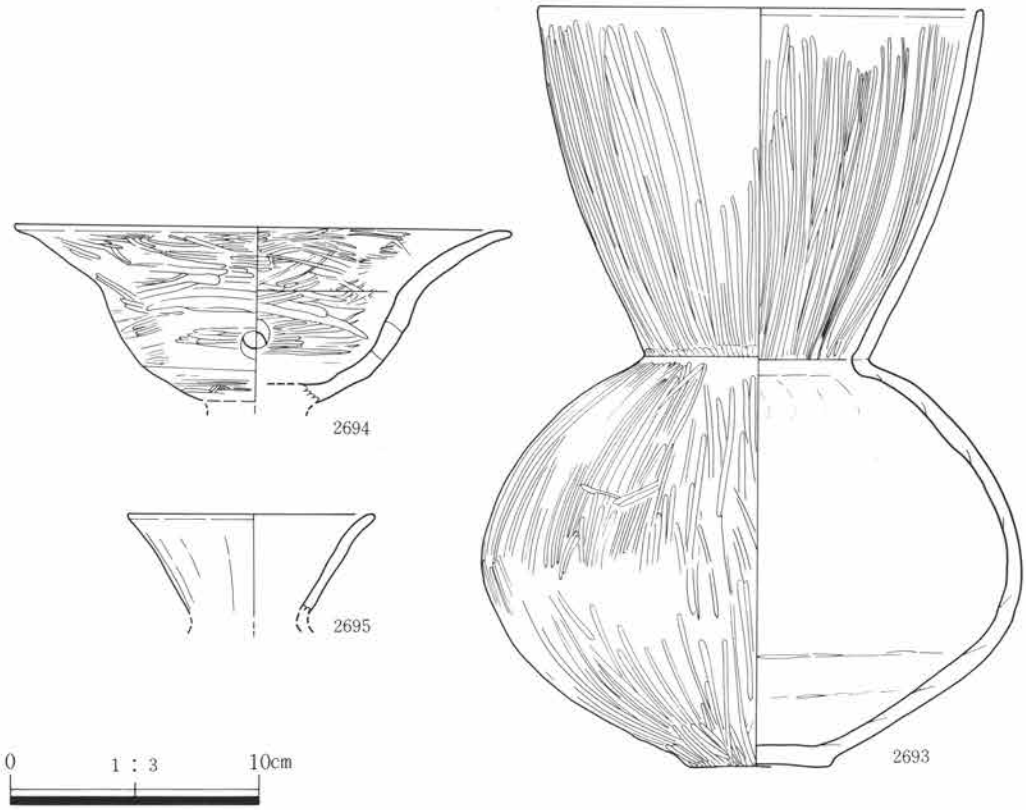
規模は約9.5m×9.5mで、ほぼ正方形を呈する。主軸はN—35°—Wとなる。周溝は、三辺のみで、北東辺は確認されていない。なお、北東辺については、周溝が全く存在しなかったのか、そ

れともローム層にまでは達しない浅い溝がめぐっていたのかについては明らかではない。

周溝は、幅が0.9m～1.2mであるが、南西辺周溝については更に広くなっている。又、南東辺周溝は、東側部分でやや開き気味となっている。周溝の深さは、30cm～40cmであるが、東辺周溝は約10cmと浅くなっている。南西辺周溝内には、深さ10cm～15cmの浅い長楕円形の掘り込みがある。約4.4m×約1.3mの規模を持ち、掘り込み底面より３～７cm上方からは、坩(2693)・器台(2694)・小形壺（2695）が出土している。本方形周溝墓の時期は、古墳時代前期と考えられる。（飯塚）



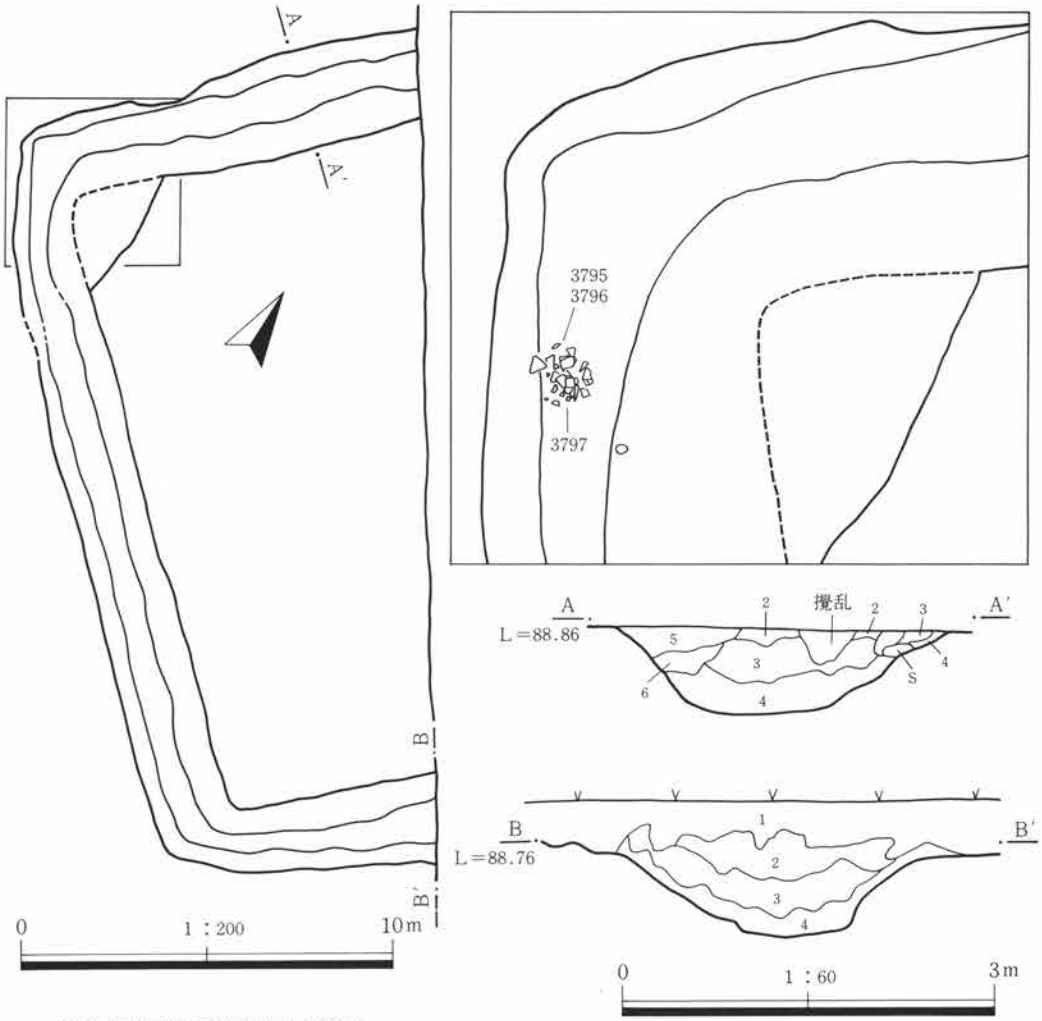
第240図　I 地区A区12号方形周溝墓遺構図



第241図　Ⅰ地区Ａ区12号方形周溝墓遺物図

第 70 表　Ⅰ地区Ａ区12号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
2693	坩 土師器	器高:300㎜口径:178㎜底径:57㎜最大径:216㎜完形	径１～２㎜の砂粒・小石を含む。酸化。軟質。橙。	口縁部高く最大径体部中央。外面及び口縁部内面:縦篦磨き。体部内面:なで。	周溝内。
2694	器台 土師器	器高:(69㎜)口径:198㎜底径:—最大径:—体部のみ残	小砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い褐。内外面に黒斑あり。	器受部端部は大きく開く。等間隔の４孔を有する。内外面:横篦磨き。	周溝内。
2695	小形壺 土師器	器高:(40㎜)口径:98㎜底径:—最大径:—口縁部のみ残	径２～３㎜の小石・砂粒を含む。酸化。軟質。	口縁部ラッパ状に開く。外面:縦なで内面:横なで。	周溝内。



Ⅰ地区Ｃ区１号方形周溝墓土層説明

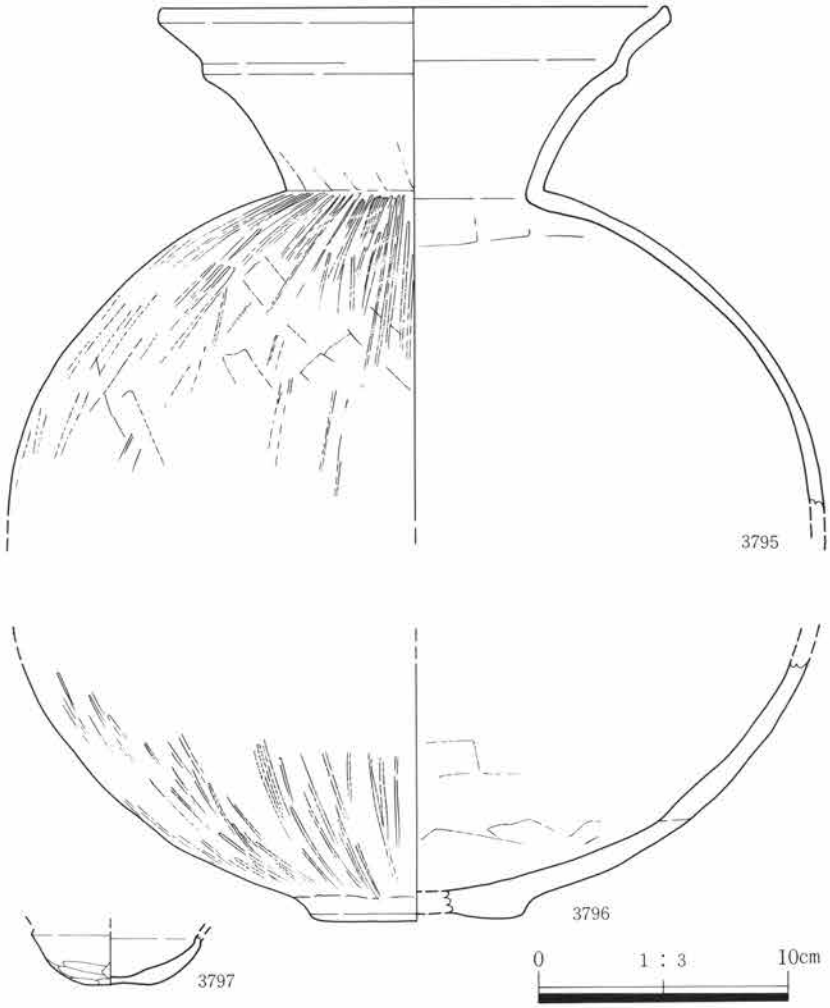
1　表土
2　暗褐色土　小石、軽石を含む。
3　黒褐色土　ローム小ブロックを含む。
4　暗黄褐色土　ローム大小ブロックを多く含む。
5　暗褐色土　粒子粗く、粘性弱い。
6　黒褐色土　焼土・ローム小ブロック少量含む。

第242図　Ⅰ地区Ｃ区１号方形周溝墓遺構図・遺物分布図

Ⅰ地区Ｃ区１号方形周溝墓（第242・243図、第71表、図版41・51）

本方形周溝墓は、南西部分の約半分が調査区域内に存在する。Ｃ区９号住居跡・11号住居跡・13号住居跡・１号溝と重複するが、これらよりも本方形周溝墓の方が古い。

全体の規模は不明であるが、南西部分の辺は16.5mとなる。なお、この辺を基準に主軸を設定し、方位を求めると、N－48°－Wとなる。周溝の幅は、約２mでほぼ一定しているが、北側では約2.3mとやや広くなる。周溝の深さは60cm～70cmで、掘り方は一様ではないが、底面はほぼ平坦となっている。

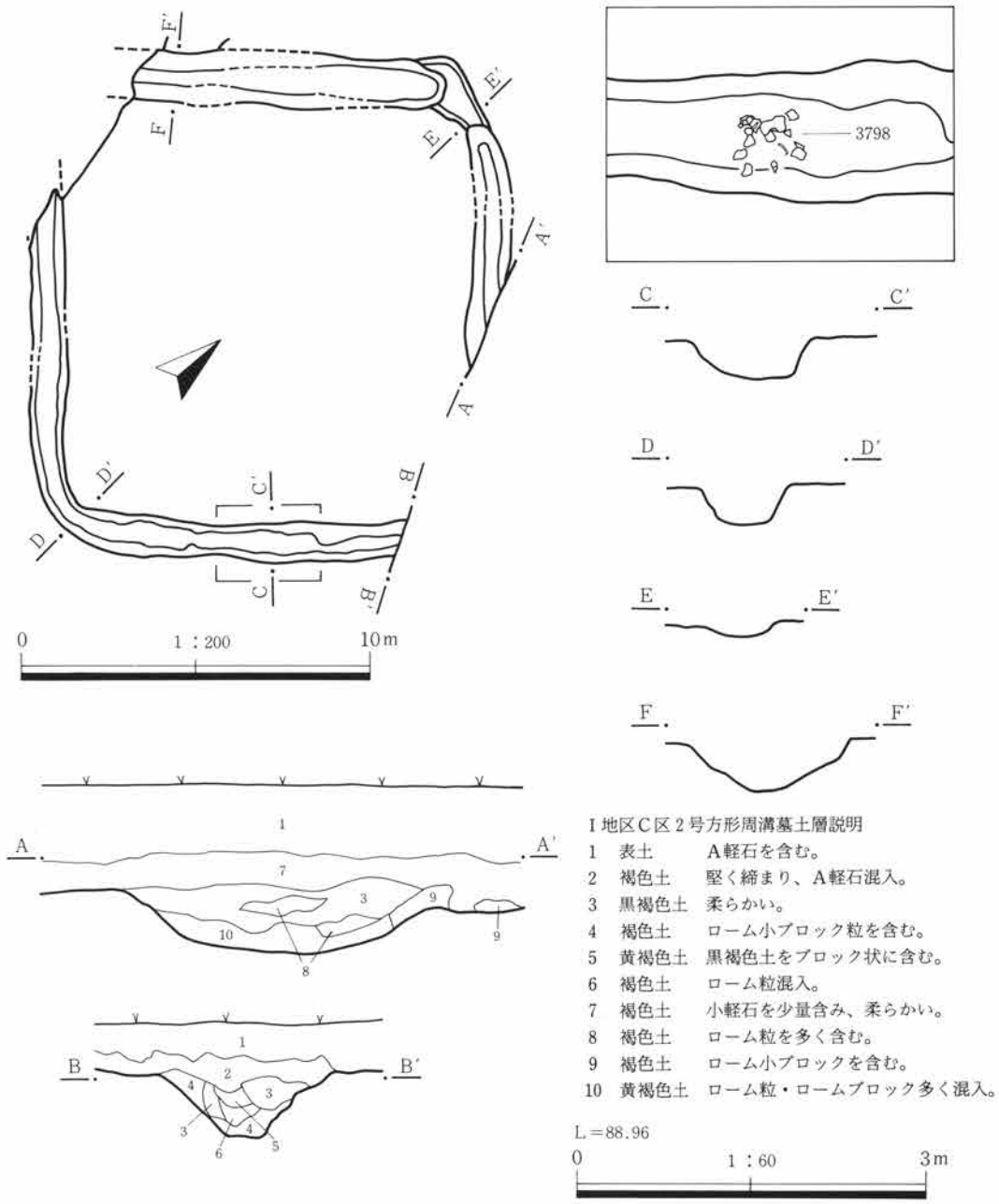


第243図　Ⅰ地区C区1号方形周溝墓遺物図

遺物は西側のコーナー付近よりまとまって発見された。底面より10cm～30cm上方の覆土中で破片となっていた。なお、3795及び3796の壺は同一個体と思われる。本方形周溝墓の時期は古墳時代前期である。　（飯塚）

第 71 表　Ⅰ地区C区1号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
3795 3796	壺 土師器	器高:[360㎜]口径:[204㎜]底径:[86㎜]全体の⅔残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い赤褐。	有段口縁。最大径は体部中央。外面:口縁部はなで、体部は箆削り後、僅かに縦箆磨き。内面:口縁部～体部はなで。	周溝内。
3797	坩 土師器	器高:(19㎜)口径:一底径:25㎜下半部残。	小砂粒を含む。酸化。硬質。橙。	体部は浅く、平底。外面:体部下半はなで後、箆削り。内面:体部下半はなで。	周溝内。



I 地区C区2号方形周溝墓土層説明

1	表土	A軽石を含む。
2	褐色土	堅く締まり、A軽石混入。
3	黒褐色土	柔らかい。
4	褐色土	ローム小ブロック粒を含む。
5	黄褐色土	黒褐色土をブロック状に含む。
6	褐色土	ローム粒混入。
7	褐色土	小軽石を少量含み、柔らかい。
8	褐色土	ローム粒を多く含む。
9	褐色土	ローム小ブロックを含む。
10	黄褐色土	ローム粒・ロームブロック多く混入。

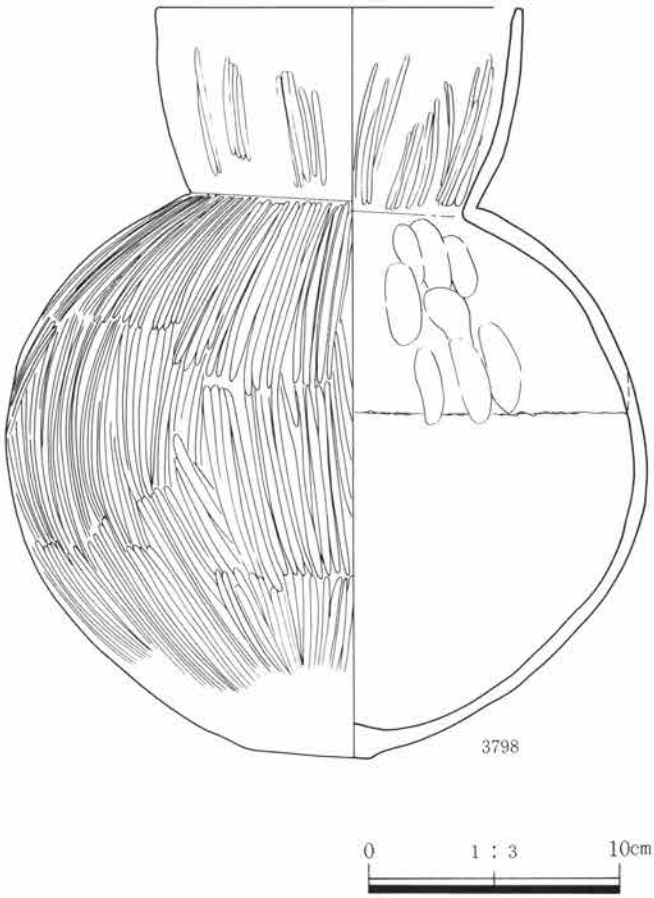
第244図　I 地区C区2号方形周溝墓遺構図・遺物分布図

I 地区C区2号方形周溝墓（第244・245図、第72表、図版41・51）

本方形周溝墓は、C区7号方形周溝墓の北側4mの位置に、7号方形周溝墓と平行して存在する。C区1号館跡・囲溝掘立群・8号溝と重複するが、いずれよりも本方形周溝墓の方が古い。

方台部の規模は、11.7m×11.7mで、正方形を呈する。方位は、N－11°－Eとなる。周溝の幅は、北西部辺が1.4mとやや広くなっているが、他の３辺はいずれも１mと狭い。周溝の深さは、ローム上面より30cm～50cmであるが、北側コーナー付近では約15cmと浅くなっている。周溝の掘り方については一様ではなく、逆台形やU字形となる。又、内側が逆台形で外側がU字形となる部分もある。

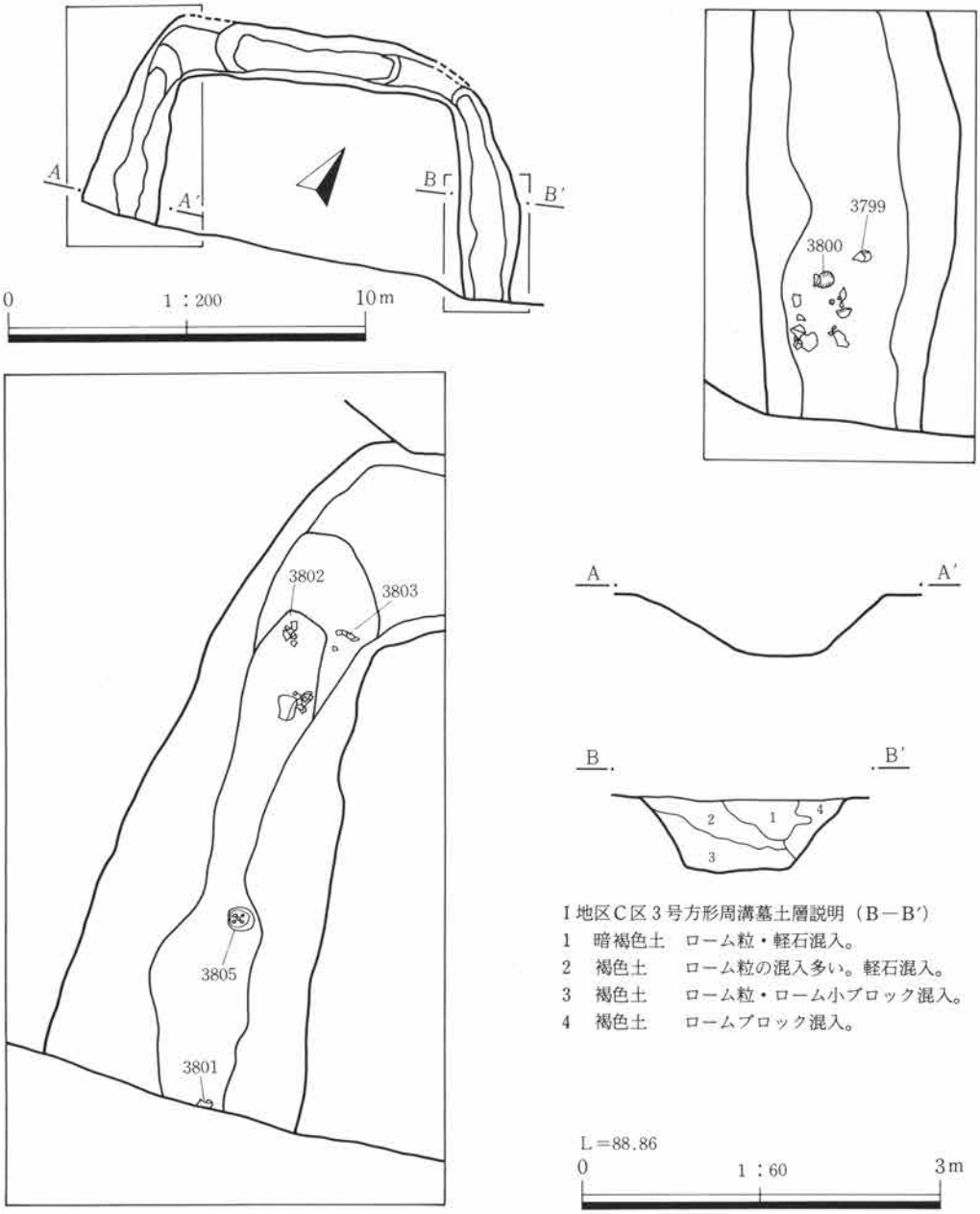
遺物は、周溝の南東辺ほぼ中央に存在する。底面より５cm～10cm上方から、壺（3798）が、破砕された状態で出土した。本方形周溝墓の時期は、出土遺物から古墳時代前期と考えられる。　（飯塚）



第245図　Ⅰ地区Ｃ区２号方形周溝墓遺物図

第 72 表　Ⅰ地区Ｃ区２号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
3798	壺 土師器	器高:296㎜口径:147㎜底径:52㎜最大径:255㎜ほぼ完形	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。体部～口縁部に黒斑。	口縁部は、内湾しながら立ち上がる。最大径は、体部中央。外面:口縁部及び体部は、縦箆磨き。内面:口縁部は、縦箆磨き、体部はなで及び指押さえ。体部に、輪積痕あり。	周溝内。



第246図　I地区C区3号方形周溝墓遺構図・遺物出土状況図

I地区C区3号方形周溝墓（第246・247図、第73表、図版51・52）

本方形周溝墓は、調査区内に北半分が存在する。他の遺構との重複関係では、2号古墳の周堀が、本方形周溝墓の周溝北東部上方を僅かに切っている。規模は明らかではないが、方台部の北

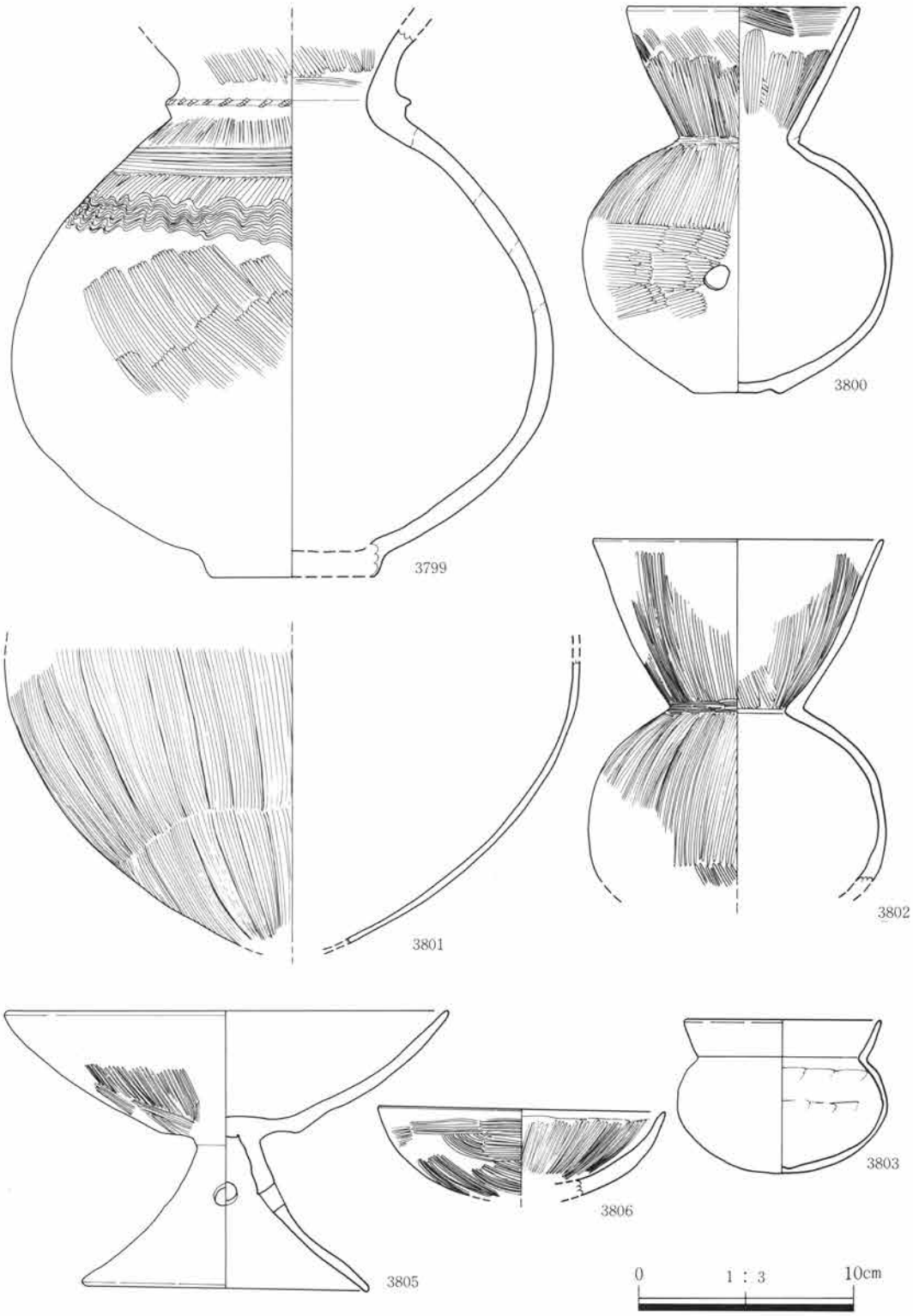
西辺は約7.5mとなる。又、方台部の南西辺がほぼ直角に曲がるのに対して、北東辺は約100度で、やや開き気味になっている。北西辺と南西辺を基準に主軸を設定すると、方位はN－25°－Wとなる。

周溝の幅は一定ではなく、北西辺の周溝幅が1.5mであるのに対して、北東辺の最も広い部分で1.7m、南西辺では2.2mと広くなる部分もある。又、コーナー部はやや狭くなっている。周堀の深さは、45cm～60cmである。北東辺がやや深く、北西辺とコーナー部が浅くなっている。掘り方は、逆台形や皿状を呈しているが一様ではない。

遺物は、北東辺と南西辺の周溝内より出土している。これらの遺物のうち、坩（3800・3802・3803）は、底面より30cm～50cm上方に存在し、その他は底面より約10cm上方に存在した。本方形周溝墓の時期は、古墳時代前期と考えられる。（飯塚）

第 73 表　Ⅰ地区Ｃ区３号方形周溝墓遺物観察表

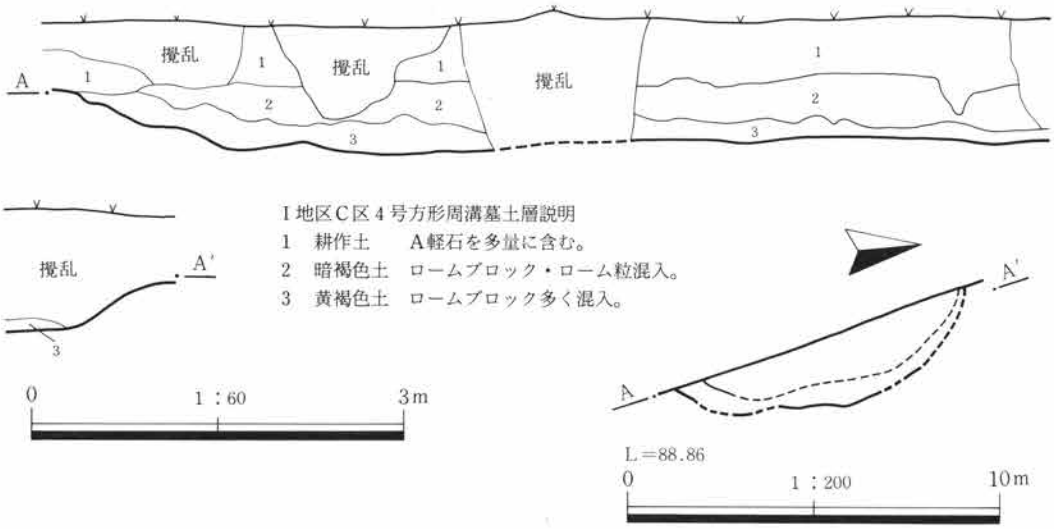
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
3799	壺 土師器	器高:(250㎜)口径:一底径:[75㎜]最大径:250㎜口縁部上半欠	径３～５㎜の小石。砂粒を含む。酸化。軟質。明黄褐。	頸部に凸帯、最大径は、体部中央やや下方。外面:口縁部はなで。体部は篦磨き後、上方より縦・横・波状の櫛描文。内面：口縁部は篦磨き。体部はなで。	周溝内。
3800	坩 土師器	器高:177㎜口径:[108㎜]底径:43㎜最大径:143㎜口縁部の一部欠	砂粒を多く含む。酸化。軟質。明赤褐。体部に黒斑。外面に煤付着。	最大径は体部中央。外面:篦磨き。内面:なで。	周溝内。体部中央に径10㎜の焼成後穿孔あり。
3801	甕 土師器	体部破片	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い褐。	外面:縦刷毛目。内面:なで。	周溝内。
3802	坩 土師器	器高:(158㎜)口径:[134㎜]底径:一最大径:[137㎜]口縁部～体部中央⅓残	砂粒を多く含む。酸化。硬質。鈍い橙。	口径と体部最大径は、ほぼ同じ。外面:縦篦磨き。内面:口縁部は縦篦磨き。体部なで。	周溝内。
3803	坩 土師器	器高:71㎜口径:[89㎜]底径:一最大径:96㎜口縁部¾欠	小石・砂粒は殆ど含まず。酸化。硬質。鈍い褐。	口縁部は大きい。丸底。内外面は、なで。	周溝内。
3805	高杯 土師器	器高:128㎜口径:204㎜底径:134㎜ほぼ完形	径２～４㎜の小石を多く含む。酸化。硬質。浅黄橙。	杯部は大きく開き、脚部に４孔を有する。杯部及び脚部外面篦磨き。脚部内面篦削り。	周溝内。
3806	高杯 土師器	器高:一口径:[134㎜]底径:一杯部¼残	径２～３㎜の小石を含む。酸化。硬質。明赤褐。	杯部は、内湾気味に開く。内外面は篦磨き。	周溝内。



第247図　Ⅰ地区Ｃ区３号方形周溝墓遺物図

Ⅰ地区Ｃ区４号方形周溝墓（第248図）

本方形周溝墓は、周溝の一部が確認された。溝の形態と覆土の形態から方形周溝墓としたが、方形周溝墓ではない可能性も残る。周溝の深さは、ローム面より約45cmで、底面はほぼ平坦である。遺物は、発見されなかった。（飯塚）



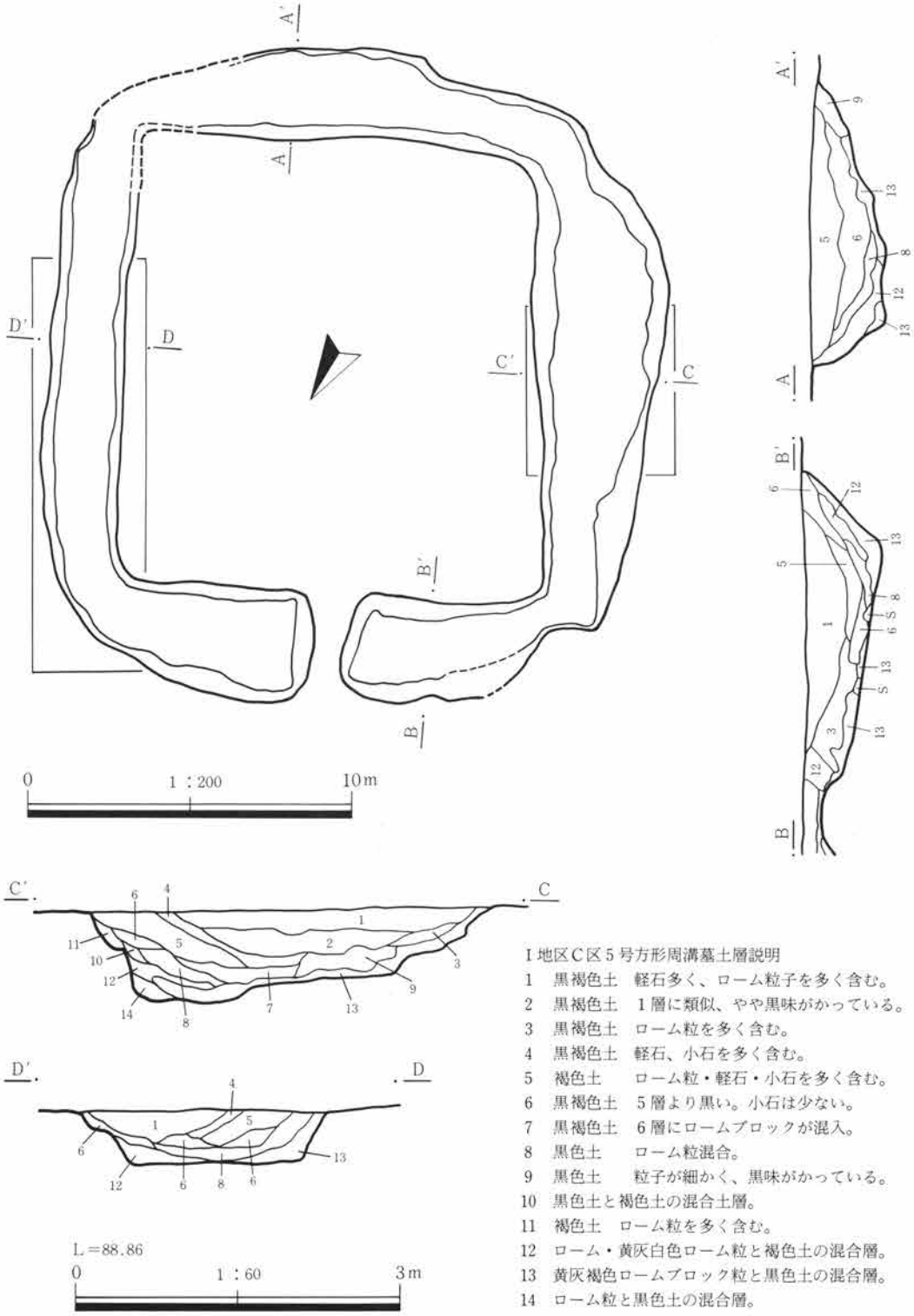
第248図　Ⅰ地区Ｃ区４号方形周溝墓遺構図

Ⅰ地区Ｃ区５号方形周溝墓（第249～253図、第74表、図版42・52・53）

６号方形周溝墓の南東至近距離で検出された。他の遺構との重複関係では、Ｃ区15号住居よりも新しく、２号古墳・５号井戸・62号土坑よりも古い。なお、76号土坑との新旧関係については、不明である。76号土坑は、2.9m×1.2mの規模を有する長方形の土坑であるが、この土坑の主軸は、本方形周溝墓の主軸とほぼ一致している。その点においては、76号土坑は本方形周溝墓の主体部となる可能性も考えられないわけではないが、76号土坑の埋没状況及び方台部中央より外れた位置に存在すること、遺物が皆無であること等により、本方形周溝墓の主体部と考える根拠はない。

方台部は、ほぼ正方形を呈するものの、各辺の長さは一様ではなく、北西辺が約13m、北東辺が約13.5m、西南辺が13.5m、東南辺が12mである。主軸は、N－30°－Wである。

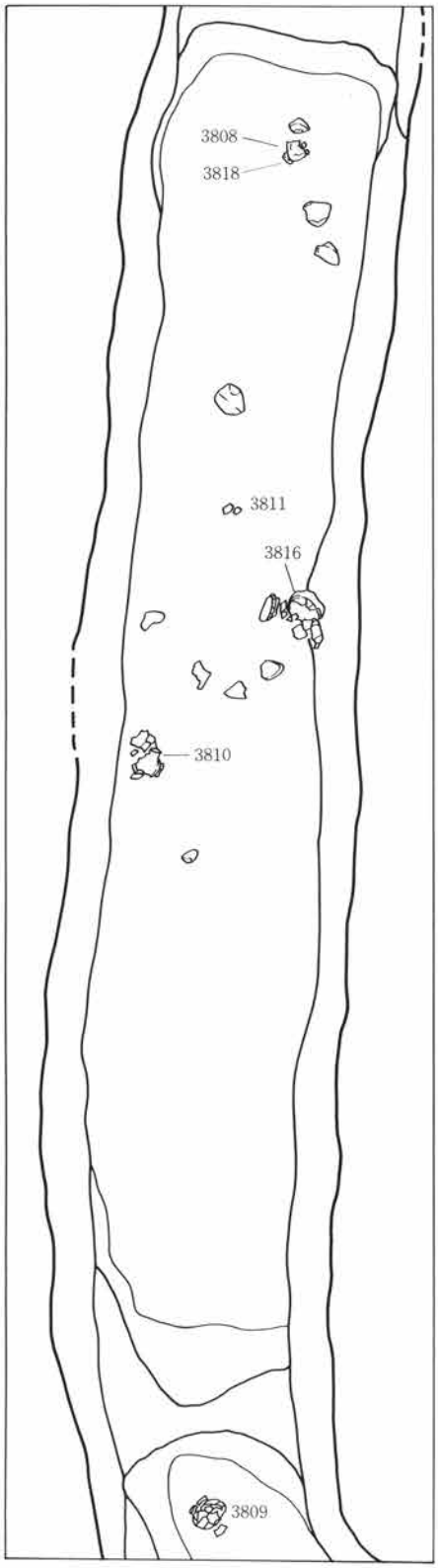
周溝は、北西辺周溝に最も狭い部分で70cm、最も広い部分で1.5mのブリッジを持つ。周溝の幅は一様ではなく、北東辺周溝を除く他の３辺では、中央付近に幅の広くなる部分がある。最も幅の広い部分は、北西辺で3.3m、南西辺で4.3m、東南辺で2.3mとなる。又、コーナー付近では、

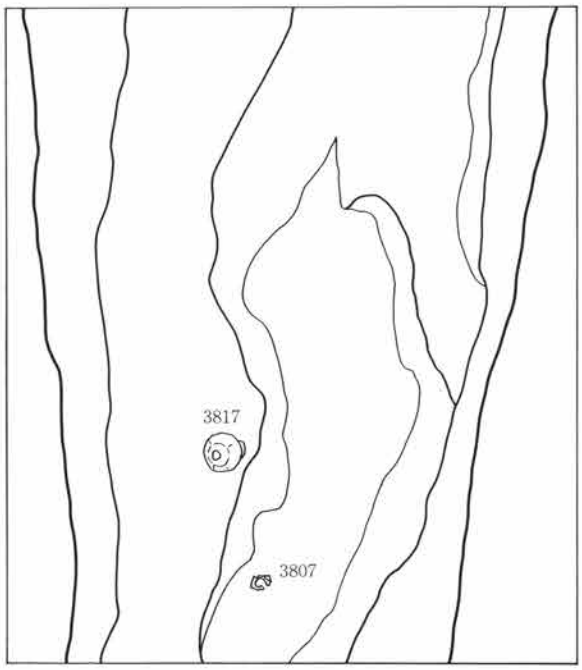


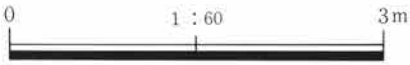
I地区C区5号方形周溝墓土層説明

1　黒褐色土　軽石多く、ローム粒子を多く含む。
2　黒褐色土　1層に類似、やや黒味がかっている。
3　黒褐色土　ローム粒を多く含む。
4　黒褐色土　軽石、小石を多く含む。
5　褐色土　　ローム粒・軽石・小石を多く含む。
6　黒褐色土　5層より黒い。小石は少ない。
7　黒褐色土　6層にロームブロックが混入。
8　黒色土　　ローム粒混合。
9　黒色土　　粒子が細かく、黒味がかっている。
10　黒色土と褐色土の混合土層。
11　褐色土　ローム粒を多く含む。
12　ローム・黄灰白色ローム粒と褐色土の混合層。
13　黄灰褐色ロームブロック粒と黒色土の混合層。
14　ローム粒と黒色土の混合層。

第249図　I地区C区5号方形周溝墓遺構図





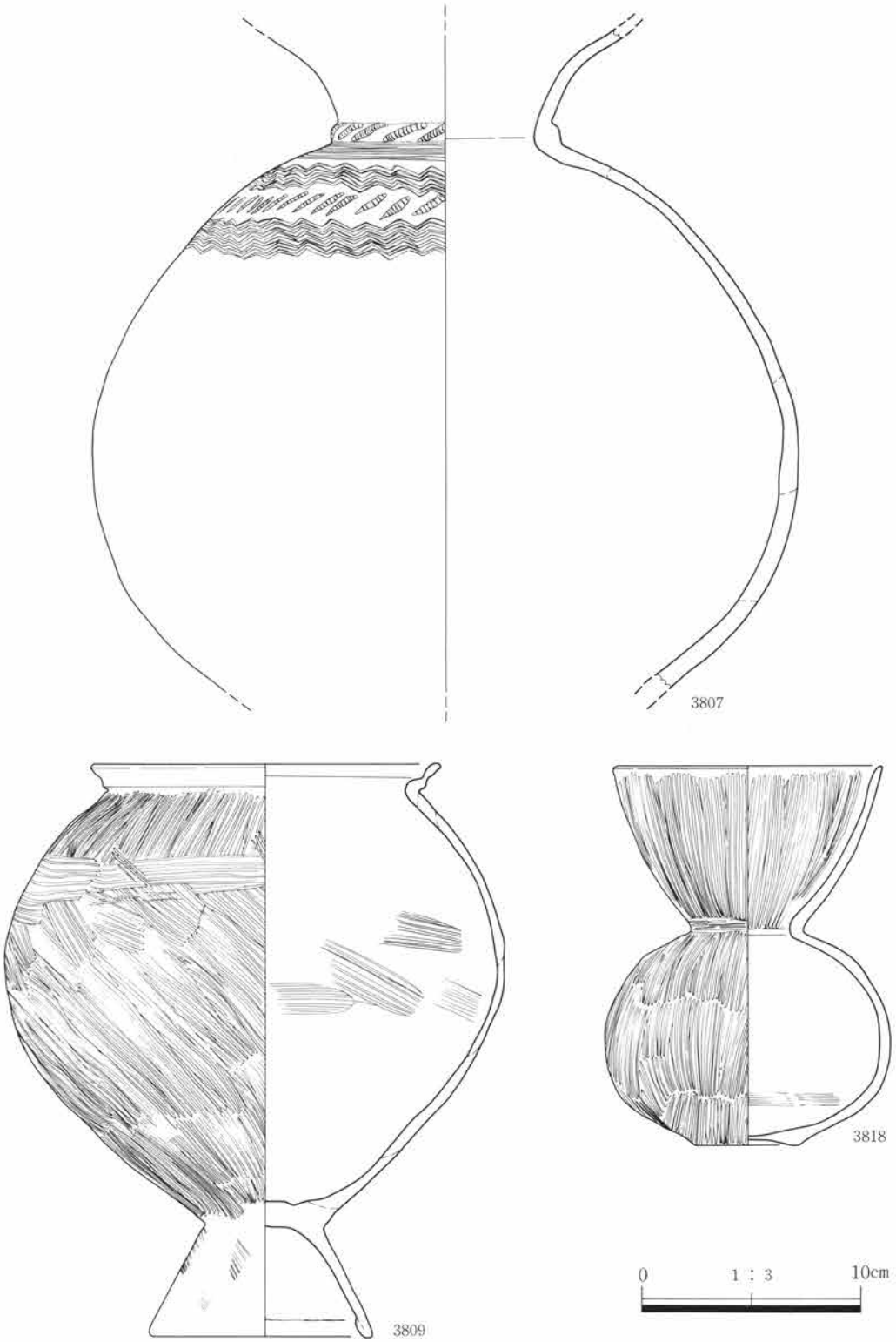


１m～２mと狭くなっている。周溝の深さは、40cm～80cmで、周溝中央付近が最も深く、コーナー付近では、40cm以下となっている。

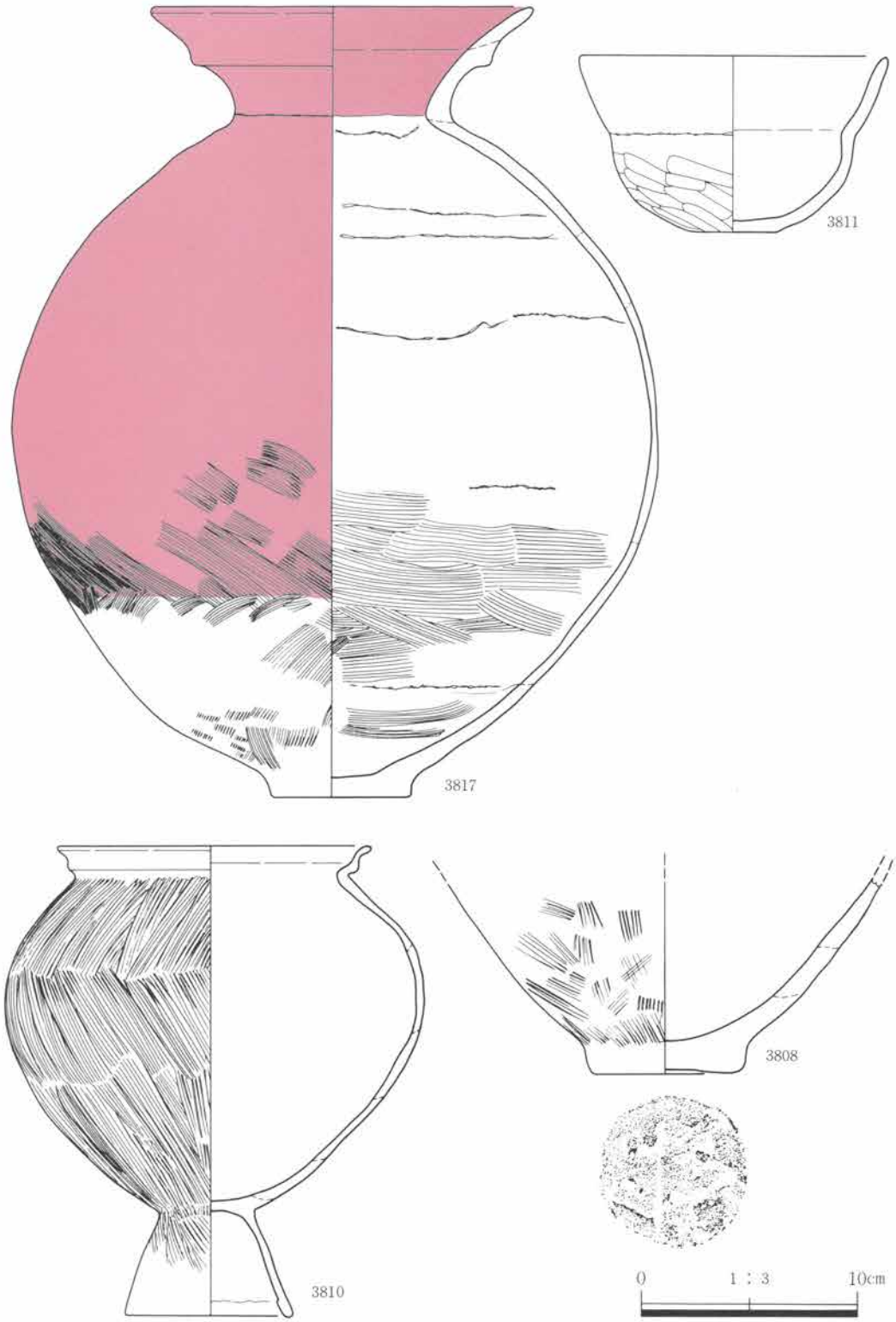
遺物は、北東辺周溝と南西辺周溝に存在した。周溝中央付近に集中している。これらの遺物のうち、台付甕（3809・3810）は底面にほぼ着いた状態であったのに対し、3807の壺は底面より約30cm～40cm上方であった。その他の遺物については、底面より５cm～15cmと比較的底面に近い。

本方形周溝墓の時期は、遺物の様相から古墳時代前期と考えられる。（飯塚）

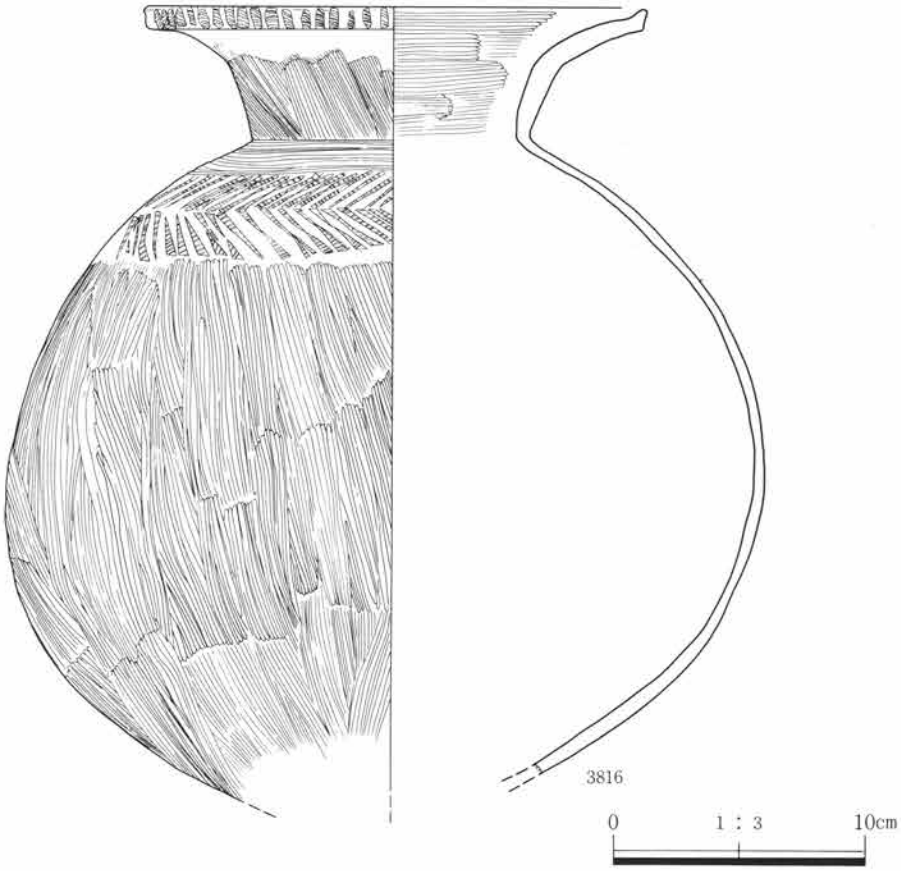
第250図　Ⅰ地区Ｃ区５号方形周溝墓遺物出土状況図



第251図　Ⅰ地区Ｃ区５号方形周溝墓遺物図(1)



第252図　Ⅰ地区Ｃ区５号方形周溝墓遺物図（２）



第253図　Ⅰ地区C区5号方形周溝墓遺物図(3)

第 74 表　Ⅰ地区C区5号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
3807	壺 土師器	器高:一口径:一底径:一頸部径:105㎜最大径:323㎜口縁端部・体部下端～底部欠	径2～3㎜の小石を多く含む。酸化。軟質。鈍い黄橙。	頸部に凸帯。最大径は体部中央。頸部凸帯に櫛歯文。外面:篦磨き後、体部上方より横線文・波状文・櫛歯文・波状文。	周溝内。
3808	壺 土師器	器高:(980㎜)口径:一底径:70㎜体部下半⅓底部残	径3～5㎜の小石を多く含む。酸化。軟質。橙。	底部は厚い。外面:なで後、刷毛目。内面:なで。底部に木葉痕。	周溝内。
3809	台付甕 土師器	器高:261㎜口径:160㎜底径:98㎜最大径:228㎜完形	径3～4㎜の小石を少量含む。酸化。硬質。鈍い黄橙・黒褐。体部に黒斑。	「S」字状口縁。台部は折り返し。外面:体部は斜め刷毛目後、肩部に横線文、台部はなで。内面:なで。	周溝内。

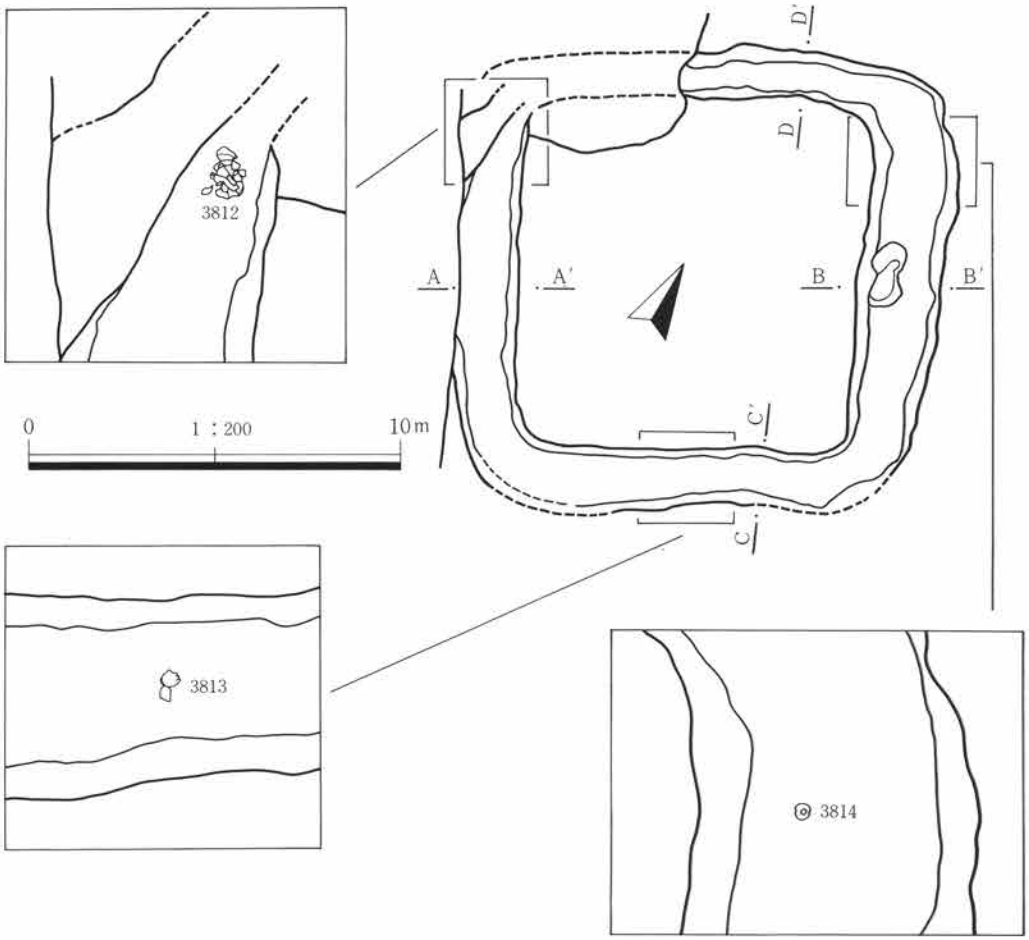
3810	台付甕 土師器	器高:216㎜口径:145㎜底径:78㎜最大径:194㎜完形	砂粒を多く含む。酸化。やや硬質。橙。体部上半に黒斑。外面に煤付着。	「S」字状口縁。台部折り返し。外面:体部～台部上方は、刷毛目。内面:なで。	周溝内。
3811	坩 土師器	器高:81㎜口径:[142㎜]底径:34㎜全体の⅔残	小砂粒を多量に含む。酸化。軟質。橙。体部に黒斑。外面一部に煤付着。	最大径は口縁部。頸部の縊が小さく底部は平底。内外面は篦磨き。	周溝内。
3816	壺 土師器	器高:(300㎜)口径:200㎜底径:一最大径302㎜口縁～体部残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄褐。	最大径は中央部やや下方。口縁部上半は大きく開く。外面:口縁部は刷毛なで。体部は篦なで後、上方より横線文・櫛歯羽状文。内面:なで。	周溝内。
3817	壺 土師器	器高:363㎜口径:178㎜底径:65㎜最大径:298㎜完形	小石・砂粒を多く含む。酸化。軟質。外面及び口縁部内面は、赤色塗彩。(胎土は鈍い黄橙。)	有段口縁。最大径は体部中央。外面:刷毛なで調整後、篦磨き。内面:体部下半は刷毛目。上半なで。輪積み痕あり。	周溝内。
3818	坩 土師器	器高:(172㎜)口径:121㎜底径:[48㎜]	胎土は粒子が細かく、砂粒を含む。酸化。硬質。鈍い橙。	最大径は体部中央。口縁部は内湾しながら開く。外面及び口縁部内面は、縦篦磨き。体部内面はなで。	周溝内。

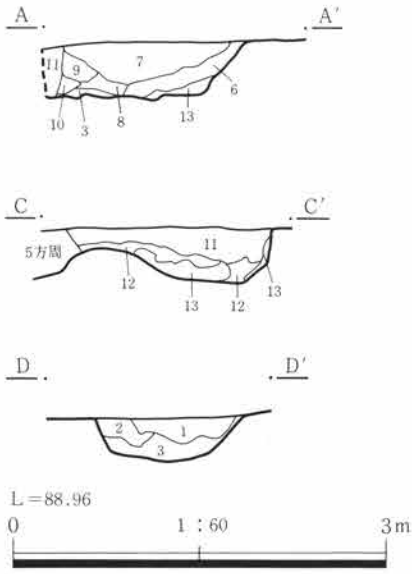
Ⅰ地区Ｃ区６号方形周溝墓（第254・255図、第75表、図版43・53）

５号方形周溝墓の北西方向至近距離で、一辺が併行して検出された。重複する他の遺構には、Ｃ区１号館跡と77号土坑がある。これらの遺構との新旧関係では、１号館跡よりも古いが、77号土坑との関係は不明である。本方形周溝墓の方台部の形態は、隅丸正方形に近いものの、東北辺が傾斜しており、やや歪んだ形となっている。西側と南側のコーナーは、ほぼ直角となっており、これを基準にして主軸を設定すると、N－31°－Wとなる。

周溝は、幅1.5m～2.2mであるが、北西辺周溝はやや狭く、北東辺周溝はやや広くなっている。周溝の深さは約45cmで、場所による違いは殆ど見られない。なお、各辺の周溝において、中央部がやや深くなる傾向がある。掘り方は一定ではなく、皿状・逆台形など多様な形態を示す。

遺物は３か所に存在した。このうち坩（3814）は底面より約20cm上方であるのに対し、他の遺物は底面近くに存在した。本方形周溝墓の時期は、古墳時代前期と考えられる。　（飯塚）

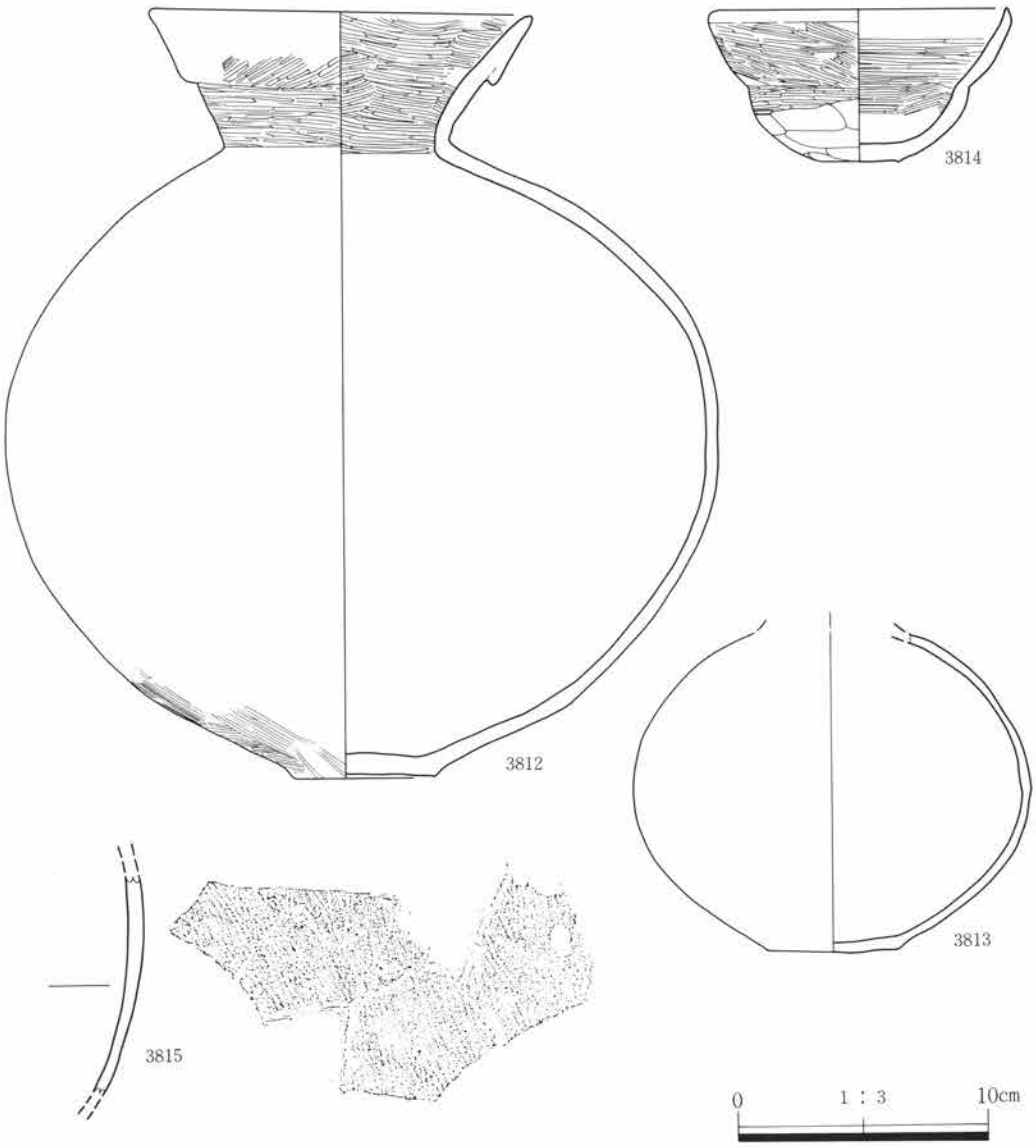




I地区C区6号方形周溝墓土層説明

1　褐色土　小軽石混入。
2　褐色土　小軽石・ローム小ブロック混入。
3　褐色土　ローム小ブロック・ローム粒・軽石混入。
4　黄褐色土　褐色土のブロック混入。
5　褐色土　黄褐色土の大きなブロック混入。
6　黄褐色土　褐色土の混入多い。
7　褐色土　多量のローム粒、小軽石混入。
8　褐色土　ローム粒、小軽石混入。
9　暗褐色土　ローム粒、軽石少量混入。
10　暗褐色土　やや多く、ローム粒、軽石を含む。
11　攪乱層
12　褐色土　ローム粒を多く含む。
13　ロームブロックと黒褐色土の混合土層。

第254図　I地区C区6号方形周溝墓遺構図



第255図　Ⅰ地区Ｃ区６号方形周溝墓遺物図

第 75 表　I 地区C区 6 号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
3812	壺 土師器	器高:302㎜ 口径:1552㎜ 底径:57㎜ 最大径:236㎜完形	径 3～7㎜の小石、砂粒を含む。酸化。軟質。淡橙。体部外面は黒斑が多い	有段口縁。最大径は体部中央。外面:篦削り後、篦磨き。内面:口縁部は篦削り後、篦磨き。体部はなで。	周溝内。
3813	壺 土師器	器高:136㎜ 口径:一 底径:54㎜ 最大径:[160㎜]体部～底部½残	小砂粒を含む。	最大径は体部中央。外面:篦磨き。内面:なで。	周溝内。
3814	坩 土師器	器高:60㎜ 口径:118㎜ 底径:33㎜完形	砂粒を多く含む。酸化。硬質。橙。	平底。最大径は、口唇部で内傾。外面:篦削り後、口縁部のみ篦磨き。内面:篦磨き。	周溝内。
3815	甕 土師器	器高:一 口径:一 底径:一 体部中央150㎜×80㎜の破片	砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い黄橙。	外面:刷毛目。内面:なで。	周溝内。

I 地区C区 7 号方形周溝墓（第256～260図、第76表、図版43・53・54）

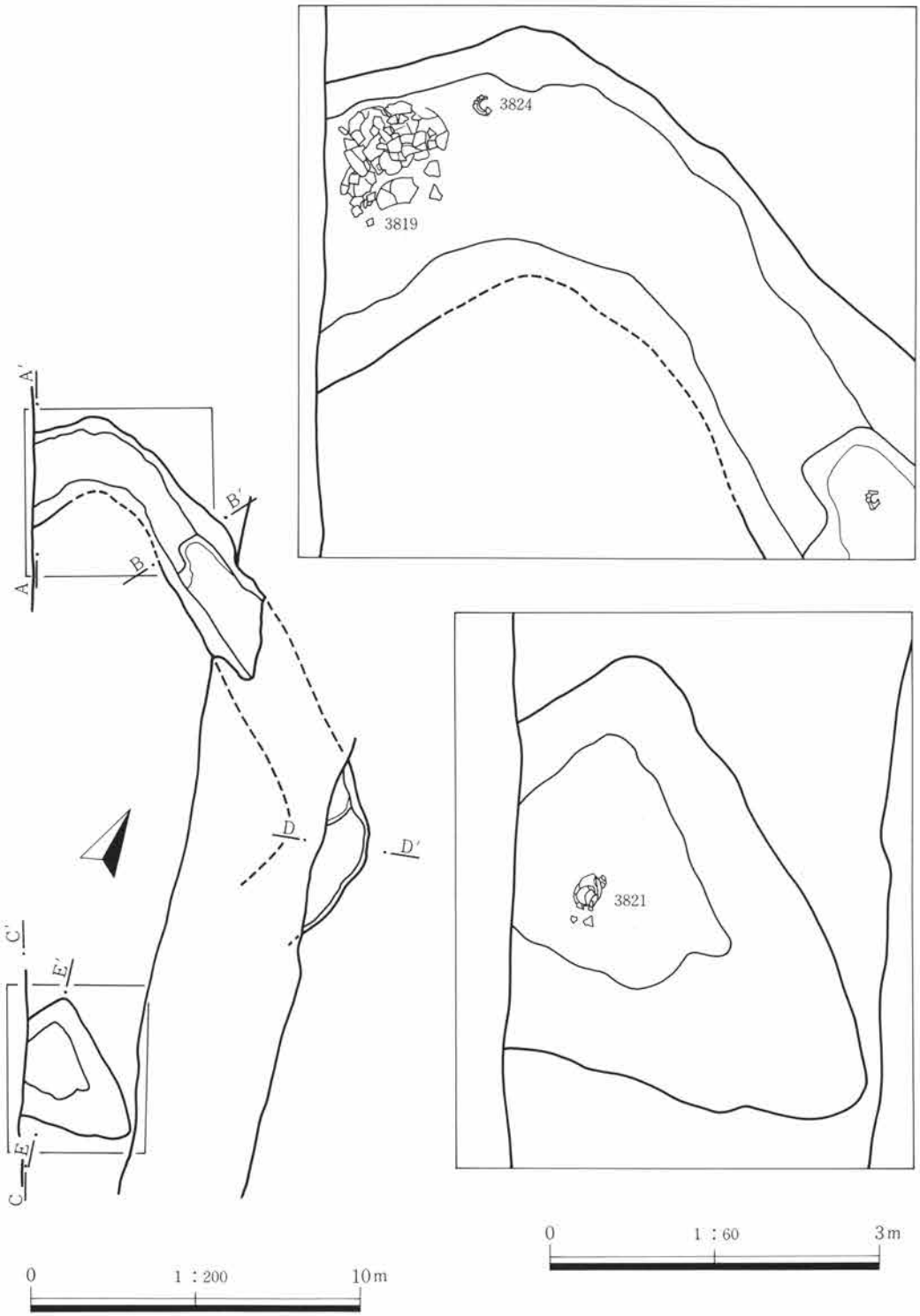
本方形周溝墓は、全体の約半分が調査区内に存在する。東側へ 4 mの位置には、C区 2 号方形周溝墓が併行する。他の遺構との重複関係では、C区 1 号館跡・64号土坑・70号土坑・71号土坑が、本方形周溝墓よりも新しく、本方形周溝墓を切っている。

調査範囲が限定されているため、全体の規模は不明であるが、方台部の北側辺の長さを推定すると、約12.5mとなる。又、主軸はN—30°—Eとなる。周溝は、東側辺にブリッジが存在するものと考えられる。C区 1 号館跡の堀がこのブリッジに重複して存在するため、幅は明らかにすることはできないが、 1 号館跡の堀の位置関係から、最底 3 m はあったとみることができる。

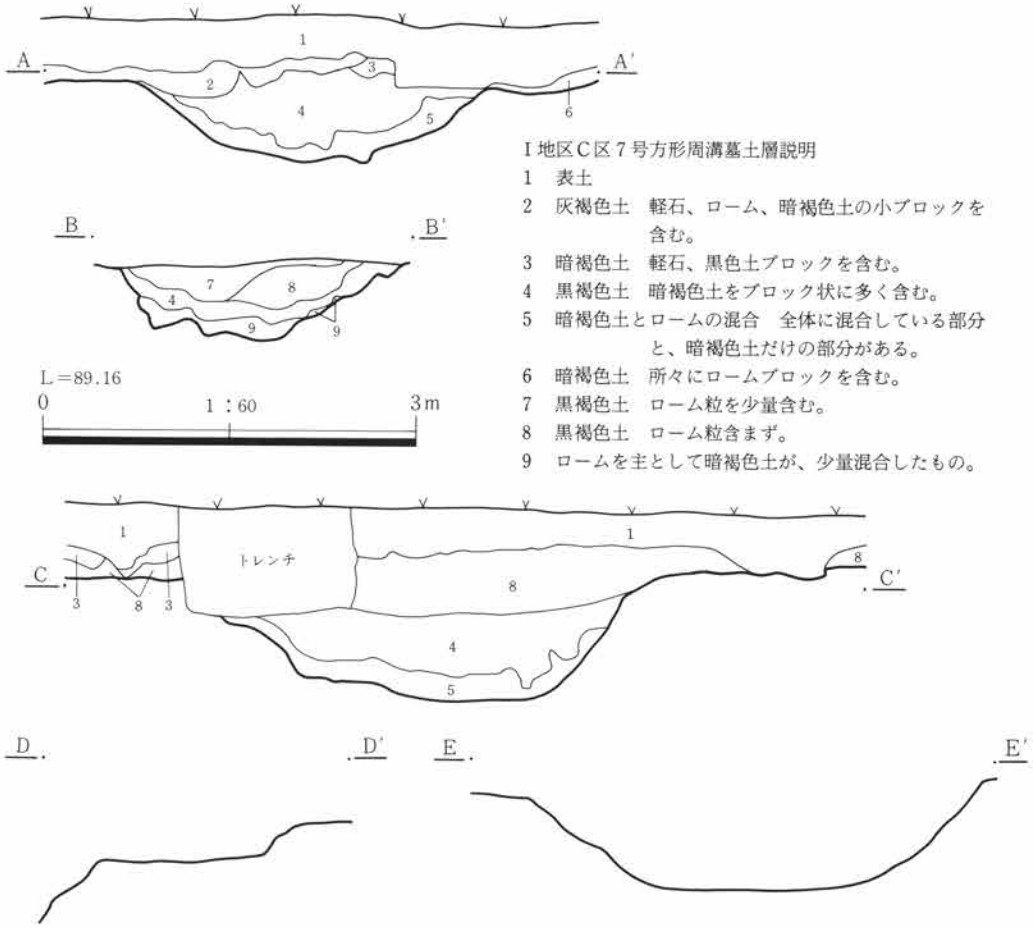
周溝は、幅が約2.5mであるが、コーナー付近では、やや幅が狭くなる。又、東側のブリッジ付近では約4.5mと広くなっている。周溝の掘り方は皿状で、ローム面から60～80cmの深さである。

遺物は壺（3819）がほぼ底面上に存在したほか、壺（3820）は底面より約15㎝上方に潰れたような形で発見された。又、甕（3822・3823・3825）は、底面より30cm前後の比較的高い位置に存在した。

本方形周溝墓の時期は、古墳時代前期と考えられる。　（飯塚）



第256図　Ⅰ地区Ｃ区７号方形周溝墓遺構図(1)



I 地区C区7号方形周溝墓土層説明

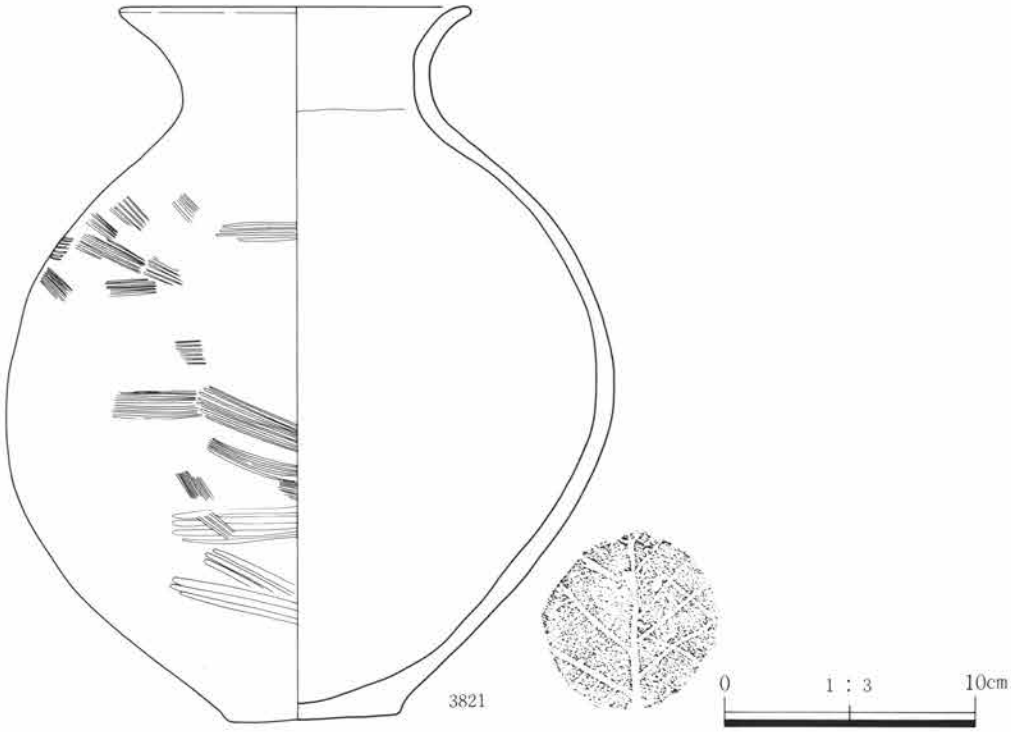
1　表土
2　灰褐色土　軽石、ローム、暗褐色土の小ブロックを含む。
3　暗褐色土　軽石、黒色土ブロックを含む。
4　黒褐色土　暗褐色土をブロック状に多く含む。
5　暗褐色土とロームの混合　全体に混合している部分と、暗褐色土だけの部分がある。
6　暗褐色土　所々にロームブロックを含む。
7　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
8　黒褐色土　ローム粒含まず。
9　ロームを主として暗褐色土が、少量混合したもの。

第257図　I 地区C区7号方形周溝墓遺構図(2)

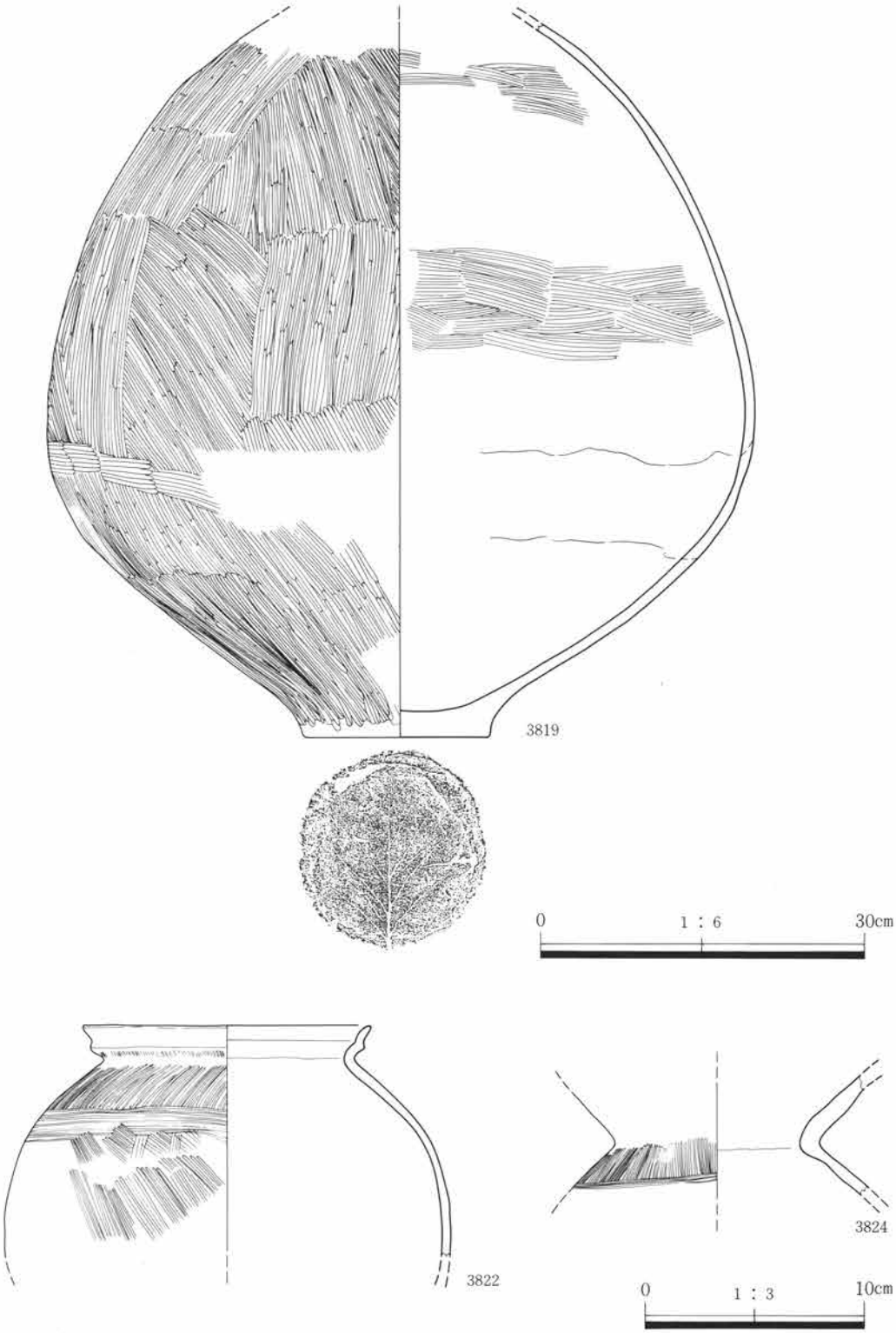
第 76 表　I 地区C区7号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
3819	壺 土師器	器高:(648㎜)口径:一底径:72㎜最大径:646㎜体部～底部残	径2～3㎜の小石、砂粒を含む。酸化。やや硬質。外面は鈍い黄橙及び黒。内面は黒。	最大径は体部下半。外面:縦及び横篦磨き。内面:なで、一部に横刷毛目。体部下半に輪積痕あり。	周溝内。
3820	壺 土師器	器高:(325㎜)口径:一底径:76㎜最大径:337㎜体部～底部のみ残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	最大径は体部中央。外面:縦篦磨き。内面:なで。	周溝内。
3821	壺 土師器	器高:280㎜口径:140㎜底径:70㎜最大径:241㎜完形	砂粒を含む。酸化。軟質。明橙。体部に黒斑。	口縁部はV字状に縊れ、最大径は体部中央。全面的に磨滅しており、調整不明瞭であるが、一部に刷毛目が見られる。内面:なで。底部に木葉痕。	周溝内。

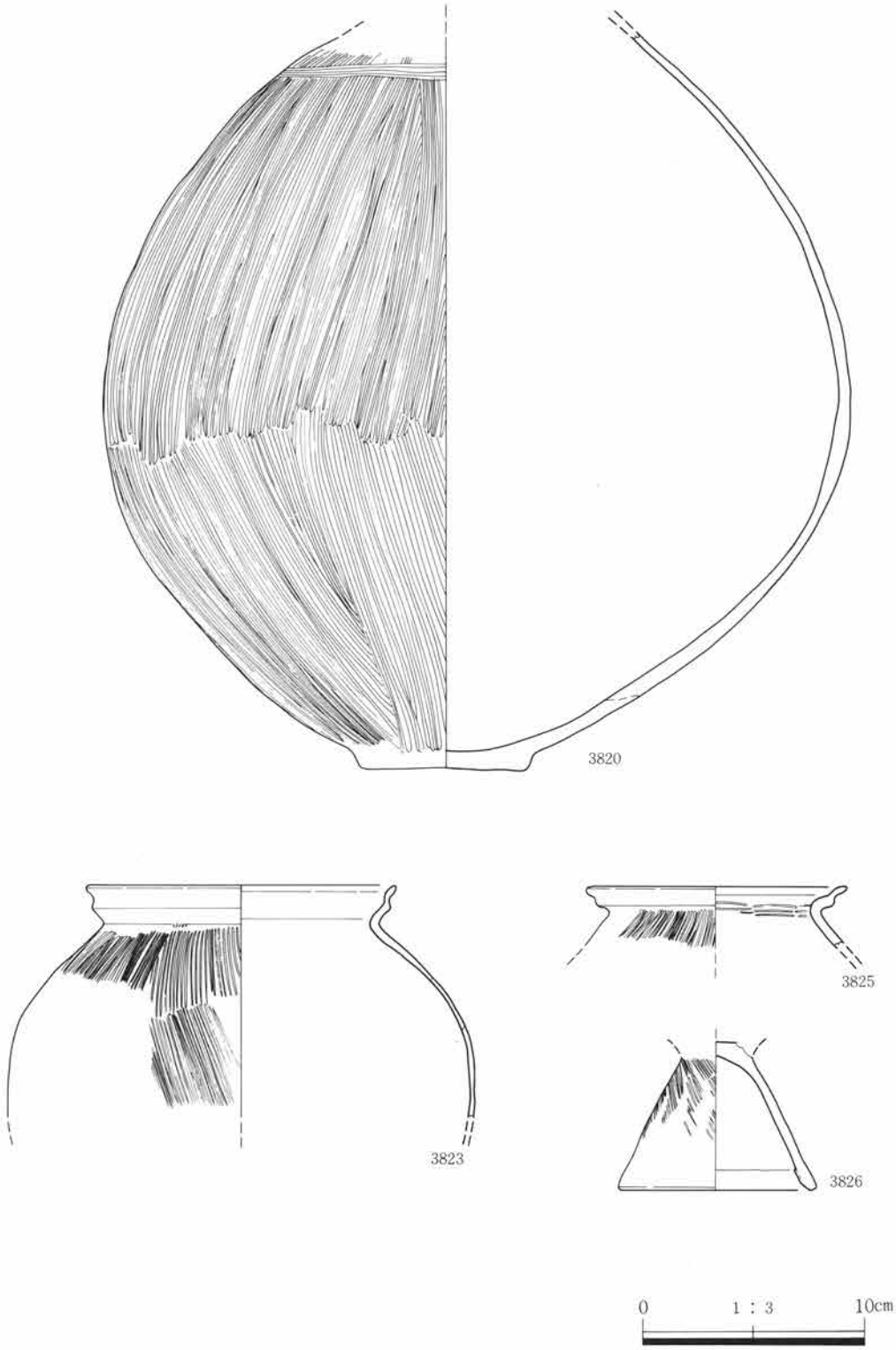
3822	甕 土師器	器高:(105㎜)口径:132㎜底径:—最大径:[202㎜]	砂粒をやや多く含む。酸化。硬質。赤褐。外面煤付着。	「S」字状口縁。外面:体部斜め刷毛調整後、肩に横線文、口縁部なで。内面:なで。	周溝内。
3823	甕 土師器	器高:(104㎜)口径:[137㎜]底径:—口縁～体部上半⅜残	小砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。	「S」字状口縁。外面:体部斜め刷毛、口縁部なで。内面:なで。	周溝内。
3824	壺 土師器	器高:[55㎜]口径:—底径:—頸部径:[94㎜]頸部⅓残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。赤褐。	頸部「く」の字状に縊れる。外面:口縁部なで、体部上方より刷毛目、横線文。内面:なで。	周溝内。
3825	甕 土師器	器高:(265㎜)口径:[114㎜]底径:—口縁～体部上半¼残	砂粒を多く含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	「S」字状口縁。外面:縦刷毛目、頸部に横線文。内面:なで。	周溝内。
3826	台付甕 土師器	器高:(66㎜)口径:—底径:[89㎜]台部⅓残	小砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	台部折り返し。外面:上部斜め刷毛目。内面:横なで。	周溝内。



第258図　Ⅰ地区Ｃ区７号方形周溝墓遺物図(1)



第259図　Ⅰ地区Ｃ区７号方形周溝墓遺物図(2)

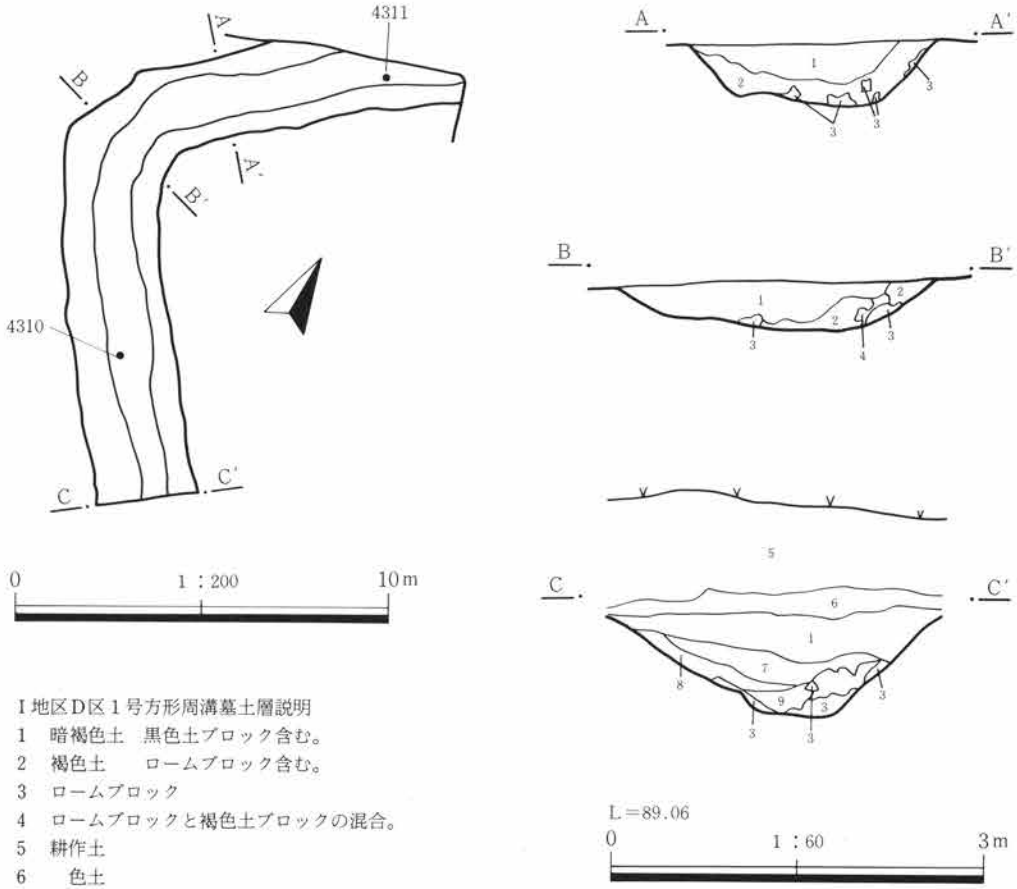


第260図　Ⅰ地区Ｃ区７号方形周溝墓遺物図(3)

Ⅰ地区Ｄ区１号方形周溝墓（第261・262図、第77表、図版54・55）

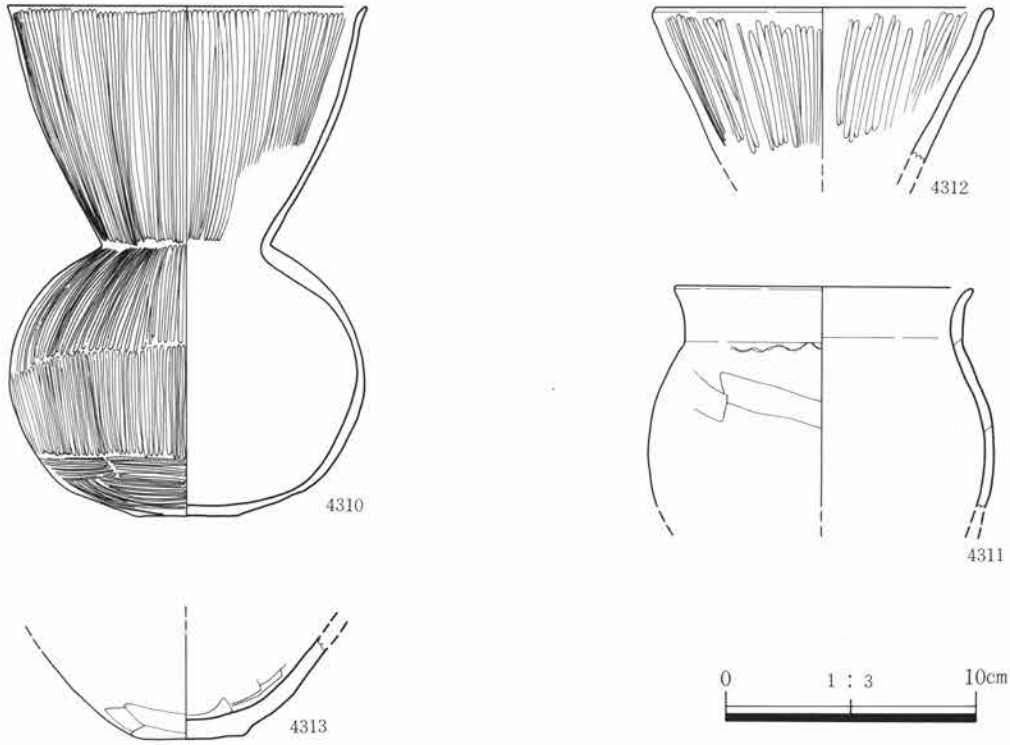
２号方形周溝墓と併行して発見された。全体の約４分の１である。６号井戸と重複しているが、本方形周溝墓の方が古い。周溝は、幅が２m～2.5m、深さ50cm～75cmである。北側周溝とコーナー部が浅く、南側が深くなっている。主軸はN－40°－Wである。

周溝からの出土遺物として、坩（4310・4312）・甕（4311・4313）があるが、このうち4310の坩は、西側周溝の底面から約15cm上方に、また4311の甕は、周溝底面上から発見された。本方形周溝墓の時期は、古墳時代前期と考えられる。（飯塚）



Ⅰ地区Ｄ区１号方形周溝墓土層説明
1　暗褐色土　黒色土ブロック含む。
2　褐色土　　ロームブロック含む。
3　ロームブロック
4　ロームブロックと褐色土ブロックの混合。
5　耕作土
6　　色土
7　暗褐色土　ロームブロックを含む。
8　暗褐色土　ロームブロック・黒色土ブロック含む。
9　ロームブロック・黒色土ブロック・褐色土ブロックの混合。

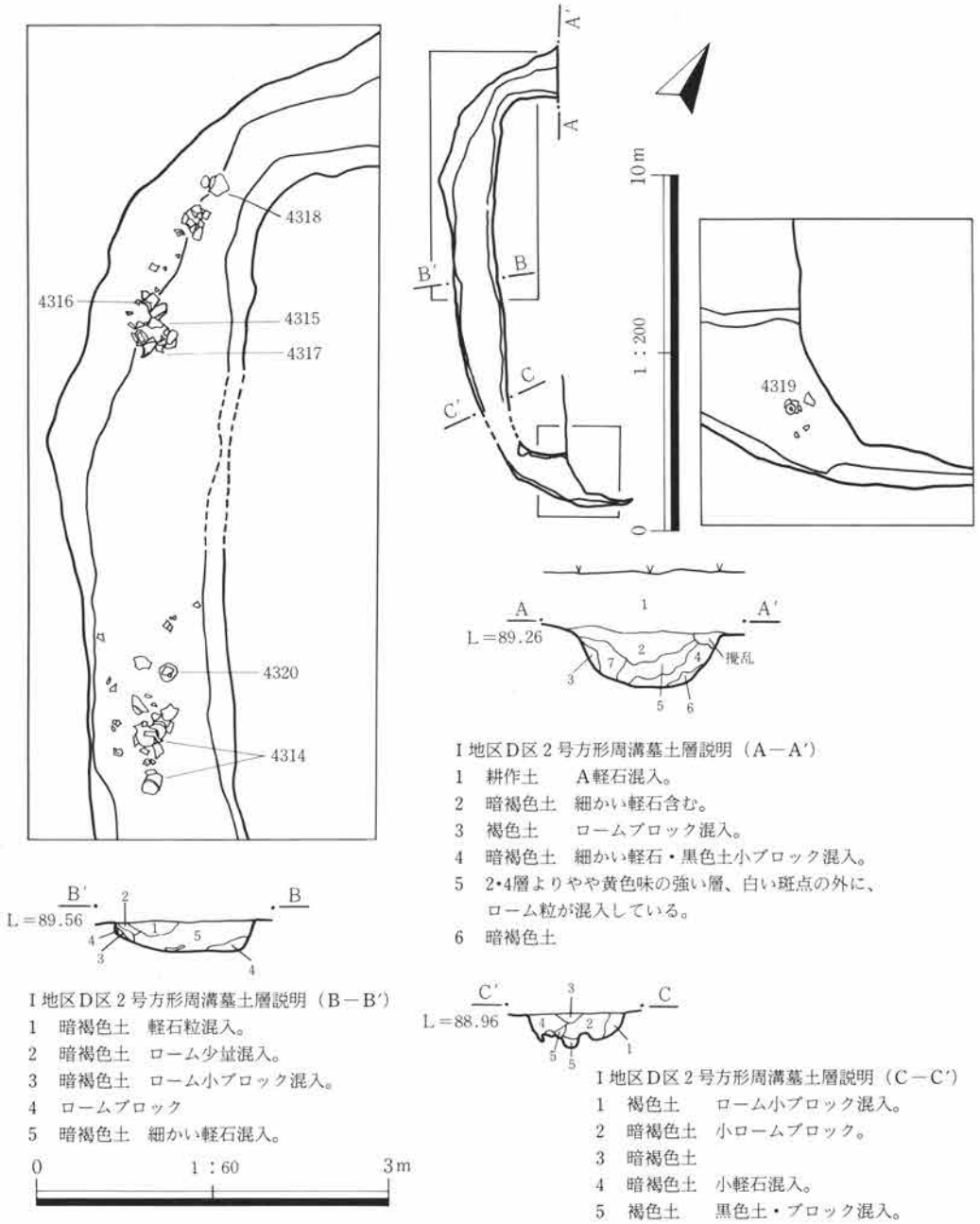
第261図　Ⅰ地区Ｄ区１号方形周溝墓遺構図



第262図　Ⅰ地区Ｄ区１号方形周溝墓遺物図

第 77 表　Ⅰ地区Ｄ区１号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4310	坩 土師器	器高:206㎜ 口径:[142㎜]底径:一最大径:144㎜口縁部半分欠	小砂粒を多く含む。酸化。やや軟質。橙。黒斑あり。	口縁部高くやや内湾しながら立ち上がる。最大径体部中央。平底。外面及び、口縁部内面:篦磨き。体部内面:なで。	周溝内。
4311	甕 土師器	器高:一口径:[120㎜]底径:一最大径:138㎜口縁部～体部上半部⅓残	径３～４㎜の小石、砂粒を含む。酸化。黄橙。黒斑あり。	口縁部緩やかに立ち上がる。内外面:なで。	周溝内。
4312	坩 土師器	器高:一口径:[136㎜]底径:一最大径:一口縁部⅓残	砂粒を多く含む。酸化。:軟質。橙。	内外面:縦篦磨き。	周溝内。
4313	甕 土師器	器高:一口径:一底径:43㎜最大径:一体部下端～底部	径３～５㎜の小石、砂粒を含む。	内外面:なで。	周溝内。



Ⅰ地区D区2号方形周溝墓土層説明（A－A'）
1　耕作土　　A軽石混入。
2　暗褐色土　細かい軽石含む。
3　褐色土　　ロームブロック混入。
4　暗褐色土　細かい軽石・黒色土小ブロック混入。
5　2・4層よりやや黄色味の強い層、白い斑点の外に、ローム粒が混入している。
6　暗褐色土

Ⅰ地区D区2号方形周溝墓土層説明（B－B'）
1　暗褐色土　軽石粒混入。
2　暗褐色土　ローム少量混入。
3　暗褐色土　ローム小ブロック混入。
4　ロームブロック
5　暗褐色土　細かい軽石混入。

Ⅰ地区D区2号方形周溝墓土層説明（C－C'）
1　褐色土　　ローム小ブロック混入。
2　暗褐色土　小ロームブロック。
3　暗褐色土
4　暗褐色土　小軽石混入。
5　褐色土　　黒色土・ブロック混入。

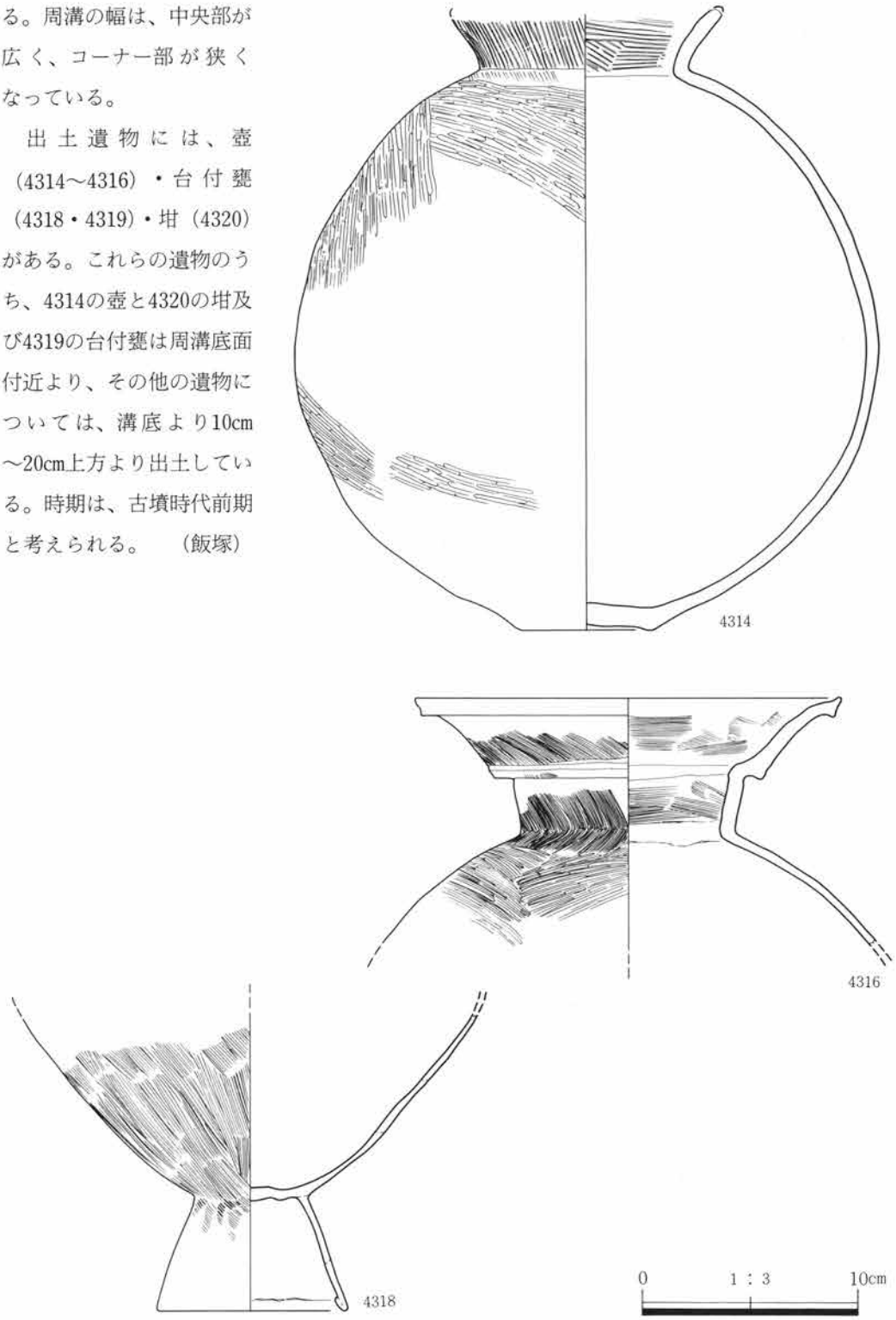
第263図　Ⅰ地区D区2号方形周溝墓遺構図

Ⅰ地区D区2号方形周溝墓（第263～265図、第78表、図版55・56）

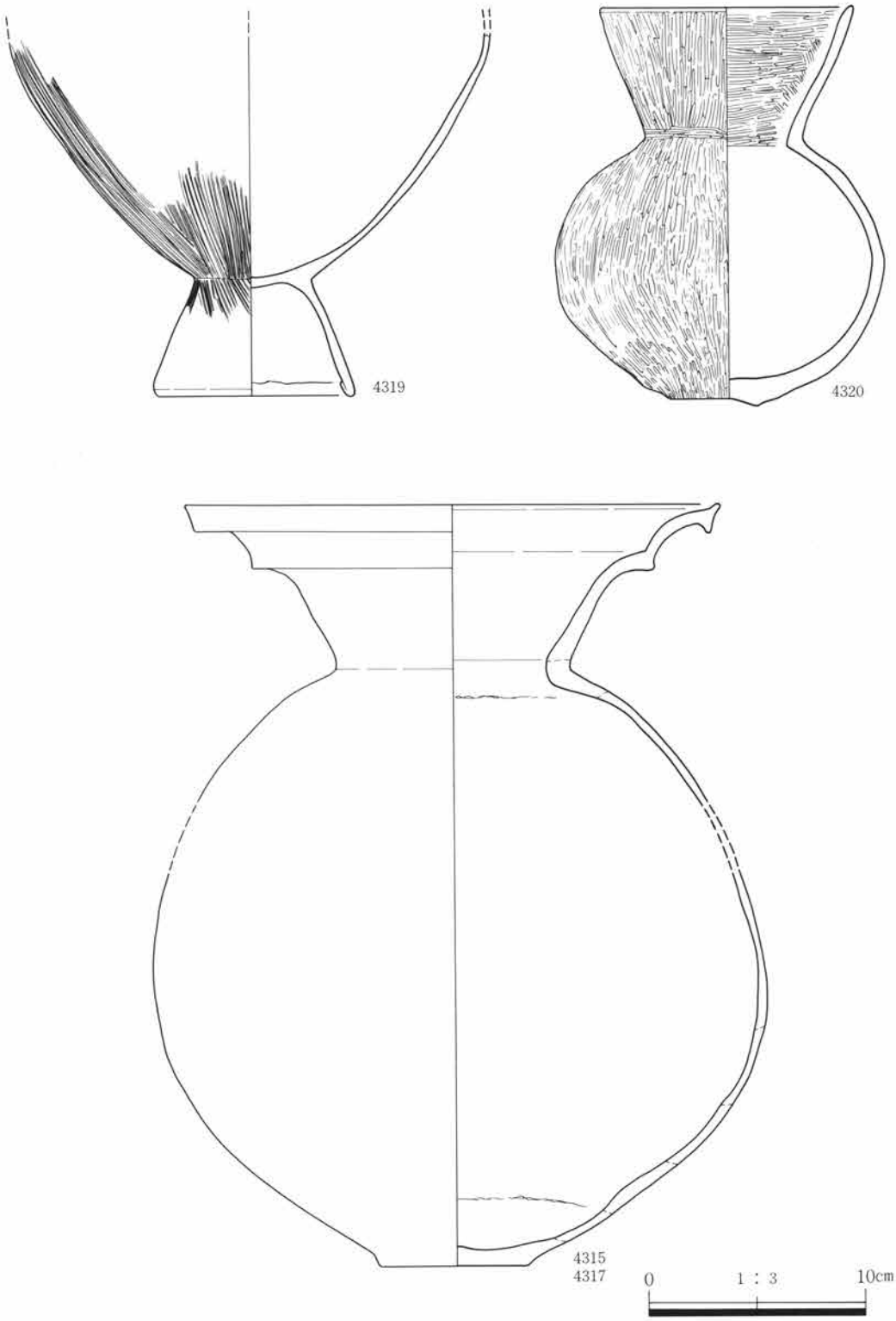
1号方形周溝墓と平行して発見された。西側の周溝とコーナー部のみの検出である。方台部は、南北9.9mを測り、主軸は、N－30°－Wである。周溝の規模は、幅約1.3m、深さ30cm～45cmであ

る。周溝の幅は、中央部が広く、コーナー部が狭くなっている。

出土遺物には、壺（4314～4316）・台付甕（4318・4319）・坩（4320）がある。これらの遺物のうち、4314の壺と4320の坩及び4319の台付甕は周溝底面付近より、その他の遺物については、溝底より10cm～20cm上方より出土している。時期は、古墳時代前期と考えられる。　（飯塚）



第264図　Ⅰ地区Ｄ区２号方形周溝墓遺物図(1)



第265図　Ⅰ地区Ｄ区２号方形周溝墓遺物図(2)

第 78 表　Ⅰ地区D区2号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4314	壺 土師器	器高:一口径:一底径:64㎜最大径:270㎜口縁部欠	径3～5㎜の小石・砂粒を多く含む。酸化。軟質。橙。体部中央～下半に大きな黒斑あり。	口縁部「く」の字状に立ち上がる。体部ほぼ球形。外面:口縁部縦刷毛。体部篦磨き。内面:口縁部横刷毛。体部はなで。体部下端に径6㎜の焼成後穿孔。	周溝内。
4315 4317	壺 土師器	器高:349㎜口径248㎜底径:一最大径:一全体の⅔残	砂粒を多く含む。酸化。やや軟質。橙。体部下端に黒斑あり。	有段口縁、最大径下端、内外面:なで。輪積痕あり。	周溝内。
4316	壺 土師器	器高:一口径:(197㎜)底径:一最大径:一口縁部～上端⅔残	小石・砂粒を含む。酸化。やや硬質。浅黄。	有段口縁。外面なで後、斜め刷毛。外面:段部斜め刷毛後、横なで。内面:なで。	周溝内。
4318	台付甕 土師器	器高:一口径:一底径:87㎜体部下半～台部残	小砂粒を含む。酸化。やや硬質。浅黄。	台部折り返し。体部外面:縦刷毛。内面:なで。台部内外面なで。	周溝内。
4319	台付甕 土師器	器高:一口径:一底径:93㎜最大径:一体部下半	小砂粒を含む。酸化。やや硬質。浅黄。	台部折り返し。外面:体部～台上部斜め刷毛。体部及び台部内面なで。	周溝内。
4320	坩 土師器	器高:183㎜口径:116㎜底径:40㎜最大径:145㎜ほぼ完形	砂粒を含む。酸化。軟質外面及び口縁部。内面:赤色塗彩。	最大径体部中央。内外面:赤彩後、篦磨き。体部内面なで。	周溝内。

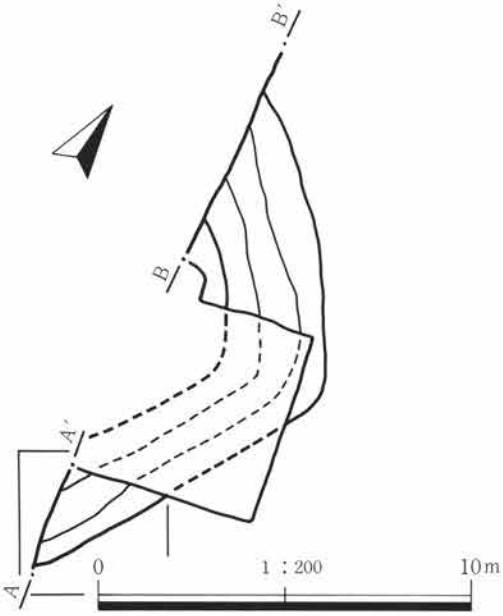
寺前地区3号方形周溝墓（第266～268図、第79表、図版44・56）

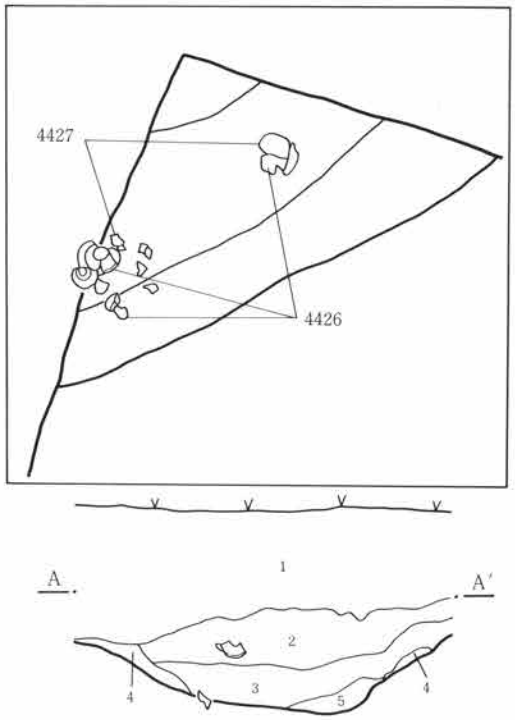
一部が確認された。西側の大部分は道路によって削られ、調査区内においても車庫によって削られている。周溝の幅は、2.5m～2.7mで、逆台形の掘り方を呈する。深さは、1m～1.5mで、溝底面のレベルは、ほぼ一定である。

本方形周溝墓からの出土遺物として、壺形土器2個体（4426・4427）がある。この2個体の土器は、破片となり、溝底から上方7cm～30cmの間に混在していた。

なお、本方形周溝墓に伴うと考えられる壺形土器（4757）がある。昭和30年代に西側道路の東側が拡幅された際、田島桂男氏が採集していたもので、その位置は、今回の調査区に接し、北側にめぐる周溝のほぼ延長した位置に当たっている。田島氏採集の土器は、本方形周溝墓出土の壺形土器と特徴が近似しており、この点からも本方形周溝墓との関連が強い。

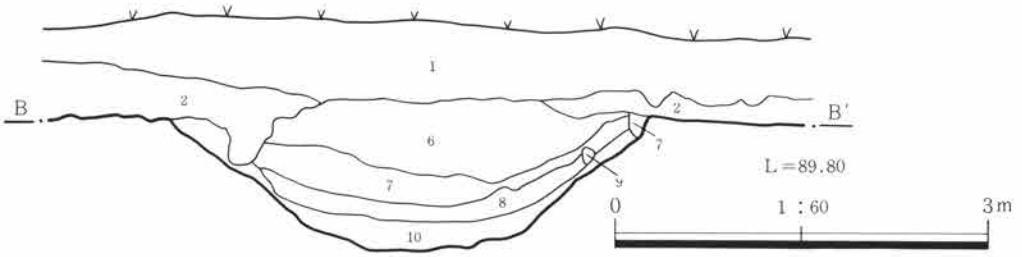
本方形周溝墓の時期は、古墳時代前期と考えられる。（飯塚）





寺前地区３号方形周溝墓土層説明

1　表土
2　暗褐色土　粘性余りなく、柔らかい。
3　暗褐色土　ローム粒少量含む。上層より黒っぽい。
4　暗褐色土中にローム粒が全体的に混合したもの
5　暗褐色土　ローム粒全体に含みが少ない。
6　黒褐色土　堅く締まっている。
7　暗褐色土　黒褐色土を所々にブロック状に含む。
8　黒褐色土　暗褐色土を所々にブロック状に含む。
9　ロームブロック
10　暗褐色土　ローム粒を全体に混合、ロームブロックを所々に含む。

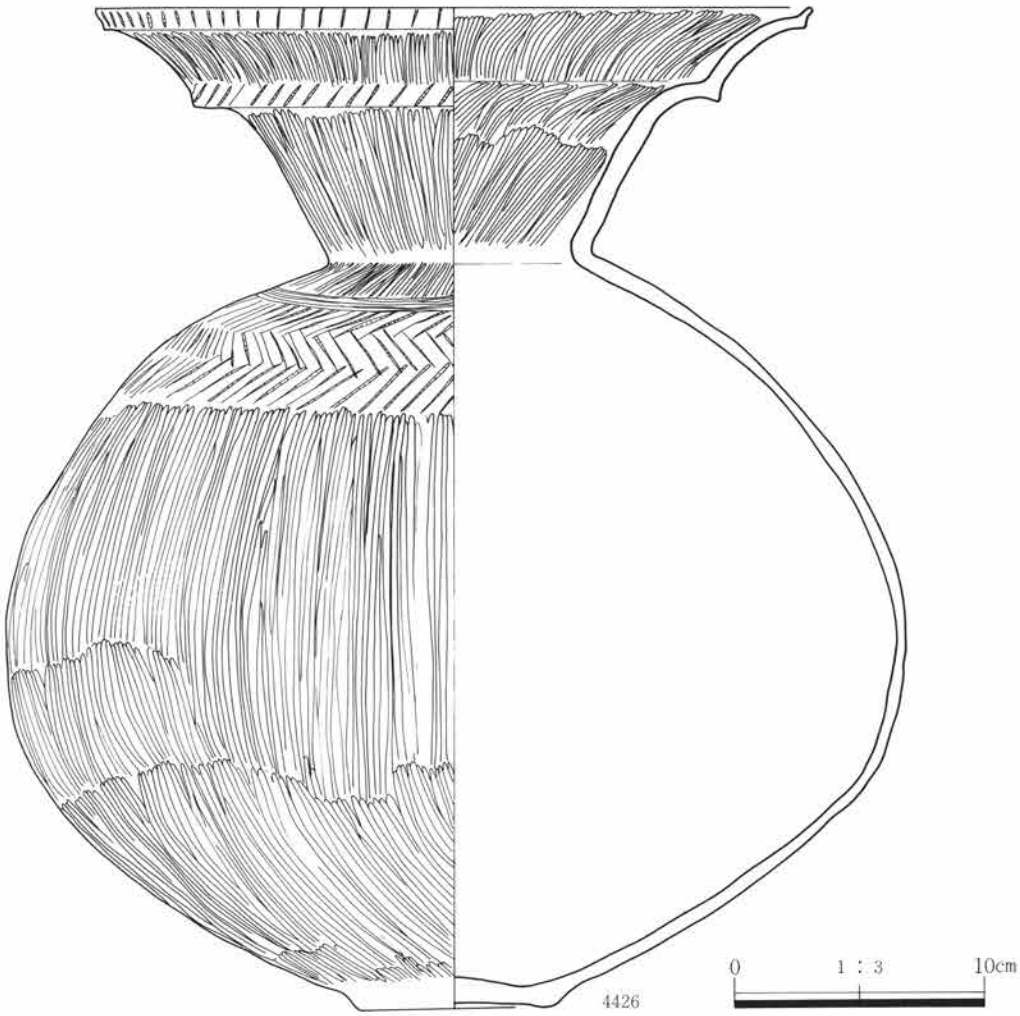


第266図　寺前地区３号方形周溝墓遺構図

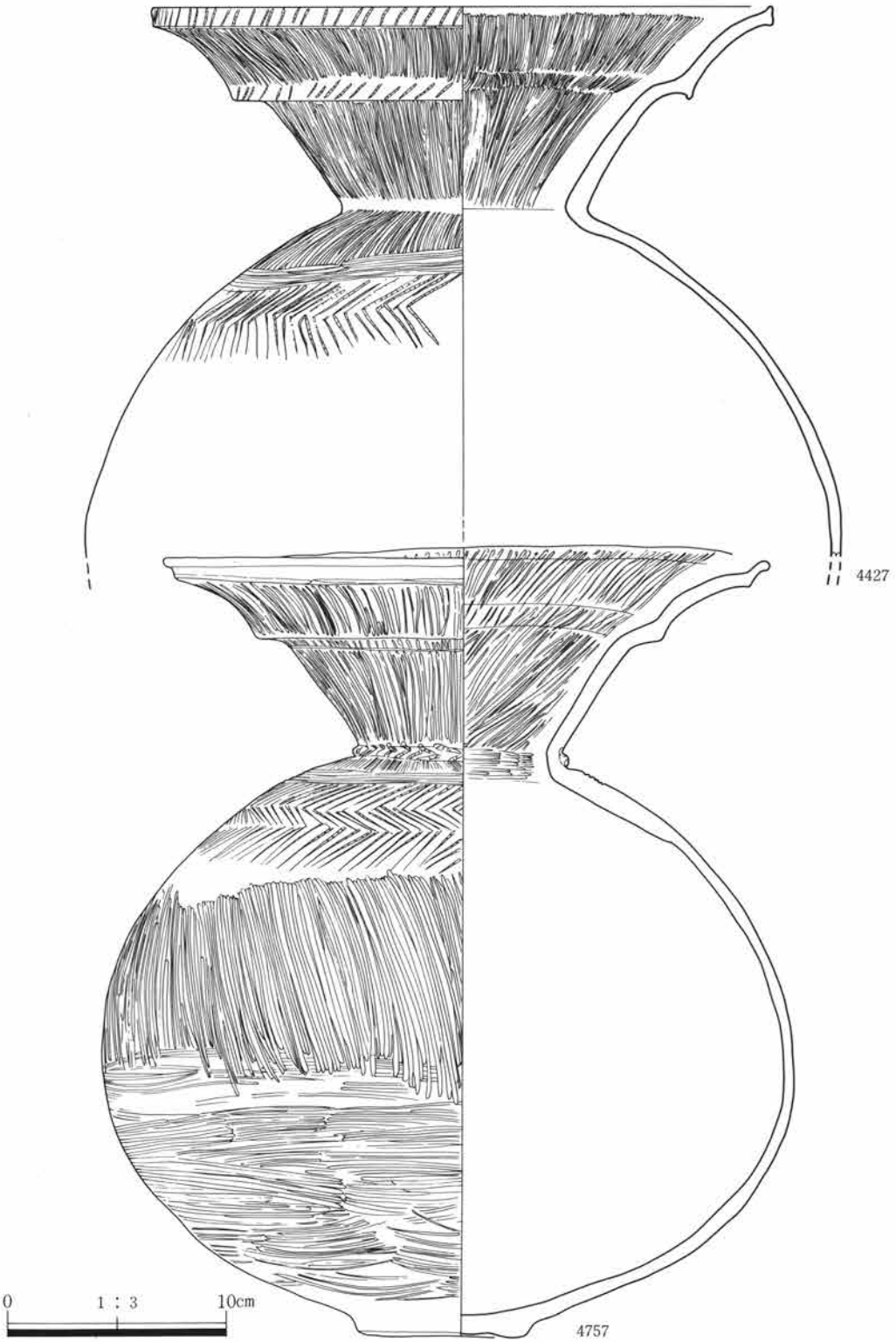
第 79 表　寺前地区３号方形周溝墓遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4326	壺 土師器	器高:396㎜口径:286㎜底径:78㎜最大径:358㎜完形	砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	有段口縁。最大径中央やや下端。外面:全面縦箆磨き後、口唇部・口縁段部櫛歯文、体部、上端より櫛状工具による刷毛、横線文、羽状櫛歯文。内面:なで。	周溝内。

4427	壺 土師器	器高:一口径:284㎜ 底径:一最大径:一口縁～体部上半残	小砂粒を含む。酸化。軟質。橙。一部煤付着。	有段口縁、外面:篦磨き後、口唇部・口縁段部櫛歯文。体部上端より櫛状工具による刷毛。横線文。羽状櫛歯文。内面:なで。	周溝内。
4757	壺 土師器	器高:357㎜口径:277㎜底径:78㎜最大径:315㎜完形	砂粒・黒色小石を含む。酸化。やや硬質。橙。	有段口縁。最大径は中央部やや下端。外面:口縁部は縦篦磨き、頸部は凸帯貼り付け。体部上方より櫛状工具によるハケ目・横線文・羽状櫛歯文・縦篦磨き。体部下半は横篦磨き。内面:口縁部は縦篦磨き、頸部は横篦磨き、体部はなで。	道路拡幅の際、田島桂男氏採集。同氏蔵。



第267図　寺前地区３号方形周溝墓遺物図(1)



第268図　寺前地区３号方形周溝墓遺物図(2)

(5) 古　　墳

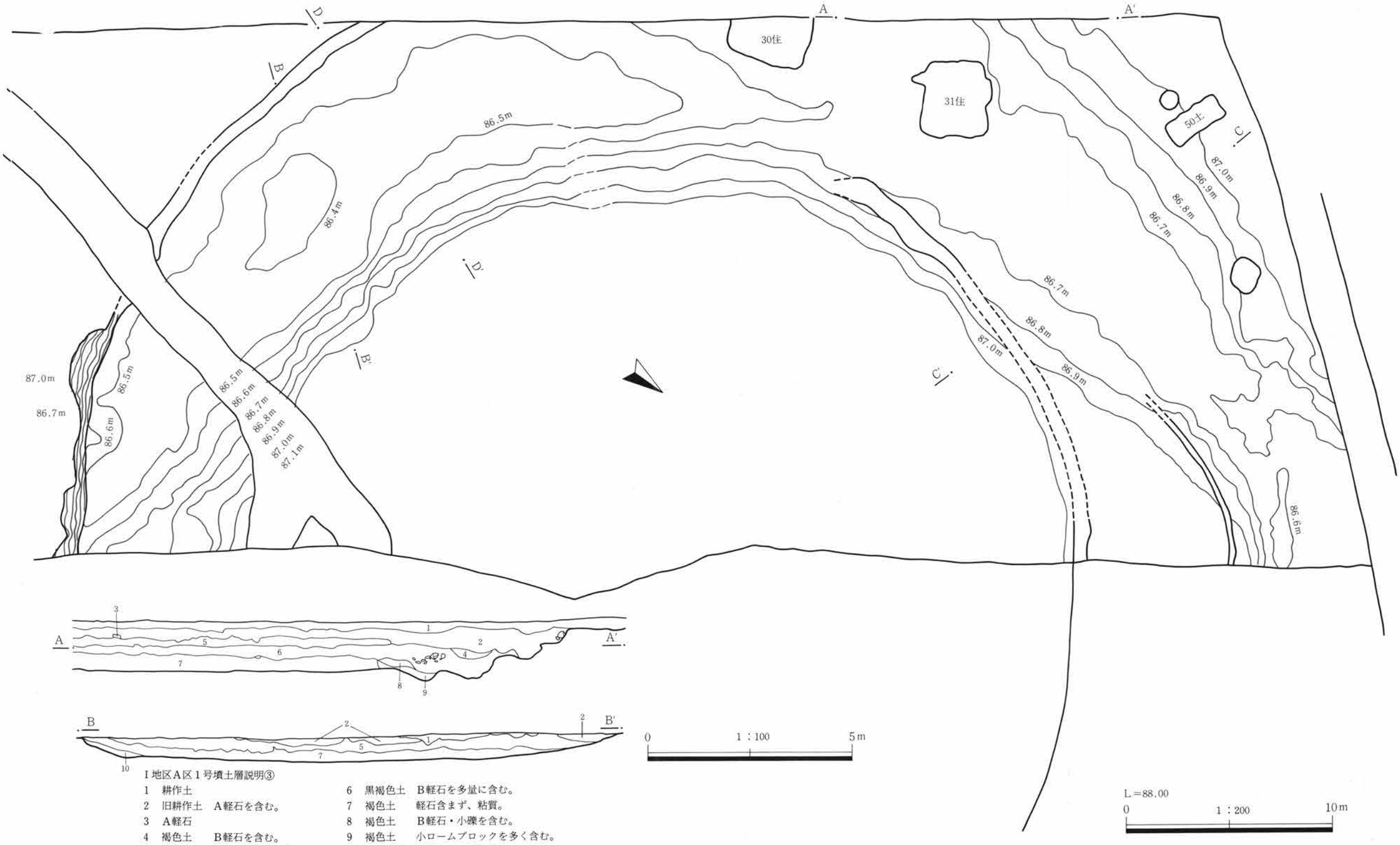
Ⅰ地区Ａ区１号古墳（長者屋敷天王山古墳）（第269～285図、第80・81表、図版57・62・63）

本古墳は『長者屋敷天王山古墳』として知られているが、墳丘のほとんどは既に消滅しており、高さ約１mの残丘が２ケ所存在するのみであった。上毛古墳総覧によれば、下佐野字長者屋敷に所在する前方後円墳で、全長216尺・高さ15尺の規模を持つ。天王山の名称があり、地元では天道山とも呼ばれていた。

主体部については明治45年３月に発掘された。発掘したのは堀口孫次郎を中心とする本古墳の土地所有者数名であった。この時の発掘を見学していた地元民の記憶によれば、墳頂部ほぼ中央（947番地で堀口孫次郎所有地）の比較的浅い所から、細長い粘土槨が現れたという。内部には多くの副葬品が存在したが、このうち鏡は３～４枚で、２ケ所ぐらいに分かれていたという。その他の遺物については、比較的隅の方であり、粘土槨の内面は真っ赤であったという。なお、上毛古墳総覧のもとになった古墳調査票（群馬県教育委員会保管）には、「槨は粘土ニシテ内部全部朱を以て満タサレタリト……」とある。

発掘直後、副葬品は堀口孫次郎が保管していたが、１年後の大正２年３月、堀口孫次郎は、一緒に発掘した堀口菊次郎と共に、これらの副葬品の多くを当時の東京帝室博物館に寄贈した。この寄贈された遺物が、現在東京国立博物館に保管されている。昭和58年２月に発行された、『東京国立博物館図版目録・古墳遺物篇（関東Ⅱ）』によると大正２年に寄贈された副葬品は、内行花文鏡１・変形珠文鏡１・勾玉10・管玉８・算盤玉２・臼玉一括・石釧２・刀子２・石製斧２・石製鑿１であったことがわかる。しかし、大正２年に東京帝室博物館に寄贈された遺物は、長者屋敷天王山古墳の粘土槨から発見された遺物の全てではないらしい。明治45年３月の発掘に関わった土地所有者達の家人には、大正２年に東京帝室博物館へ寄贈した副葬品は、天王山から発見された副葬品の全部ではなく、堀口孫次郎は副葬品の若干を手許に遺して置いたという話も伝わっている。（なお、寄贈遺物の中に、天王山古墳以外の遺物が含まれている可能性もある）

一方、大正14年に群馬郡教育会から発行された『群馬郡誌』には、堀口孫次郎が手許に遺して置いたとされる副葬品が紹介されている。それによると、鏡２・勾玉・切子玉若干・外数点で、「博物館へ寄贈以外のものなり。」と書かれている。又、大正15年に雄山閣から発行された『日本考古学大系・漢式鏡』（後藤守一著）によると、堀口孫次郎が所有する鏡２面の内容が記載されている。内行花文鏡と変形神獣鏡で、共に直径11cmである。東京帝室博物館へ寄贈された内行花文鏡が直径8.1cm、変形珠文鏡が7.9cmであるので、堀口孫次郎は、大きな方の鏡２面を手許に残して置いた可能性もある。大正14年発行の『群馬郡誌』に記載された、堀口孫次郎が所有する鏡以外の遺物である勾玉・切子玉若干・外数点の内容については、明らかにすることができない。大正15年発行の『日本考古学大系・漢式鏡』には、鏡以外にも伴出遺物の内容を記すが、鏡については東京帝室博物館所有の２面と堀口孫次郎所有２面の計４面の内容が紹介されてはいるもの



Ⅰ地区A区1号墳土層説明③

1　耕作土
2　旧耕作土　A軽石を含む。
3　A軽石
4　褐色土　B軽石を含む。
5　褐色土　粘質・B軽石を含む。
6　黒褐色土　B軽石を多量に含む。
7　褐色土　軽石含まず、粘質。
8　褐色土　B軽石・小礫を含む。
9　褐色土　小ロームブロックを多く含む。
10　ローム粒を主体とした流れ込み。

第269図　Ⅰ地区A区1号古墳遺構図（1）

の、その他の遺物については、石製鑿が3（東京国立博物館所有は1）と記載されている以外は、東京国立博物館所有遺物と品名・数量がほぼ一致している。従って、『群馬郡誌』に記載された鏡以外の遺物の多くは、本古墳の出土ではないため、『漢式鏡』においては後藤守一によって除外されている可能性もある。堀口孫次郎は既に故人となっており、家人にも長者屋敷天王山古墳出土とされる遺物は伝えられていない。家人の話によれば、堀口孫次郎は出土遺物の蒐集家でもあり、売買も行っていた。鏡2面は、第2次世界大戦以前に、売買によって堀口孫次郎の許を離れたという。しかし、行先については、明らかではない。

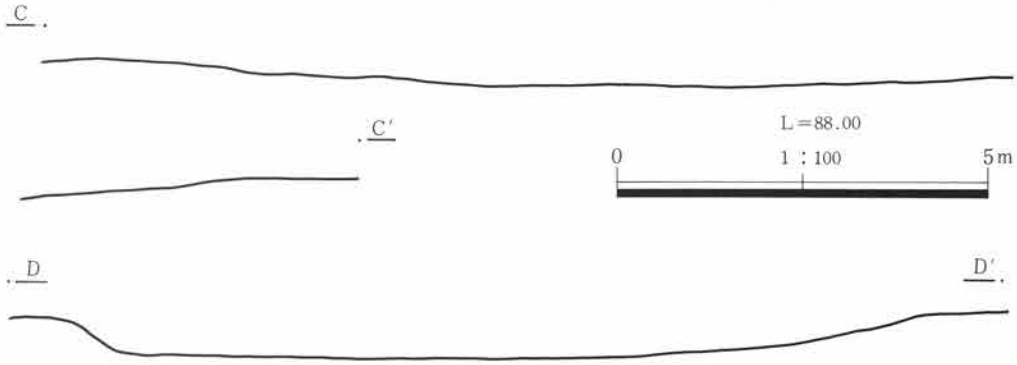
（規模と墳形について）

昭和10年に発行された上毛古墳総覧によれば、群馬郡佐野村字長者屋敷946番地に所在する前方後円墳で、全長216尺（65.5m）・高さ15尺（4.5m）と記載されている。又、群馬県教育委員会が保管する、上毛古墳総覧のもとになった古墳調査台帳には、前方部の位置が描かれた付図があり、それによると前方部は後円部の南側から南西方向となっている。

今回調査が実施されたのは、後円部とされる円丘のうち、南西部分の約半分であり、古墳調査台帳の付図に描かれた、縊部と前方部が含まれる位置に当たっている。しかし、検出されたのは、円形にめぐる周堀であった。なお、地元では前方後円墳とされており、前方部とされる位置もはっきりしているが、この部分は発掘調査の結果、A区1号館跡南西コーナー付近の堀の内側であることが明らかとなった。この部分は、周囲より僅かに高くなっており、それが天王山墳丘に続いていることから、前方後円墳と誤認されたものと思われる。なお、A区1号館跡の堀の内側から、天王山墳丘を含めた全長は、上毛古墳総覧に記載された長者屋敷天王山古墳全長の216尺(65.5m)となる。

本古墳は、戦後になってから墳丘部東側の住宅建築や、その後の全面的な土取りによって消滅した。消滅以前の状態については、終戦直後に米軍によって撮影された航空写真と、上毛古墳総覧のもとになった古墳調査台帳に貼付された北側からの写真とによって、その姿を窺うことができる。航空写真によると、南側部分（今回の発掘調査部分でA区1号館跡の堀の部分に当たる）が削られてやや変形しているものの、他の部分は円形となっている。このことは、未発掘部分で地籍図の地割が円形とならない東側部分（948番地）について、この部分に住宅を建築した堀口氏が、住宅建築以前には、この部分は墳丘が円形にめぐっていたと記憶している事実と符合する。

ところで、調査区北側の周堀内には、墳丘から続く張り出しが見られる。この張り出しのラインはほぼ北側へと約17m続き、東側調査区壁から約1.5mの位置で東側へと折れている。この張り出し部を含めて、墳丘の主軸を設定すると、主軸はN－23°－Wとなり、張り出しは約8mとなる。なお、この張り出しについては、地籍図をはじめ航空写真にも、その存在が認められない。張り出しの存在する部分は、円形にめぐる墳丘裾の地割が整然と残っており、ある程度の高さを持った張り出しであったと仮定した場合、後世この張り出し部のみを円丘裾の円形ラインを整えながら、跡形もなく完全に削り取ってしまったと考えない限り、ある程度の高さを持った張り出しで



第270図　Ⅰ地区Ａ区１号古墳遺構図（２）

あったとは考え難いことである。本古墳の周堀部分及びその周辺は、全て畑地であり、水田と異なって平坦に削り取らなければならない必然性が特に認められないことからも、この張り出し部は、周堀内に削り残す程度であったか、土盛が行われていたとしても、極めて低いものであった可能性が強い。

以上の点から、本古墳の規模は、円丘部の直径約42m、張り出し部の推定長８m、張り出しを含めると全長約50mと考えることができる。なお、墳形は、造り出し付き円墳となる可能性が強いものと思われる。

（周堀及び残存墳丘について）

周堀は、南西部で全体の約半分が検出された。周堀埋没後に、Ａ区１号館跡・30号住居跡・31号住居跡・９号井戸・10号井戸・11号井戸・12号井戸、その他多くの土坑が周堀内に造られている。また、墳丘下には、32号住居跡・34号住居跡・35号住居跡・36号住居跡・37号住居跡・38号住居跡・39号住居跡が本古墳築造以前の遺構として存在する。

周堀の幅は、南側では９m～10mであるが、西側では約14mとやや広くなっている。又、深さは、南側でローム上面より約60cm、東側で約40cmと東側の方がやや浅くなる。周堀の掘り方については、南側において周堀外側が急傾斜で立ち上がっているのに対して、その他の部分では、全て緩やかに立ち上がっている。

残存墳丘は、２ケ所に存在した。そのうちの１ケ所は、本古墳の円丘部中央付近に存在するもので、高さ１m、９m×16mの規模を持つ。もう１ケ所は、両側隅で高さ約１m、直径約９mの規模を持つ。このうち、後者の西側隅の残存墳丘は、トレンチ調査の結果、原位置を止どめるものではなく、崩された古墳盛土が再び積み上げられた部分がほとんどであることが判明した。又、円丘部中央付近に存在する残存墳丘についても、大きく攪乱されていた。

（出土遺物について）

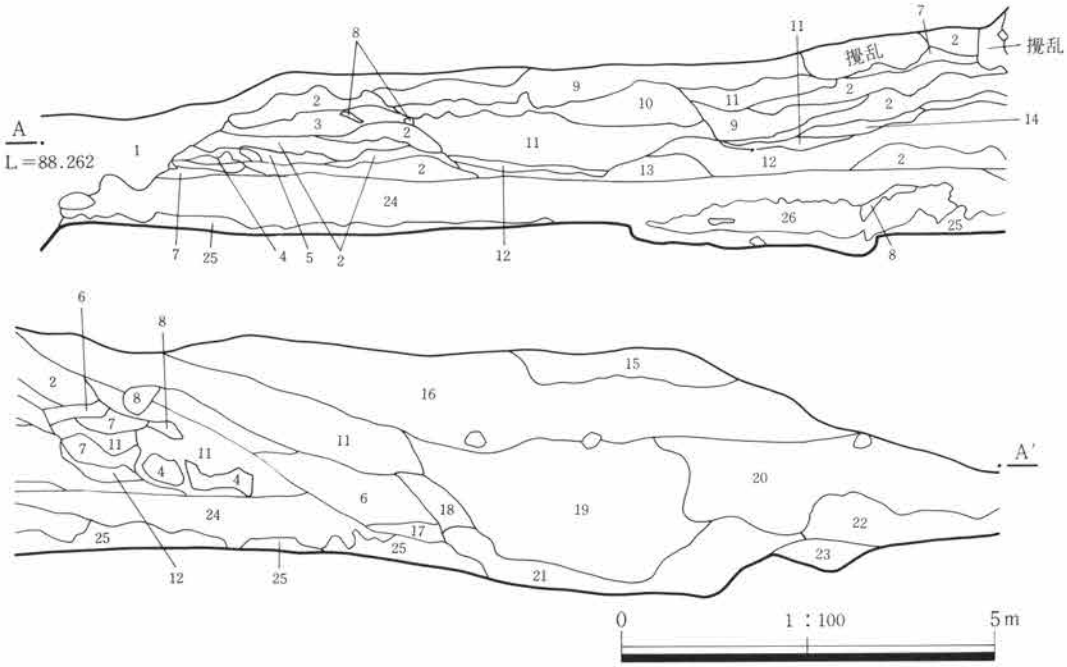
今回の調査では、遺物は全て周堀内から出土しており、種類としては、埴輪と土器がある。埴

第271図　Ⅰ地区Ａ区１号古墳残存墳丘図

輪は、量がやや多いものの、全て小破片となって周堀底より浮いた状態で発見されている。埴輪の出土位置は、周堀全域に亙っており、周堀内における高さも、堀底近くから約50cm上方までと幅がある。このような埴輪の出土状態は、墳丘上に存在した埴輪が破片となって、長期間に亙り周堀内に転落した状態を示しているものと考えられる。

周堀内出土の土器には、土師器と須恵器がある。土器の時期幅が大きく、長期にわたり周堀内に土器が入り込んだ状態が窺える。周堀内の比較的高い位置から出土したものに、須恵器平瓶（2575）・土師器壺（2586）・があり、古墳時代後期と考えられる。又、2562・2563・2564については、東側の調査区から約70cm内側の周堀底面付近において、押し潰されたような状態で出土した。その他の土器（古式土師器）については、周堀全域より比較的深い位置から出土しており、底面付近出土のものも多く、本古墳築造時と関わる可能性がある。

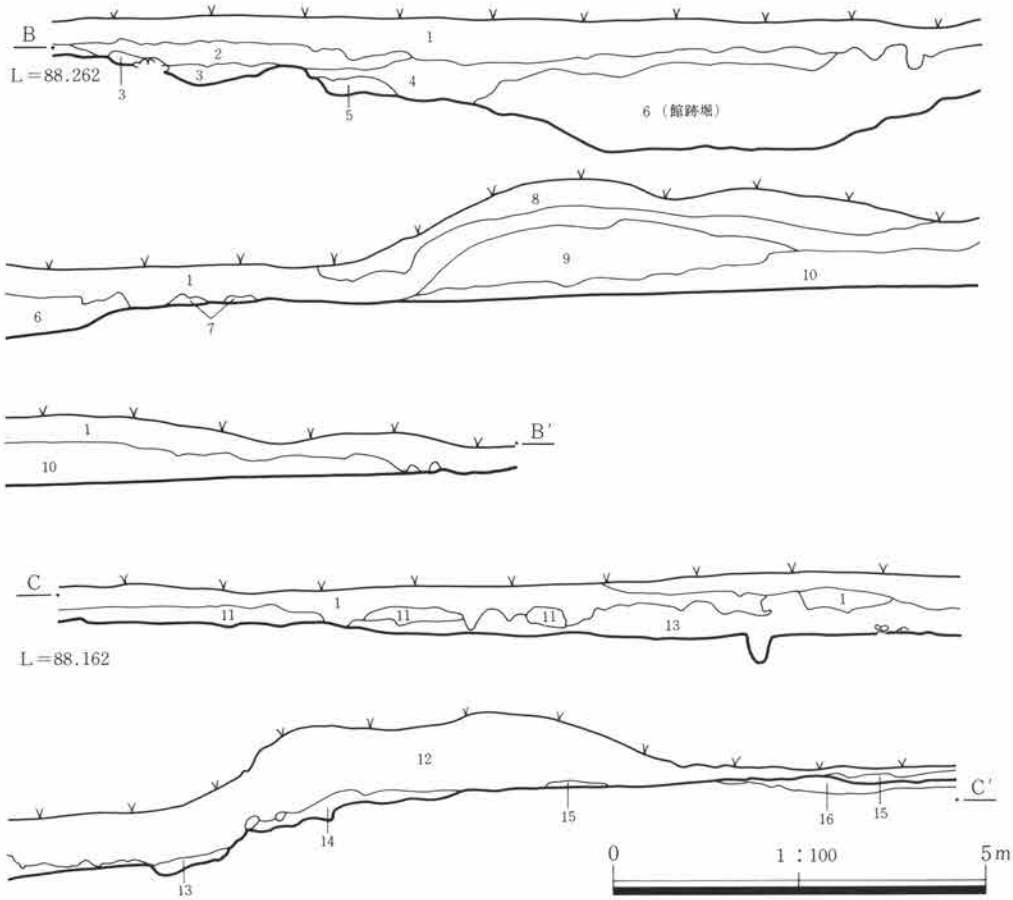
本古墳の築造時期は、明治45年に主体部から出土したとされる副葬品と、今回の調査で周堀内から出土した遺物により、古墳時代前期末～中期初頭と推定できる。　（飯塚）



Ｉ地区Ａ区１号墳土層説明②

1　古墳盛土の攪乱されたもの。
2　ローム　暗褐色土少量混合。
3　暗褐色土　ローム粒・軽石・黒色土小ブロック混入。
4　暗褐色土　ローム粒混合。
5　ローム　暗褐色土多く混合。
6　暗褐色土
7　ローム　暗褐色土僅かに混合。
8　ロームブロック
9　暗褐色土　ローム粒・ローム小ブロック混入。
10　ロームブロックと暗褐色土の混合。
11　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
12　暗褐色土とロームブロックの混合。ロームの量多い。
13　暗褐色土　ローム粒少量含む。
14　ロームブロックと暗褐色土ブロックの混合。
15　ローム　暗褐色土混合。
16　暗褐色土　小石、Ｂ軽石を多く含む。
17　黒褐色土
18　暗褐色土　ロームブロック多く含む。
19　暗褐色土　粒子粗く、柔らかい。ロームブロック・河原石・Ｂ軽石を含む。
20　黒褐色土　ロームブロック少量含む。
21　暗褐色土　ローム多く含み、締まっている。
22　暗褐色土　粒子細かく、固く締まっている。
23　暗褐色土　粒子細かく、締まっておりローム粒少量含む。
24　黒褐色土（旧表土）　炭化物・焼土小粒・ローム小粒を若干含む。
25　漸移層
26　黒褐色土　炭火物・ローム粒。

第272図　Ｉ地区Ａ区１号古墳残存墳丘断面図(1)

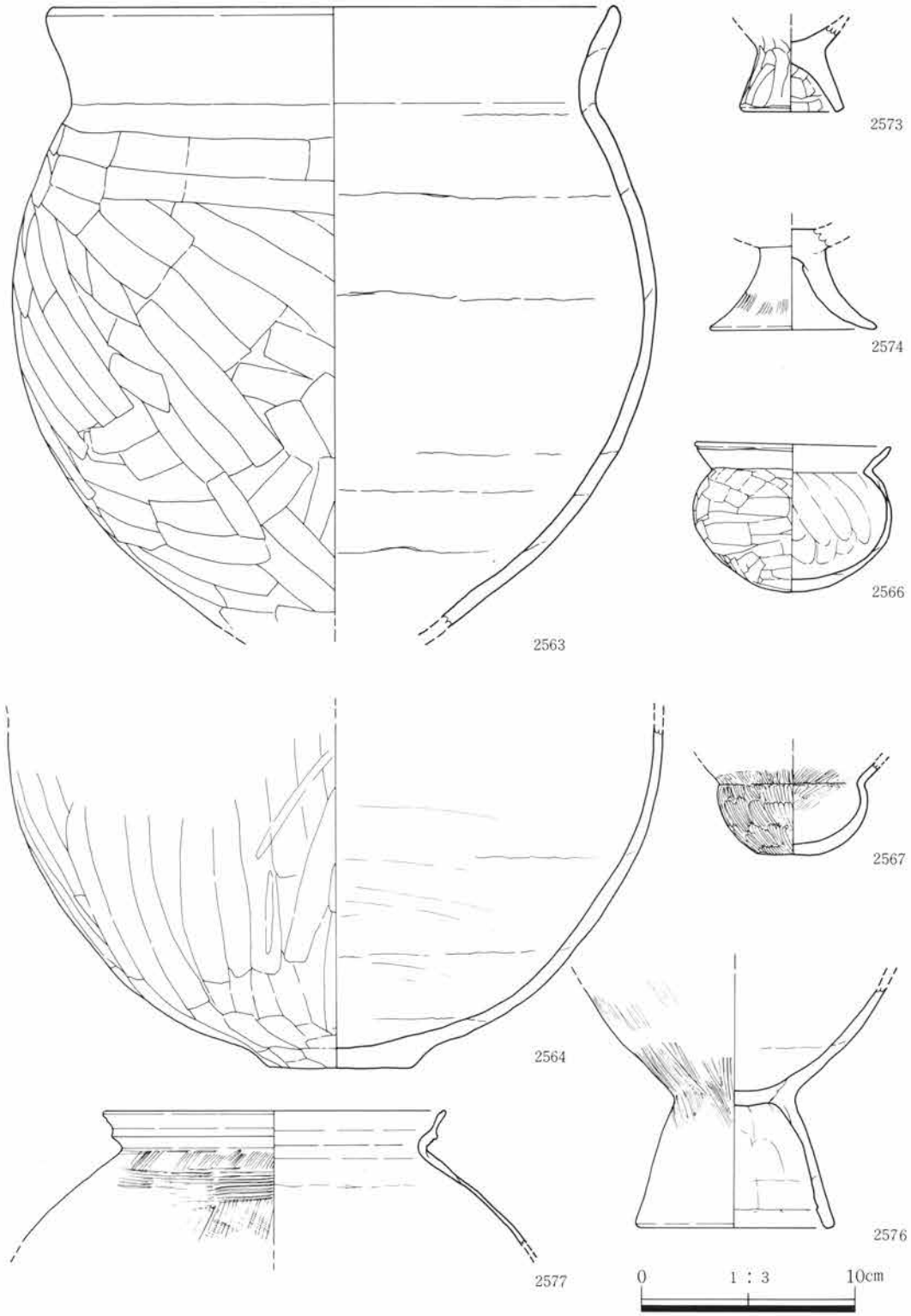


Ⅰ地区A区1号墳土層説明①

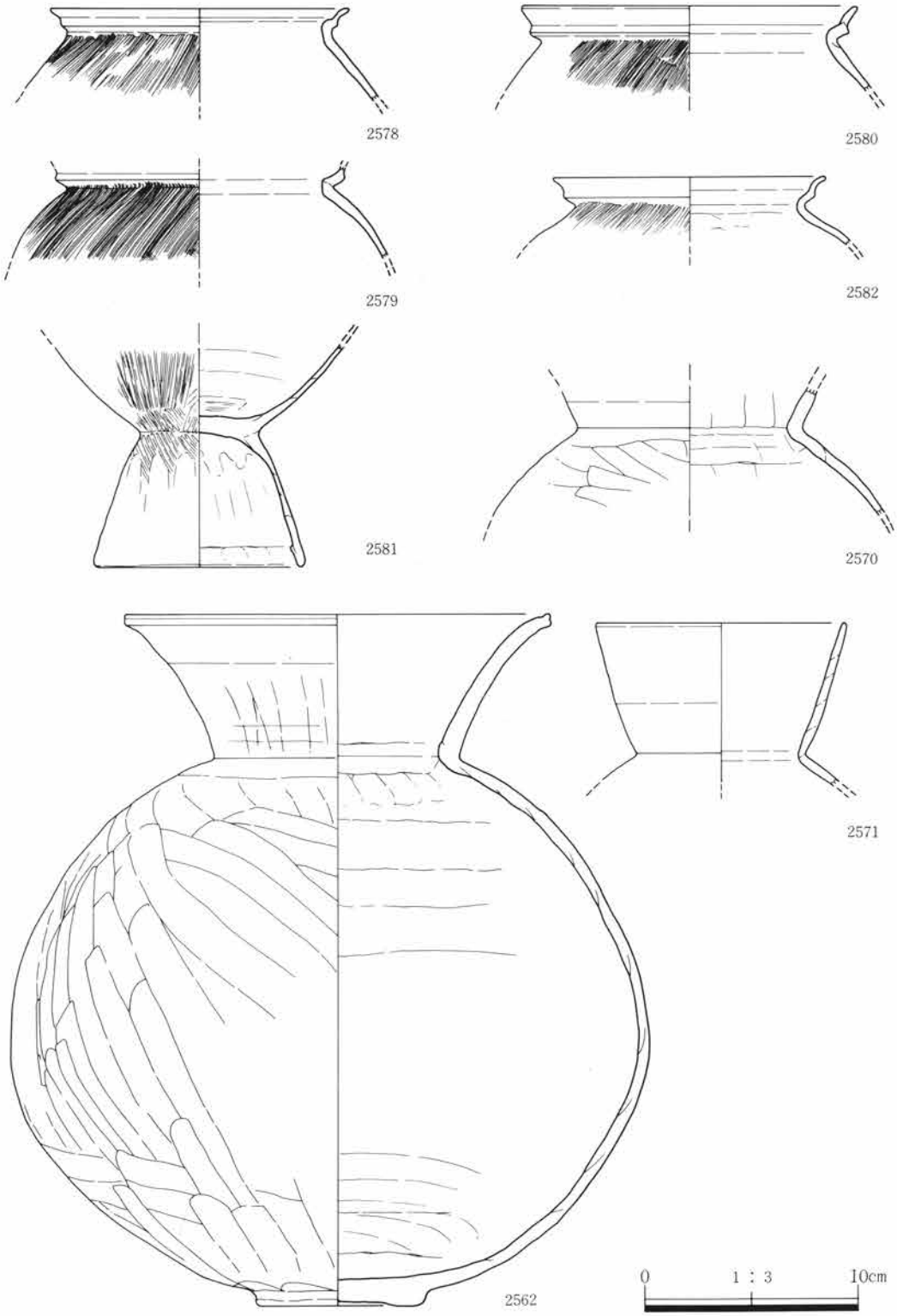
1　表土　　A軽石を多く含む。
2　A軽石層　黒褐色土・暗褐色土が若干混入。
3　暗褐色土　やや締まっており、小河原石含む。
4　暗褐色土　粒子粗く、小軽石・小石・ローム小粒を含む。
5　暗褐色土　小石を若干、ローム粒をやや多く含む。
6　館跡堀内埋没土　（土層説明省略）
7　古墳盛土　ロームが主体で、黒褐色土が少量混合。
8　古墳盛土が攪乱され、二次的に置かれたもの。暗褐色土・黒褐色土・ロームの混合。
9　攪乱された古墳盛土　暗褐色土・黒褐色土・ロームの混合。
10　古墳盛土
11　褐色土　　A軽石・ロームブロックを含む。
12　寄せ土　　暗褐色土主体で、黒褐色土・ローム少量混合、河原石を多く含み、非常に締まりがない。
13　暗褐色土　やや粘質、締まっている。
14　褐色土　　柔らかい。
15　古墳盛土　ロームブロック主体で、黒色土との混合層。
16　黒色旧表土層

第273図　Ⅰ地区A区1号古墳残存墳丘断面図(2)

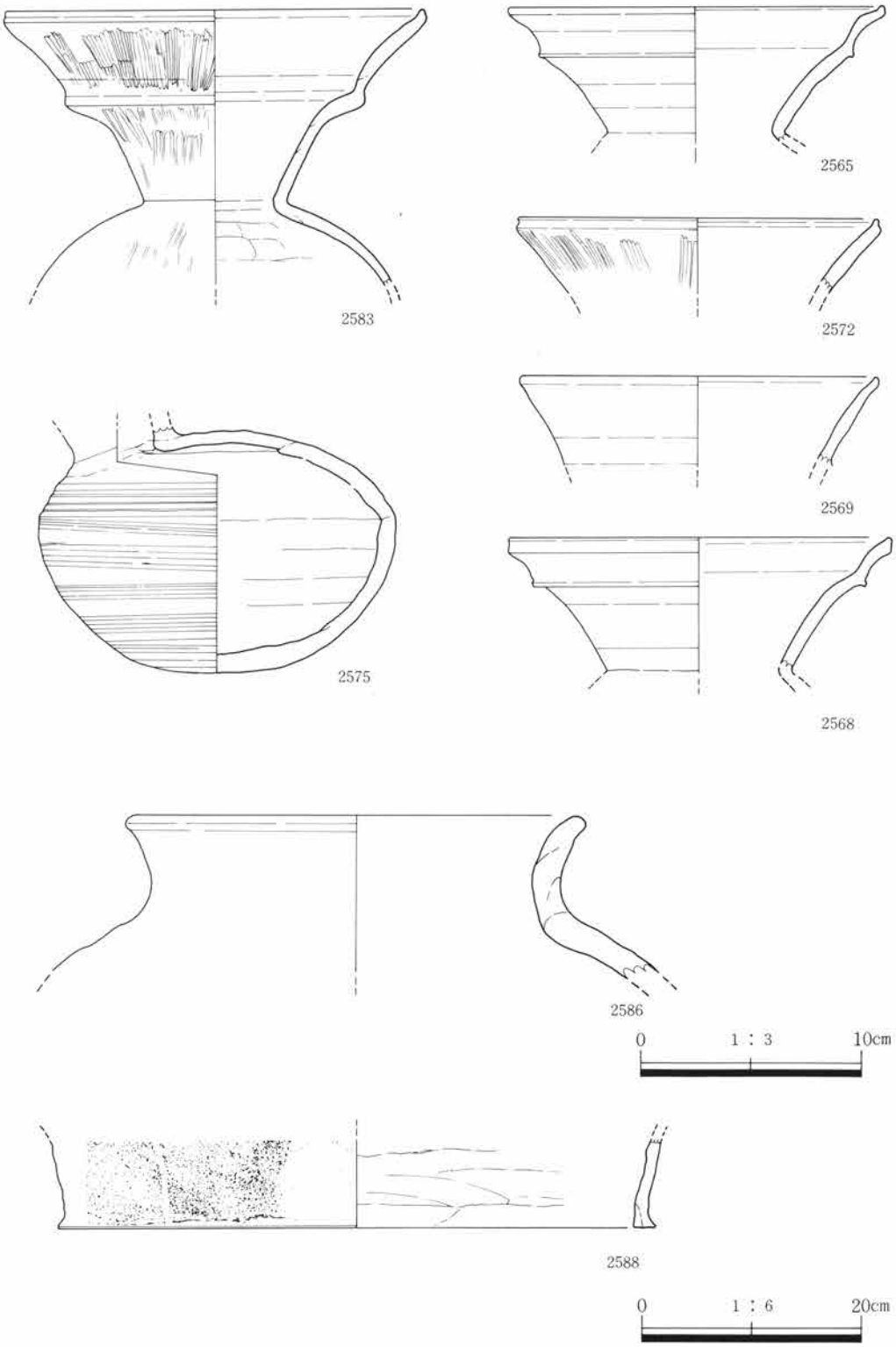
第274図　Ⅰ地区Ａ区１号古墳位置図



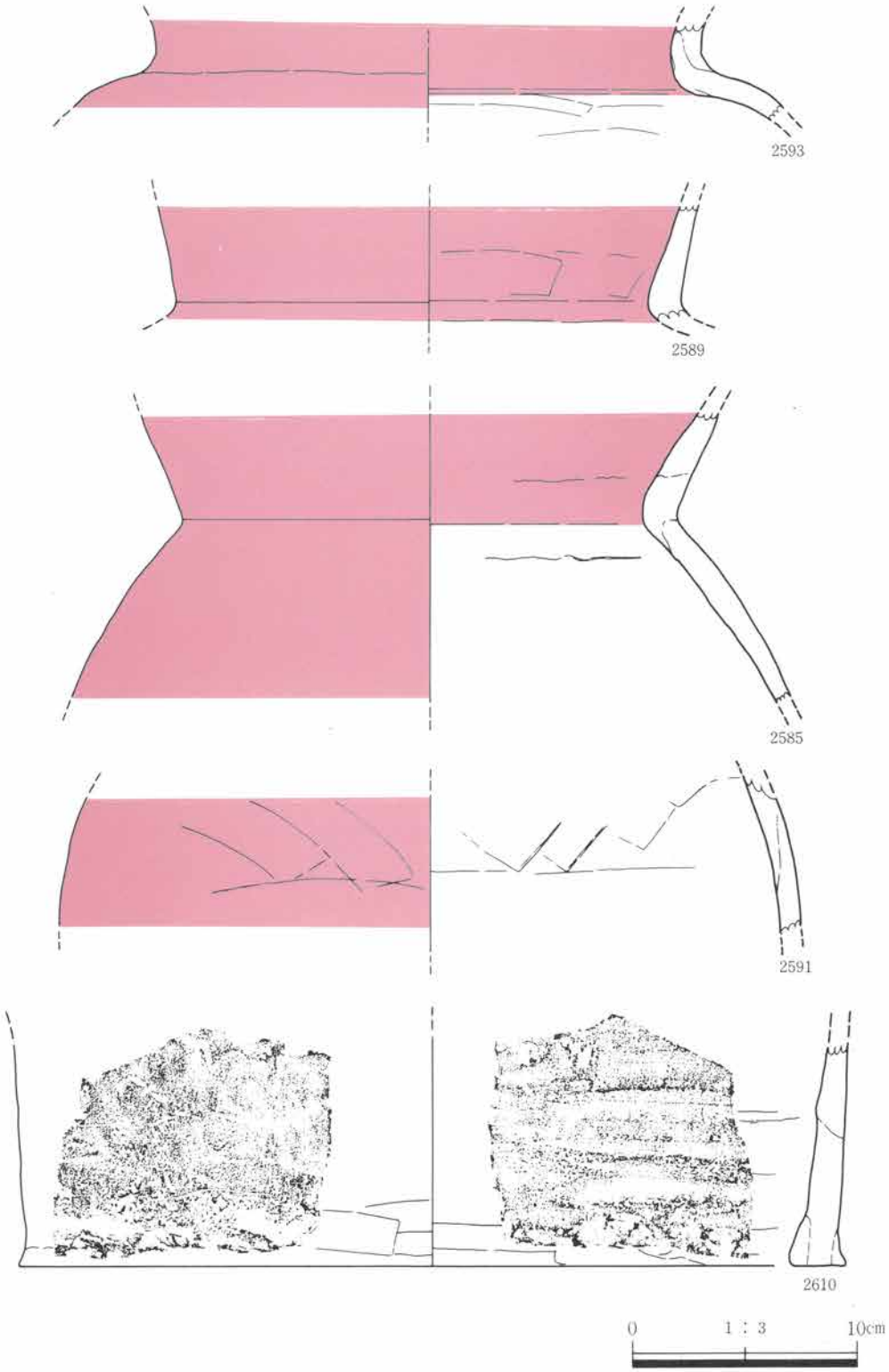
第275図　Ⅰ地区Ａ区１号古墳遺物図(1)



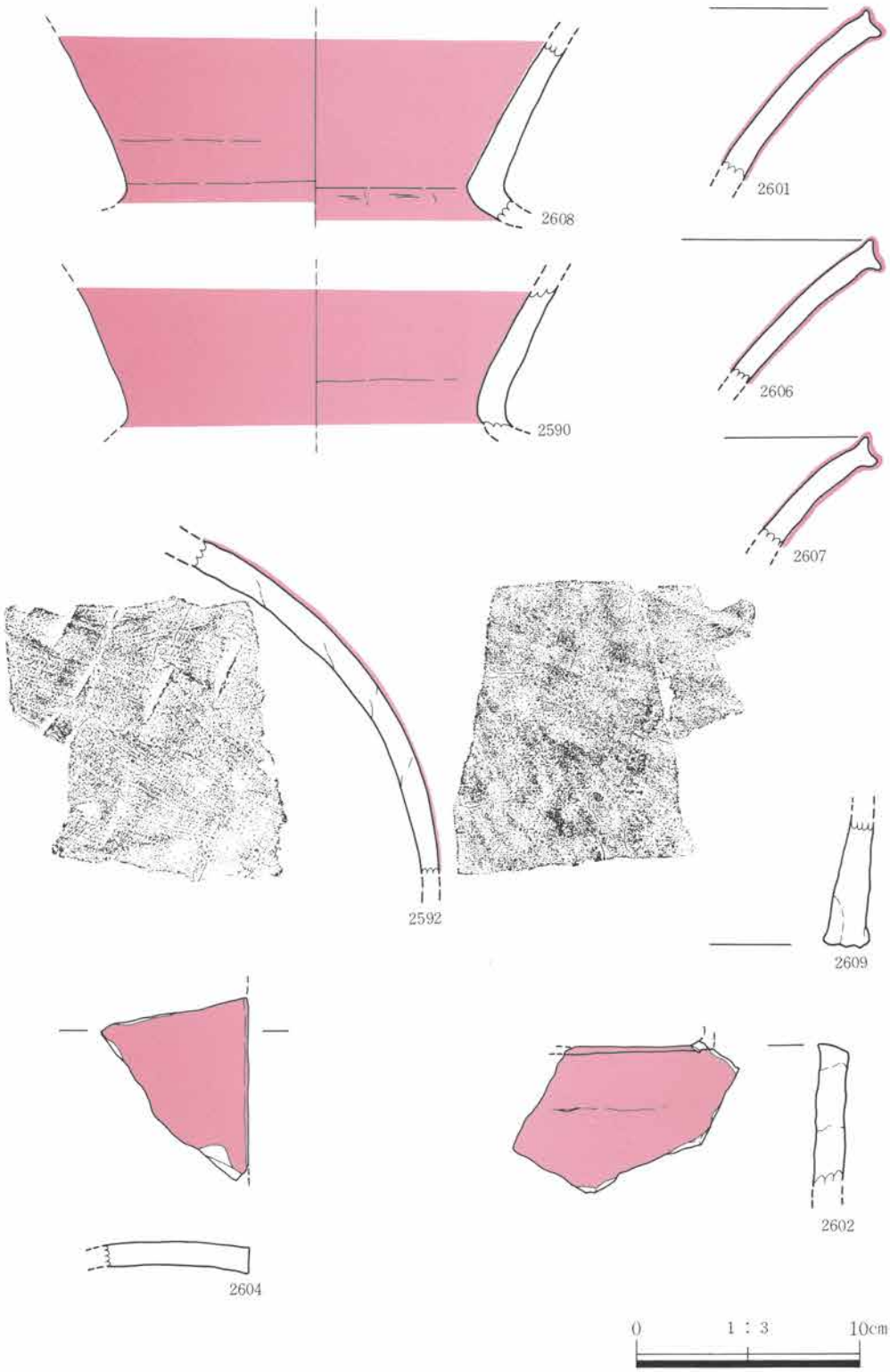
第276図　Ⅰ地区Ａ区１号古墳遺物図(2)



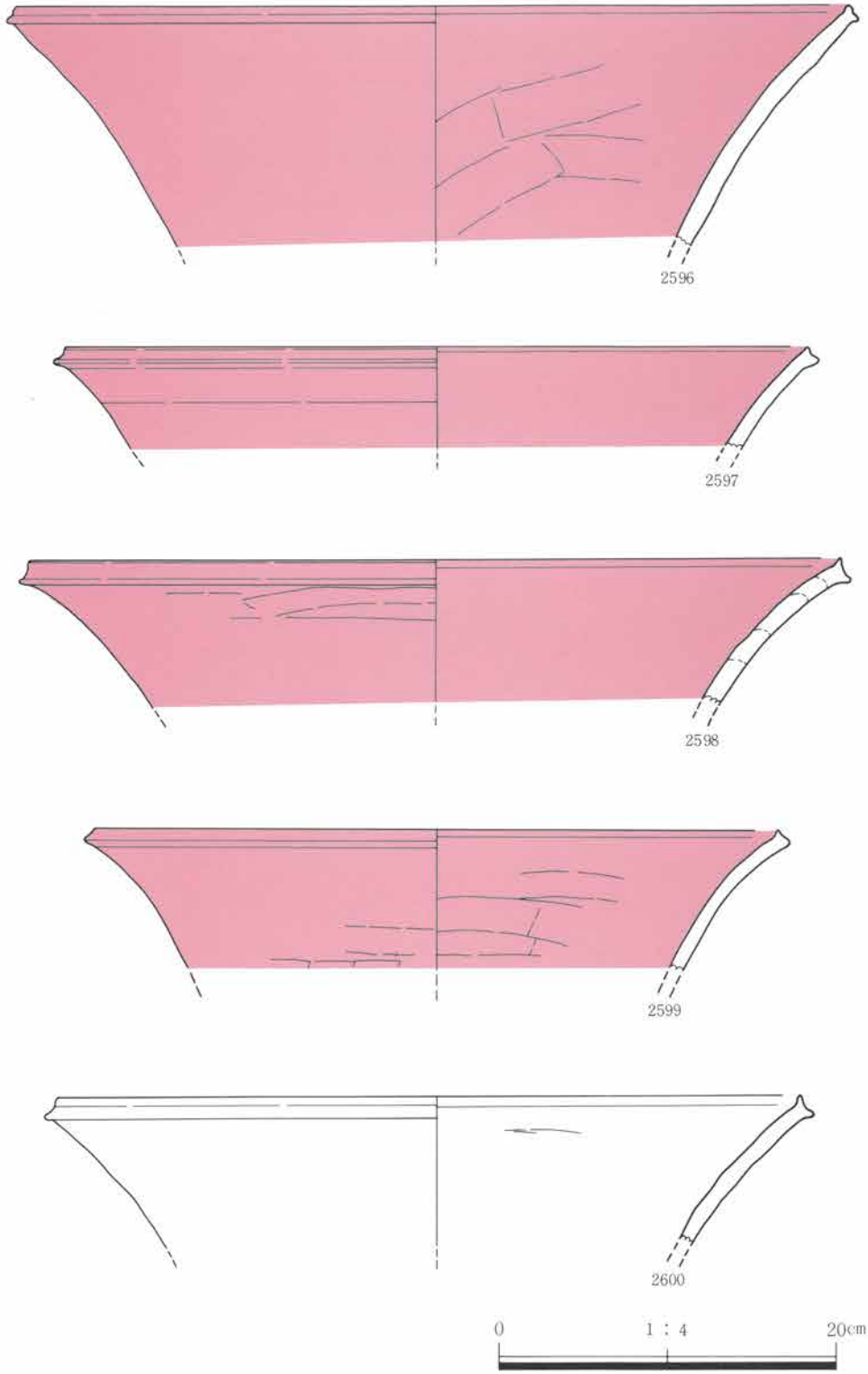
第277図　Ⅰ地区Ａ区１号古墳遺物図(3)



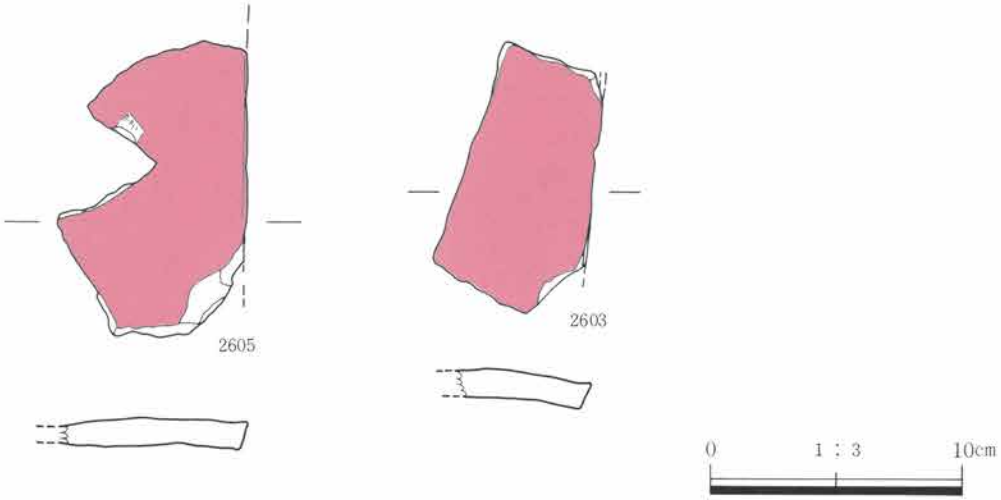
第278図　Ⅰ地区Ａ区１号古墳遺物図（４）



第279図　Ⅰ地区Ａ区１号古墳遺物図（５）



第280図　Ⅰ地区Ａ区１号古墳遺物図（６）



第281図　Ⅰ地区Ａ区１号古墳遺物図（７）

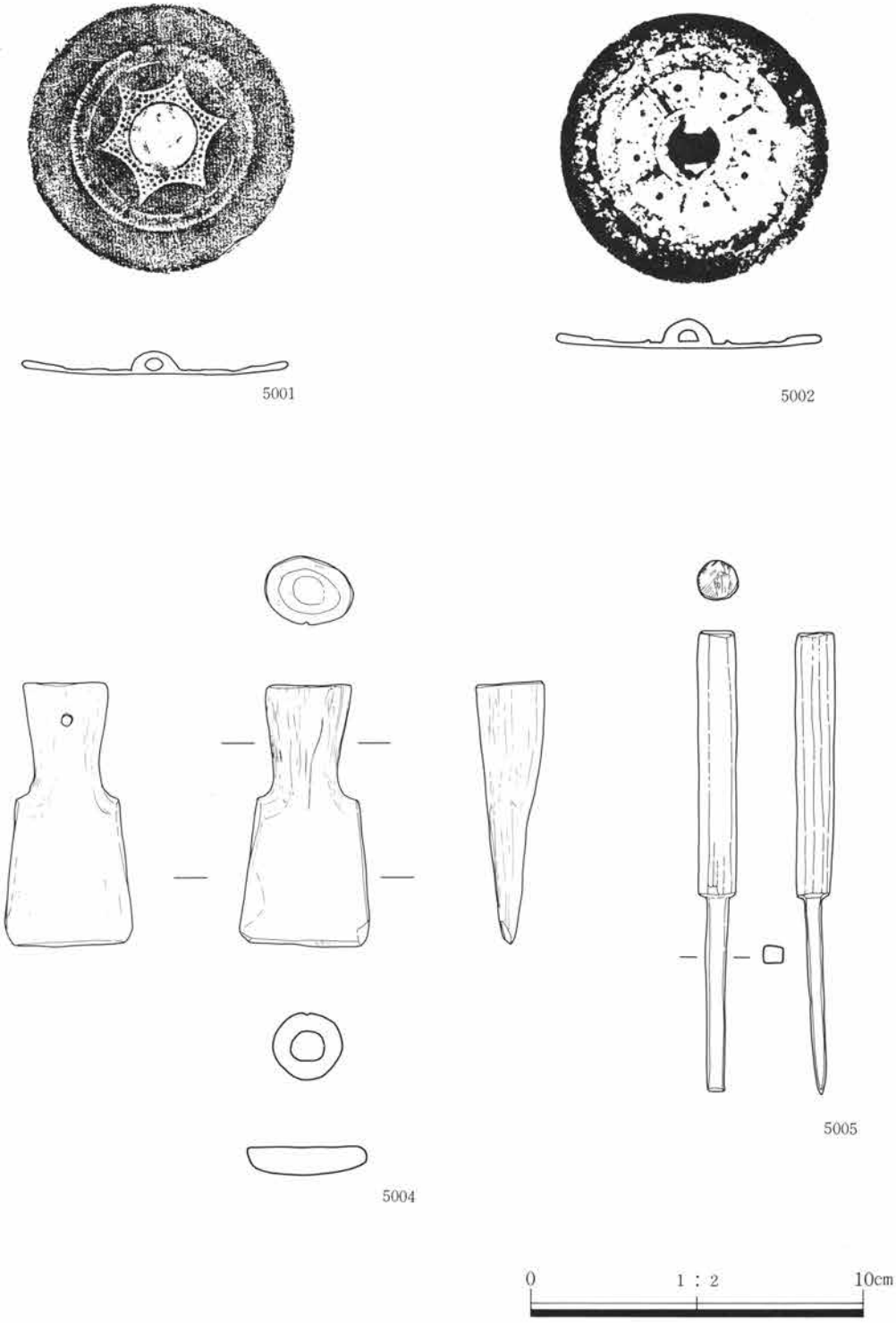
第 80 表　Ⅰ地区Ａ区１号古墳遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
2562	壺 土師器	器高:318㎜口径:196㎜底径:75㎜最大径:297㎜ほぼ完形	砂粒を含む。酸化。やや軟質。明赤褐。体部下端に煤付着。	口縁部「く」の字状に開き、最大径体部中央やや下端。外面:箆削り後、箆磨き。内面:口縁部箆磨き。体部:なで。	周堀内。
2563	甕 土師器	器高:一口径:268㎜底径:一最大径:300㎜口縁～体部½残	砂粒を多く含む。酸化。軟質。外面:鈍い橙。内面:橙。体部下半に黒斑あり。	最大径体部中央やや上端で、口縁部緩やかに外反。外面:箆削り。内面:なで。	周堀内。
2564	壺 土師器	器高:(155㎜)口径:一底径:66㎜体部下半～底部のみ残	小砂粒を含む。酸化。軟質。橙。体部下端～底部に黒斑あり。	体部内湾しながら立ち上がる。外面:箆削り後、箆磨き。内面:なで。	周堀内。
2565	壺 土師器	器高:(60㎜)口径:[170㎜]底径:一口縁部⅓残	直径１～２㎜の小石及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。明赤褐。	有段口縁で外反。内外面:横なで。	周堀内。
2566	小形甕 土師器	器高:69㎜口径:90㎜底径:一完形	直径１～２㎜の小石及び砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	口縁部は「く」の字状に外反。底部丸底。最大径体部やや上端。外面:口縁部～体部上半は横なで。体部下半～底部は箆削り。内面:なで。	周堀内。
2567	坩 土師器	器高:(45㎜)口径:一底径:[30㎜]最大径:(64㎜)体部½残	直径１～２㎜の小石及び、砂粒を含む。酸化。やや硬質。橙。	体部最大径は上端。内外面:箆磨き。	周堀内。

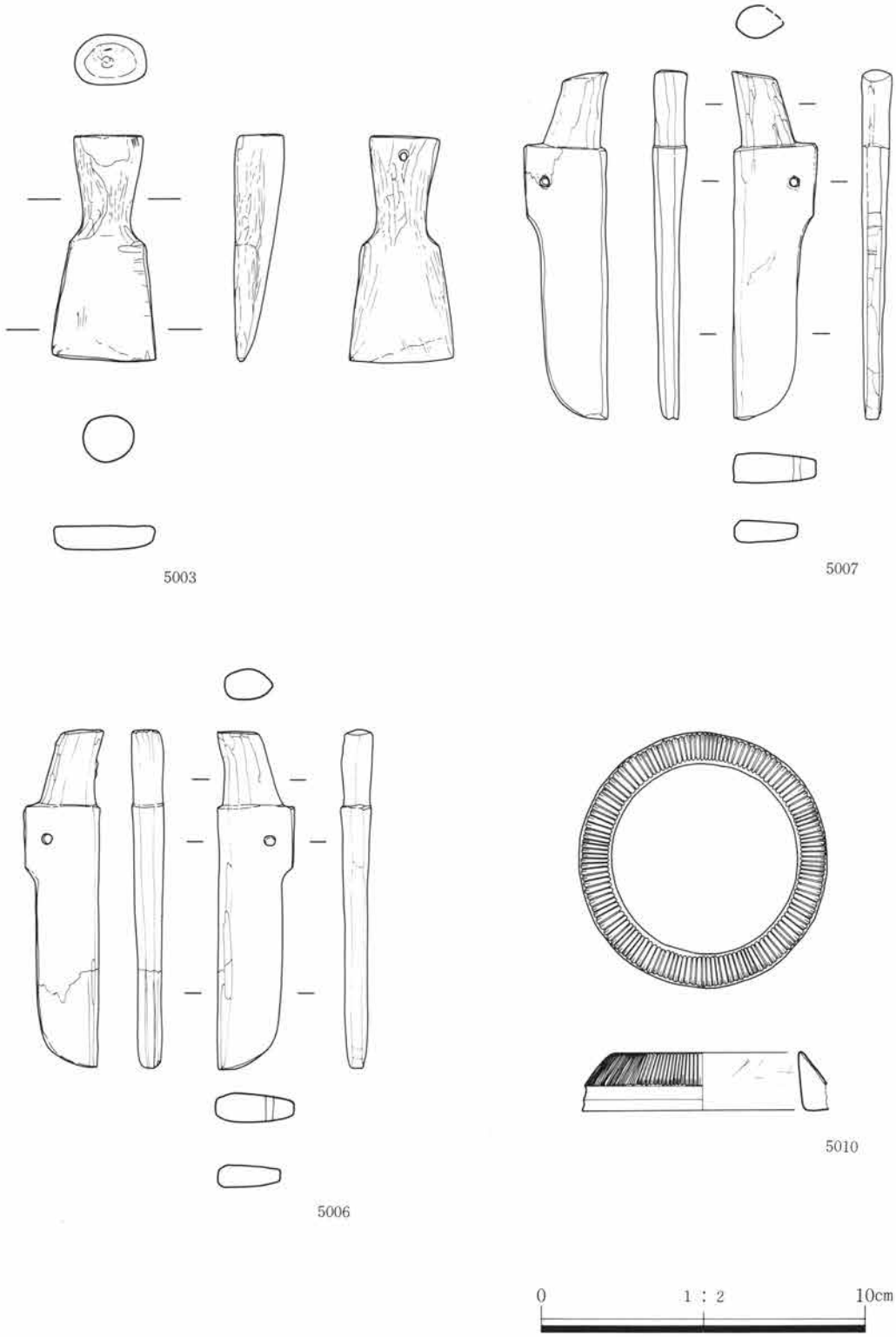
2568	壺 土師器	器高:(62mm)口径:[173mm]底径:—口縁部⅙残	砂粒を多く含む。酸化。やや軟質。明赤褐。	有段口縁で外反。内外面:横なで。	周堀内。
2569	甕 土師器	器高:(39mm)口径:[160mm]底径:—口縁部⅙残	砂粒を多く含む。酸化。やや軟質。明赤褐。	内外面:横なで。	周堀内。
2570	壺 土師器	器高:—口径:—底径:—頸部径:(104mm)頸部¼残	直径１～２mmの小石及び、砂粒を含む。酸化。橙。	口縁部は「く」の字状に外反。外面:口縁部及び頸部横なで。体部篦削り。内面:口縁部及び体部横なで。	周堀内。
2571	坩 土師器	器高:(73mm)口径:[114mm]底径:—口縁～頸部¼残	砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い橙。	口縁部は内湾しながら立ち上がる。外面:縦篦磨き。内面:横篦磨き。	周堀内上層。
2572	壺 土師器	器高:(33mm)口径:[164mm]底径:—口縁部⅕残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁端部に沈線文。外面:縦篦磨き。内面:横篦磨き。	周堀内下層。
2573	甕(ミニチュア) 土師器	器高:(36mm)口径:47mm底径:47mm底部のみ残	径１～２mmの小石を含む。酸化。硬質。明赤褐。	「ハ」の字状に開く。外面:縦篦削り。内面:横篦削り。	周堀内。
2574	高杯 土師器	器高:(46mm)口径:—底径:[77mm]脚部のみ¾残	径２～３mmの小石を多く含む。酸化。軟質。橙。	外反しながら開く。内外面:なで。外面:刷毛目痕あり。	周堀内。
2575	平瓶 須恵器	器高:(110mm)口径:—底径:—最大径:161mm口縁部欠	小砂粒を含む。還元。硬質。灰。口縁部内面及び体部上面に自然釉付着	丸底で器体が丸味を持つ。体部～底部にかけてカキ目。	周堀内。
2576	台付甕 土師器	器高:(110mm)口径:—底径:[92mm]体部下端～脚部⅓残	砂粒を多く含む。やや酸化。台部に煤付着。硬質。浅黄橙。	台部は折り返し。外面:縦刷毛目。内面:なで。	周堀内。
2577	甕 土師器	器高:(61mm)口径:[159mm]底径:—口縁～体部上端⅕残	小砂粒を含む。酸化。口縁部外面:煤付着。硬質。浅黄橙。	「S」字状口縁。外面:斜め刷毛後、横線文。内面:横なで。体部の厚さ２mm	周堀下層。
2578	甕 土師器	器高:(40mm)口径:[138mm]底径:—口縁～体部⅕残	砂粒を多く含む。酸化。硬質。外面:黒。内面:浅黄。	「S」字状口縁。外面:斜め刷毛目。内面:なで。	周堀内。
2579	甕 土師器	器高:(42mm)口径:—底径:—頸部径:[123mm]口縁部～体部上端⅓残	径２～３mmの小石・砂粒を含む。酸化。やや硬質橙。	「S」字状口縁。外面:全面斜め刷毛目。内面:なで。	周堀内。
2580	甕 土師器	器高:(38mm)口径:[156mm]底径:—口縁～体部上端⅕残	径２～３mmの小石・砂粒を含む。酸化。硬質。鈍い黄橙。	「S」字状口縁。外面:斜め刷毛目。内面:なで。	周堀内。

2581	台付甕 土師器	器高:(102㎜)口径:—底径:[96㎜]体部下端～台部⅓残	底部砂粒を含む。酸化。硬質。体部煤付着。浅黄褐灰。	台部内面:折り返し。外面:縦刷毛目。内面:なで。	周堀下層。
2582	甕 土師器	器高:(30㎜)口径:[126㎜]底径:—口縁部¼残	径1～2㎜の小石・砂粒を含む。酸化。やや硬質。鈍い黄橙。	外面:斜め刷毛目。内面:なで。	周堀内。
2583	壺 土師器	器高:(123㎜)口径:[190㎜]底径:—口縁部～体部⅗残	砂粒を少量含む。酸化。硬質。橙。	有段口縁。内外面:篦磨き。	周堀内。
2585	壺 埴輪	器高:(127㎜)口径:—底径:—頸部径:[219㎜]口縁部下半～体部上半の一部。	小石・砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い橙。口縁部内外面及び体部外面赤色塗彩。	口縁部「く」の字状に立ち上がる。内外面:なで。口縁部内外面及び体部外面:なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2586	壺 土師器	器高:(70㎜)口径:[204㎜]底径:—頸部⅕残	径2～3㎜の小石・砂粒を含む。酸化。硬質。明赤褐。	頸部は短く外反。内外面:全面磨滅のため、技法不明。	周堀内。
2588	円筒 埴輪	器高:(80㎜)口径:—底径:[540㎜]破片	砂粒を含む。酸化。焼成普通。橙。	器肉が比較的薄く大形。内外面:磨滅	周堀内。
2589	壺 埴輪	器高:(48㎜)口径:—底径:—頸部径:[224㎜]破片	砂粒を含む。酸化。焼成普通。橙。内外面:赤色塗彩。	内外面:なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2590	壺 埴輪	器高:(62㎜)口径:—底径:—頸部径:[168㎜]破片	砂粒を含む。酸化。焼成良好。鈍い橙。内面:赤色塗彩。	外面:全面磨滅のため、調整技・赤色塗彩の有無不明。内面:横なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2591	壺 土師器	器高:(70㎜)口径:—底径:—体部径:[330㎜]破片	砂粒をやや多く含む。酸化。やや硬質。鈍い橙。外面:赤色塗彩。	外面:なで後、赤色塗彩。内面:なで。	周堀内。
2592	壺 埴輪	器高:(145㎜)口径:—底径:—体部の一部	砂粒を少量含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。外面:赤色塗彩。	内外面:なで。外面:なで後、赤色塗彩	周堀内。
2593	壺 埴輪	器高:—口径:—底径:—体部上端の一部	砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。外面及び口縁部内面:赤色塗彩。	内外面:なで。外面及び口縁部内面:なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2596	円筒 埴輪	器高:(140㎜)口径:[494㎜]底径:—最上部の一部	小砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。内外面:赤色塗彩。	上端は大きく開く。内外面:なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2597	円筒 埴輪	器高:(60㎜)口径:[440㎜]底径:—最上部の一部	砂粒を多く含む。酸化。焼成良好であるがやや軟質。鈍い橙。内外面:赤色塗彩。	上端は大きく開く。内外面:なで後、赤色塗彩。	周堀内。

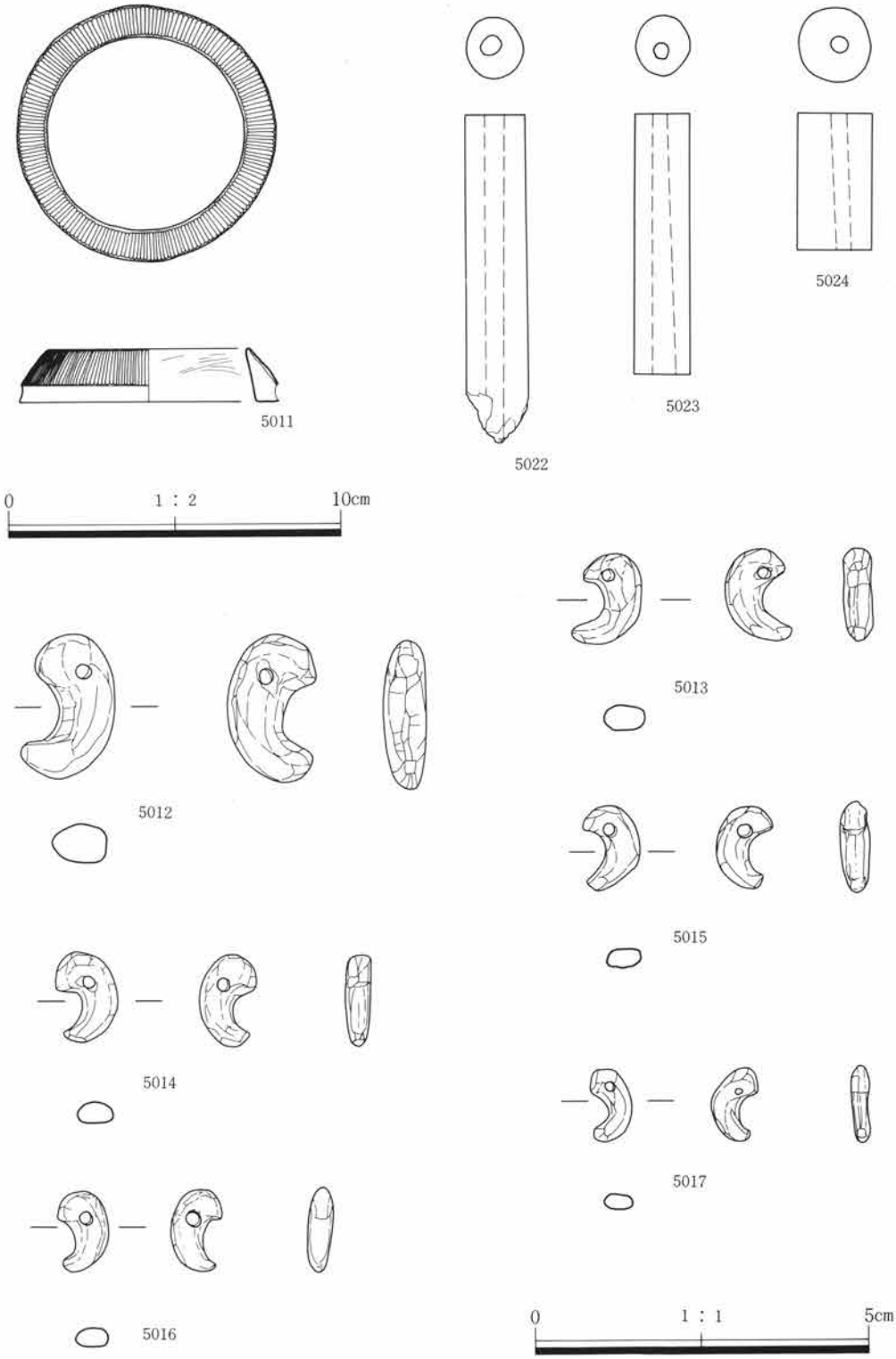
2598	円筒埴輪	器高:(85㎜)口径:[480㎜]底径:一最上部の一部	砂粒を少量含む。酸化。焼成普通。やや軟質。鈍い橙。内外面:赤色塗彩。	上端は大きく開く。内外面:なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2599	円筒埴輪	器高:(82㎜)口径:[402㎜]底径:一最上部の一部	砂粒を含む。酸化。焼成良好。やや軟質。橙。	上端は大きく開く。内外面:なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2600	円筒埴輪	器高:(85㎜)口径:[450㎜]底径:一最上部の一部	砂粒を含む。酸化。焼成普通。鈍い橙。黒斑あり。	上端は大きく開く。内外面:なで。	周堀内。
2601	円筒埴輪	器高:(80㎜)口径:一底径:一最上部の一部	径2～3㎜の小石を多く含む。酸化。焼成普通。鈍い橙。内外面:赤色塗彩。	上端は大きく開く。内外面:なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2602	円筒埴輪	体部の一部	小砂粒を含む。酸化。焼成普通。鈍い橙。外面:赤色塗彩。	方形透孔部分。内外面:なで。外面及び透孔部分なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2603	円筒埴輪	体部の一部	小砂粒を含む。酸化。焼成普通。鈍い橙。外面:赤色塗彩。	方形透孔部分。内外面:なで。外面及び透孔部分なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2604	円筒埴輪	体部の一部	小砂粒を含む。酸化。焼成良好。鈍い橙。外面:赤色塗彩。	方形透孔部分。内外面:なで。外面:なで後、赤色塗彩。外面:赤色塗彩後、篦磨き。方形透孔部分篦磨き。	周堀内。
2605	円筒埴輪	体部の一部	小砂粒を含む。酸化。焼成普通。鈍い橙。外面:赤色一部塗彩。	方形透孔部分。内外面:なで後、外面及び透孔部分赤色塗彩。	周堀内。
2606	円筒埴輪	最上部の一部	小石・小砂粒を含む。酸化。焼成良好。橙。内外面:赤色塗彩。	上端は大きく開く。内外面:なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2607	円筒埴輪	最上部の一部	小石・小砂粒を含む。酸化。焼成良好。鈍い橙。内外面:赤色塗彩。	上端は大きく開く。内外面:なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2608	壺埴輪	頸部径:[168㎜]口縁～頸部の一部のみ残	砂粒を含む。酸化。焼成普通。橙。赤色塗彩。	口縁部「く」の字状に立ち上がる。内外面:なで後、赤色塗彩。	周堀内。
2609	円筒埴輪	底部の一部	砂粒を含む。酸化。焼成普通。鈍い橙。	内外面:なで。	周堀内。
2610	円筒埴輪	器高:(98㎜)口径:一底径[368㎜]底部の一部残	小砂粒を少量含む。酸化。焼成普通。鈍い橙。	外面:縦なで。内面:横なで。	周堀内。



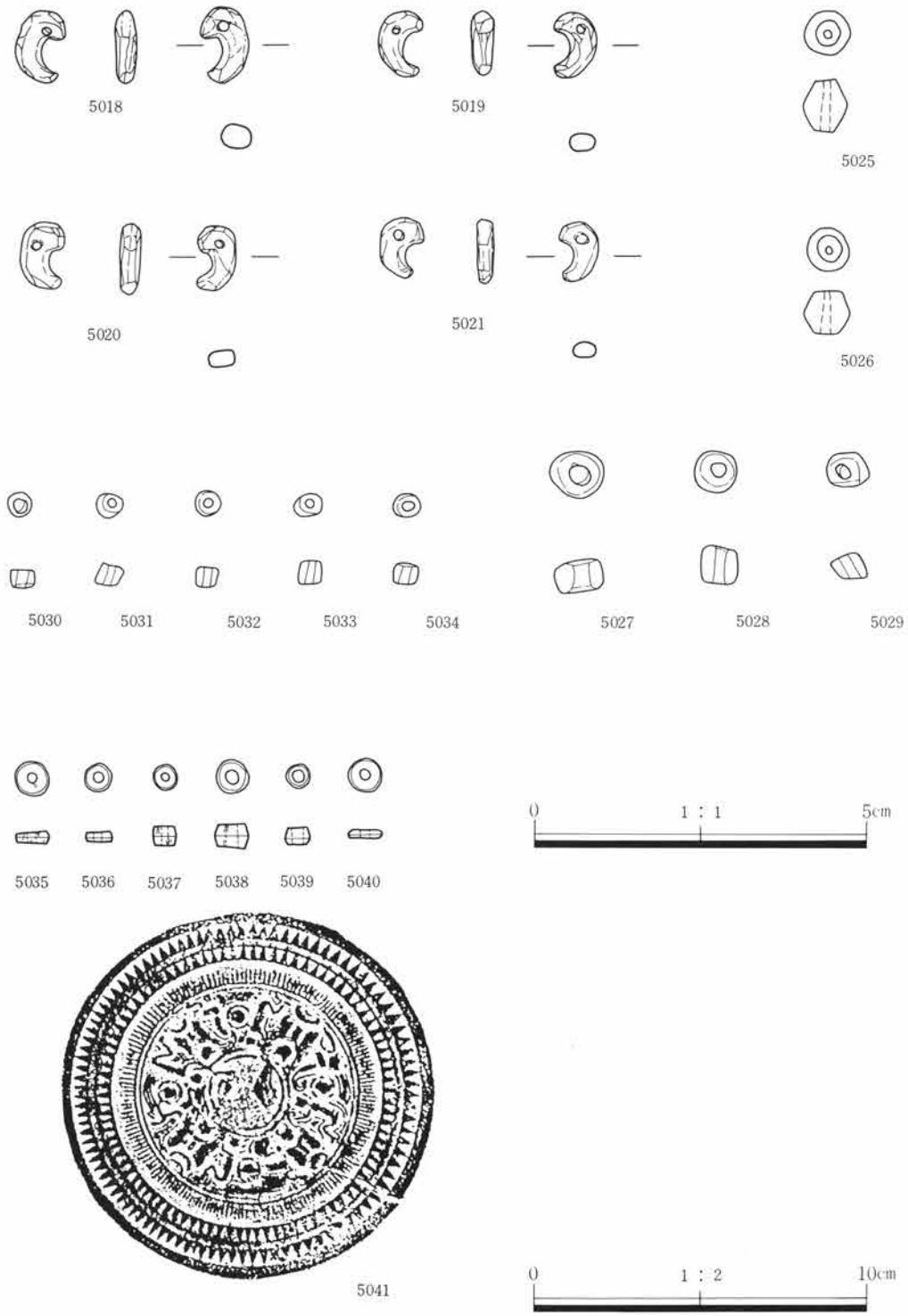
第282図　長者屋敷（伝天王山古墳）出土東京国立博物館収蔵遺物(1)



第283図　長者屋敷（伝天王山古墳）出土東京国立博物館収蔵遺物(2)



第284図　長者屋敷（伝天王山古墳）出土東京国立博物館収蔵遺物(3)

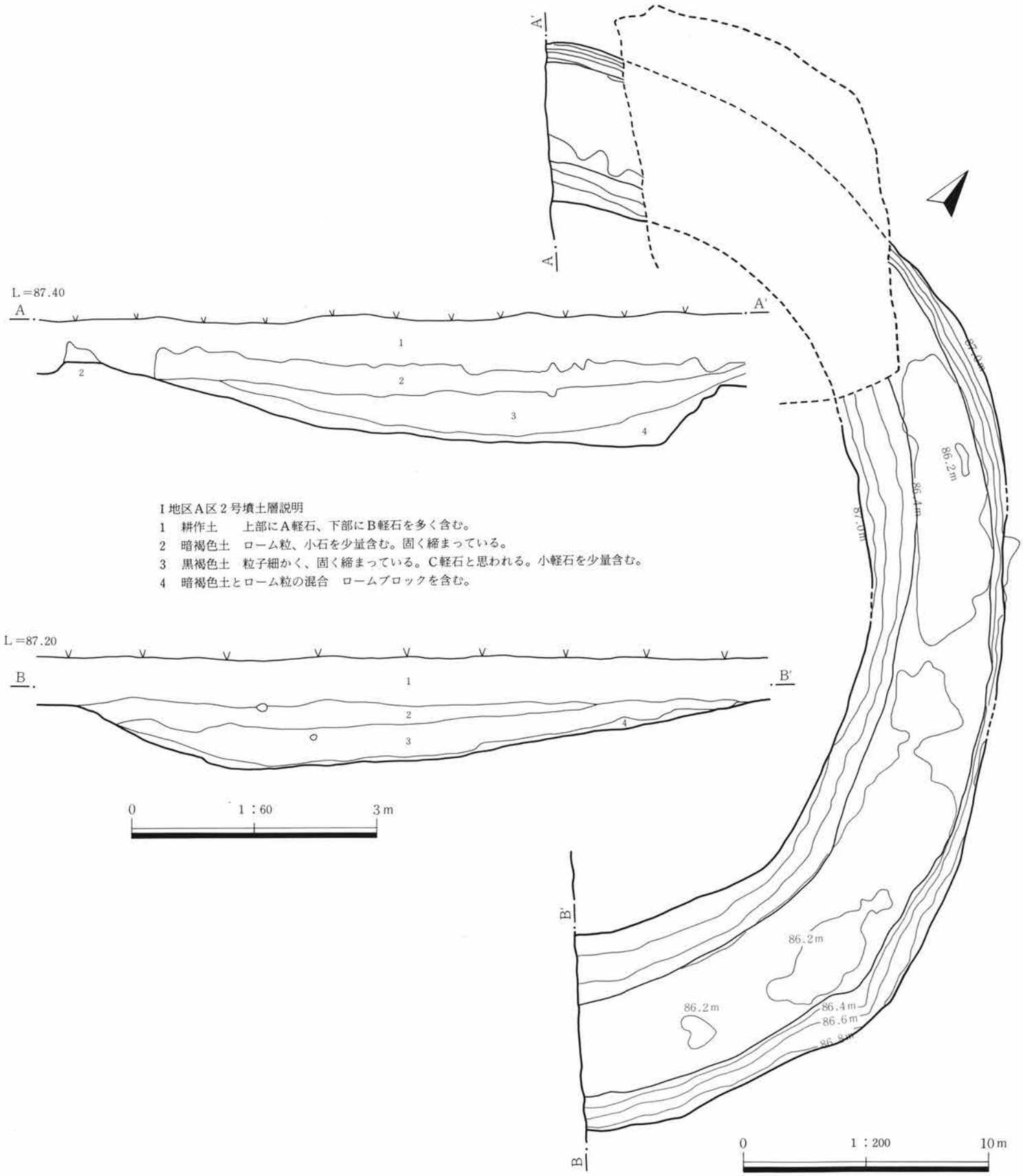


第285図　長者屋敷（伝天王山古墳）出土東京国立博物館収蔵遺物(4)及び伝同古墳出土遺物

第 81 表　長者屋敷（A区１号古墳）出土東京国立博物館収蔵遺物観察表及び同古墳出土遺物

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
5001	内行花文鏡 青銅製	面径:80mm縁厚:2mm		鈕一内行花文帯一櫛歯文帯一素縁。内行花文の間に珠文を充塡。鏡背に赤色顔料の痕跡あり。	東京国立博物館所蔵。
5002	変形珠文鏡 青銅製	面径:80mm縁厚:3mm	緑銹著し。表裏に平絹付着。	鈕一主文様帯一櫛歯文帯一素縁。主文様帯は8区画。その間に5珠文を配する。	東京国立博物館所蔵。平面写真は、図録より転載
5003	石製斧 滑石製	長さ:61mm刀幅:32mm		有肩。目釘孔1。	東京国立博物館所蔵。
5004	石製斧 滑石製	長さ:78mm刀幅:38mm		有肩。接部を線彫りで表現。目釘孔1。	東京国立博物館所蔵。
5005	石製鑿 滑石製	全長:136mm内柄の長さ:79mm	青灰。	調整良好。	東京国立博物館所蔵。
5006	刀子 滑石製	長さ:103mm	青灰。	小孔1あり。	東京国立博物館所蔵。
5007	刀子 滑石製	長さ:105mm	青灰。	小孔1あり。	東京国立博物館所蔵。
5010	石釧 軟玉製	径:77mm内径:58mm高さ:16mm	緑。		東京国立博物館所蔵。
5011	石釧 軟玉製	径:77mm内径:58mm高さ:17mm	緑。		東京国立博物館所蔵。
5012	勾玉 滑石製	長さ:21mm厚さ:6mm		調整良。	東京国立博物館所蔵。
5013	勾玉 滑石製	長さ:14mm厚さ:4mm		調整良。	東京国立博物館所蔵。
5014	勾玉 滑石製	長さ:13mm厚さ:3.5mm		調整良。	東京国立博物館所蔵。
5015	勾玉 滑石製	長さ:12.5mm厚さ:4mm		調整良。	東京国立博物館所蔵。
5016	勾玉 滑石製	長さ:12.5mm厚さ:3mm		調整良。	東京国立博物館所蔵。
5017	勾玉 滑石製	長さ:11mm厚さ:3mm		調整良。	東京国立博物館所蔵。
5018	勾玉 滑石製	長さ:10.5mm厚さ:3mm		調整良。	東京国立博物館所蔵。

5019	勾　玉 滑石製	長さ:9.5㎜厚さ:3㎜		調整良。	東京国立博物館所蔵。
5020	勾　玉 滑石製	長さ:10.5㎜厚さ:3㎜		調整良。	東京国立博物館所蔵。
5021	勾　玉 滑石製	長さ:9㎜厚さ:2.5㎜		調整良。	東京国立博物館所蔵。
5022	管　玉 碧玉製	残存長:47㎜径:9㎜		両面から穿孔。	東京国立博物館所蔵。
5023	管　玉 碧玉製	長さ:38.5㎜径:8㎜		両面から穿孔。	東京国立博物館所蔵。
5024	管　玉 碧玉製	長さ:20㎜径:11㎜		両面から穿孔。	東京国立博物館所蔵。
5025	算盤玉 水晶製	長さ:7.5㎜最大径:6.5㎜			東京国立博物館所蔵。
5026	算盤玉 水晶製	長さ:6㎜最大径:7㎜			東京国立博物館所蔵。
5027	小　玉 ガラス製	厚さ:4.5㎜径:7㎜	濃紺。		東京国立博物館所蔵。
5028	小　玉 ガラス製	厚さ:5㎜径:5㎜	濃紺。		東京国立博物館所蔵。
5029	小　玉 ガラス製	厚さ:4㎜径:4㎜	濃紺。		東京国立博物館所蔵。
5030	小　玉 ガラス製	厚さ:2.5㎜径:3.5㎜	浅青。		東京国立博物館所蔵。
5031	小　玉 ガラス製	厚さ:3㎜径:3㎜	浅青。		東京国立博物館所蔵。
5032	小　玉 ガラス製	厚さ:3㎜径:3㎜	浅青。		東京国立博物館所蔵。
5033	小　玉 ガラス製	厚さ:3.5㎜径:3.5㎜	浅青。		東京国立博物館所蔵。
5034	小　玉 ガラス製	厚さ:3㎜径:3.5㎜	浅青。		東京国立博物館所蔵。
5035	臼　玉 滑石製	厚さ:2㎜径:5㎜	黒。		総数298個。東京国立博物館所蔵。
5036	臼　玉	厚さ:1.5㎜径:4㎜	濃緑。		総数298個。東京国立博物館所蔵。



第286図　Ⅰ地区A区２号古墳遺構図

5037	臼　玉 滑石製	厚さ：3㎜径：3.5㎜	黒。		総数298個。東京国立博物館所蔵。
5038	臼　玉 滑石製	厚さ：4㎜径：5㎜	暗褐。		総数298個。東京国立博物館所蔵。
5039	臼　玉 滑石製	厚さ：2.5㎜径：3.5㎜	暗褐。		総数298個。東京国立博物館所蔵。
5040	臼　玉 滑石製	厚さ：1㎜径：5㎜	暗褐。		総数298個。東京国立博物館所蔵。
5041	変形神獣鏡 青銅製	面径：110㎜		4個の円座乳があり、それによつて等分された区画には、変形神像がある。なお、第285図の拓本は、『日本考古学大系・漢式鏡』による。	堀口孫次郎旧蔵、現在所在不明。（『群馬郡誌』大正14年群馬郡教育会発行。

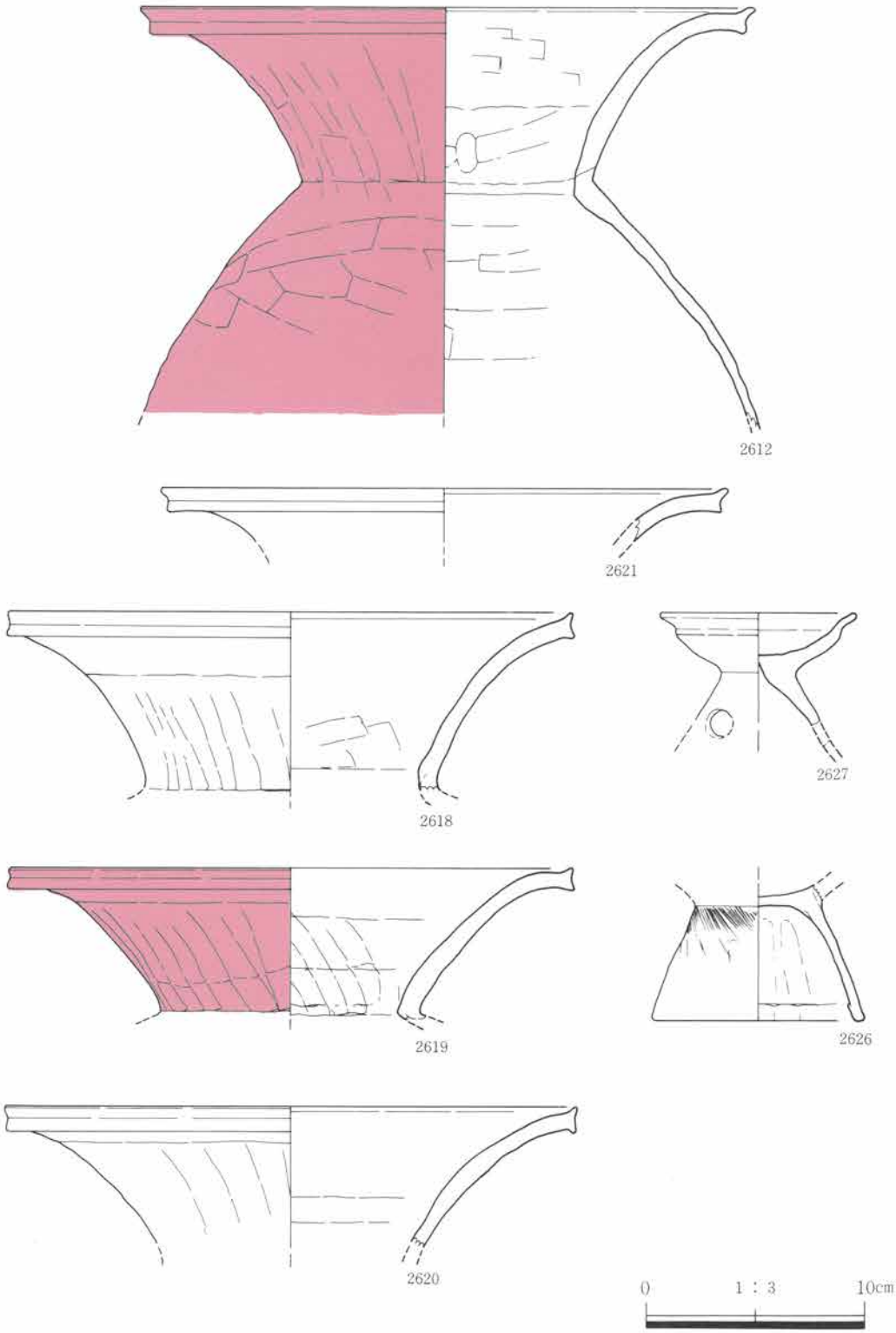
I地区A区2号古墳（第286～289図、第82表、図版63・64）

本古墳は、佐野村第39号墳として、上毛古墳総覧に登載されている。上毛古墳総覧によれば、下佐野字長者屋敷991番地に所在する円墳で、明治42年に発掘とあるが、出土遺物については、記載されていない。なお、墳丘については、『墳型存セズ』とあり、昭和10年には、墳丘が既に消滅していたことが知られる。

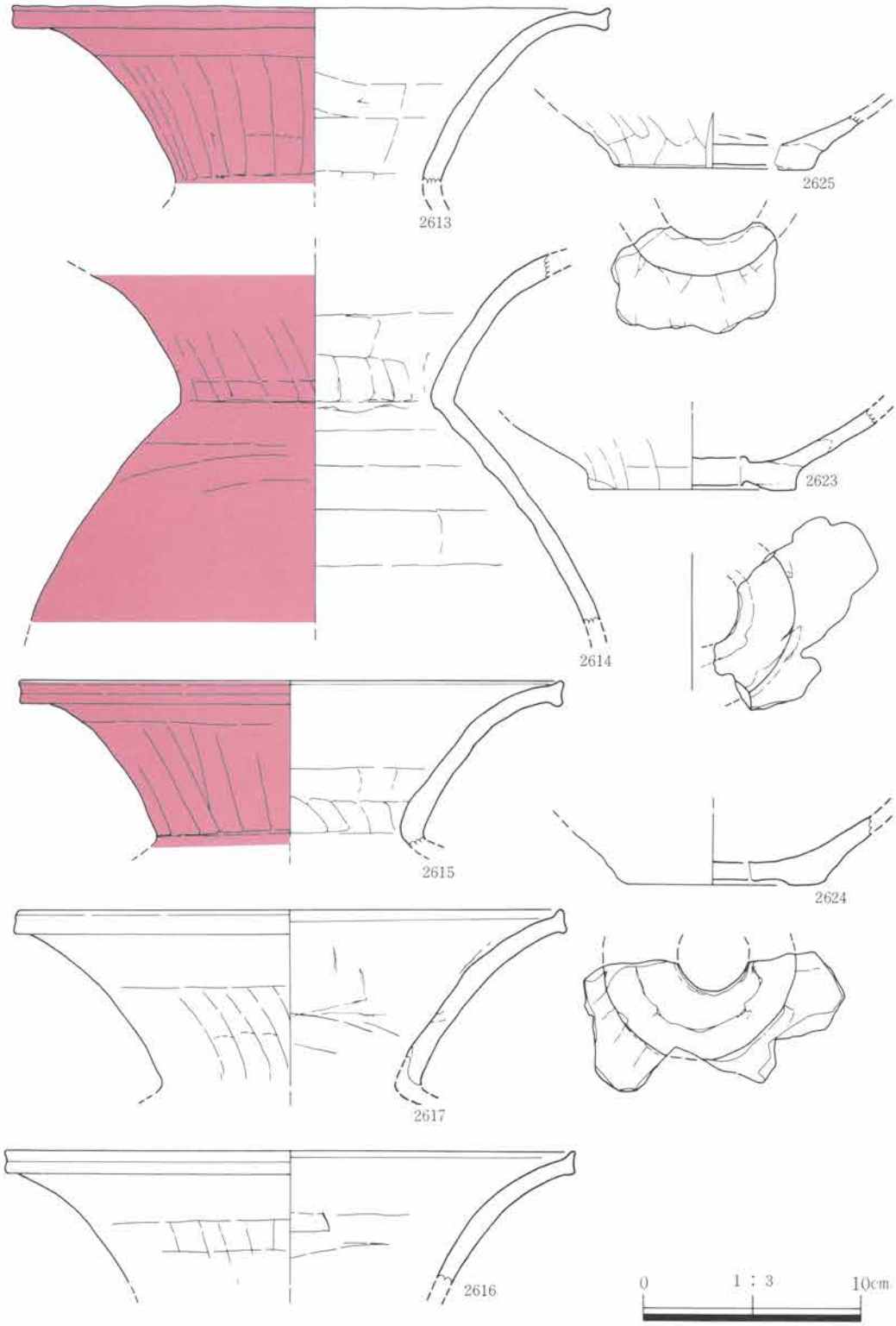
発掘調査においては、円形にめぐる周堀が検出された。円墳とすれば半分弱の検出で、墳丘部の推定直径は約32mとなる。他の遺構との重複関係では、A区74号住居跡・76号住居跡よりも新しく、69号住居跡・21号溝・14号井戸よりも古い。又、周堀部分の北側には、10m×16mの新しい攪乱がある。周堀の規模は、幅が5.5m～8mで、南側の方が広くなっている。深さは約2.5mで、南側も北側もほぼ同じである。周堀の掘り方は、内側が緩傾斜であるのに対して、外側は急傾斜となっている。

遺物は、全て周堀からの発見である。周堀底面近くが多いが、底面上からの出土はほとんどない。全て破片で、周堀のほぼ全域から発見された。これらの遺物は、出土状態から、墳丘上の土器が破片となって転落したものと考えられる。

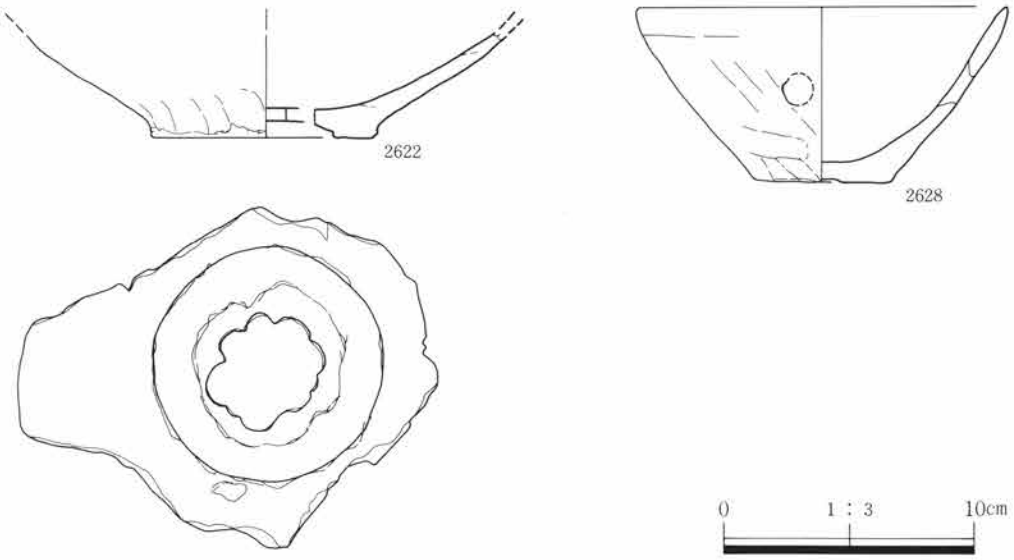
本古墳の築造時期は、周堀出土土器の様相から、古墳時代前期と推定できる。　（飯塚）



第287図　１地区Ａ区２号古墳遺物図（１）



第288図　Ⅰ地区A区２号古墳遺物図（２）



第289図　Ⅰ地区Ａ区２号古墳遺物図（３）

第 82 表　Ⅰ地区Ａ区２号古墳遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
2612	壺 土師器	器高:(190㎜)口径:280㎜底径:―口縁部～体部上半残	砂粒を少量含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。外面は赤色塗彩痕あり。	最大径は口縁部でラッパ状に開く。外面:口縁部は篦磨き後赤彩、体部は篦削り後赤彩。内面:口縁部は篦磨き、体部はなで。	周堀内。
2613	壺 土師器	器高:(80㎜)口径:275㎜底径:―口縁部のみ残	径２～３㎜の小石・砂粒を多く含む。酸化。やや軟質。淡赤橙。外面は赤色塗彩。	口縁部はラッパ状に開く。外面:篦磨き後、赤彩。内面:なで。	周堀内。
2614	壺 土師器	器高:(169㎜)口径:―底径:―頸部径:[125㎜]口縁部～体部上半½残	砂粒を少量含む。酸化。軟質。鈍い橙。外面は赤彩。	口縁部はラッパ状に開く。内外面:なで。外面はなで後、赤彩。	周堀内。
2615	壺 土師器	器高:(75㎜)口径:[250㎜]底径:―口縁部¼残	径２～３㎜の小石・小砂粒を含む。酸化。やや硬質。黄橙。外面は赤色塗彩	口縁部はラッパ状に開く。外面:なで後、赤彩。内面:なで。	周堀内。
2616	壺 土師器	器高:(60㎜)口径:[262㎜]底径:―口縁部⅓残	小砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	口縁部はラッパ状に開く。内外面:なで。	周堀内。

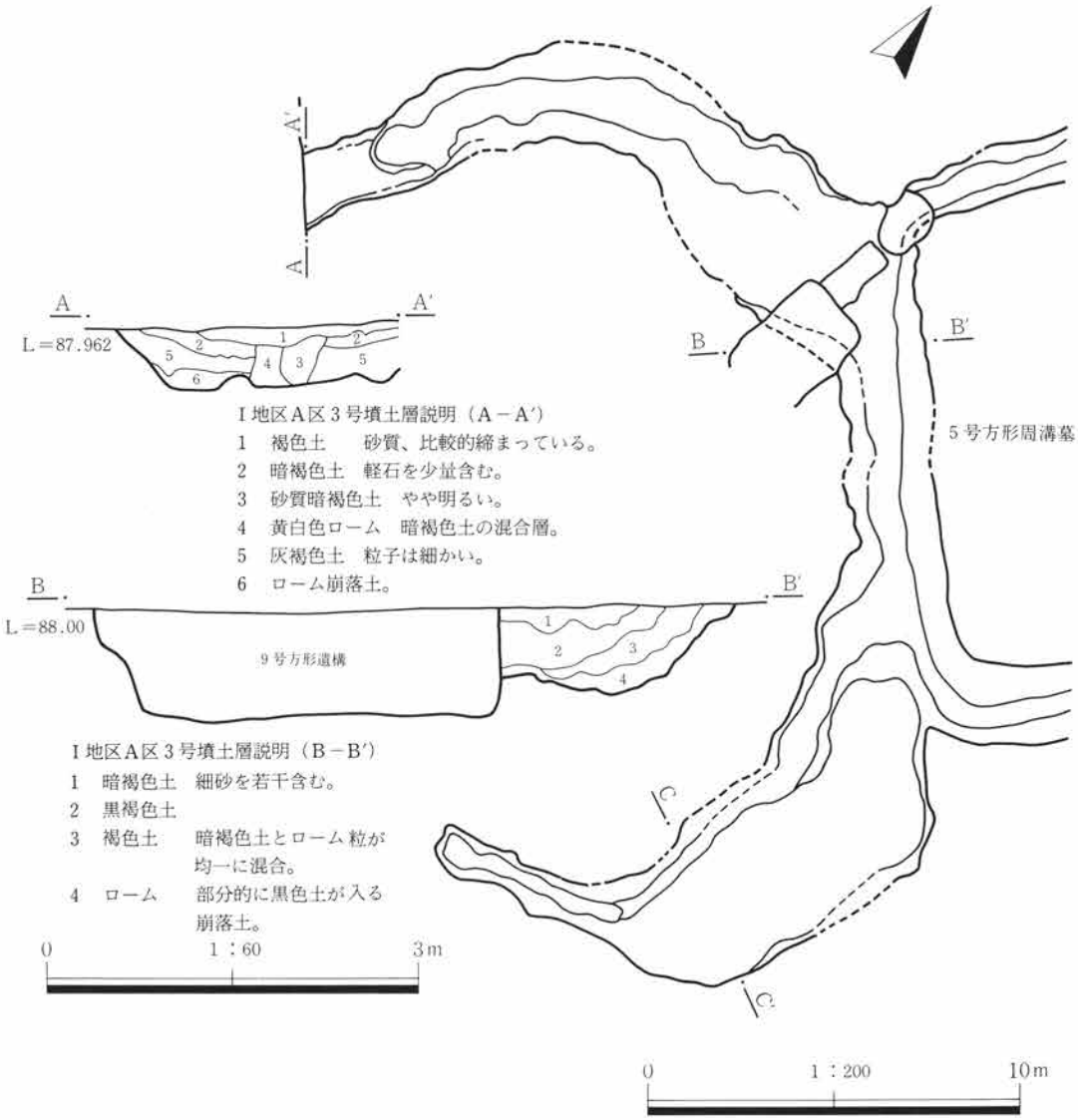
2617	壺 土師器	器高:(80㎜)口径:[250㎜]底径:—口縁部¼残	小砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い黄橙。	口縁部はラッパ状に開く。内外面:なで。	周堀内。
2618	壺 土師器	器高:(80㎜)口径:[260㎜]底径:—口縁部⅕残	小砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い橙。	口縁部はラッパ状に開く。内外面:なで。	周堀内。
2619	壺 土師器	器高:(65㎜)口径:[258㎜]底径:—口縁部⅓残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。外面は赤彩。	口縁部はラッパ状に開く。外面:なで後、赤色塗彩。内面:なで	周堀内。
2620	壺 土師器	器高(65㎜)口径:[260㎜]底径:—口縁部⅕残	小砂粒を含む。酸化。硬質。鈍い褐。	口縁部はラッパ状に開く。内外面:なで。	周堀内。
2621	壺 土師器	器高:(24㎜)口径:[260㎜]底径:—口縁部⅙残	小砂粒を含む。酸化。軟質。鈍い橙。	口縁部はラッパ状に開く。内外面:なで。	周堀内。
2622	壺 土師器	器高(40㎜)口径:—底径:90㎜体部下端～底部残	小砂粒を含む。酸化。やや軟質。明黄褐。	底部に焼成前穿孔。内外面:なで。	周堀内。
2623	壺 土師器	器高:(35㎜)口径:—底径:[95㎜]底部⅓残	小砂粒を少量含む。酸化。軟質。鈍い橙。	底部に焼成前穿孔。内外面:なで。	周堀内。
2624	壺 土師器	器高:(32㎜)口径:—底径:[92㎜]底部½残	小砂粒を少量含む。酸化。軟質。鈍い橙。	底部に焼成前穿孔。内外面:なで。	周堀内。
2625	壺 土師器	器高:(23㎜)口径:—底径:[86㎜]底部¼残	小砂粒を含む。酸化。軟質。橙。	底部に焼成前穿孔。内外面:なで。	周堀内。
2626	台付甕 土師器	器高(62㎜)口径:—底径:96㎜台部のみ残	砂粒を多く含む。酸化。軟質。鈍い黄橙。	台部は折り返し。外面:上部は刷毛目。内面:なで	周堀内。
2627	高杯 土師器	器高:(49㎜)口径:89㎜底径:—杯部～脚部上半残	砂粒を多く含む。酸化。軟質。浅黄橙。	杯部は稜をもって外反、3孔を有す。内外面:なで。	周堀内。
2628	鉢 土師器	器高:70㎜口径:148㎜底径54㎜ほぼ完形	砂粒を多く含む。酸化。やや軟質。橙。黒斑あり。	径12㎜の焼成後穿孔あり。外面:なで。滑らかでなく、ざらざらしている。内面:なで。	周堀内。

I 地区A区3号古墳（第290図）

本古墳は、墳丘は既に消滅していた。北側部分で、A区5号方形周溝墓と堀を共有するような

恰好となる。又、南側部分では、堀が途中で立ち上がっている。重複遺構との新旧関係では、Ａ区１号住居跡に関しては本古墳の方が新しいが、その他の遺構である４号古墳・７号方形遺構・８号方形遺構・９号方形遺構については、本古墳の方が古く、本古墳の墳丘削平後にこれらの遺構が造られているということになる。墳丘部は、やや不整な円形を呈しており、推定直径を求めると約10mとなる。周堀の掘り方は一定ではなく、最も幅の広い東側で５m、又、最も幅の狭くなる南側で１m～２mとなる。確認面であるローム面からの深さは、40cm～50cmである。

本古墳からは、遺物が全く出土していないため、築造時期は不明である。　（飯塚）



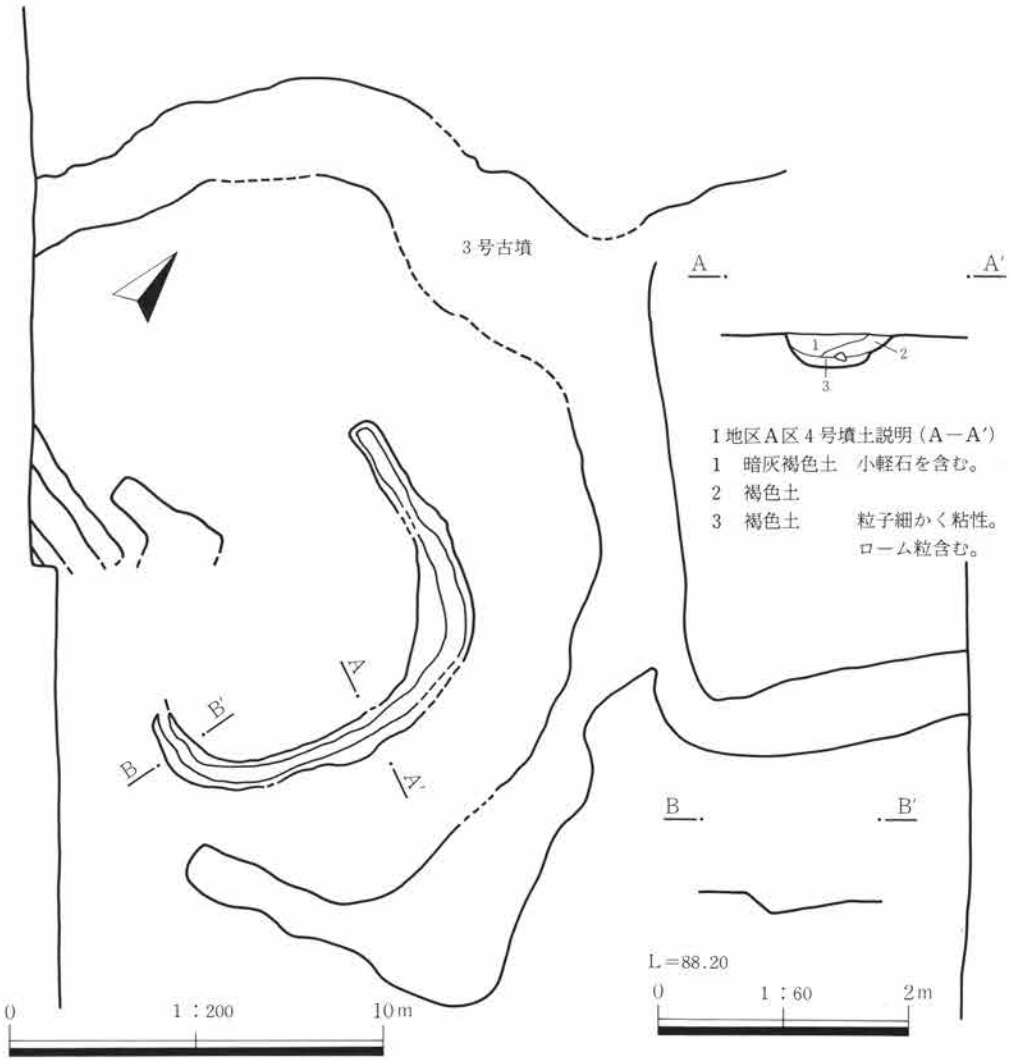
第290図　Ⅰ地区Ａ区３号古墳遺構図

Ⅰ地区Ａ区４号古墳（第291図）

本古墳は、Ａ区３号古墳の墳丘部分に確認された。３号古墳との新旧関係は、明確ではない。しかし、３号古墳は、覆土が比較的黒ずんでおり、３号古墳と連結しているような形となっている５号方形周溝墓をはじめ、その他の方形周溝墓の覆土にも比較的類似することから、本古墳の方が３号古墳よりも新しくなる可能性が強い。

周堀は、西側約半分が欠けているが、この欠けている部分にローム層にまで達しない浅い周堀がめぐっていたか否かは、ローム層上面まで耕作が及んでいるため不明である。周堀の形態は、円形に近い隅丸方形と考えられる。規模は、周堀の幅が70cm～1.5m、深さが約30cmである。

周堀内より、遺物は発見されなかったが、墳丘側に河原石が集中して落ち込んでおり、本遺構が、葺石を有する古墳であったことを裏付けているものと考えられる。（飯塚）



第291図　Ⅰ地区Ａ区４号古墳遺構図

Ⅰ地区Ｂ区１号古墳（第292図）

本古墳は、墳丘が既に消滅していた。周堀内には、Ｂ区１号住居跡・13号住居跡・23号住居跡等が存在しており、これらは周堀埋没後に周堀上に造られたものである。

周堀は、調査区内において半円形を呈しているが、墳丘部の直径を推定すると約25mとなる。周堀幅は３m～４mで、中央やや北側に幅60cmのブリッジが存在する。周堀の深さは、ローム上面から90cm前後である。掘り方は逆台形を呈する。

出土遺物は皆無であり、時期は不明である。（飯塚）

Ⅰ地区Ｂ区２号古墳（第293・294図、図版58）

本古墳は、宅地内に僅かに墳丘が残存する。残存墳丘は、地表面からの高さ約80cmで、墳丘上に、大小の河原石や凝灰岩の切り石等が散乱していた。なお、宅地内で、しかも雑木林内に存在していたためか、上毛古墳総覧には登載されていない。

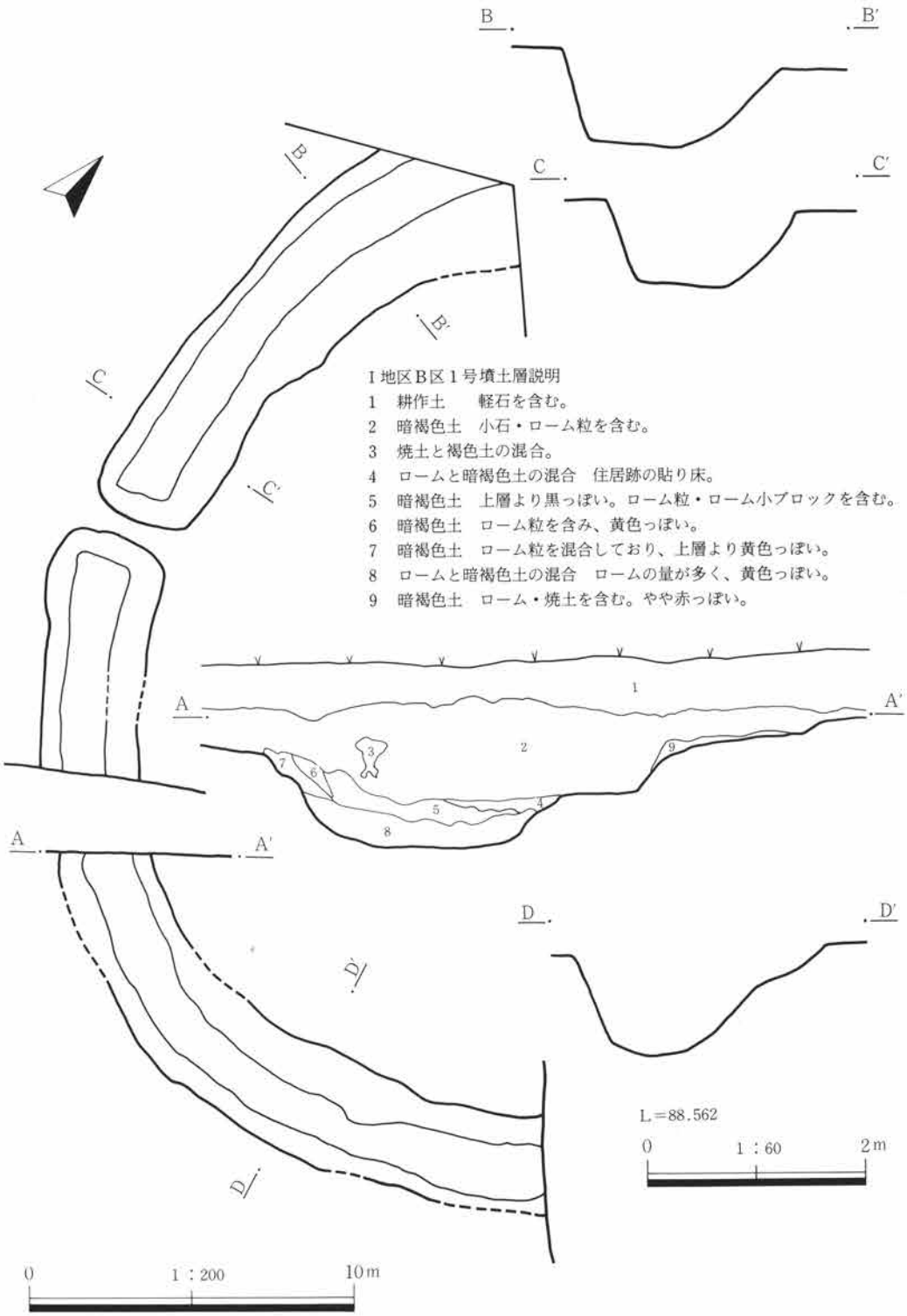
全面調査に先行して、トレンチによる残存墳丘の調査を実施したが、墳丘は大きく破壊されており、盛土の状態を全く止どめていない。このトレンチ調査から、残存墳丘は、旧地表面付近まで攪乱された後に、再び積み上げられたものと判明した。

調査では、墳丘部の一部と周堀の一部が確認された。他の遺構との重複関係では、Ｂ区31号住居跡・32号住居跡・10号溝よりも新しく、21号住居跡・5号井戸よりも古い。墳丘は、周堀の形態から円くなる可能性が強く、推定直径を求めると、10m前後となる。墳丘中央部からは、破壊された横穴式石室の一部が発見された。

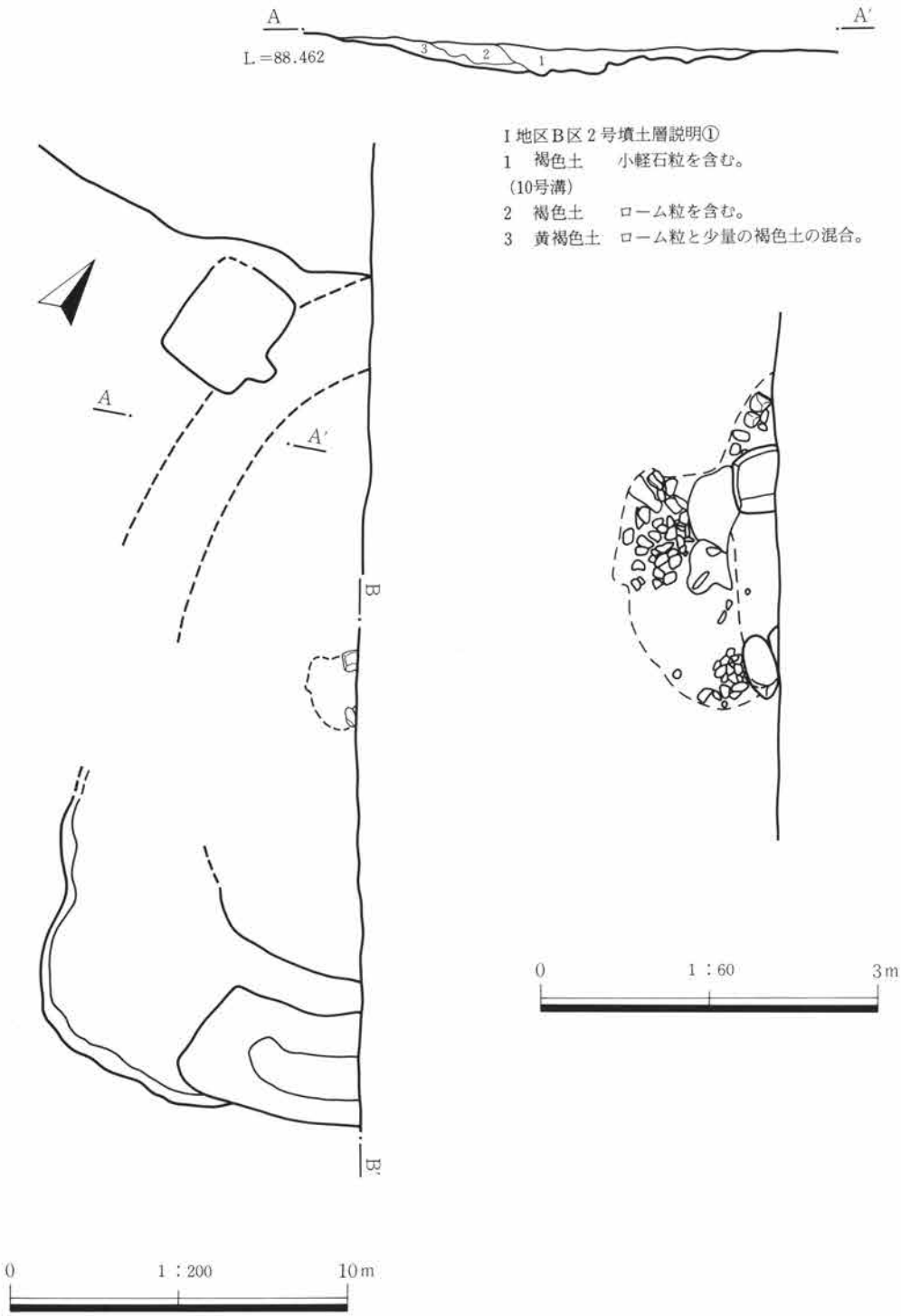
横穴式石室は、調査区内において一部が確認されたものの、大部分は調査区外に続くものと考えられる。石室は、大きく破壊されており、左側壁と推定される凝灰岩の切り石と、右側壁下に置かれたと考えられる偏平な河原石が、原位置を止どめていると推定される以外は、ほとんど攪乱されているものと思われる。石室の幅は、推定で約１mである。石室の周囲には、径10cm前後の河原石が多く存在しており、河原石を敷いた後、石室の根石を据えている可能性が強い。

周堀は、右側部分を除いて、極めて不明瞭である。10号溝との重複部分においては、断面観察によると、幅は約2.5mで、深さ約20cmの浅い周堀を認めることができる。また、南側部分の調査区域外との境界付近では、幅が4.2mで深さ90cmと、北側に比して幅が広く、深さも深くなっている。しかし、北側に行くに従い、次第に浅くなり、中央付近では確認できなくなる。

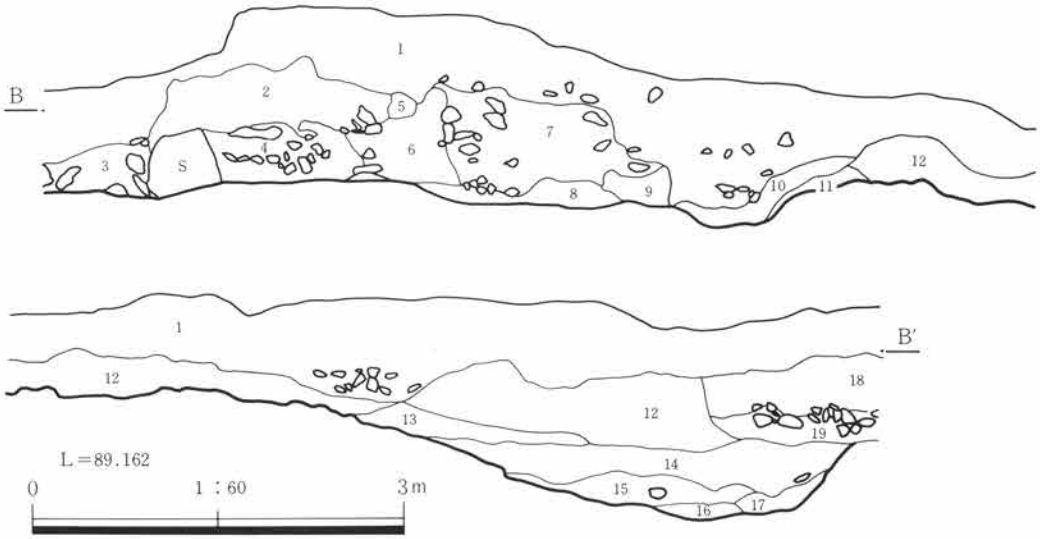
出土遺物については、石室内及び周堀とも確認されていない。本古墳の時期は、石室の様相から７世紀代と推定される。（飯塚）



第292図　I地区B区1号古墳遺構図



第293図　Ⅰ地区Ｂ区２号古墳遺構図（１）



I地区B区2号墳土層説明②

1　暗褐色土　A軽石を多量に含み、柔らかい。
2　黄色土　凝灰岩の風化したものを含み、柔らかい。
3　黒褐色土　粒子は細かく、石を多く含む。
4　褐色土　石を多く含む。
5　粘土
6　黄色土　凝灰岩の小石を多く含み、固く締まっている。
7　褐色土　小石を多く含む。
8　黒色土　黄色土ブロックを含み、粒子は細かい。
9　黒色土　黄色土粒を含む。
10　暗褐色土　小軽石・黄色土粒を含む。
11　暗褐色土　粒子は細かい。
12　褐色土　小軽石を含む。
13　褐色土　黒色土が大きくブロック状に混入。
14　褐色土　粒子は細かい。
15　褐色土　やや暗く、ローム粒を含む。
16　褐色土とロームの混合層
17　黄色土　ローム粒を多く含む。
18　褐色土　A軽石を少量含む。
19　暗褐色土　粒子は細かい。

第294図　I地区B区2号古墳遺構図（2）

I地区B区3号古墳（第295～297図、第83表、図版64）

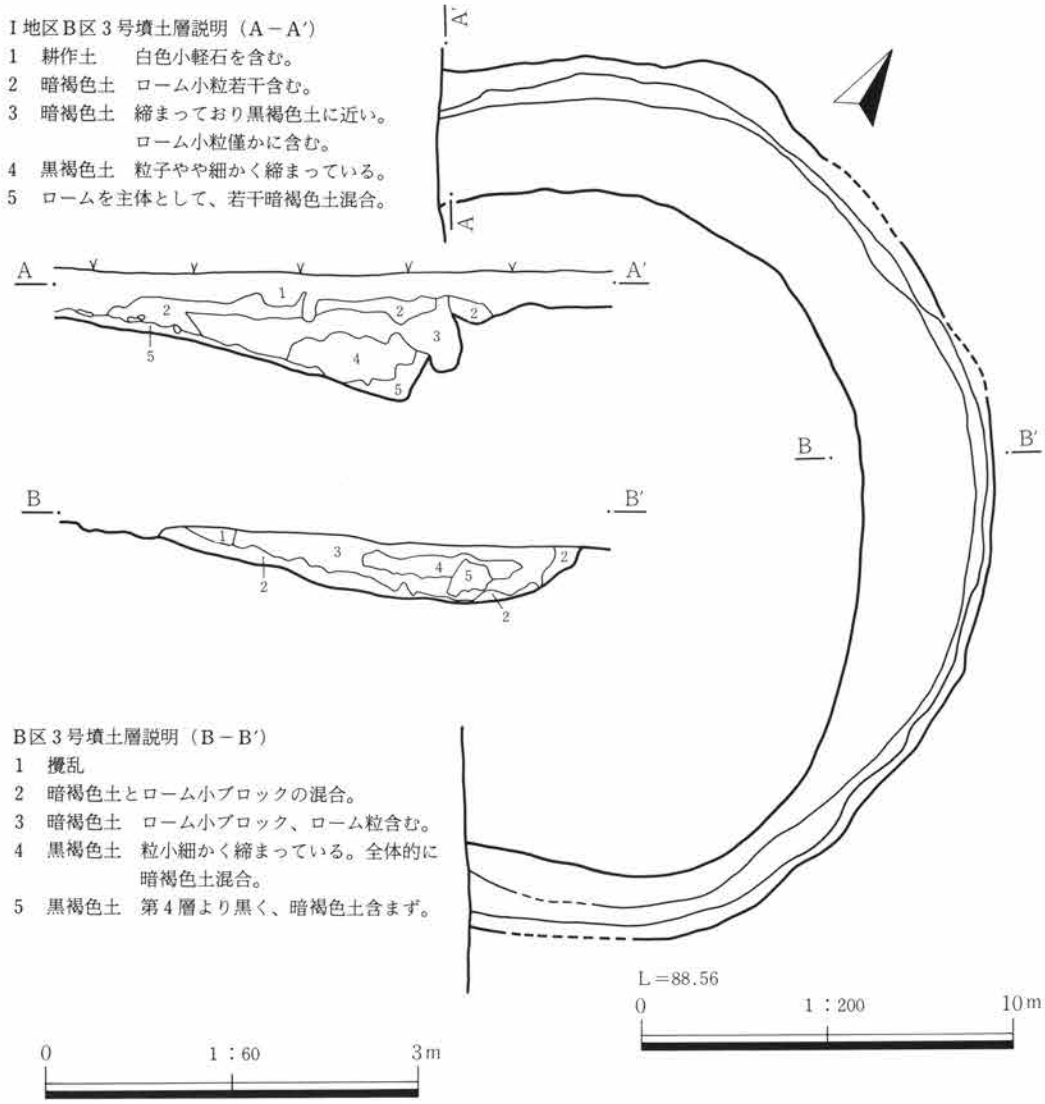
本古墳の墳丘は、既に消滅していた。多くの住居跡と重複しており、このうち本古墳より古い住居跡は、B区6号住居跡・10a号住居跡・10b号住居跡・12a号住居跡・12b号住居跡・17号住居跡である。これらは墳丘部から周堀部にわたっている。本古墳より新しい住居跡は、7号住居跡・9c号住居跡・11号住居跡・15a号住居跡の4軒である。本古墳より新しい住居跡は、全て平安時代で周堀上か周堀に一部かかって造られており、墳丘部には存在しない。このことは、平安時代には墳丘が存在していたことを示している。

周堀は、調査区において半円形を示している。墳丘部の直径は、約18mとなる。周堀の幅及び掘り方は一様ではない。北側部分においては、幅約3.5mと広く、掘り方は墳丘部側では緩やかな傾斜となっているのに対して、外側は急傾斜に掘り込まれている。又、南側部分においては、幅約

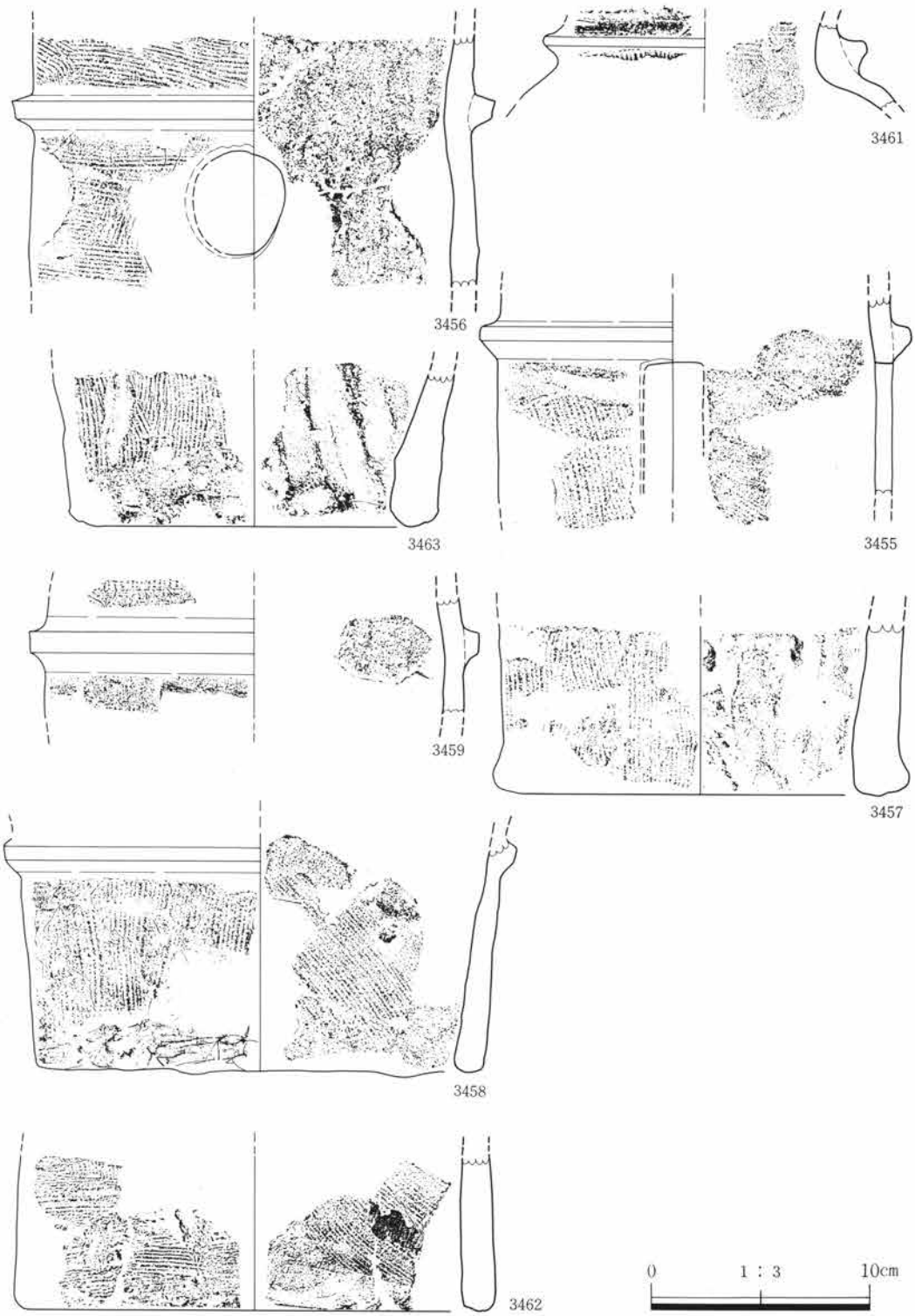
1.5mと狭く、外側がやや急傾斜に掘り込まれているものの、北側とは異なり皿状を呈する。なお、周堀の深さは、北側部分で60cm、南側部分で40cmで、南側がやや浅くなっている。

周堀の墳丘寄りには、径５cm～20cm位の河原石が多く存在した。特に北側半分に多く、墳丘側に帯状に集中している部分もある。これらは葺石と考えられるが、周堀掘り方との間に周堀埋没土を挟んでおり、築造当時の状態を止どめるものではない。

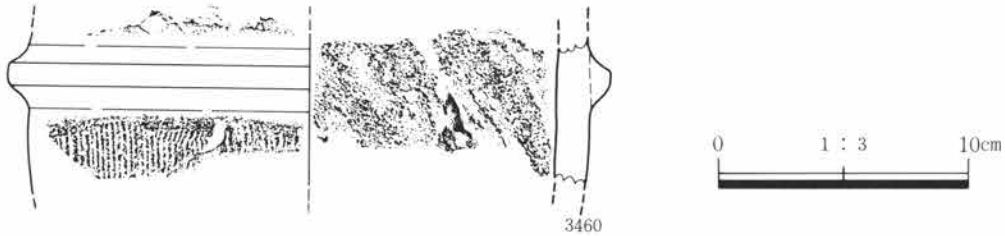
遺物は、全て周堀内より出土している。全て円筒埴輪の破片である。本古墳の築造時期は、埴輪の様相から、古墳時代後期初頭と考えられる。　（飯塚）



第295図　Ⅰ地区Ｂ区３号古墳遺構図



第296図　Ⅰ地区Ｂ区３号古墳遺物図（１）



第297図　Ⅰ地区Ｂ区３号古墳遺物図（２）

第 83 表　Ⅰ地区Ｂ区３号古墳遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
3455	埴輪 円筒	体部径:[181㎜]体部の一部のみ残	砂粒を多く含む。胎土は粒子が粗く脆い。酸化。焼成良好。橙。	方形透孔。凸帯が比較的高く、しっかりしている。外面:縦刷毛調整後、凹帯貼り付け。	周堀内。
3456	埴輪 円筒	体部径:[200㎜]体部の一部のみ残。	砂粒を多く含む。胎土は粒子が細かいが脆い。酸化。焼成良好。橙。	凸帯が比較的高くしっかりしている。外面:横刷毛調整後、凸帯貼り付け。内面:なで。	周堀内。
3457	埴輪 円筒	底径:[190㎜]最下部の一部のみ残	砂粒を多く含む。焼成良好であるが比較的脆い。酸化。橙。	外面:縦刷毛目。内面:なで。	周堀内。
3458	埴輪 円筒	最下部径:[204㎜]最下段の一部のみ残	砂粒を多く含む。酸化。焼成良好。外面は淡橙。内面は橙。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼り付け。内面:斜め刷毛目。	周堀内。
3459	埴輪 円筒	径:[191㎜]破片	砂粒を多く含む。酸化。焼成良好。橙。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼り付け。内面:なで。	周堀内。
3460	埴輪 円筒	径:[224㎜]破片	砂粒を多く含む。酸化。焼成良好。鈍い橙。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼り付け。内面:なで。	周堀内。
3461	埴輪 朝顔円筒	頸部のみ⅔残	砂粒を多く含む。酸化。焼成良好。鈍い橙。	内外面:なで。	周堀内。
3462	埴輪 円筒	最下部の一部	砂粒を多く含む。	外面:横刷毛目。内面:なで後、一部に横刷毛目。	周堀内。
3463	埴輪 円筒	最下部の一部底径:[169㎜]	砂粒を多く含む。酸化。焼成良好。鈍い橙。	外面:縦刷毛目。内面:なで	周堀内。

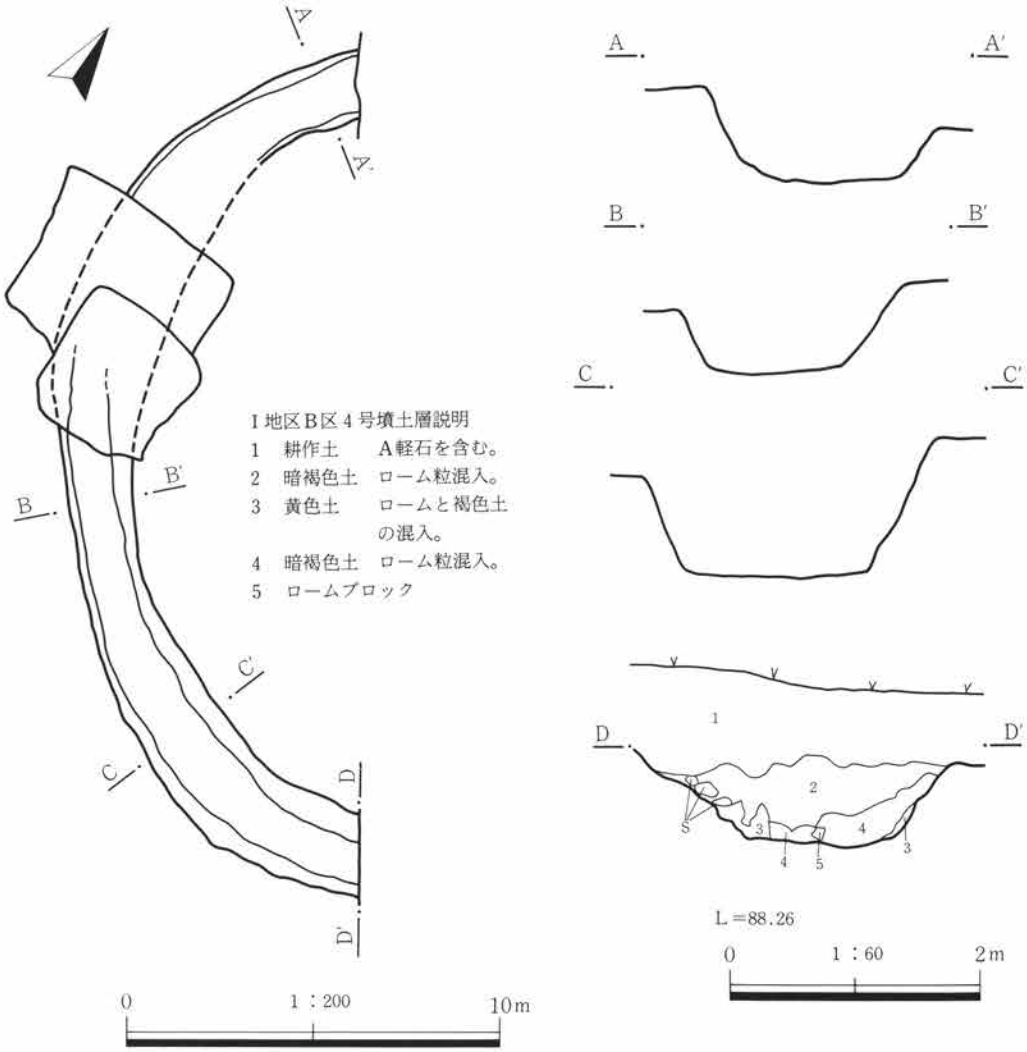
Ⅰ地区Ｂ区４号古墳（第298図、図版58）

本古墳の墳丘は、既に消滅していた。Ｂ区22ａ号住居跡・22ｂ号住居跡・36号住居跡・46号住居跡と重複関係にあるが、どの住居跡よりも本古墳の方が古い。

周堀の半分以下が確認されただけであるが、墳丘の直径を推定すると、約10mとなる。周堀の幅は、1.4m～2.6m、深さはローム面から75cm前後である。掘り方は、逆台形を呈する。

周堀墳丘側傾斜面付近に、直径５cm～30cmの河原石が密集して見られる。河原石と周堀掘り方との間には、周堀埋没土を挟んでおり、葺石が周堀内に落ち込んだ状況を示しているものと考えられる。

出土遺物がなく、築造時期は不明である。　（飯塚）



第298図　Ⅰ地区Ｂ区４号古墳遺構図

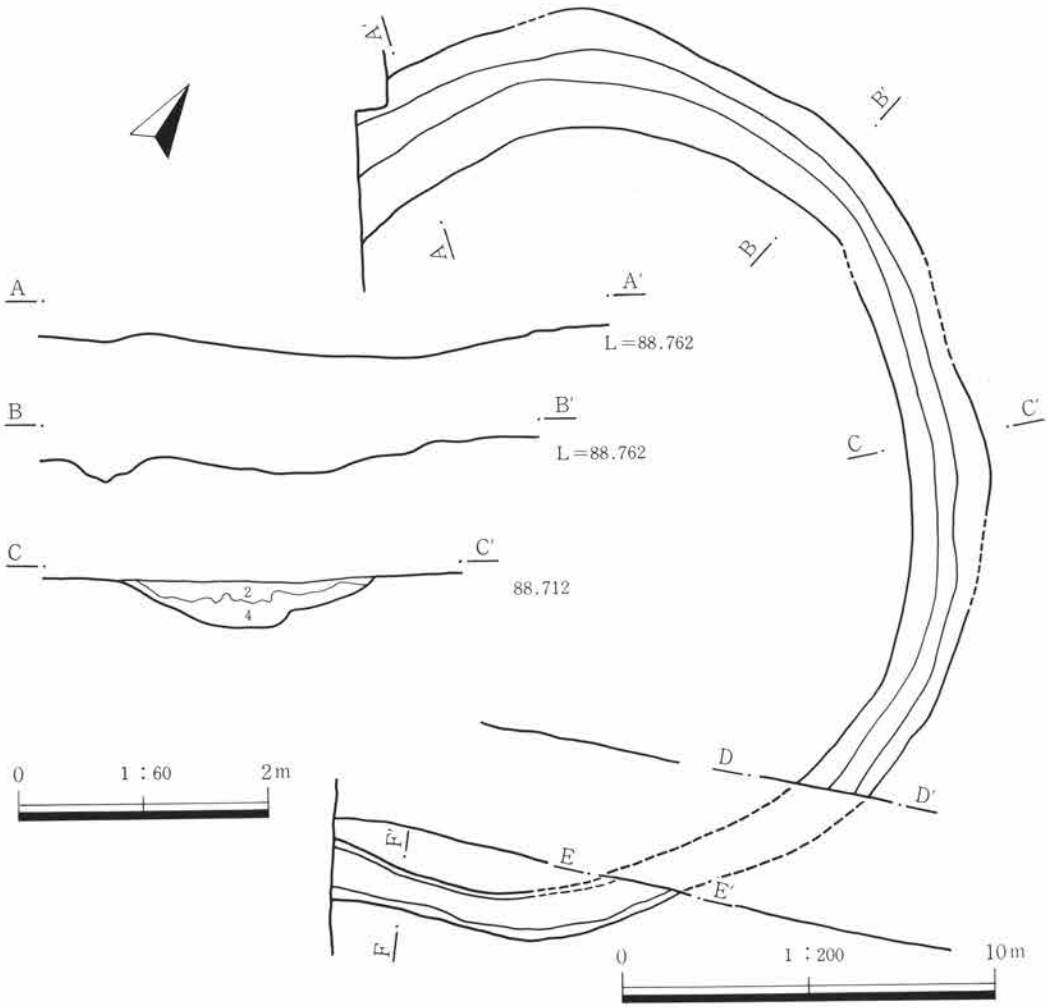
Ⅰ地区Ｃ区１号古墳（第299～302図、第84表、図版59）

本古墳は、墳丘が既に消滅していた。Ｃ区３号住居跡・６号住居跡・８ｂ号住居跡及び１号溝・２号溝が、本古墳の周堀埋没後に周堀上に造られている。西南に未調査部分を残しているため、墳形については不明であるが、周堀の形態からすると直径18m前後の円墳となる可能性が強い。

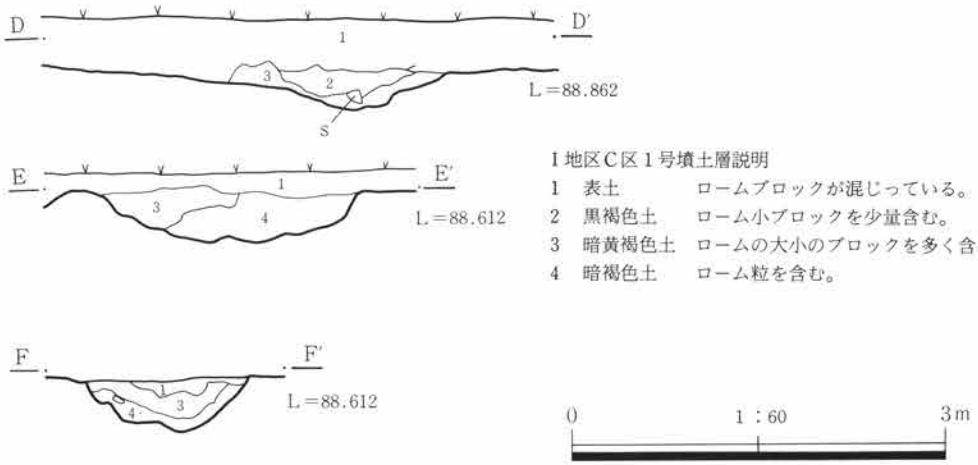
周堀は、やや不整の円形を呈している。周堀幅については、最も広い部分で３m、最も狭い部分で１mと開きがあるものの、深さについては40cm前後とほぼ一定している。周堀掘り方は、やや凹凸が多い。

出土遺物には、土器と埴輪がある。いずれも周堀内からの出土である。土器は、未調査道路部分の南側から、埴輪の大部分は、周堀北側部分より発見された。

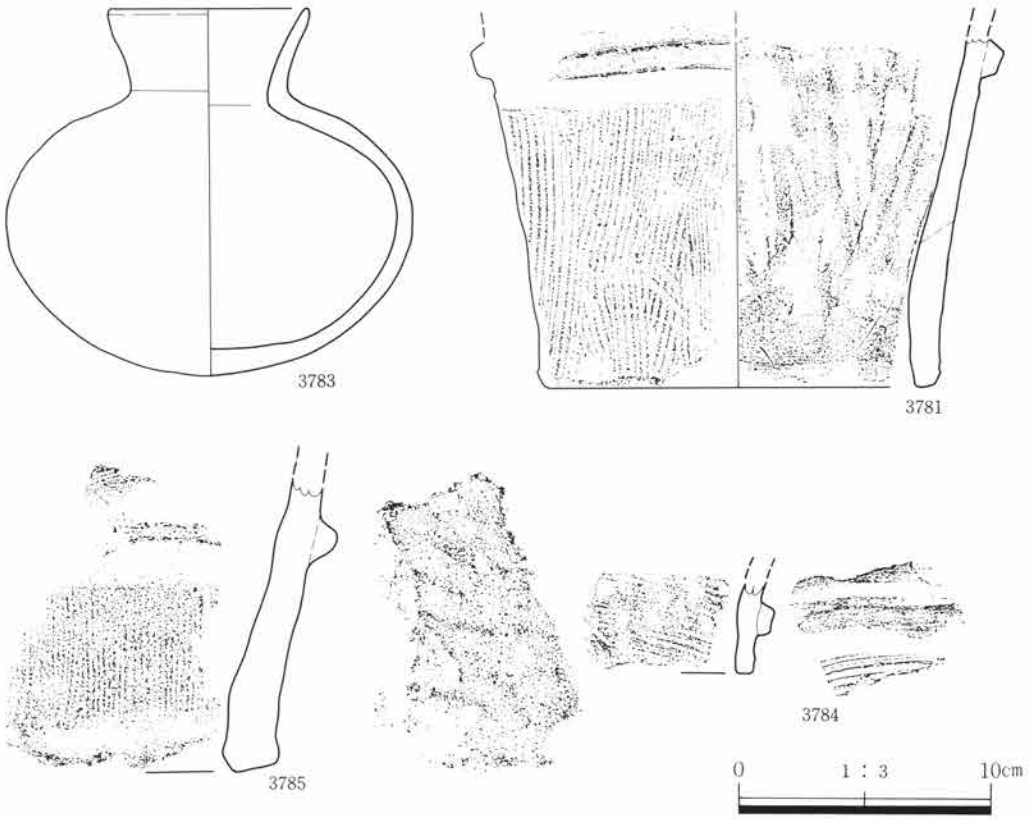
本古墳の築造時期は、出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。　（飯塚）



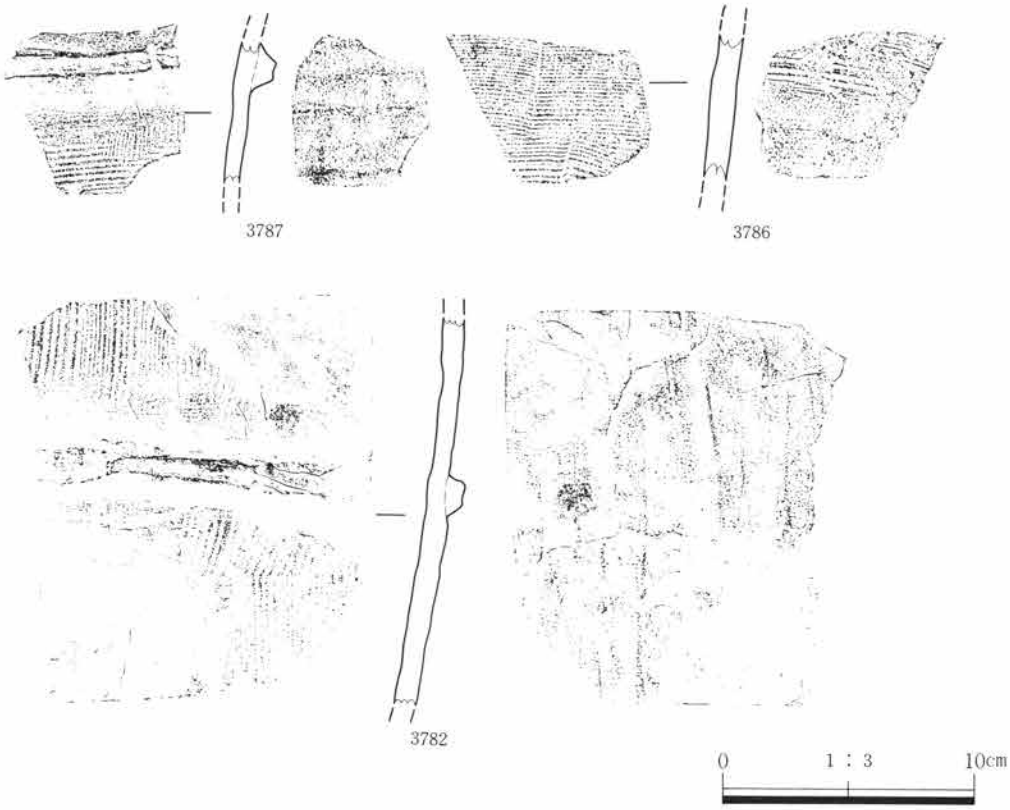
第299図　Ⅰ地区Ｃ区１号古墳遺構図（１）



第300図　I地区C区1号古墳遺構図（2）



第301図　I地区C区1号古墳遺物図（1）



第302図　Ⅰ地区Ｃ区１号古墳遺物図（２）

第 84 表　Ⅰ地区Ｃ区１号古墳遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
3781	埴輪 円筒	底径:[160㎜]最下段½残	小砂粒を含む。酸化。焼成良好で硬質。鈍い橙。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼り付け。内面:なで。最下部約３cm横箆削り。輪積痕あり。	周堀内。
3782	埴輪 円筒	破片	小石・砂粒を少量含む。酸化。焼成普通。褐。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼り付け。内面:なで。	周堀内。
3783	壺 土師器	器高:(145㎜)口径:[80㎜]底径:—最大径:[161㎜]全体の⅖残	砂粒を少量含む。酸化。やや軟質。橙。	最大径は体部中央。丸底。外面:箆磨き。内面:なで。	周堀内。
3784	埴輪 円筒	破片	砂粒を僅かに含む。酸化。焼成普通。鈍い橙。	凸帯が比較的しっかりしている。外面:横刷毛調整後、凸帯貼り付け。	周堀内。

3785	埴輪 円筒	破片	径2～3㎜の小石を多量に含む。酸化。焼成良好であるが、比較的軟質。橙。	凸帯はやや底位置。外面：縦刷毛調整後、凸帯貼り付け。内面：なで。	周堀内。
3786	埴輪 円筒	破片	小砂粒を僅かに含む。酸化。焼成普通でやや硬質。橙。	外面：横刷毛目。内面：なで後、一部に横刷毛目。	周堀内。
3787	埴輪 円筒	破片	小砂粒を少量含む。酸化。焼成普通でやや硬質。橙。	外面：縦刷毛調整後、最終的に横刷毛目。刷毛調整後、凸帯貼り付け。内面：なで。	周堀内。

Ⅰ地区C区2号古墳（第303図、図版59）

本古墳は、墳丘が既に消滅していた。C区3号方形周溝墓・5号方形周溝墓・57号土坑・58号土坑よりも新しく、1号溝よりも古い。

調査区内において、周堀は半円形を呈しており、墳丘部の直径を求めると、27m～28mとなる。周堀幅は、2m～4mとやや差があり、南側が広くなっている。深さは、北側においてはローム上面より70cmであるが、南側においては40cmと浅くなっており、底面も平坦となっている。

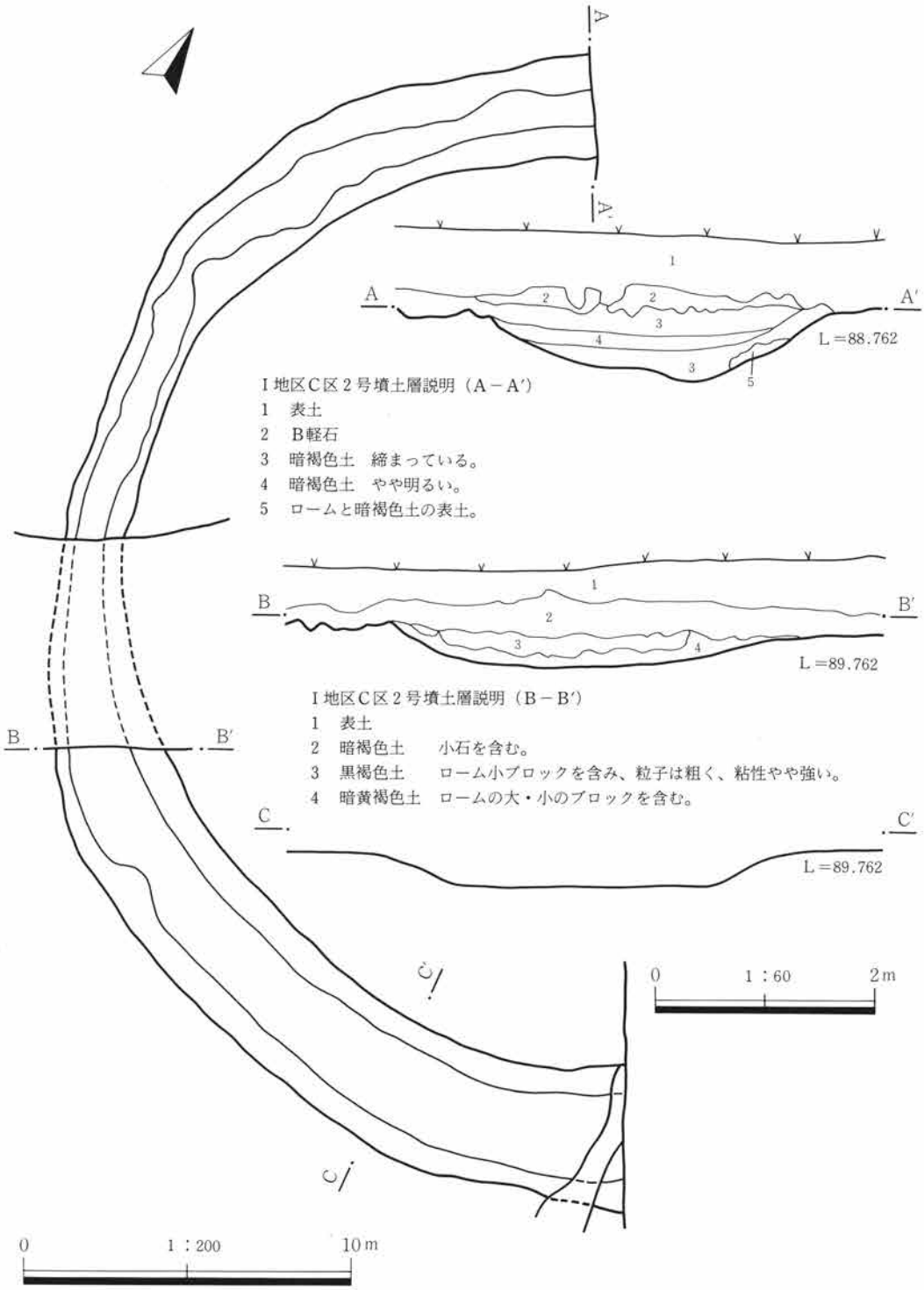
出土遺物は皆無であり、築造時期は不明である。（飯塚）

Ⅰ地区C区3号古墳（第304・305図、第85表）

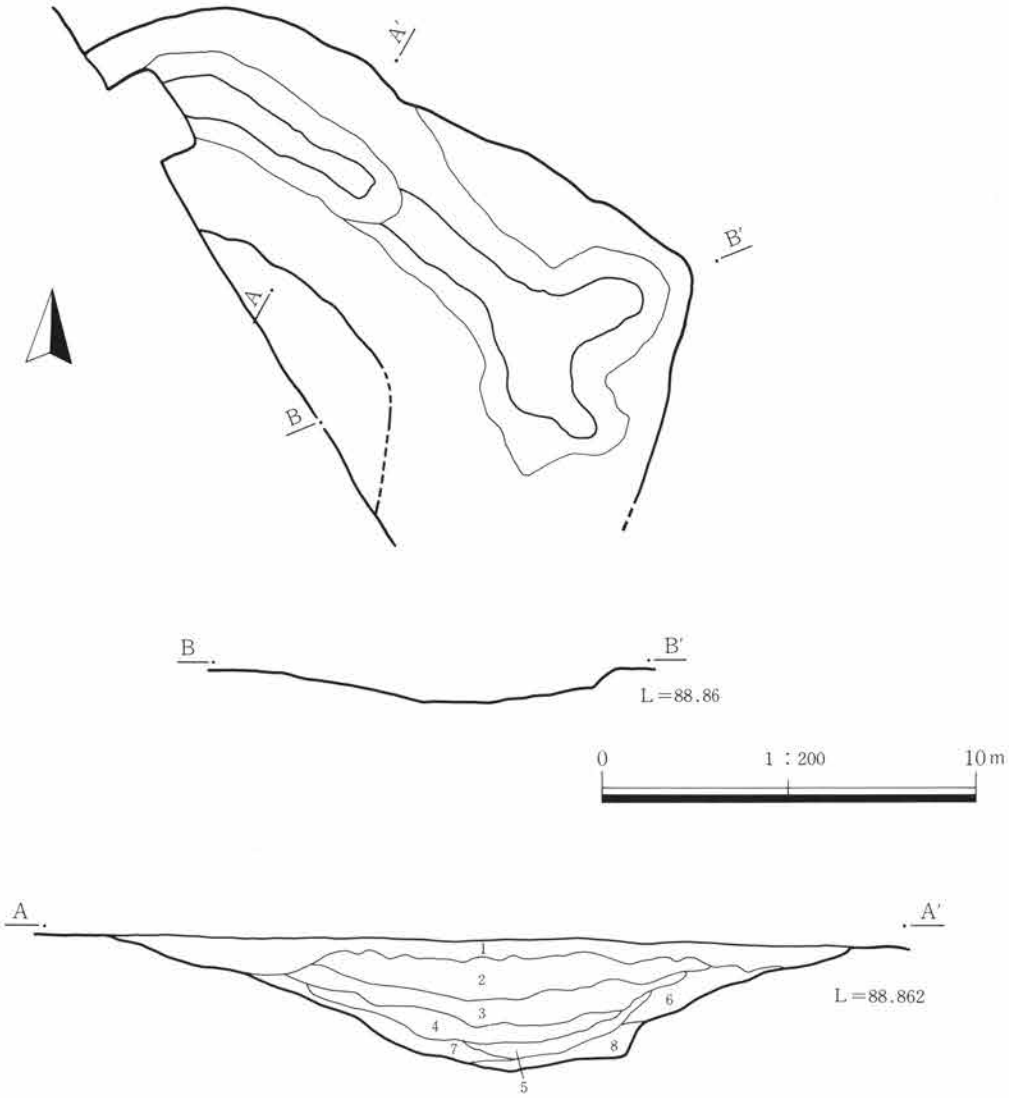
本古墳の墳丘は既に消滅しており、周堀の一部が確認された。重複関係にあるC区10号住居跡・13号住居跡よりも新しく、1号溝・2号溝よりも古い。

周堀の幅は5m～6mであり、緩やかな傾斜を持って掘り込まれている。なお、中央に深く掘り込まれている部分があるが、この部分は、途中で途切れている。又、浅く掘り込まれている部分も、南側で不明瞭となる。周堀の深さは、北側の浅い部分でローム面より20cm、最も深いやや南側で1mとなる。

規模及び墳形については、不明である。出土遺物として、円筒埴輪と形象埴輪の破片があり、周堀内より出土している。本古墳の築造時期は、古墳時代後期と考えられる。（飯塚）



第303図　Ⅰ地区Ｃ区２号古墳遺構図

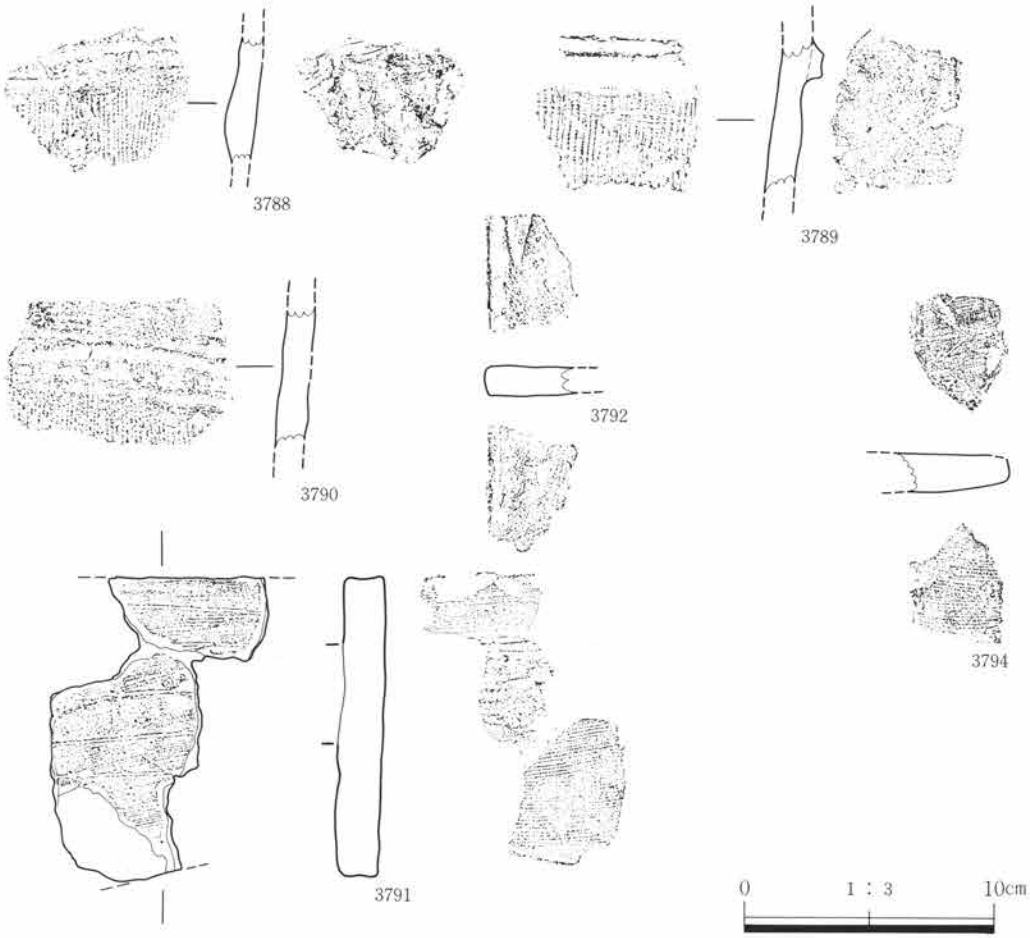


I地区C区3号墳土層説明

1	黒褐色砂質土	B軽石の二次堆積層
2	黒褐色土	ローム小ブロック、小石を少量含む。
3	褐色土	ローム小ブロック、小礫を若干含む。
4	明褐色土	ロームブロックをやや多く含み、小石を若干含む。
5	暗褐色土	ローム小ブロックを少量含む。
6	暗黄褐色土	ロームの大小のブロックを多く含む。
7	暗黄褐色土	ロームを多く含む。
8	暗褐色土	ローム小ブロックをやや多く含む。

0　1：60　2m

第304図　I地区C区3号古墳遺構図



第305図　Ⅰ地区Ｃ区３号古墳遺物図

第 85 表　Ⅰ地区Ｃ区３号古墳遺物観察表

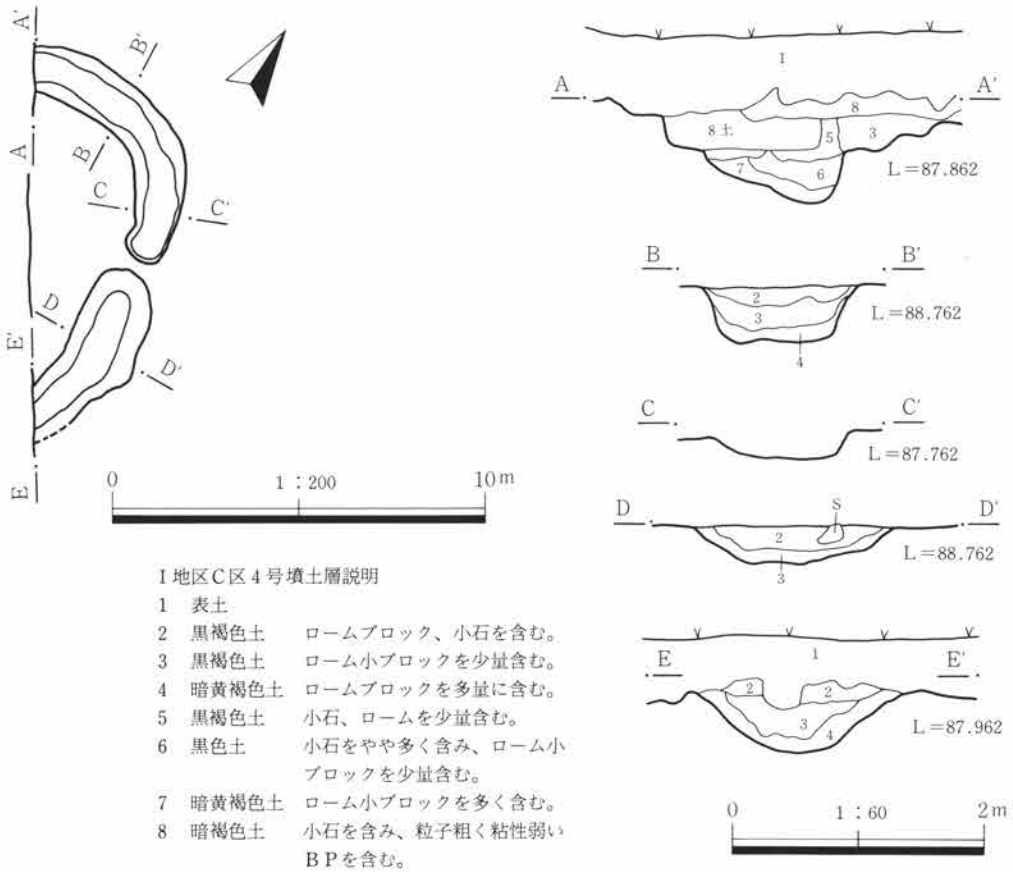
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
3788	埴輪 円筒	破片	小石・小砂粒を含む。酸化。焼成良好。橙。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼り付け。 内面:なで。	周堀内。
3789	埴輪 円筒	破片	小石・砂粒を含む。酸化。焼成良好で硬質。鈍い橙。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼り付け。 内面:なで。	周堀内。
3790	埴輪 円筒	破片	小砂粒を含む。酸化。焼成不良。鈍い橙。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼り付け。 内面:なで。	周堀内。

3791	埴　輪（形象）	破片	小砂粒を含む。酸化。焼成普通であるが硬質。橙。	表面は、刷毛調整後なで。最後に沈線文。内面：刷毛目。	周堀内。
3792	埴　輪（形象）	破片	小石・砂粒を含む。酸化。焼成普通。橙。	内外面：刷毛調整後、端部はなで。	周堀内。
3794	埴　輪（形象）	破片	径３～５㎜の小石・砂粒を含む。焼成普通。橙。	外面：刷毛調整後、沈線文様。内面：刷毛調整。	周堀内。

Ⅰ地区Ｃ区４号古墳（第306図）

本古墳の墳丘は、既に消滅していた。確認されたのは周堀の一部である。周堀は、幅1.3m～1.7mで、中央部に約30cmのブリッジを持つ。深さはローム面から20cm～40cmで、掘り方の形状は一定していない。

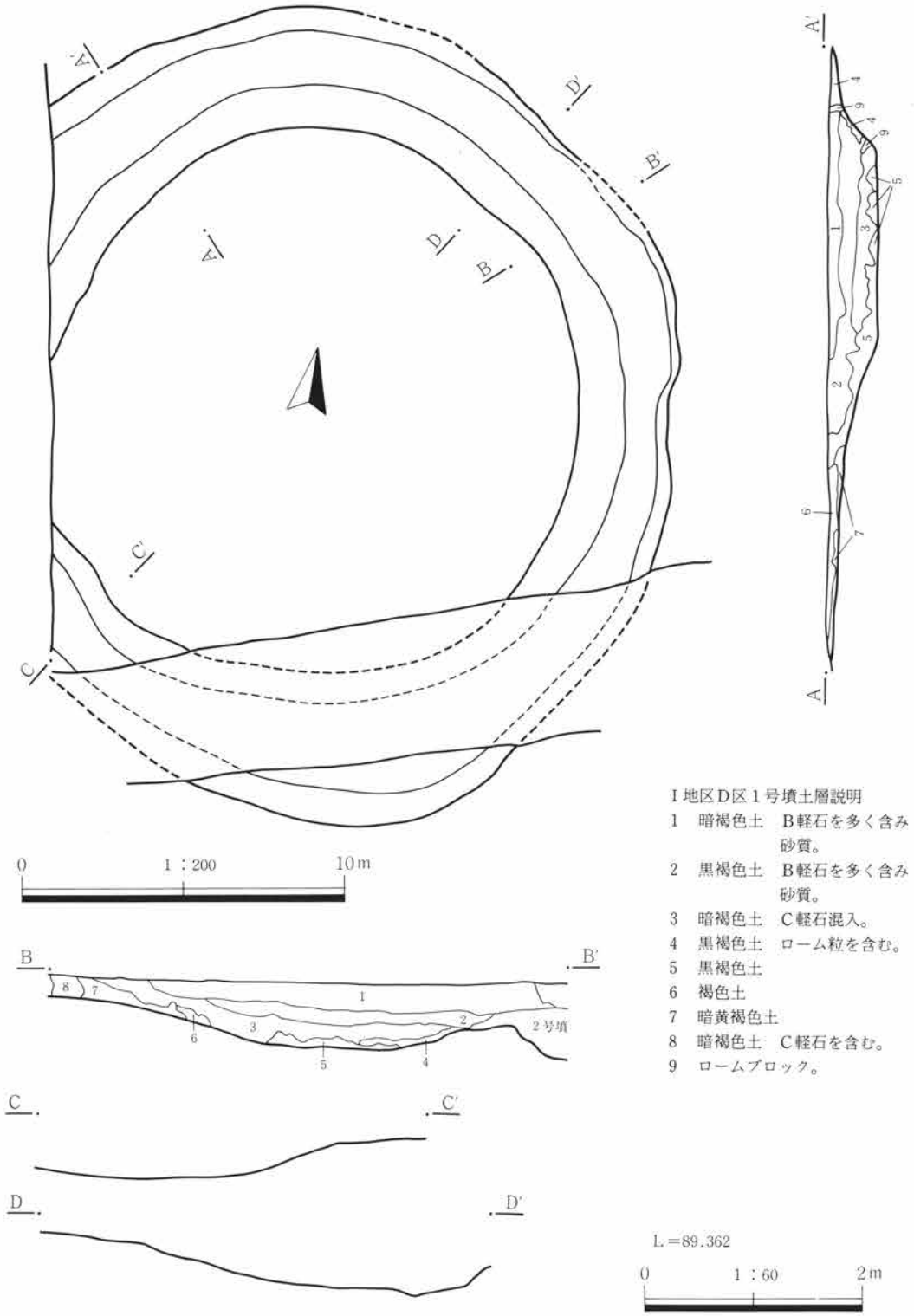
出土遺物が皆無のため、時期は不明である。　（飯塚）



Ⅰ地区Ｃ区４号墳土層説明

1	表土	
2	黒褐色土	ロームブロック、小石を含む。
3	黒褐色土	ローム小ブロックを少量含む。
4	暗黄褐色土	ロームブロックを多量に含む。
5	黒褐色土	小石、ロームを少量含む。
6	黒色土	小石をやや多く含み、ローム小ブロックを少量含む。
7	暗黄褐色土	ローム小ブロックを多く含む。
8	暗褐色土	小石を含み、粒子粗く粘性弱いＢＰを含む。

第306図　Ⅰ地区Ｃ区４号古墳遺構図



Ⅰ地区Ｄ区１号墳土層説明

1　暗褐色土　Ｂ軽石を多く含み砂質。
2　黒褐色土　Ｂ軽石を多く含み砂質。
3　暗褐色土　Ｃ軽石混入。
4　黒褐色土　ローム粒を含む。
5　黒褐色土
6　褐色土
7　暗黄褐色土
8　暗褐色土　Ｃ軽石を含む。
9　ロームブロック。

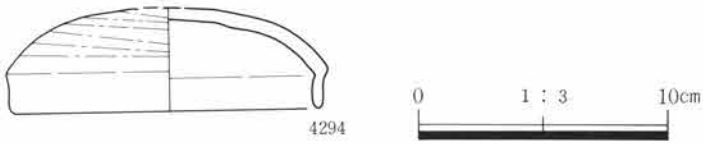
第307図　Ⅰ地区Ｄ区１号古墳遺構図

Ⅰ地区Ｄ区１号古墳（第307・308図、第86表）

本古墳の墳丘は既に消滅していた。Ｄ区２号古墳の周堀と重複している部分があるが、本古墳の方が新しい。又、１号館跡の堀によって、墳丘と周堀の一部が切られている。更に墳丘消滅後に、24号土坑・34号土坑・35号土坑・44号土坑が造られている。

規模は、墳丘部の直径16m～17m、周堀の幅３m～４m、周堀の深さ約35cmである。周堀は、緩やかな傾斜を持って掘り込まれている部分が多い。墳形は円墳と考えられる。

出土遺物として、須恵器蓋（4294）があり、周堀内から発見されている。なお、埴輪は皆無である。本古墳の時期は、古墳時代後期と考えられる。（飯塚）



第308図　Ⅰ地区Ｄ区１号古墳遺物図

第 86 表　Ⅰ地区Ｄ区１号古墳遺物観察表

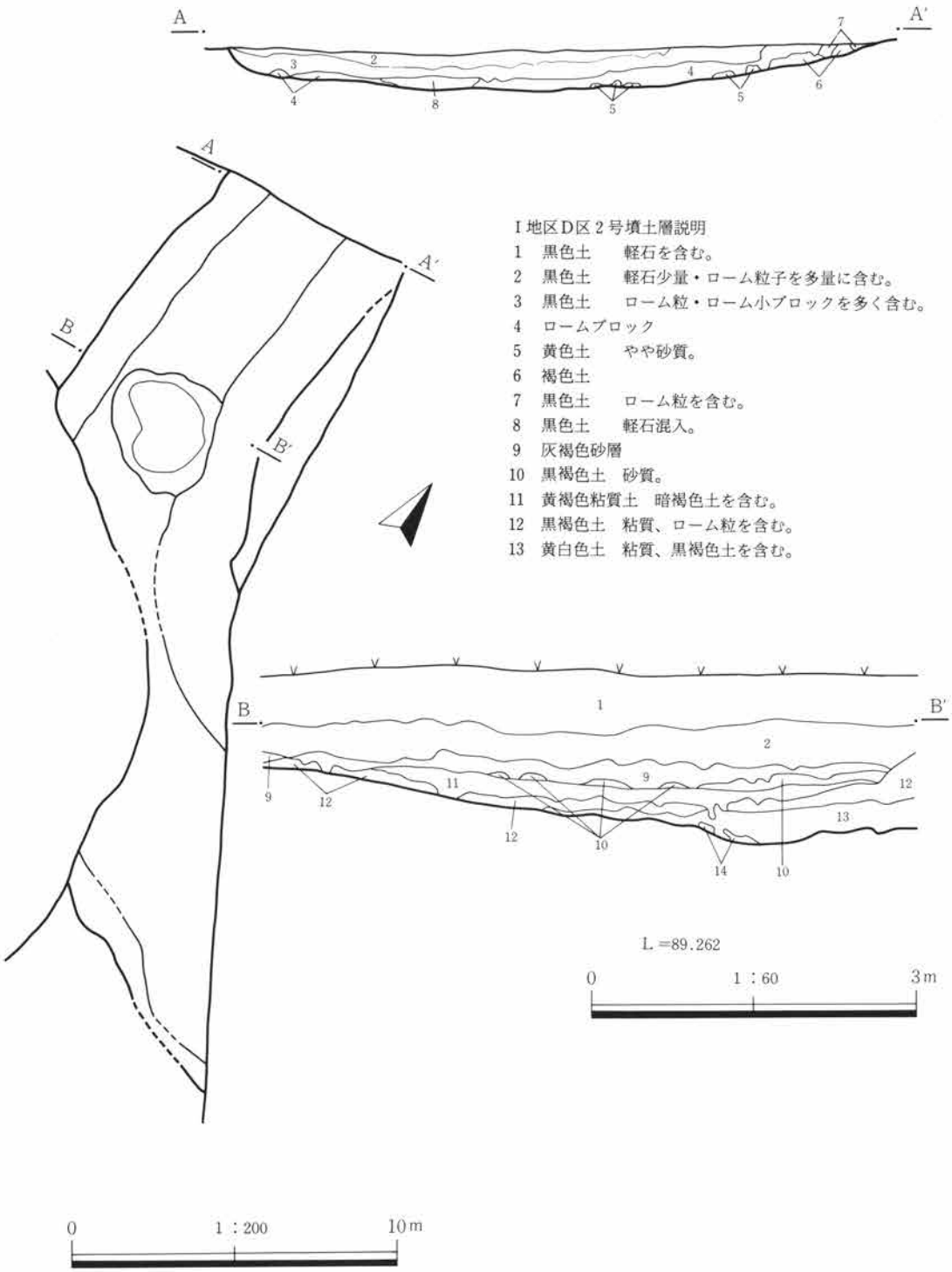
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4294	蓋 須恵器	器高:41mm 口径:128mm 底径:一 最大径:一 全体の⅔残	小砂粒を僅かに含む。還元。硬質。灰白。内面に自然釉付着。	内外面:轆轤による成形後、外面:篦削り。	周堀内。

Ⅰ地区Ｄ区２号古墳（観音山古墳）（第309・310図、第87表）

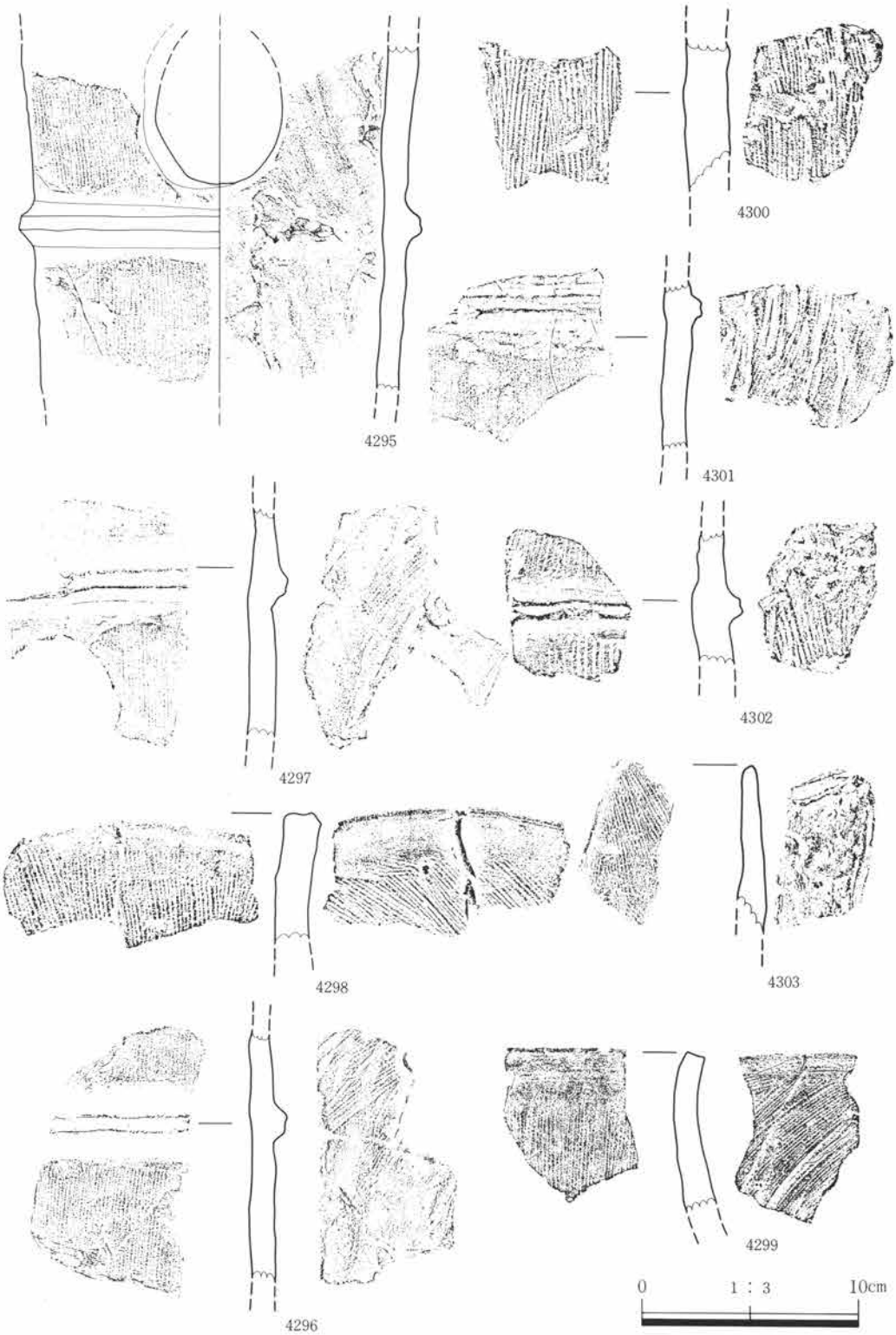
この古墳は、群馬郡佐野村第33号墳として上毛古墳総覧に登載されている。地元では、観音山と呼ばれており、比較的高い墳丘を持っていたという。しかし、第２次世界大戦後に削平された。上毛古墳総覧によれば、墳形は円墳で、昭和４年に発掘とある。金環・馬具が出土したとされているが、所在は不明である。

今回の発掘調査においては、周堀の一部が確認された。Ｄ区１号古墳の周堀と重複しており、本古墳の方が古い。周堀は、幅６m・深さ30cm～40cmで、円弧を描くが、やや不整形である。なお、掘り方は皿状を呈する。周堀内より、埴輪片が出土している。形象埴輪と考えられる破片が１片（4303）あるが、他は全て円筒埴輪である。

本古墳の築造時期は、埴輪の様相から古墳時代後期と考えられる。（飯塚）



第309図　Ⅰ地区Ｄ区２号古墳遺構図



第310図　Ⅰ地区Ｄ区２号古墳遺物図

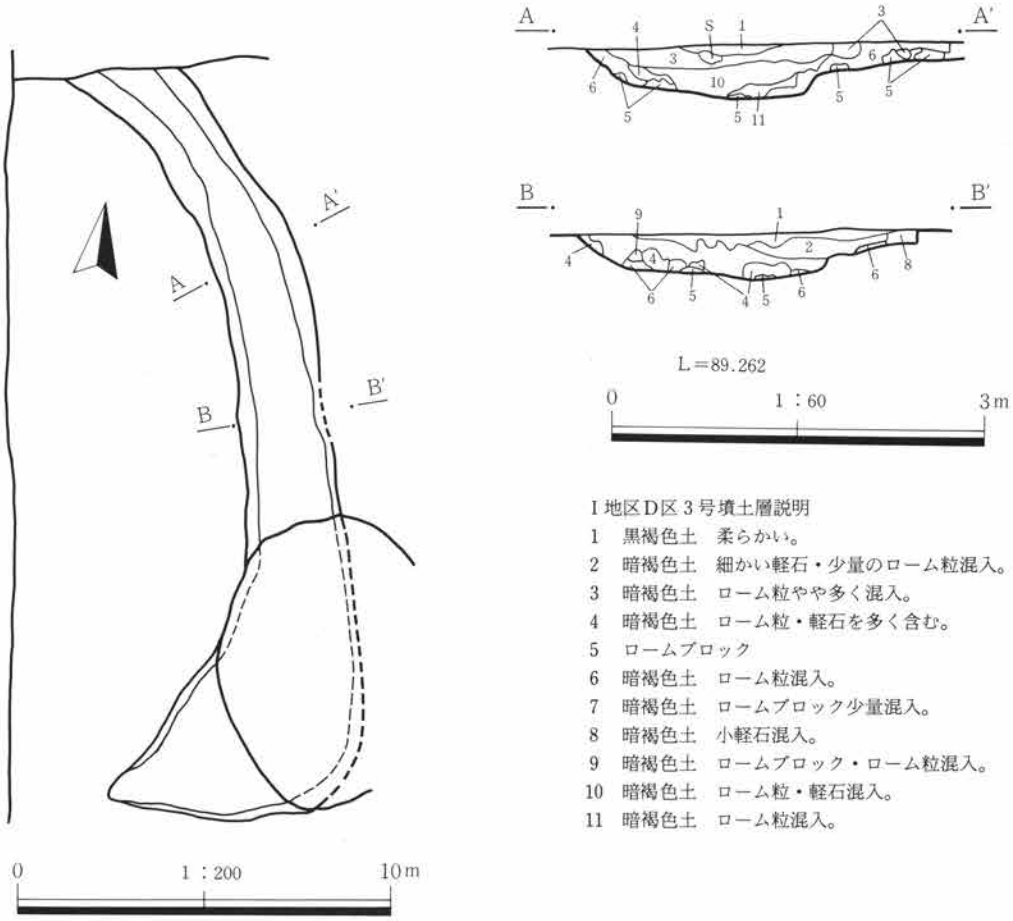
第 87 表　Ⅰ地区Ｄ区２号古墳遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4295	埴輪 円筒	体部径:[175㎜]破片	胎土は粒子が細かく、砂粒を含む。酸化。焼成普通。褐。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼りつけ。円窓くり抜き。内面:なで	周堀内。
4296	埴輪 円筒	破片	胎土は粒子が細かく、砂粒を含む。酸化。焼成普通。褐。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼りつけ。内面:指なで後、一部刷毛なで	周堀内。
4297	埴輪 円筒	破片	胎土は粒子が細かく、砂粒を含む。酸化。焼成普通。褐。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼り付け。内面:指なで後、一部刷毛なで。	周堀内。
4298	埴輪 円筒	破片	砂粒を含む。酸化。焼成良好。赤褐。	器肉やや厚い。外面:縦刷毛目。内面:斜め刷毛調整後、口唇部はなで。	周堀内。
4299	埴輪 円筒	破片	胎土は粒子が細かく、小砂粒を含む。酸化。焼成普通。褐。	外面:縦刷毛目。内面:斜め刷毛調整後、口唇部はなで。	周堀内。
4300	埴輪 円筒	破片	小石・砂粒を含む。酸化。焼成やや不良。赤褐。	器肉やや厚い。外面:縦刷毛目。内面:斜め刷毛調整後、口唇部はなで。	周堀内。
4301	埴輪 円筒	破片	小石・砂粒を含む。酸化。焼成普通。赤褐。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼り付け。内面:篦による調整。	周堀内。
4302	埴輪 円筒	破片	小石・砂粒を含む。酸化。焼成普通。赤褐。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼り付け。内面:刷毛によるなで。	周堀内。
4303	埴輪 (形象)	破片	砂粒を含む。酸化。焼成良好。橙。	外面:縦刷毛目。内面:なで。	周堀内。

Ⅰ地区Ｄ区３号古墳（第311図）

本古墳は一部が発見されたが、墳丘は既に消滅していた。Ｃ区１号館跡の堀に周堀及び墳丘の一部を切られている。古墳は、館跡の堀の内側に存在しており、Ｄ区２号住居跡・30号土坑・45号土坑と重複している。このうち、本古墳より古いのは、１号住居跡のみで、土坑は本古墳よりも新しい。

古墳の規模は不明であるが、円弧から墳丘部の直径を推定すると、13m前後となる。周堀は全周せず、南側がブリッジとなる。周堀の規模は、幅が２m～2.5mで、深さは約30cmである。掘り方は、全体的に緩やかな皿状を呈する。出土遺物は皆無である。時期不明。　（飯塚）



I地区D区3号墳土層説明
1　黒褐色土　柔らかい。
2　暗褐色土　細かい軽石・少量のローム粒混入。
3　暗褐色土　ローム粒やや多く混入。
4　暗褐色土　ローム粒・軽石を多く含む。
5　ロームブロック
6　暗褐色土　ローム粒混入。
7　暗褐色土　ロームブロック少量混入。
8　暗褐色土　小軽石混入。
9　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒混入。
10　暗褐色土　ローム粒・軽石混入。
11　暗褐色土　ローム粒混入。

第311図　I地区D区3号古墳遺構図

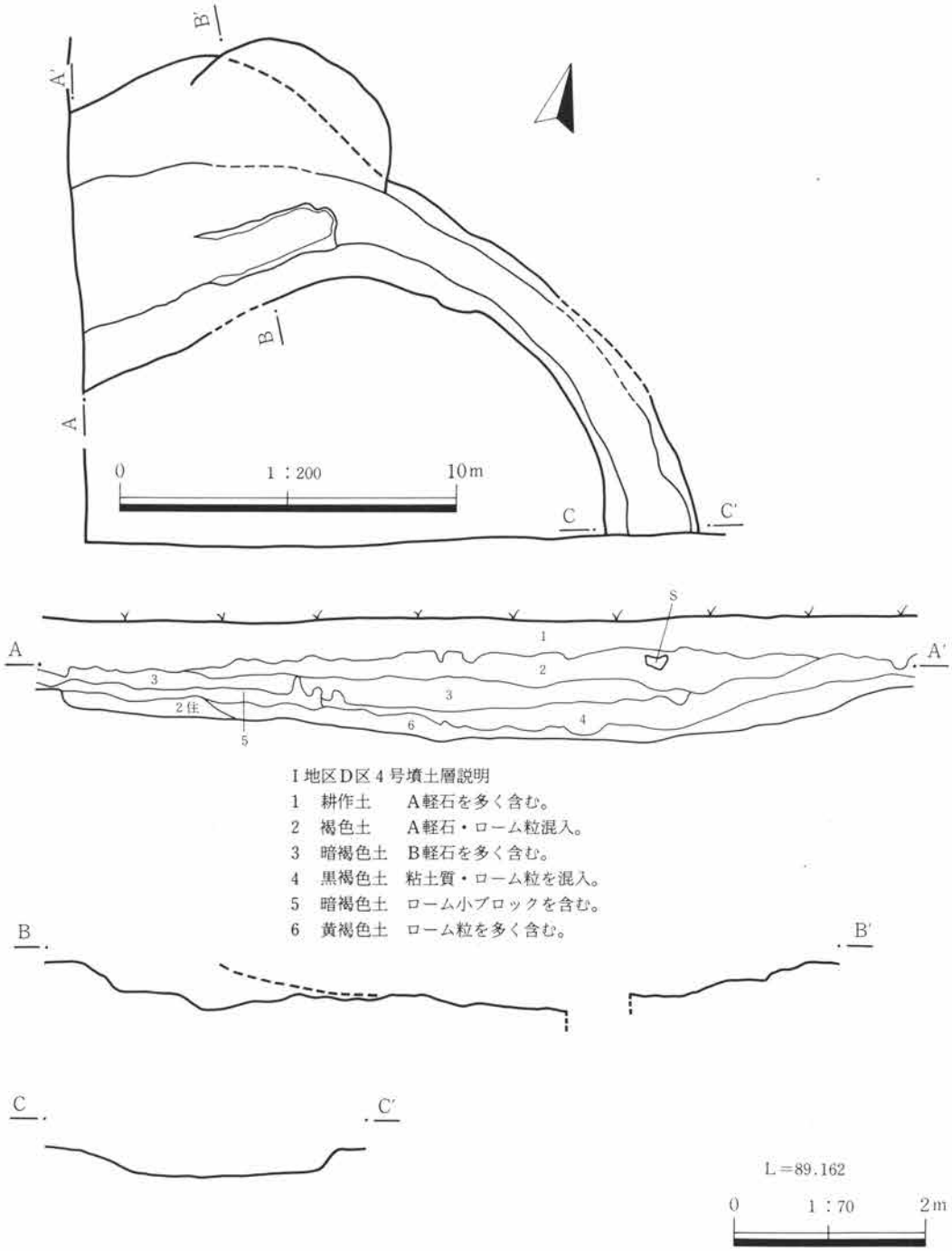
I地区D区4号古墳（第312図）

本古墳は、墳丘及び周堀の一部が確認されたが、墳丘は既に消滅していた。他の遺構との関係では、D区2号住居跡・3号住居跡・39号土坑・42号土坑・55号土坑・56号土坑・66号土坑・73号土坑・74号土坑・75号土坑・9号井戸と重複しているが、このうち本古墳より古いのは、2号住居跡と3号住居跡のみで、他の遺構は全て本古墳よりも新しい。

調査区内における墳丘の形態は、不整円形ないしは不整隅丸方形を呈するが、墳形は不明である。周堀は、幅2m～2.5mの部分が多いが、北西側では約7.5mと広くなっている。周堀の深さは、ローム層上面より約30cmと浅いが、北西部の幅の広くなった部分では、約45cmとやや深くなっている。なお、周堀内には4m×1.5mの長方形を呈する土坑状の掘り込みがある。この土坑状の掘り込みは、溝底面より10cm～15cmと浅いものであるが、埋没土は周堀埋没土と同一であり、本古

墳の施設と考えられる。

本古墳からの出土遺物は皆無であり、時期は不明。　（飯塚）

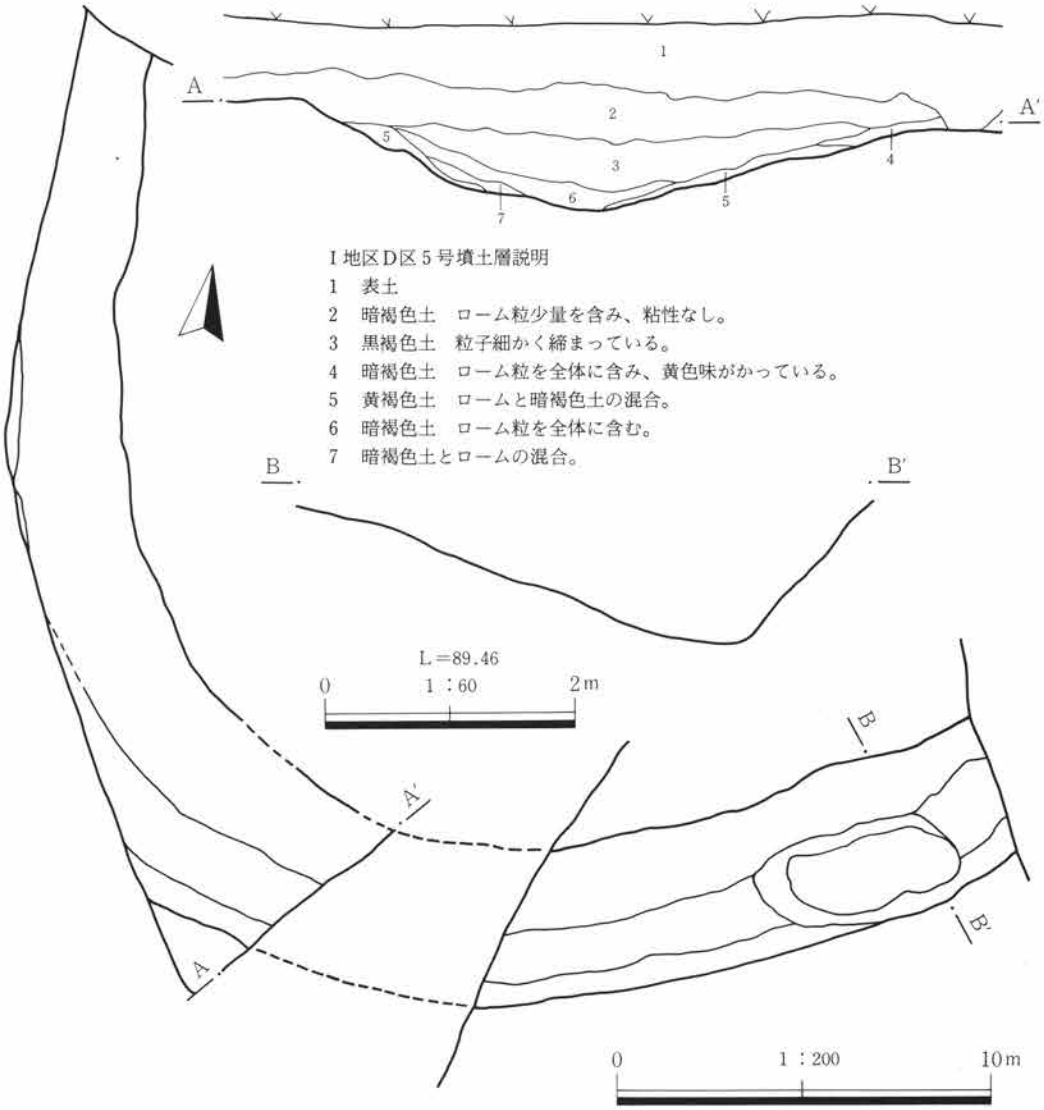


第312図　Ⅰ地区Ｄ区４号古墳遺構図

Ⅰ地区Ｄ区５号古墳（第313図）

本古墳は、墳丘が消滅しており、嘗ての墳丘部に土坑群が存在する。この土坑群は、中世末～近世であり、この時期までには墳丘は消滅していたものと考えられる。又、周堀部においては、Ｄ区７号溝と重複しているが、新旧関係は不明である。墳形については、北側部分が未調査のため、明らかにすることはできなかった。

墳丘部は、調査区内において正円にならず、南側部分が直線に近い形態となっている。周堀は、ローム面からの深さが80cm～１ｍで、中央付近が最も深く、底面に平坦面を持つたない。出土遺物が皆無であるため、時期は不明である。（飯塚）



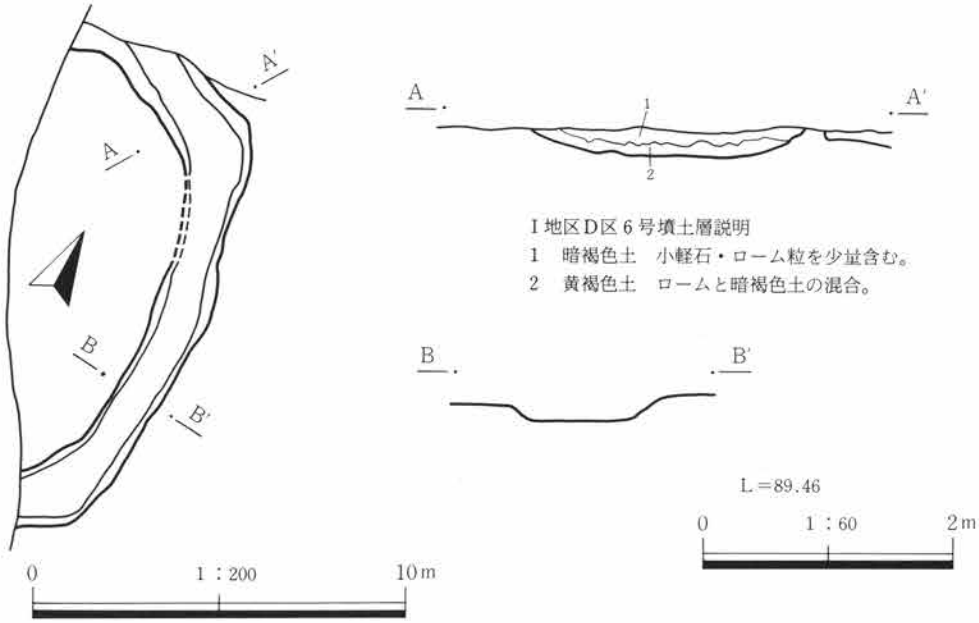
第313図　Ⅰ地区Ｄ区５号古墳遺構図

Ⅰ地区Ｄ区６号古墳（第314図）

本古墳の墳丘は、既に消滅している。周堀部において、Ｄ区６号溝・７号溝と重複関係にあるが、これらの溝との新旧関係は不明である。

調査区内における墳丘部は、やや不整の円弧を持つ。周堀は、幅1.2～２ｍで、ローム面からの深さは約20cmである。掘り方は皿状を呈する。出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

（飯塚）

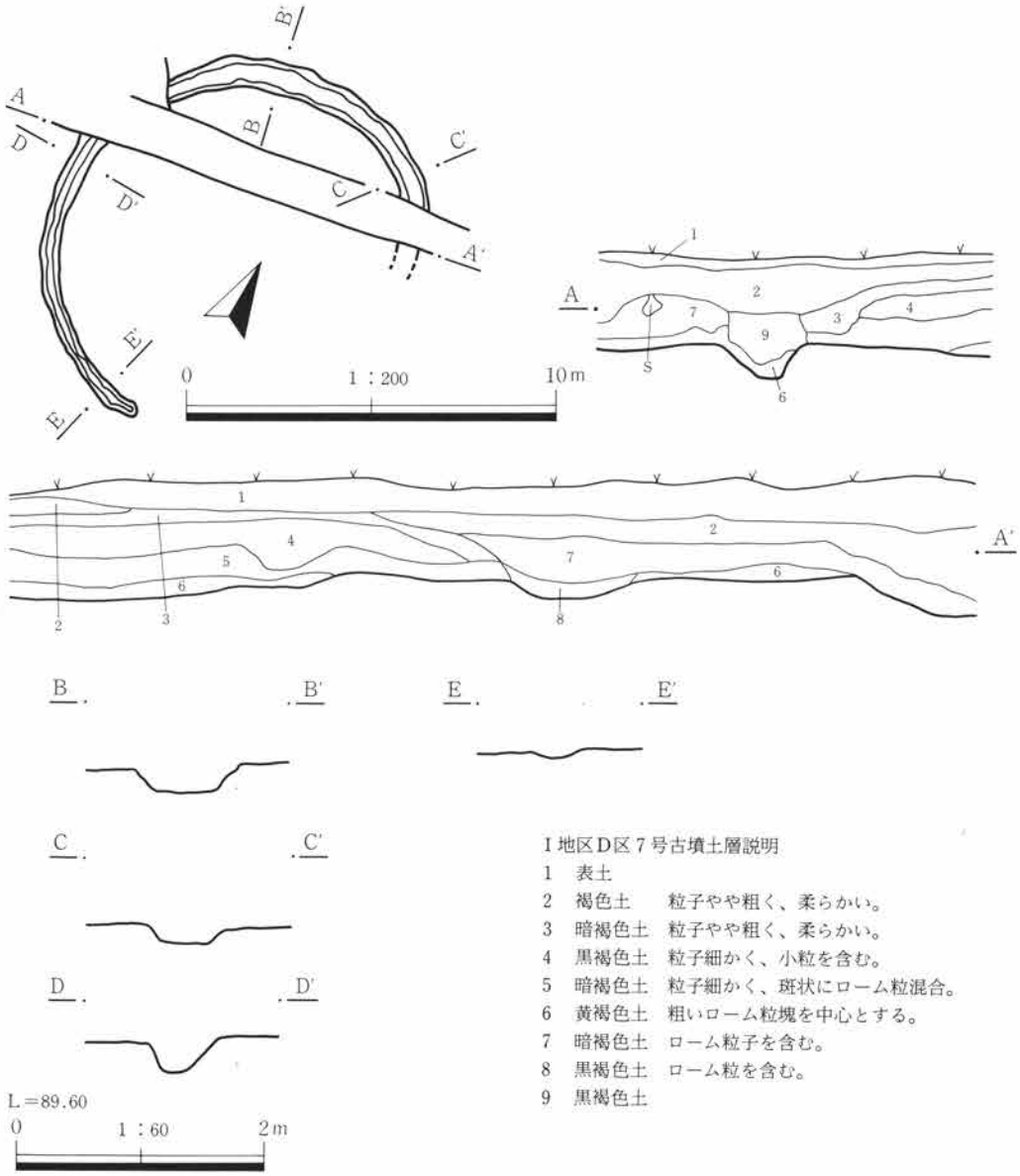


第314図　Ⅰ地区Ｄ区６号古墳遺構図

Ⅰ地区Ｄ区７号古墳（第315図）

本古墳の墳丘は存在せず、墳丘消滅後に多数の土坑が墳丘部・周堀部に造られている。周堀の形態からすると、直径9.5mの円墳となる可能性が強い。

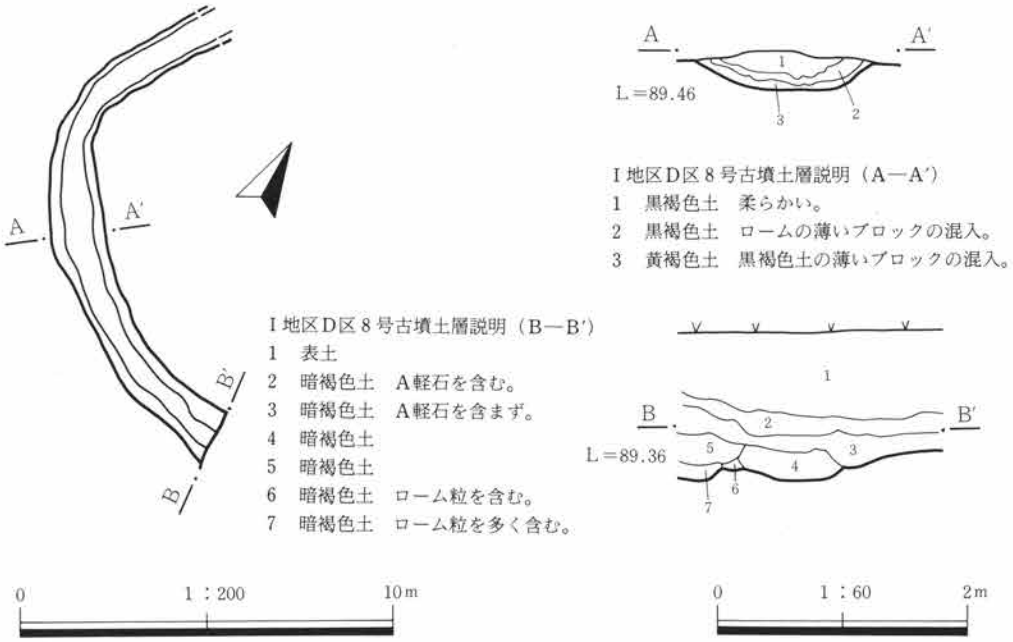
周堀は、幅30cm～70cm、ローム面からの深さは10cm～20cmで、幅が狭く浅い点が特徴として挙げられる。南側に周堀が立ち上がっている部分があり、ブリッジになるものと考えられる。出土遺物が皆無であるため、時期は不明である。（飯塚）



第315図　Ⅰ地区Ｄ区７号古墳遺構図

Ⅰ地区Ｄ区８号古墳（第316図）

本古墳は、周堀の一部が確認されたが、墳丘は既に消滅していた。墳丘部は、不整の円弧を呈している。周堀の幅は、1.3m～0.9mで、ローム面からの深さは約20cm、皿状の掘り方である。出土遺物はなく、時期は不明である。（飯塚）



第316図　Ⅰ地区Ｄ区８号古墳遺構図

Ⅰ地区Ｄ区９号古墳（第317～322図、第88表、図版59・60）

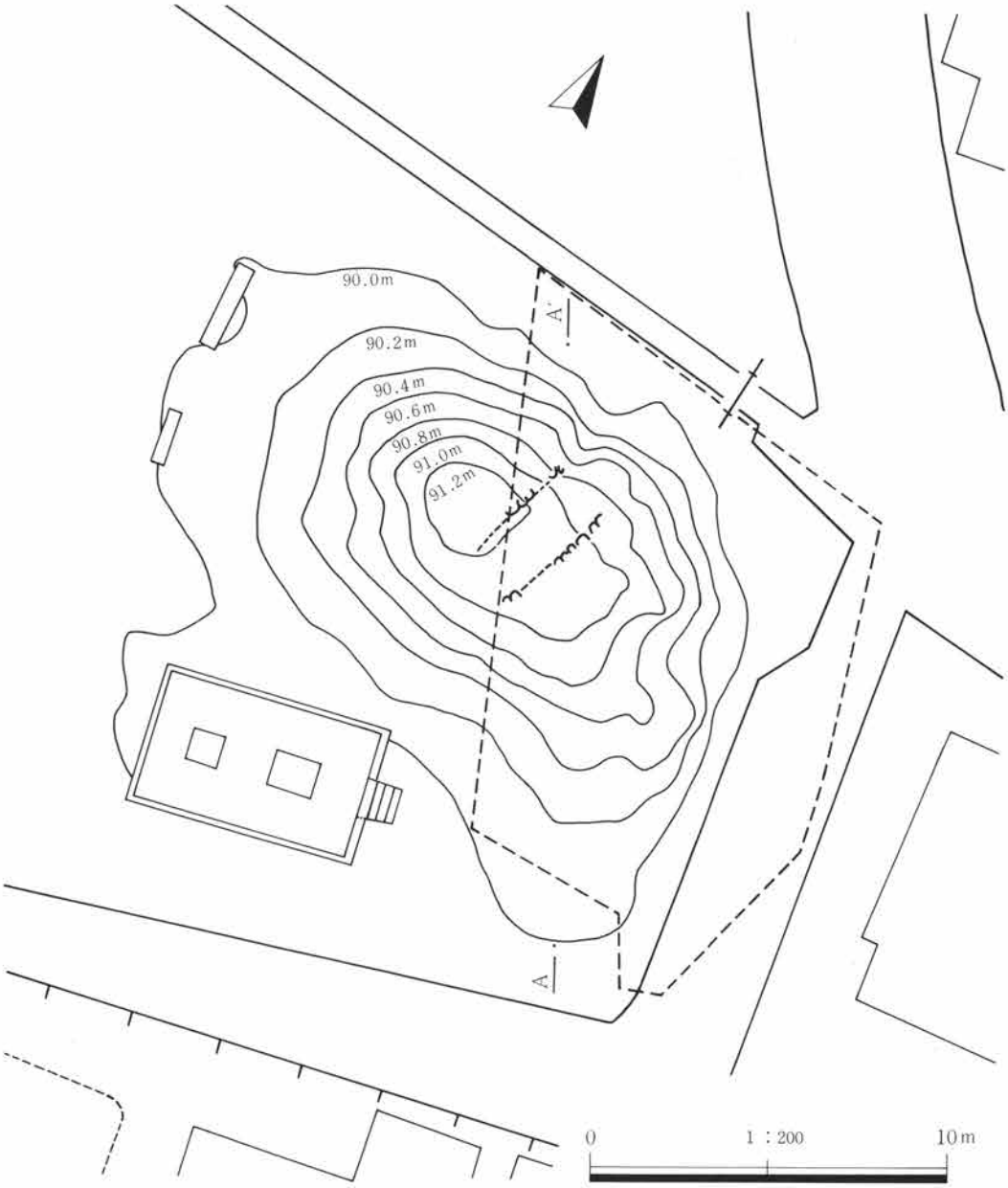
本古墳は、群馬郡佐野村第32号墳として、上毛古墳総覧に登載されている。上毛古墳総覧によれば、下佐野字蔵王塚873番地に所在する円墳で、直径は20尺・高さ６尺・未発掘となっている。測量の結果、現状では、東西約15m、南北約10mの楕円形を呈しており、高さは1.2m、墳頂部には、古峯神社が建てられていた。

発掘調査区は、墳丘の北東部分で、全体の約半分に当たる。墳丘については、墳頂から70cm位まで攪乱されている部分も多く、浅間Ａ軽石が含まれていることから、この部分の攪乱は浅間Ａ軽石降下後であることがわかる。

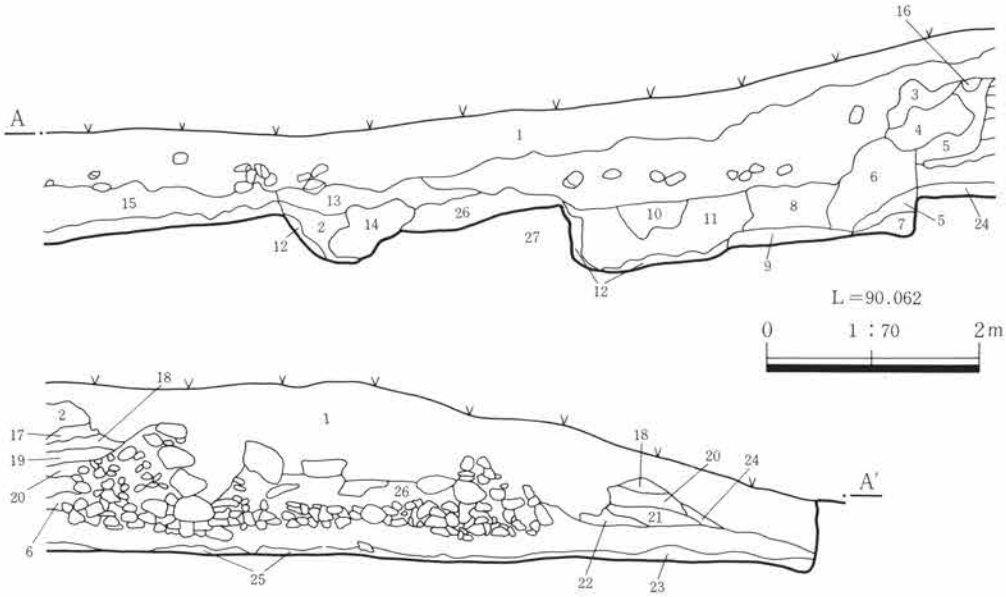
石室は、横穴式石室である。大きく壊されており、奥壁及び側壁の根石の約半分は存在しない。石室の主軸は、Ｎ－17°－Ｅであり南側に開口している。石室の構築方法は、旧地表面である黒褐色土を約12cmほど、隅丸方形に掘り凹めており、中央に周囲より約８cm高い方形の部分が存在す

る。隅丸方形に掘り凹められている部分は、推定幅約3.5cmで、この部分に径10～30cmの比較的偏平な河原石が敷き詰められている。石室の根石は、この上に設定されており、中央に存在するやや高い方形の掘り方を持つ部分に4cm～8cmの間隔を持って平行している。なお、裏込めは、隅丸方形の掘り方で、やや大き目の河原石や砂・ロームブロック等がやや多く含まれている。

玄室は、掘り方上に径4cm～12cmの比較的小さな河原石を約25cmほど敷き詰め、これを棺床面としている。石室プランは、やや胴張りで、玄室幅は約1.5m、玄室の長さは3.5m以上と推定さ



第317図　I地区D区9号古墳墳丘図



I地区D区9号墳土層説明①

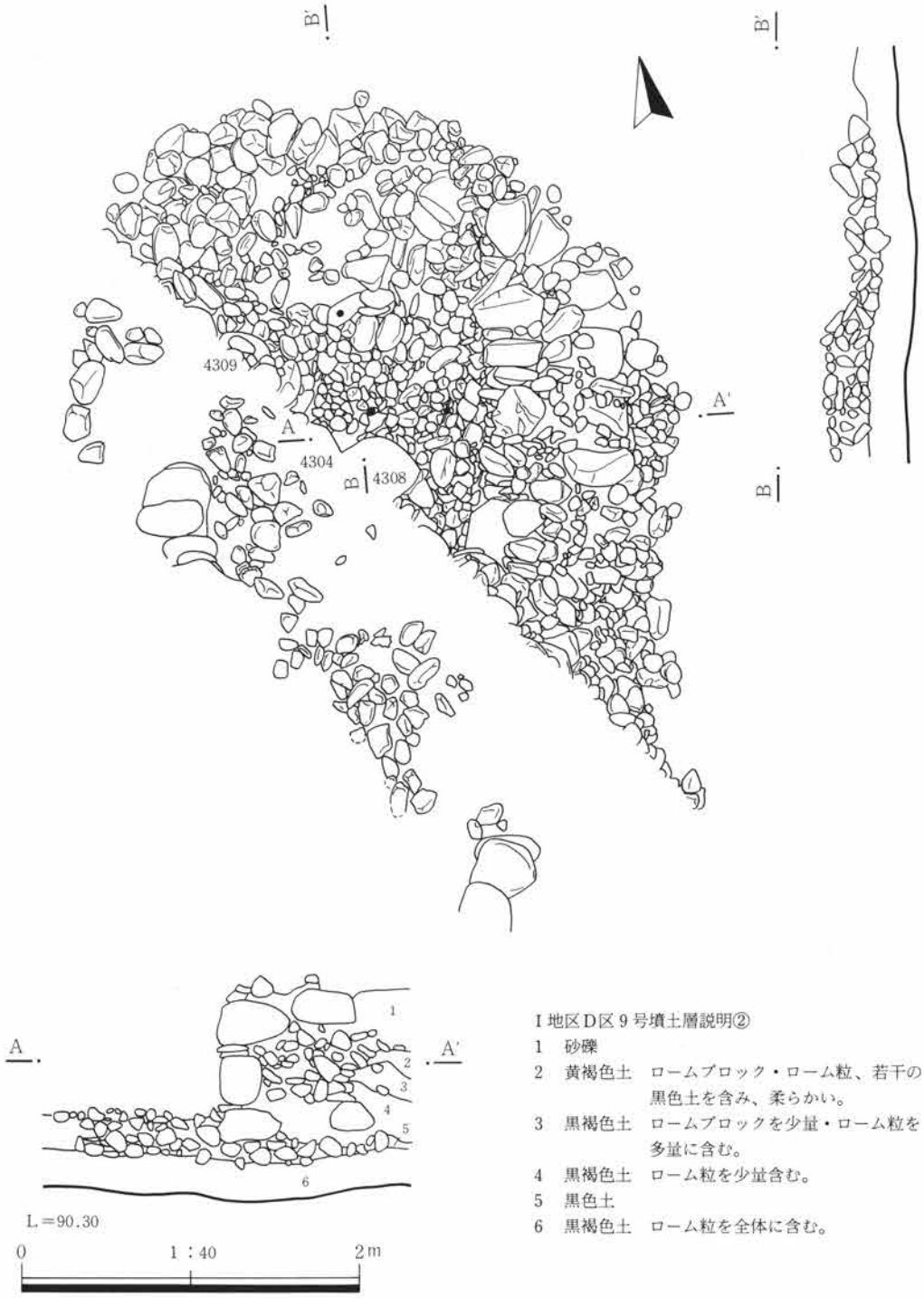
1　表土　A軽石を含む。
2　褐色土　ローム小ブロック・ローム粒を含む。
3　黄褐色土　ロームブロックを含む。
4　黄色土ブロック・褐色土ブロックの混合。
5　黄褐色土　ローム粒混入。
6　黄褐色土　ローム小ブロック・暗褐色土小ブロック・ローム粒を含む。
7　黄褐色土　暗褐色土ブロック・ローム粒を含む。
8　褐色土　ローム粒を多く含む。
9　褐色土　大ロームブロック・ローム粒を多く含む。
10　褐色土　黒色土ブロックを含む。
11　褐色土　ロームブロックを含む。
12　ロームブロック・褐色土の混合層。
13　褐色土　柔らかい。
14　暗褐色土　ローム小ブロックを含む。
15　褐色土
16　ロームブロック
17　褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。
18　褐色土　黒色土多く、ロームブロックを少量含む。
19　黄褐色土　ローム・黒色土・褐色土の混合。
20　褐色土　黒色土とロームブロックを少量含む。
21　黄褐色土　ロームと黒色土の混合。
22　黒色土　ローム粒を全体に含む。
23　黒褐色土　ローム粒を含む。
24　黒褐色土　ローム粒・黒色土を含む。
25　砂礫層
26　黄色土　ローム主体。
27　ローム層

第318図　I地区D区9号古墳墳丘断面図

れる。側壁は、比較的大きな河原石を積み、間隙に偏平な河原石を詰めている。

周堀は、確認されなかった。存在しなかった可能性もある。出土遺物については、玄室内から金環2個と鉄鏃2本が出土している。金環（4306・4307）は、玄室ほぼ中央から、鉄鏃（4308・4309）は左側壁と奥壁のコーナー付近と、中央やや右側壁より発見された。しかし、玄室内は攪乱された痕跡があり、これらの遺物が現位置を止どめるものか否かは不明である。なお、墳丘より、土師器杯（4304）と須恵器高杯（4305）の破片が出土している。

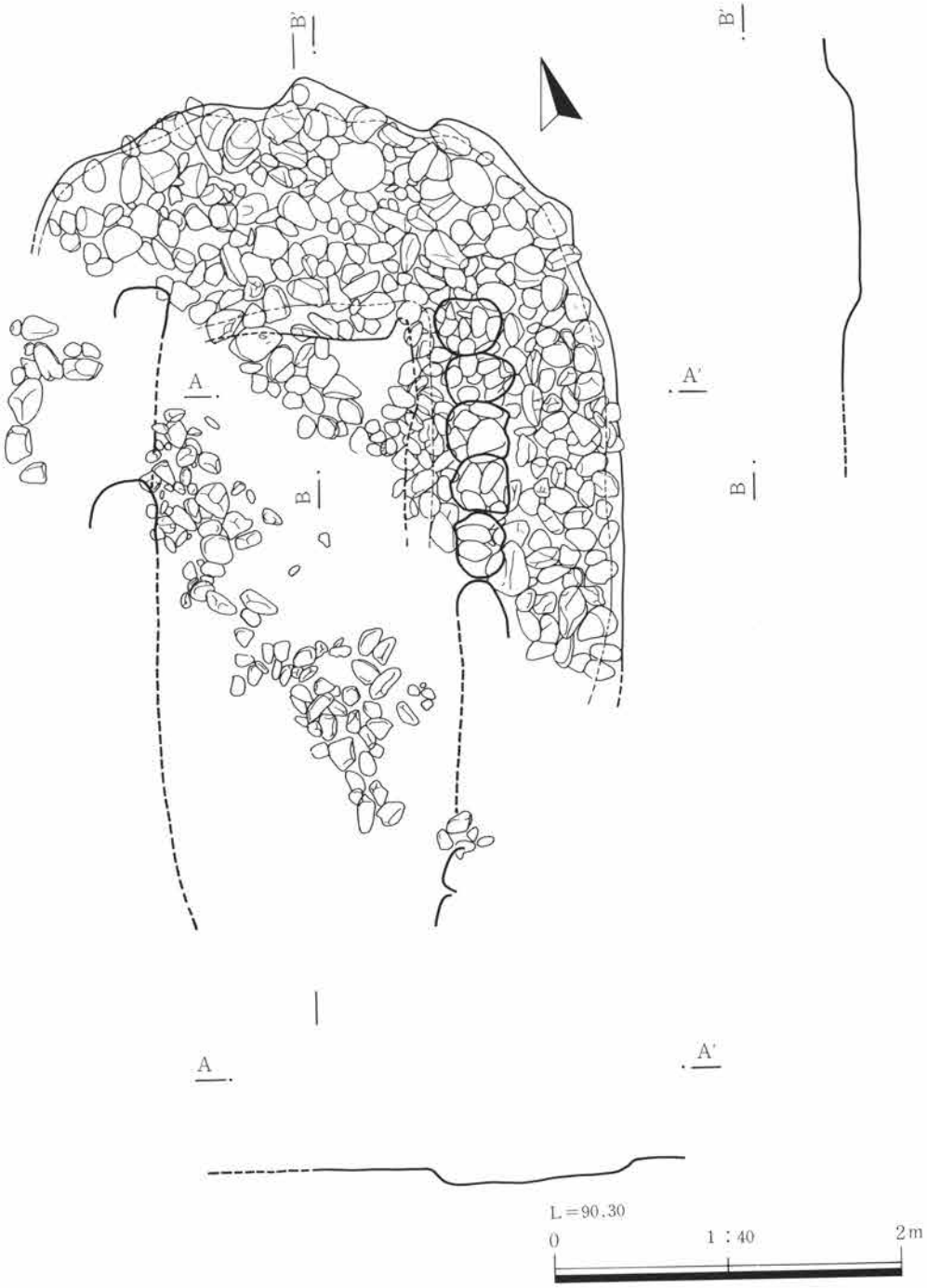
本古墳の築造時期は、終末期と考えられる。（飯塚）



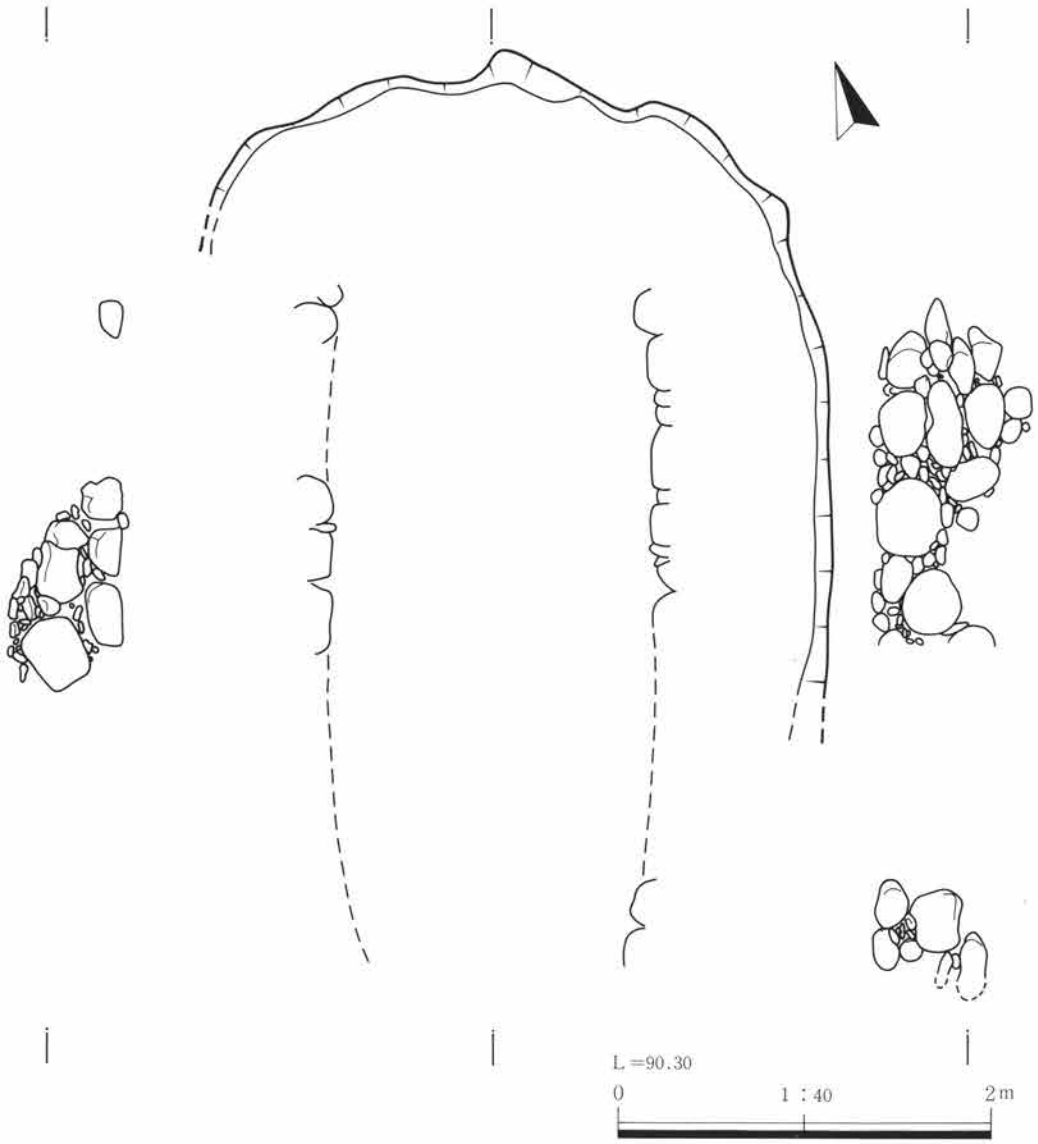
Ⅰ地区D区９号墳土層説明②

1　砂礫
2　黄褐色土　ロームブロック・ローム粒、若干の黒色土を含み、柔らかい。
3　黒褐色土　ロームブロックを少量・ローム粒を多量に含む。
4　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
5　黒色土
6　黒褐色土　ローム粒を全体に含む。

第319図　Ⅰ地区D区９号古墳石室平面・断面図



第320図　Ⅰ地区Ｄ区９号古墳石室構築状況図

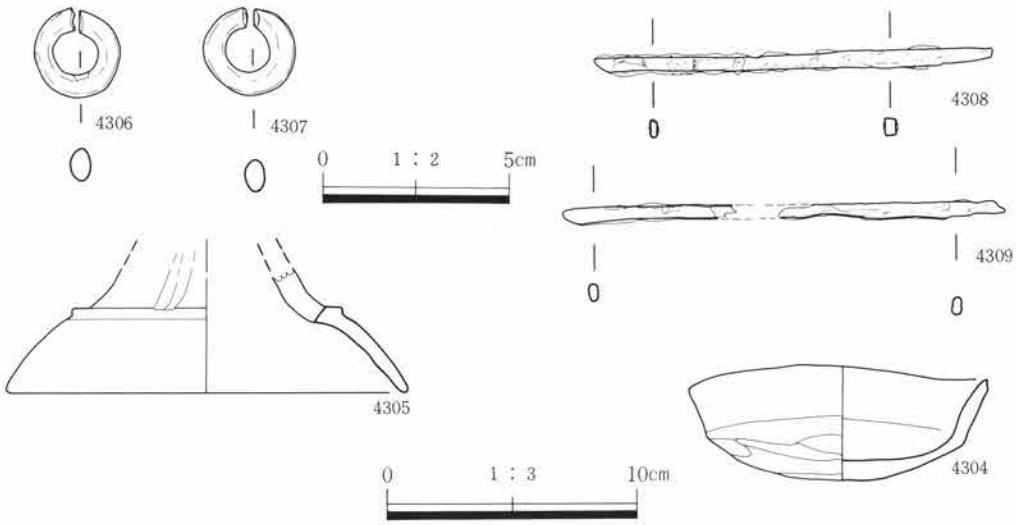


第321図　Ⅰ地区D区9号古墳石室展開図

第 88 表　Ⅰ地区D区9号古墳遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4304	杯 土師器	器高:45㎜口径:119㎜底径:—最大径:—完形	胎土粒子細かく砂粒殆ど含まず。酸化。硬質。橙。	歪んでいる。外面:なで後、底面篦削り。内面:なで。	墳丘盛土中。
4305	高杯 須恵器	器高:—口径:—底径:16㎜最大径:—脚部⅓残	砂粒殆ど含まず。還元。硬質。灰白。	方形透孔を有する。内外面:轆轤整形	墳丘盛土中。

4306	金　環	径:23㎜ 厚さ:6㎜ 幅:8.0㎜完形	全体に錆びており緑。		石室床面上。
4307	金　環	径:23㎜ 厚さ:5㎜ 幅:9㎜完形	全体に錆びており緑。金箔が僅かに残存。	断面:隋円形。	石室床面上。
4308	鉄　鏃	長さ:159㎜ 厚さ:3～5㎜幅:7㎜完形		有茎片刃矢式。厚さは先端に行くに従い薄くなる。	石室床面上。
4309	鉄　鏃	長さ:一厚さ:3～4㎜幅:7㎜		有茎片刃矢式。厚さは先端に行くに従い薄くなる。	石室床面上。

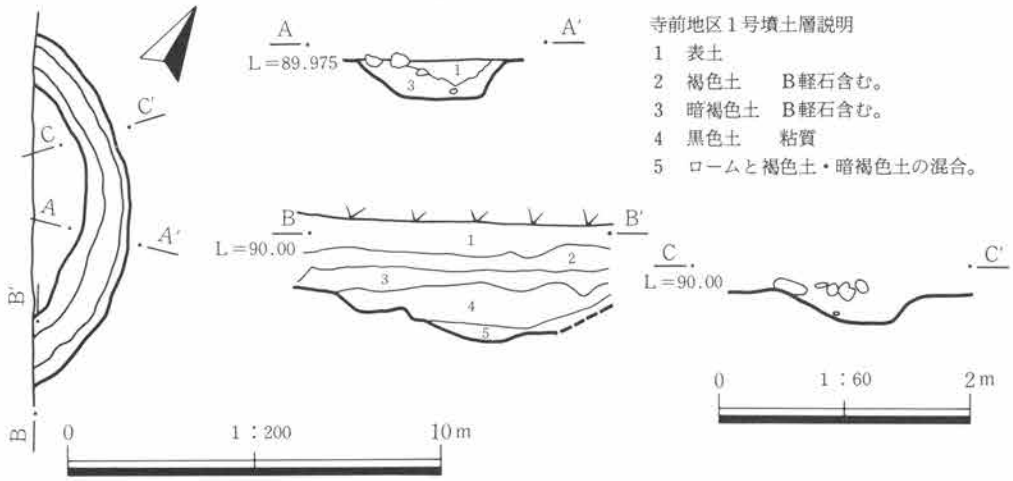


第322図　Ⅰ地区Ｄ区９号古墳遺物図

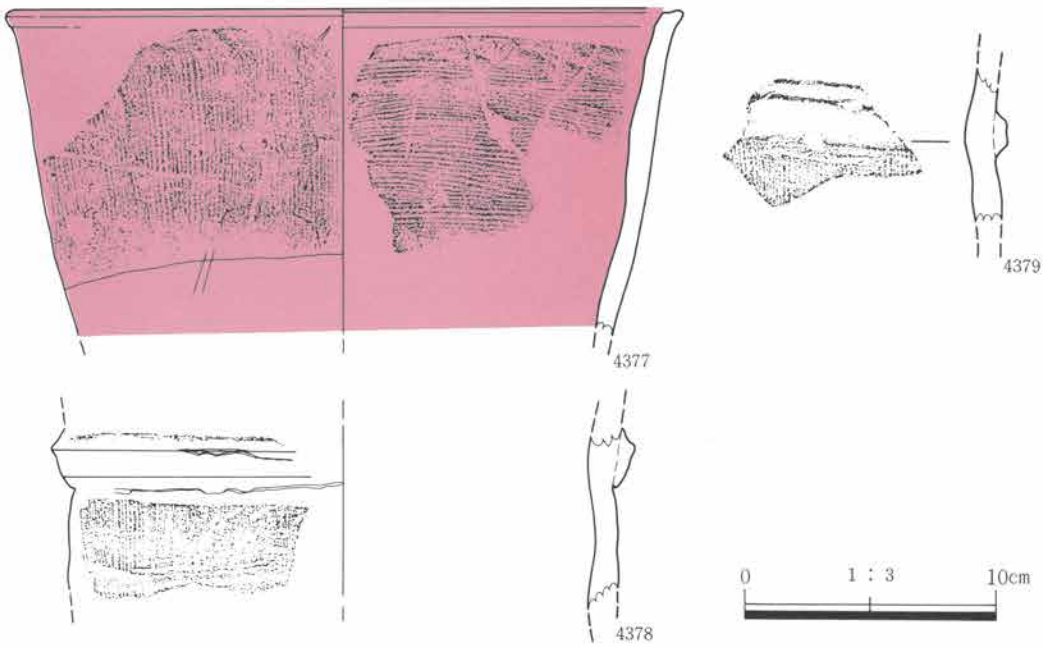
寺前地区１号古墳（第323・324図、第89表）

本古墳は、周堀の一部が確認された。仮に円形にめぐると考えた場合、直径約９ｍとなるが、３分の２は既に西側の道路によって消滅している。周堀の幅は１ｍ～1.3ｍで、ほぼ一定している。また、周堀の深さは約１ｍで、ほぼ逆台形の掘り方を呈する。周堀内側の立ち上がり付近には、河原石が密集して存在した。しかしいずれも、掘り方との間に周堀埋没土を含んでおり、原位置をとどめるものではなく、葺石が落ち込んだ状態を示しているものと考えられる。

周堀内からの出土遺物として、円筒埴輪片（4377・4379）がある。本古墳の築造時期は、埴輪の様相から古墳時代後期と考えられる。（飯塚）



第323図　寺前地区１号古墳遺構図



第324図　寺前地区１号古墳遺物図

第 89 表　寺前地区1号古墳遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4377	埴輪 円筒	器高:(128mm)口径:[270mm]底径:一上部½残	小砂粒を含む。酸化。焼成やや良好。淡橙。赤色塗彩。	器肉やや薄い。外面:縦刷毛調整後、赤色塗彩。斜めの沈線あり。刷毛目は細かい。内面:横刷毛調整後、赤色塗彩。	周堀内。
4378	埴輪 円筒	器高:(64mm)口径:一底径:一体部径:[220mm]破片	砂粒を含む。粒子は、やや細かく硬質。酸化。焼成良好。浅黄橙。	外面:刷毛調整後、凸帯貼りつけ。内面:なで。刷毛目は細かい。	周堀内。
4379	埴輪 円筒	破片	小石、砂粒を含む。酸化。焼成良好。淡橙。	外面:刷毛調整後、凸帯貼りつけ。内面:なで。刷毛目は細かい。	周堀内。

寺前地区3号古墳（第325図）

この古墳は、6号墳後方部周堀の一部を切って造られている。中世～近世と推定される26・28・29号溝に切られていることから、この時期までに墳丘は消滅していたものと考えられる。

墳形は、周堀が確認面において全周していないため、明確ではないが、周堀の形態から円墳である可能性が強い。周堀は比較的緩やかに掘り込まれており、確認面からの深さは75cm前後である。なお、北側周堀部において、堀底より約30cm上方に浅間B軽石純層の堆積が見られる。

本古墳からは、埴輪その他の遺物が出土していないため、時期は不明である。　（飯塚）

寺前地区4号古墳（長山古墳）（第326～329図、第90表）

この古墳は、上毛古墳総覧に群馬郡佐野村第24号古墳として登載され、長山古墳という名称が記されている。上毛古墳総覧によれば、上佐野字寺前521番地に存在する前方後円墳で、大正12年に発掘され、金銅製太刀・玉類・頭骨が出土している。しかし調査時点においては、墳丘は消滅して宅地となっており、出土遺物の所在も不明であった。

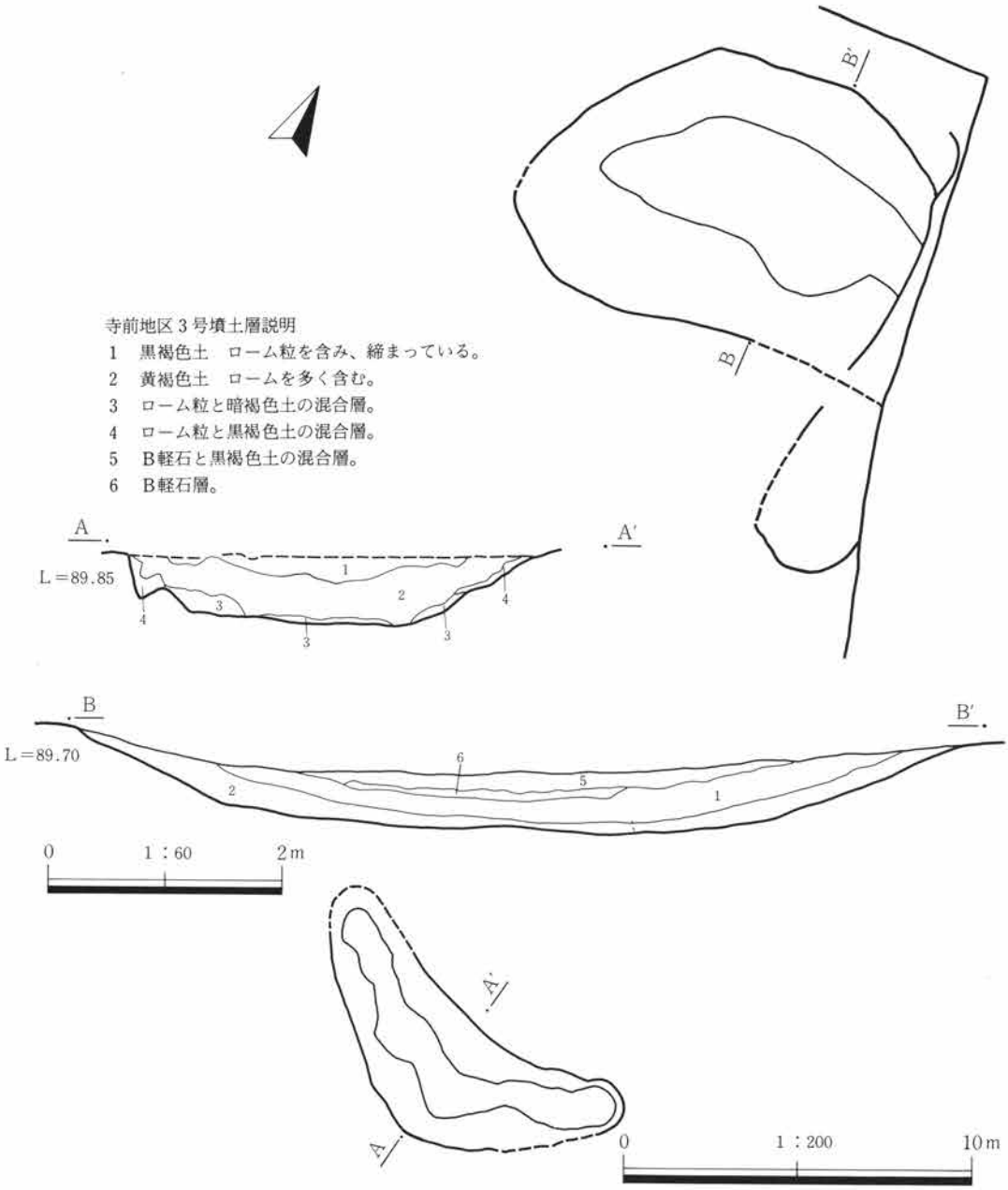
本古墳の周堀は、前方後方墳である寺前地区9号古墳の周堀を切っている。又、1号溝・5号溝によって、周堀部分が切られている。

調査区内において検出した部分は、前方部前端の一部と前方部をめぐる周堀の一部と考えられる。前方部は、最も多く確認された部分でも1mであり、前方部の他の部分及び後円部は、調査区西側の未調査部分に連続するものと考えられる。前方部部分の堆積土を観察すると、ローム漸移層の上は、浅間B軽石を多量に含んだ暗褐色土となっており、浅間B軽石降下後まもなく前方部は削平されたものと考えられる。

周堀の掘り込みは、前方部の前方向においては、確認であるローム層上面より40cmと比較的浅い皿状を呈しているが、前方部左側方においては、110cmと深くなっている。なお、前方部左側方

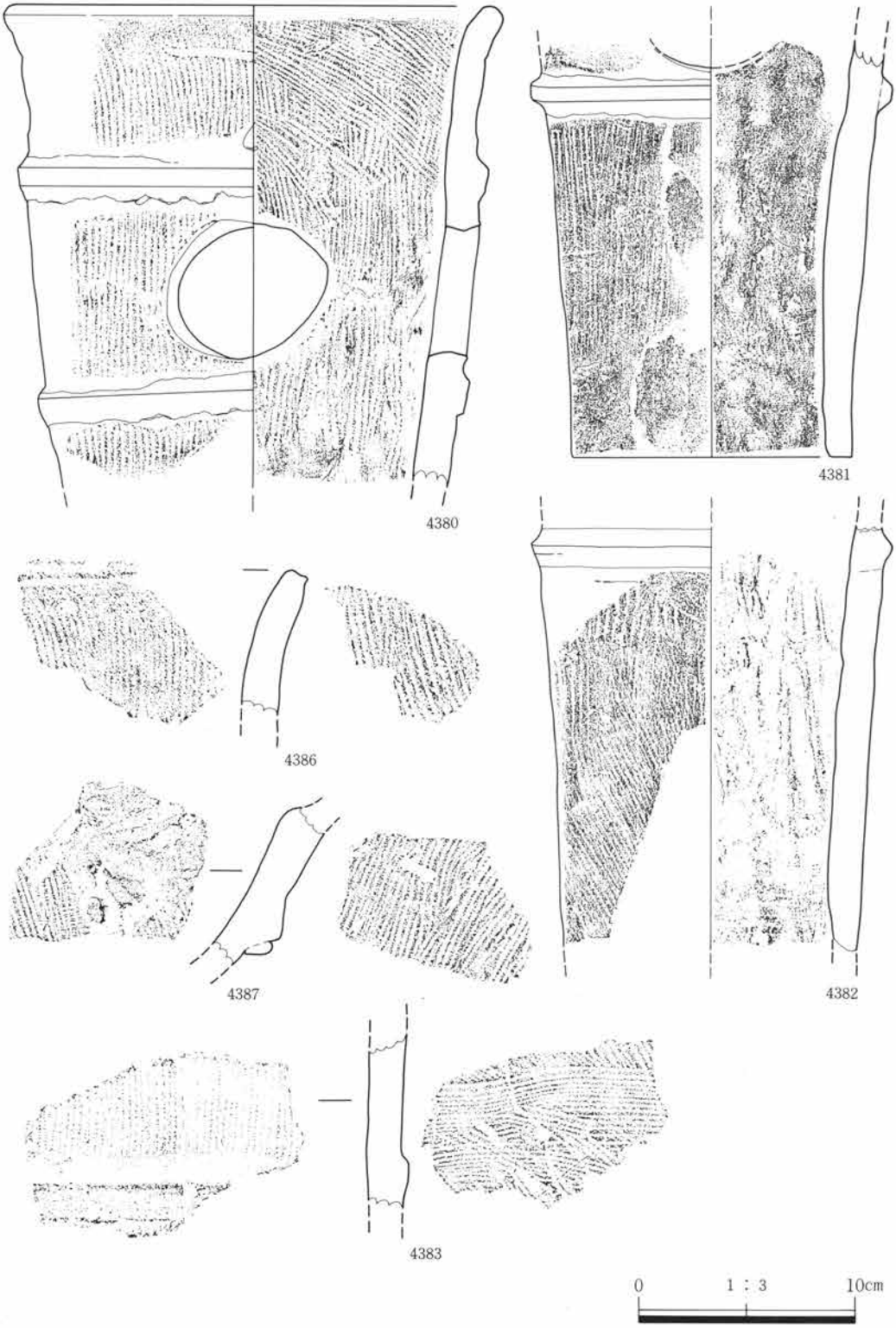
の周堀覆土に、径20～30cmの河原石がやや多く含まれているが、これらの河原石は、前方部の前方向にはほとんど見られず、葺石であったか否かは不明である。

出土遺物として、円筒埴輪の他に形象埴輪（4388・4420）・土師器杯（4390・4391）があり、いずれも前方部左側方の周堀底面付近より出土している。本古墳の時期は、古墳時代後期と考えられる。（飯塚）

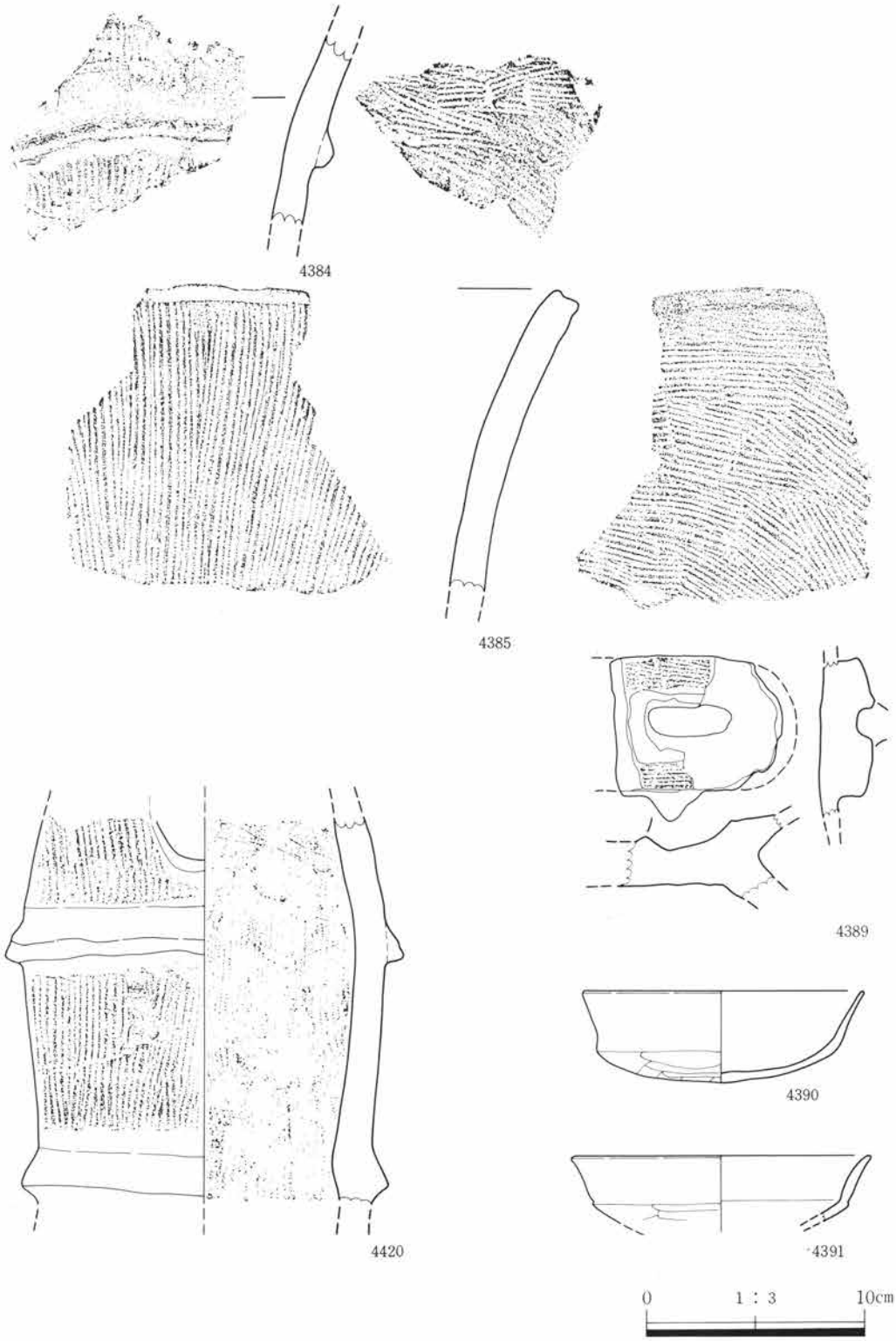


第325図　寺前地区３号古墳遺構図

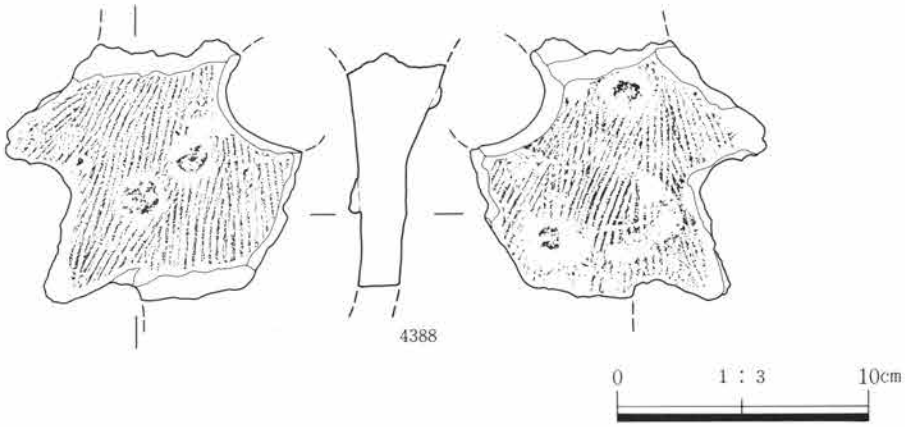
第326図　寺前地区４号古墳遺構図



第327図　寺前地区４号古墳遺物図（１）



第328図　寺前地区４号古墳遺物図（２）



第329図　寺前地区４号古墳遺物図（３）

第 90 表　寺前地区４号古墳遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4380	埴輪 円筒	器高：―口径：[230㎜]底径：―¼残	径４～５㎜の小石を含む。酸化。焼成良好。赤褐。	最上段部に沈線文あり。外面：縦刷毛目。内面：縦及び斜め刷毛目。	周堀内。
4381	埴輪 円筒	器高：(182㎜)口径：―底径：129㎜底部～第１段½残	径４～５㎜の小石を含む。酸化。焼成良好。鈍い橙。	外面：縦刷毛目。内面：なで。外面に板による叩き痕あり。	周堀内。
4382	埴輪 円筒	器高：(194㎜)口径：―底径：―第１段目½残	径５～７㎜の小石・砂粒を含む。酸化。焼成良好。明赤褐。	凸帯断面は三角形。外面：縦刷毛調整後、板による叩き痕あり。内面：なで、縦刷毛目。	周堀内。
4383	埴輪 円筒	破片	径３～４㎜の小石・砂粒を含む。酸化。焼成良好。明赤褐。	凸帯は低い。外面：縦刷毛目。内面：斜め刷毛目。	周堀内。
4384	埴輪 円筒	破片	砂粒を含む。酸化。焼成良好。橙。	凸帯不成形。外面：縦刷毛目。内面：斜め刷毛目。	周堀内。
4385	埴輪 円筒	破片	径５～７㎜の小石・砂粒を含む。酸化。焼成良好。明赤褐。	外面：縦刷毛目。内面：斜め刷毛目。	周堀内
4386	埴輪 円筒	破片	小石・砂粒を多く含む。酸化。焼成良好。	外面：縦刷毛目。内面：粗い横刷毛目。	周堀内。
4387	埴輪 （形象）	破片	小石・砂粒を含む。酸化。焼成普通。橙。	外面：刷毛調整後、ボタン状突起、その他を貼り付け。	周堀内。

4388	埴　輪 きぬがき	破片	小石・砂粒を含む。酸化。焼成良好。橙。	表裏両面は刷毛調整後、ボタン状突起貼り付け。	周堀内。
4389	埴　輪 太　刀	破片	小石・砂粒を含む。酸化。焼成普通。橙。	刷毛及びなでによる調整。	周堀内。
4390	杯 土師器	器高:51㎜口径:128㎜底径:一全体の⅔残	小砂粒を少量含む。酸化。やや軟質。橙。	内外面:なで。底部は外面篦削り。	周堀内。
4391	杯 土師器	器高:(30㎜)口径:[135㎜]底径:一全体の¼残	小砂粒を少量含む。酸化。やや軟質。橙。	内外面:なで。底部外面は篦削り。	周堀内。
4420	埴　輪 (形象)	円筒部の一部	小石、特に片岩を多く含む。酸化。焼成良好。明赤褐。	残存部上端は内傾。外面:縦刷毛目。内面:刷毛によるなで。	周堀内。

寺前地区５号古墳（第330～335図、第91表、図版61・65）

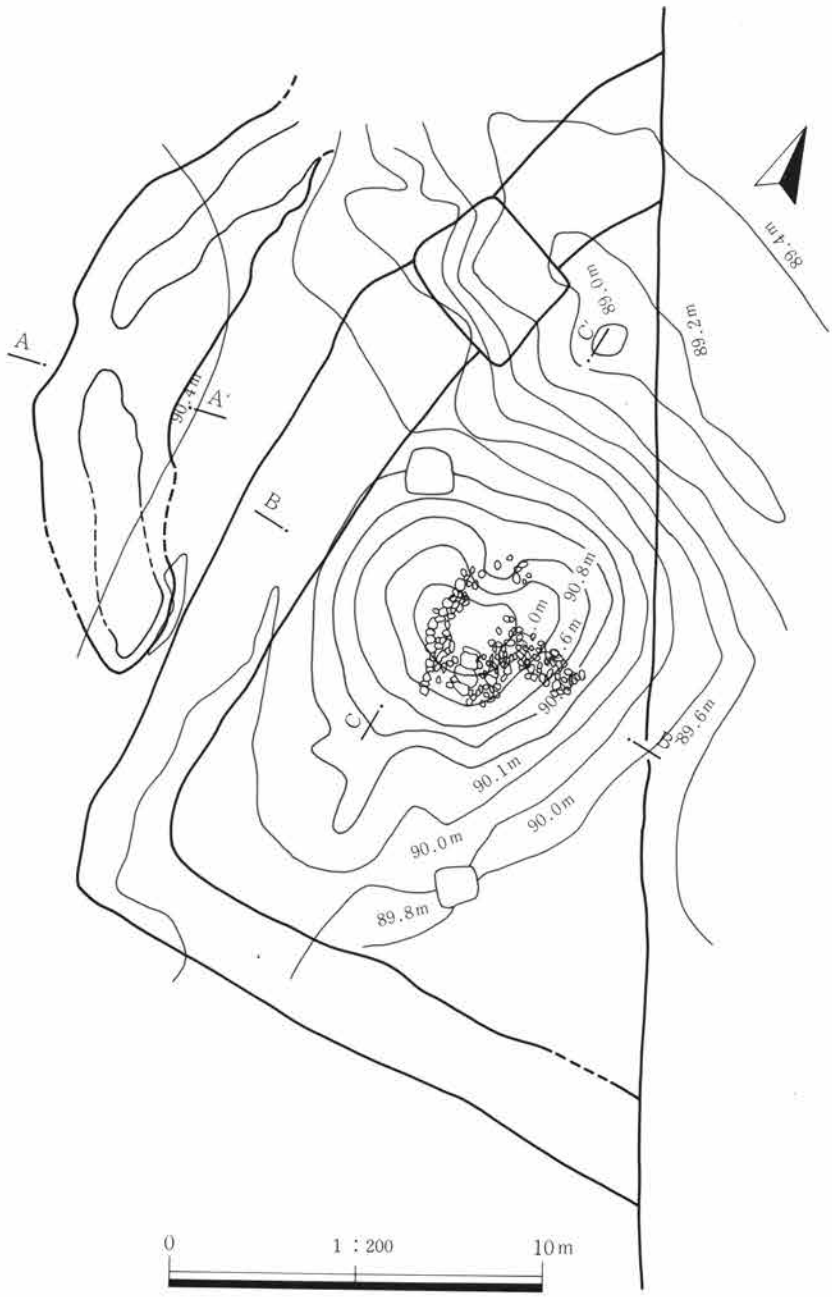
本古墳は、群馬郡佐野村第14号墳として上毛古墳総覧に登載されている。上毛古墳総覧によれば、上佐野字寺前乙497番地に所在する円墳で、高さが5尺とある。なお、未発掘とされており、墳頂部には稲荷祠が存在した。

墳丘測量の結果、本古墳は直径約12m、高さ約1.8mの規模を持つことが明らかとなったが、発掘調査により、後に造られた寺前地区１号館跡によって大きく変形していることと共に古墳築造面である旧表土が海抜90.4m付近であることが判明し、墳丘部分はそれより上方の約80cmとなった。なお、墳丘の表面から約30cmは表土、更に表土下約30cmは崩された墳丘盛土が再び盛られたもので、本来の墳丘盛土は、旧表土上20cm～30cmの残存であった。

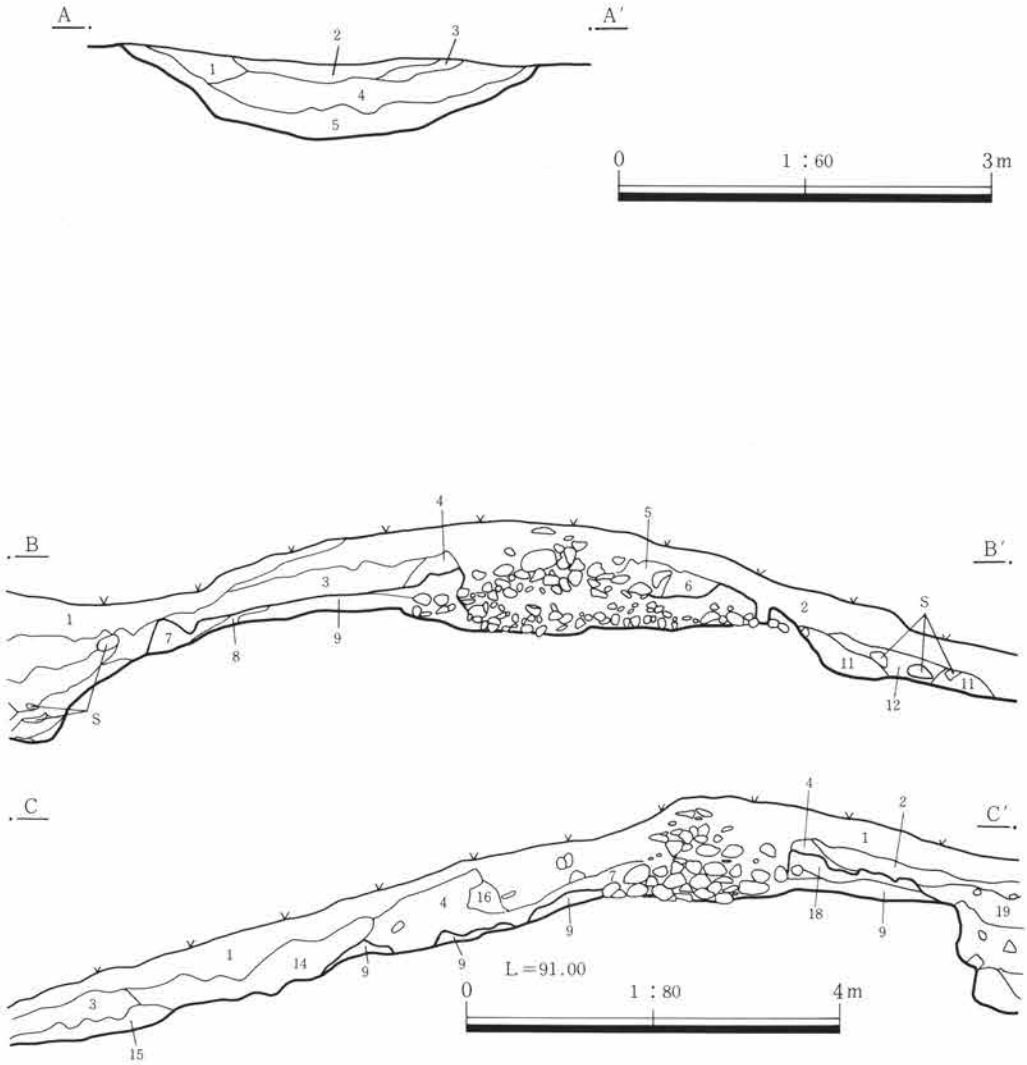
石室は大きく壊されていた。残存していたのは、羨道部左側壁の一部と石室下の石敷の一部、それに裏込めの一部である。石室は南側に開口するものと考えられ、主軸方位を推定すると、N－3°－Wとなる。石室下の石敷は、旧地表面を約20cm程掘り凹めてから約15cmの厚さで造られており、この上に石室の根石が据えられていた。

周堀は、石室の西側に確認された。幅3.5m～４m、深さ約70cmで、掘り方は皿状を呈する。なお、周堀は全周しておらず、石室の南西方向では立ち上がっている。又、北西方向では、地形が傾斜しており、途中で確認は難しくなる。周堀は、現存する墳丘とは離れているが、この間には寺前地区１号館跡の堀が存在しており、館の構築時に墳丘が削られている可能性が強い。なお、堀の内側に存在する墳丘中央部は、館の一施設として利用されたものと思われる。

出土遺物には、埴輪と鉄刀類がある。埴輪には、円筒埴輪と形象埴輪があり、周堀内と墳丘盛土中から出土しているが、小破片がほとんどである。鉄刀類は、墳丘ほぼ中央の攪乱土中より一括で出土した。この攪乱土は、石室下の石敷まで掘られた後に再び積み上げられたもので、鉄刀類はこの攪乱土中（墳頂より約１m下方）にまとめられていた。　（飯塚）



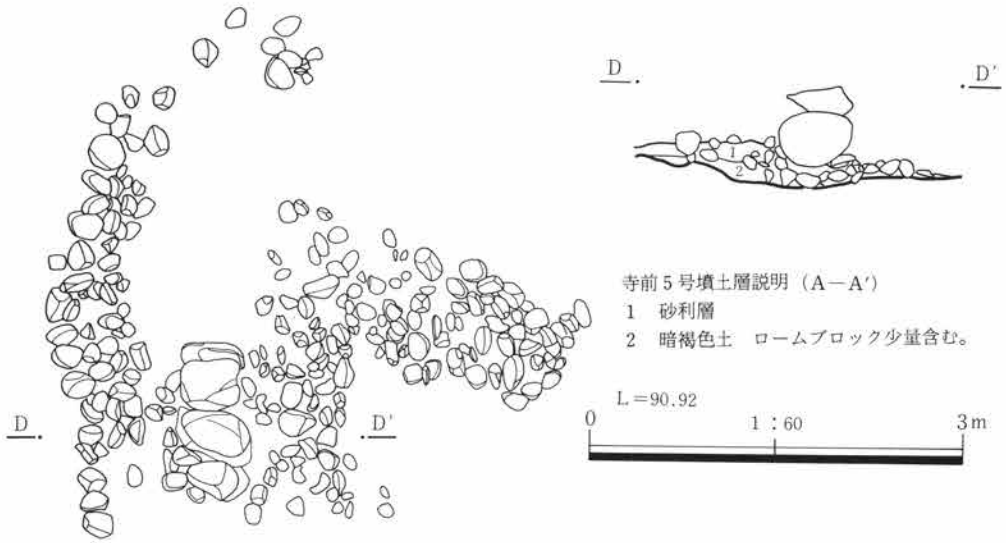
第330図　寺前地区５号古墳遺構図（１）



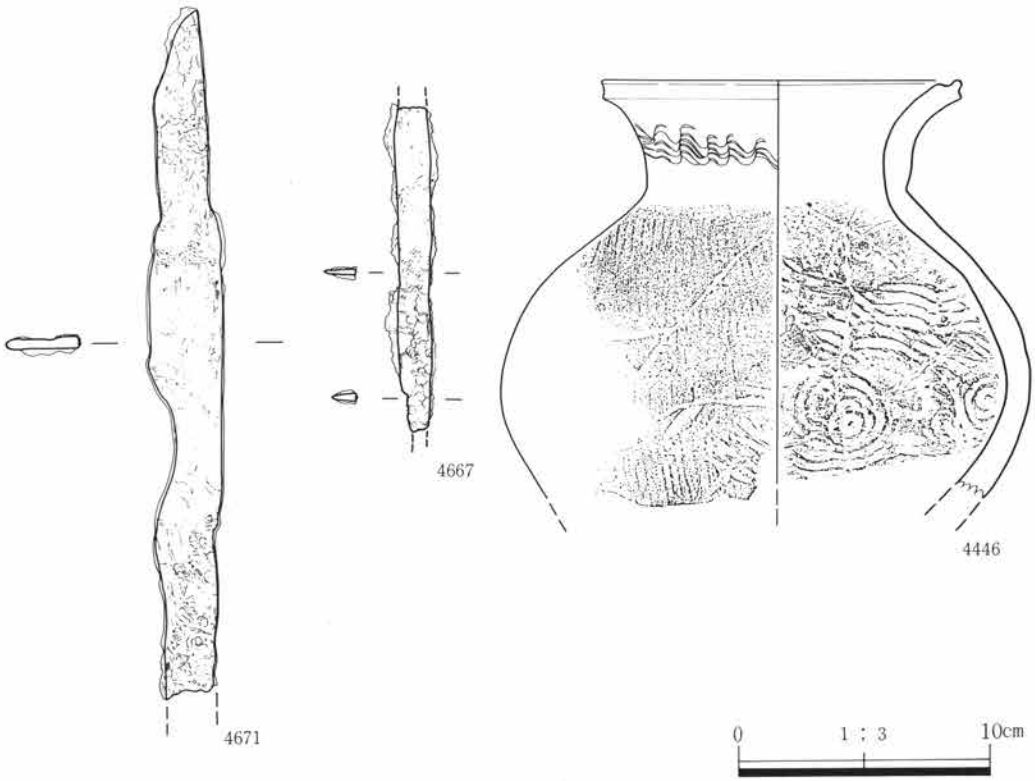
寺前地区５号墳土層説明

1　暗褐色土　Ａ軽石を多く含む。
2　褐色土　Ａ軽石を多く含む。
3　褐色土　ローム・暗褐色土小ブロック含む。
4　褐色土　暗褐色土ブロック含む。
5　黄褐色土　小石を多く含む。
6　黄褐色土　Ａ軽石・小石を含む。
7　暗褐色土　柔らかい。
8　黒褐色土　ローム粒・ローム小ブロック含む。
9　黒色土　ロームブロック含む。
10　黄褐色土　砂利層を含む。
11　褐色土　石を多量に含み、柔らかい。
12　褐色土　石を少量含む。
13　黄褐色土　砂質で柔らかい。
14　褐色土　小石を多く含む。
15　黄褐色土　砂質・褐色土ブロック含む。
16　暗褐色土　ローム粒・ロームブロック・小石含む。
17　褐色土　小石・砂を含み、柔らかい。
18　黄褐色土　ローム・褐色土の混合層。
19　褐色土　ローム粒・小石を含む。

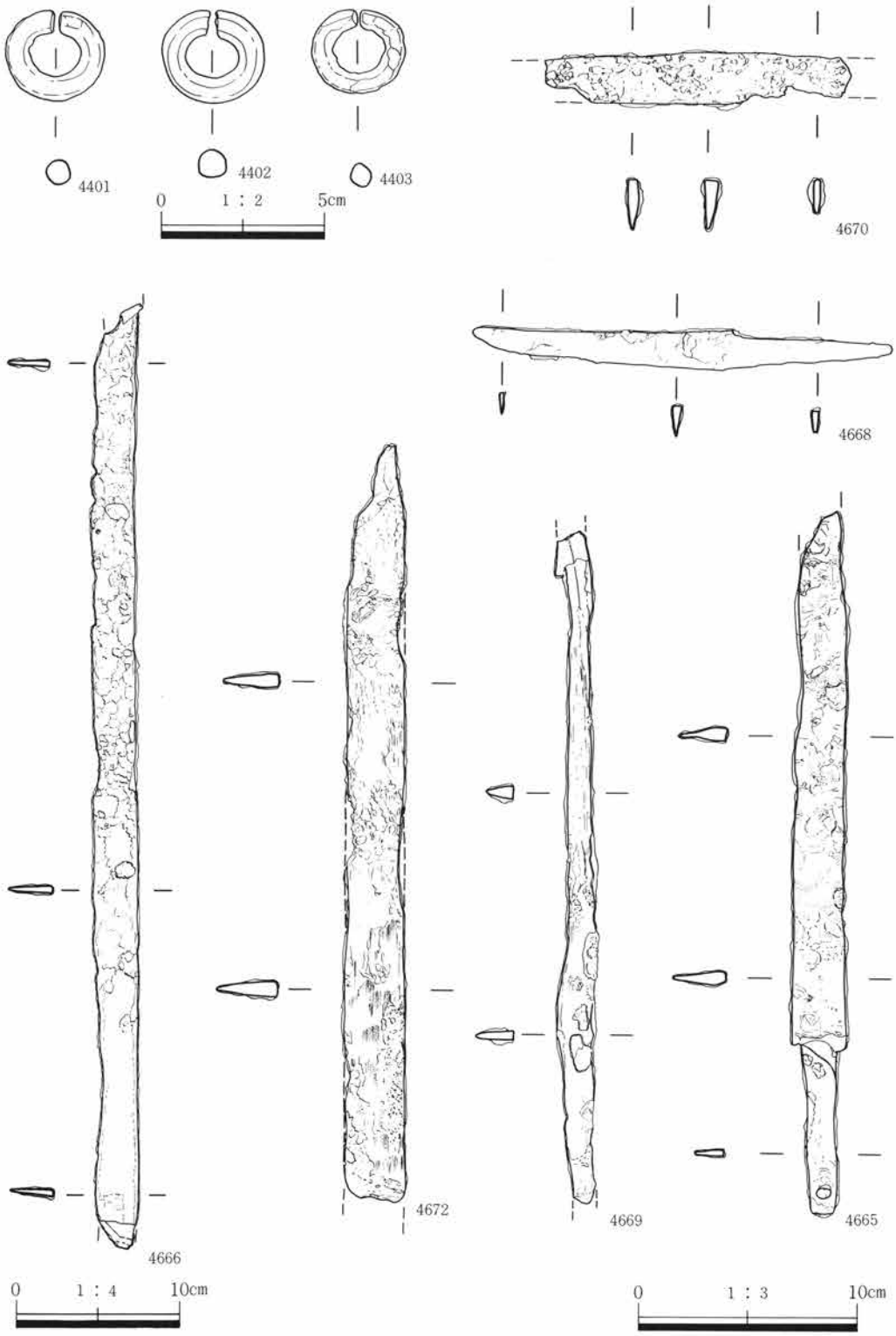
第331図　寺前地区５号古墳遺構図(2)



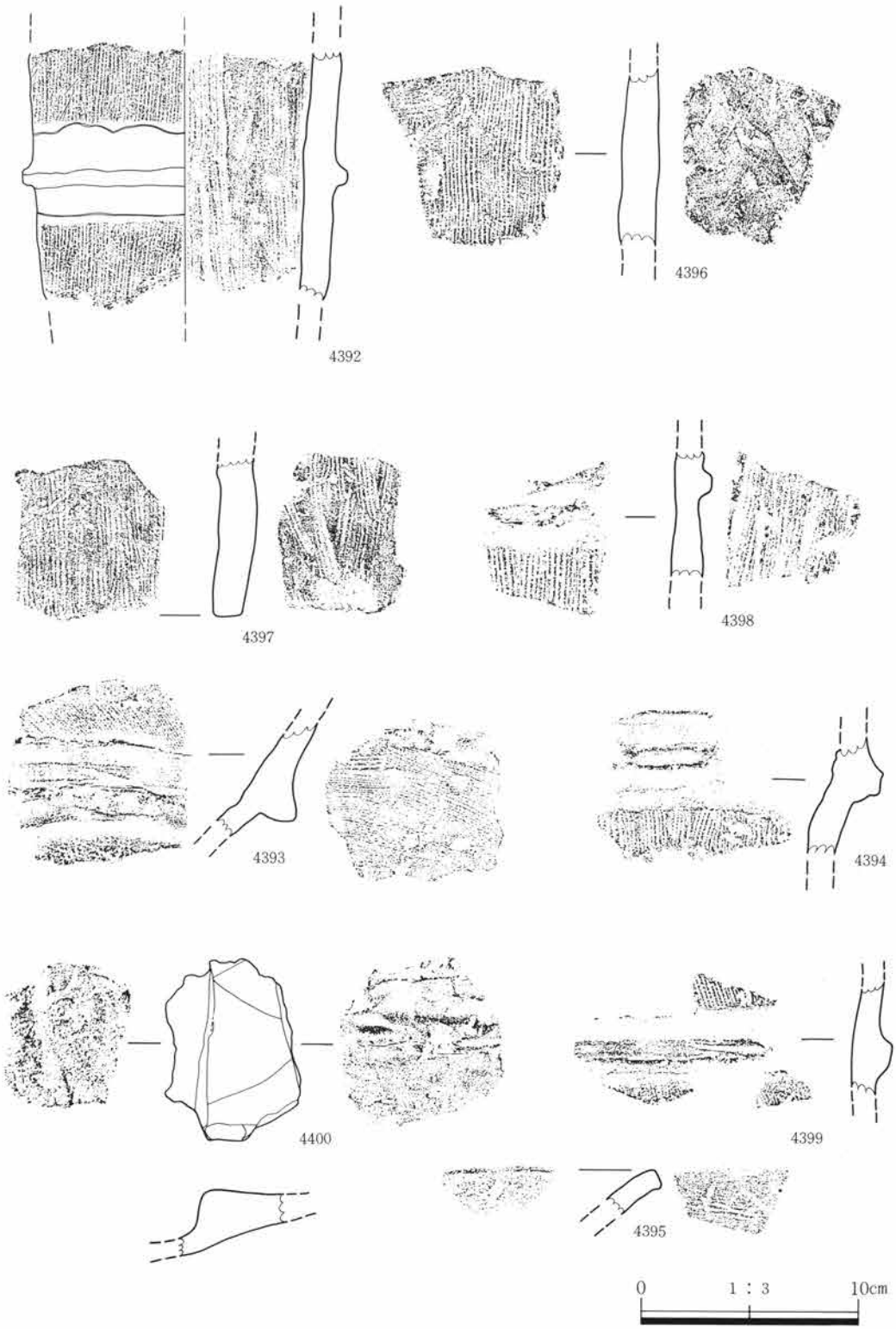
第332図　寺前地区５号古墳遺構図(3)



第333図　寺前地区５号古墳遺物図(1)



第334図　寺前地区５号古墳遺物図(2)



第335図　寺前地区５号古墳遺物図(3)

第 91 表　寺前地区5号古墳遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4392	埴輪 円筒	体部径:[140㎜]破片	砂粒を含む。酸化。焼成良好。鈍い橙。	外面:縦刷毛調整後、凸帯貼りつけ。内面:なで、一部縦刷毛目。	墳丘部。
4393	埴輪 (形象) 不明	破片	小砂粒を含む。酸化。焼成良好。鈍い橙。	外面:凸帯上方は斜め刷毛調整後、凸帯を貼り付ける。凸帯下方は縦刷毛目。内面:斜め刷毛目。	周堀内。
4394	埴輪 円筒	破片	砂粒を多く含む。酸化。焼成普通。鈍い黄橙。	外面:縦刷毛目。内面:なで。	周堀内。
4395	埴輪 円筒	破片	小石・砂粒を含む。酸化。焼成良好。灰白。	外面:縦刷毛目。内面:横刷毛目。	周堀内。
4396	埴輪 不明	破片	径4～7㎜の小石・砂粒を含む。酸化。焼成普通。赤褐。	外面:縦刷毛目。内面:なで。	墳丘部。
4397	埴輪 円筒	最下段破片	砂粒を含む。酸化。焼成普通。赤褐。	内外面:縦刷毛目。	墳丘部。
4398	埴輪 円筒	破片	小石・砂粒を多く含む。酸化。焼成良好。鈍い橙	内外面:縦刷毛目。	墳丘部。
4399	埴輪 円筒	破片	砂粒を含む。酸化。焼成良好。浅黄橙。	外面:縦刷毛目。内面:なで。	周堀内。
4400	埴輪 (形象) 盾	破片	胎土は粒子細かく、砂粒を含む。	内外面:なで後、細い沈線文。	墳丘部。
4401	金環	直径:30.5㎜厚さ:7㎜幅:7㎜完形	全体に錆びており、黒ずんだ緑。		墳丘攪乱土内。
4402	金環	直径:31㎜厚さ:8㎜幅:8㎜完形	全体に錆びており、緑。		墳丘攪乱土内。
4403	金環	直径:29㎜厚さ:6㎜幅:7㎜完形	全体に錆びており、緑。		墳丘攪乱土内。
4446	壺 須恵器	器高:(165㎜)口径:140㎜底径:一最大径:210㎜口縁～体部上半部残	小砂粒を含む。環元。やや軟質。灰白。	最大径は体部。外面:口縁部は波状文、体部は平行叩き目。内面:同心円の叩き目。	周堀内。
4665	直刀	切っ先欠幅:23～25㎜背の厚さ:7㎜		目ぬき(径:4㎜、長さ:22㎜)残存。	墳丘攪乱土内。
4666	直刀	茎部欠幅:27㎜背の厚さ:7㎜			墳丘攪乱土内。
4667	刀子	刃区の一部			墳丘攪乱土内。

4668	刀　子	全長:192㎜茎部長:72㎜背の厚さ:4㎜			墳丘攪乱土内。
4669	直　刀	刃区の背の一部分背の厚さ:9㎜			墳丘攪乱土内。
4670	直　刀	刃区の一部背の厚さ:5㎜			墳丘攪乱土内。
4671	直　刀	刃区の一部幅:28㎜背の厚さ:9㎜			墳丘攪乱土内。木質部付着。
4672	直　刀	刃区の一部幅:28㎜背の厚さ:7㎜			墳丘攪乱土内。

寺前地区6号古墳（第336～341図、第92表、図版61・65）

この古墳は、上毛古墳総覧に群馬郡佐野村第18号古墳として登載されている。上毛古墳総覧によれば、上佐野字寺前乙497番地に所在する円墳で、高さは10尺、未発掘となっている。この佐野村第18号古墳は、昭和53年頃まで宅地内に存在しており、直径約6m、高さ約2.5mの規模を持っていた。しかし、上越新幹線通過予定地となり、古墳に接して建てられていた住宅が他の場所に移転した際、移転先の盛土として利用されたため墳丘は消滅した。

発掘調査の結果、全長約37mの前方後方墳で、嘗ての墳丘は、後方部盛土の一部である可能性が濃厚となった。本古墳は、寺前地区3号墳の周堀によって後方部をめぐる周堀の一部が切られ、寺前地区1号館跡の堀によって前方部の前方の周堀が切られている。また、調査区外と道路部分に、未調査部分を残している。

墳丘規模は、推定全長37m、前方部長約17m、後方部長約21m、後方部幅約22.5m、推定前方部前端幅24mである。なお、後方部左側に確認面において最大幅4mの不整形を呈する「造り出し」がある。本古墳の存在する部分は、ローム層にまで耕作や攪乱が及んでおり、特に前方部において著しい。そのため前方部前端の明確な位置を確定することは不可能であった。

前方部の形態は、前方部左側が攪乱されているため、この部分を含めた上での判断は不可能であるが、右側の形態を見る限り、前方部は撥形に開いている。なお、前方部前端部分に、撥形に開いたあと、主軸に平行するかのように内側に曲がっている部分があるが、前方部前端が本来このような形態であったのか、あるいは周堀底面付近の掘り方がこのような掘り方ではあるものの、周堀の堀り込み面及び盛土部分においてはこの形態と相違していたのかについては、判断することは不可能である。

周堀は、後方部後方及び後方部右側において幅8.5～9mと同じであるが、前方部前端においては、5～7mと狭くなっている。又、前方部部分の周堀は、右側の調査区内において、後方部周堀よりも5m内側に入って造られている。未調査部分が存在することや、他の遺構に切られているため、推定の域を出るものではないが、周堀形態が左右対称であったとした場合、長軸で52m、前方

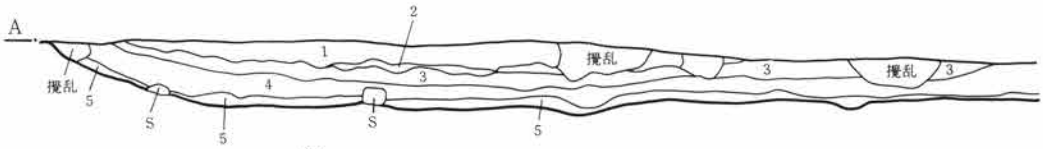
部部分での幅約28m、後方部部分での幅約39mと考えることができる。周堀の掘り方は、海抜89m20cm～89m40cmの間で、ほぼ水平である。なお細かに見ていくと、後方部後方に幅約４m、深さ約10cmのやや深くなった部分あり、又、周堀内では、掘り方中央部から墳丘寄りがやや深くなっている。

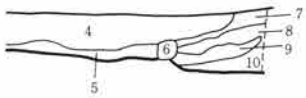
第336図　寺前地区６号古墳残存墳丘図

第337図　寺前地区６号古墳遺構図（１）

出土遺物については、全て周堀覆土中からで、S字状口縁台付甕と推定される4408と4410が後方部右側で墳丘寄りの最も深い部分から底面に密着して出土している以外は、前方部の撥形に開いている部分の周辺を除く全域から、周堀底面から浮いた状態で出土している。

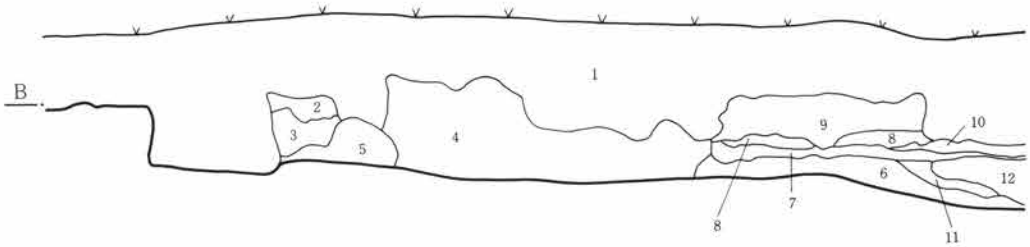
本古墳の築造時期は、出土遺物の様相から古墳時代前期と推定される。　（飯塚）

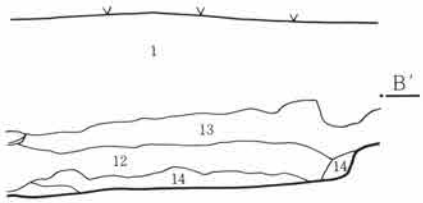




寺前地区6号墳土層説明（A－A′）

1　B軽石と暗褐色土の混合。
2　B軽石
3　暗褐色土　ローム粒を少量含む。
4　暗褐色土とロームとの混合、やや黄褐色に近い。
5　ロームと暗褐色土の混合、ロームの量多い。
6　暗褐色土　ローム粒少量混入。
7　暗褐色土　ローム混入。
8　ロームを多く含む暗褐色土。
9　暗褐色土　ローム、黒褐色土を含む。
10　黒褐色土　ロームブロック、暗褐色土ブロックを含む。

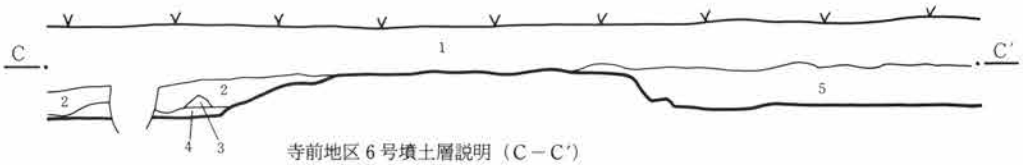




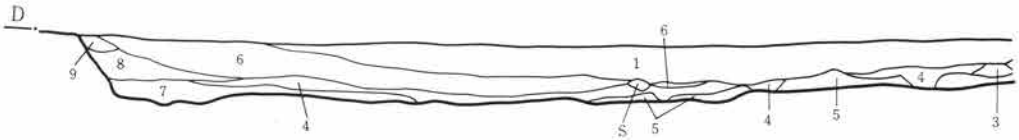
寺前地区6号墳土層説明（B－B′）

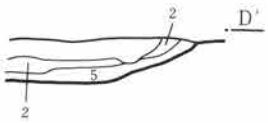
1　耕作土
2　黄褐色土　柔らかい。
3　黄褐色土　小ブロック、暗褐色土の混入。
4　暗褐色土　ローム小ブロックを混入。
5　褐色土　ロームの薄いブロックの混入。
6　褐色土　ローム粒、小石の混入。
7　暗褐色土　ローム粒混入。
8　暗褐色土　B軽石を多量に混入。
9　黒褐色土　多量のB軽石層に混入。
10　暗褐色土　ローム粒及びB軽石の混入。
11　暗褐色土　ロームブロックの混入。
12　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒、小石の混入。
13　褐色土　ロームの混入も多い。
14　褐色土　ロームブロック少量混入。

第338図　寺前地区6号古墳遺構図(2)

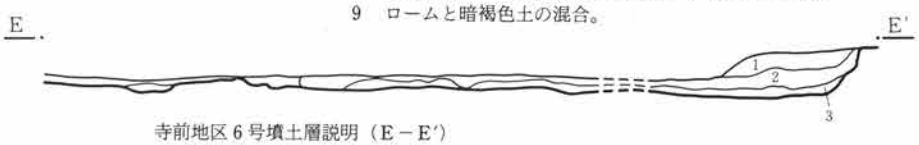


寺前地区６号墳土層説明（C－C′）
1　表土
2　暗褐色土　ローム粒を全体に含む。
3　ロームと暗褐色土の混合。
4　ロームと暗褐色土の混合したもののブロック。
5　暗褐色土　ローム粒、ローム小ブロックを含む。

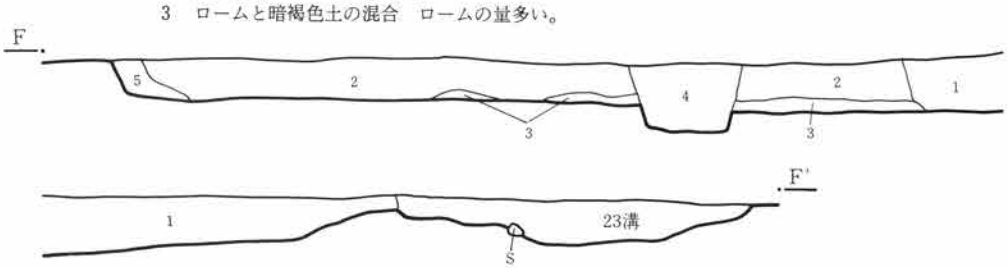




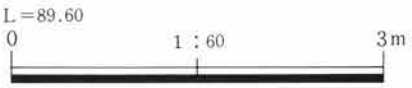
寺前地区６号墳土層説明（D－D′）
1　暗褐色土　ローム粒を全体に含む。
2　ロームを多く含んだ暗褐色土。
3　ロームを多く含んだ暗褐色土ロームを多く含む。
4　ロームを多く含んだ暗褐色土ロームをやや多く含む。
5　ロームと暗褐色土の混合　ロームの方が多い。
6　黒褐色土　ローム粒、ローム小ブロックを含む。
7　ロームが主体で暗褐色土が少量全体的に混合したもの
8　暗褐色土　ローム粒全体的に混合、やや黄色っぽい。
9　ロームと暗褐色土の混合。



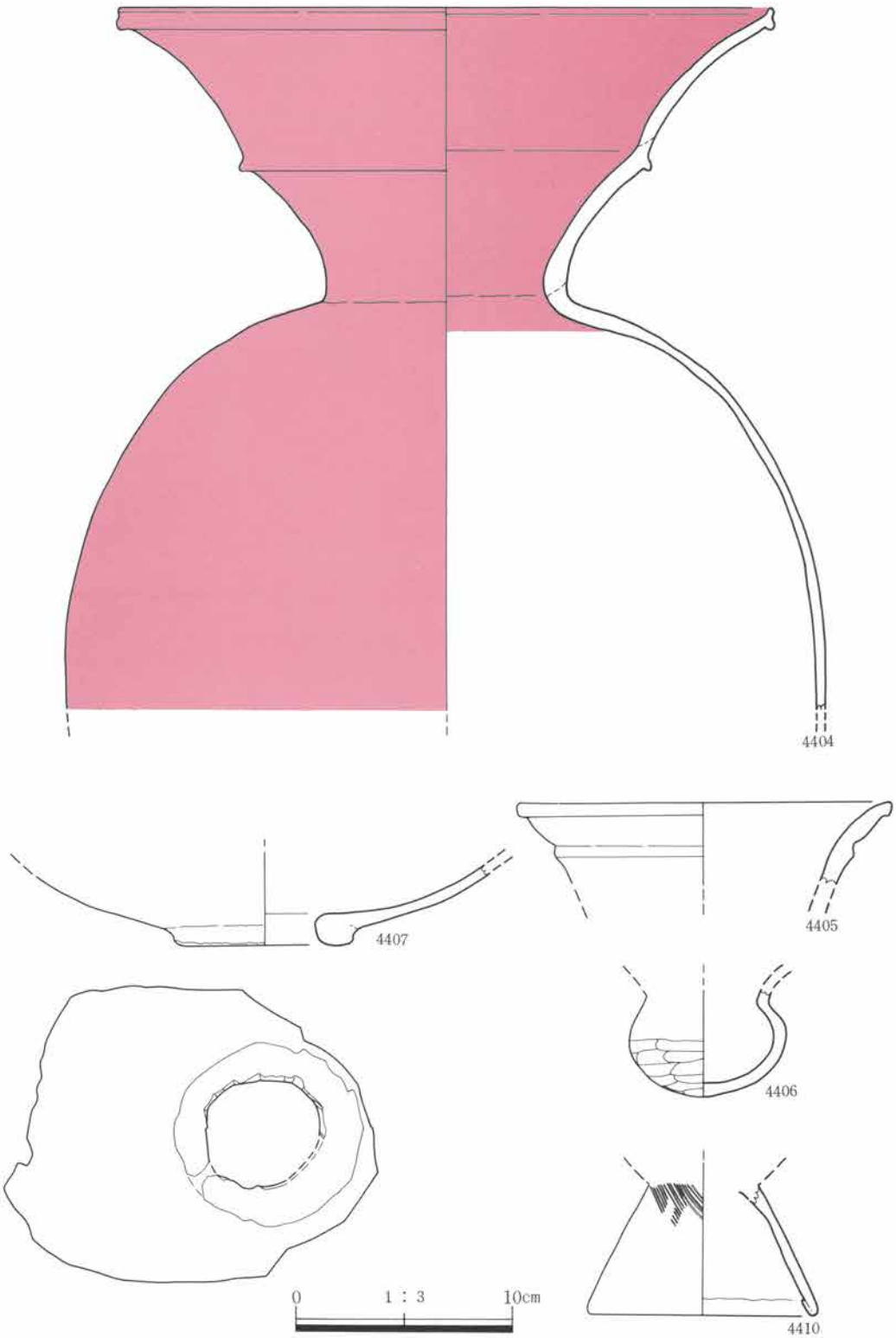
寺前地区６号墳土層説明（E－E′）
1　暗褐色土　ローム粒を含む。
2　黒褐色土　ローム粒を含む。
3　ロームと暗褐色土の混合　ロームの量多い。



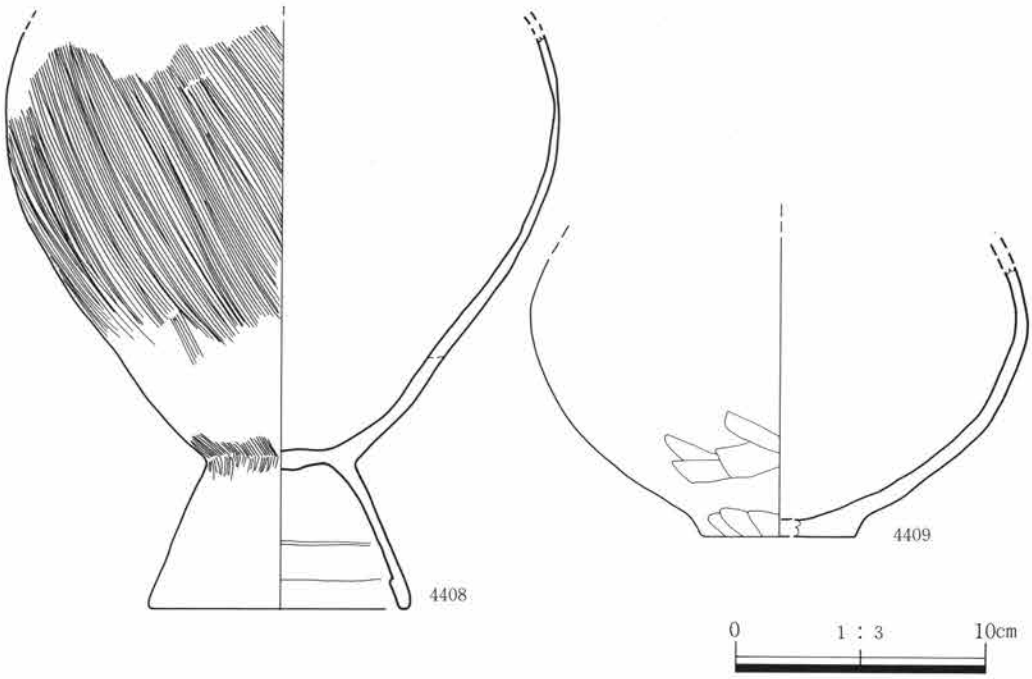
寺前地区６号墳土層説明（F－F′）
1　攪乱層
2　暗褐色土　ローム・黒褐色土の小ブロックを含む。
3　ロームと暗褐色土の混合。
4　暗褐色土　柔らかい。
5　ロームと暗褐色土の混合　ロームの量多い。



第339図　寺前地区６号古墳遺構図(3)



第340図　寺前地区６号古墳遺物図（１）



第341図　寺前地区６号古墳遺物図(2)

第 92 表　寺前地区６号古墳遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4404	壺 土師器	器高:(318㎜)口径:[302㎜]底径:一口縁部～体部上半½残	小砂粒を僅かに含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。外面及び口縁部内面は赤彩。	有段口縁。口縁部は大きく開く。内外面:なで。外面及び口縁部内面は、なで後赤色塗彩。	周堀内。
4405	壺 土師器	器高:(37㎜)口径:[172㎜]底径:一口縁部上半¼残	砂粒を含む。酸化。やや軟質。橙。	有段口縁。内外面:なで。	周堀内。
4406	坩 土師器	器高:(47㎜)口径:一底径:一最大径:66㎜口縁部欠	砂粒を多く含む。酸化。やや軟質。明黄褐。	丸底。外面:篦削り後、篦磨き。内面:なで。	周堀内。
4407	壺 土師器	器高:(32㎜)口径:一底径:82㎜体部下端～底部のみ残	小砂粒を僅かに含む。酸化。やや軟質。鈍い黄橙。一部に赤色塗彩。	底部に焼成前穿孔。内外面:なで。	周堀内。4404と同一個体の可能性あり。
4408	台付甕 土師器	器高:(230㎜)口径:一底径:104㎜最大径:221㎜体部～台部½残	砂粒を多く含む。酸化。軟質。橙。	台部折り返し。内外面:なで後、体部に刷毛目。	周堀内。

4409	壺 土師器	器高:(117㎜)口径:一底径:[62㎜]最大径:[198㎜]体部下半～底部¼残	砂粒を含む。酸化。軟質。浅黄。一部に黒斑。	外面:篦磨き。内面:なで。	周堀内。
4410	台付甕 土師器	器高:(59㎜)口径:一底径:[102㎜]台部¼残	小砂粒を含む。酸化。やや軟質。鈍い橙。	台部折り返し。内外面:なで後、外面上端に刷毛目。	周堀内。

寺前地区７号古墳（第342～345図、第93表）

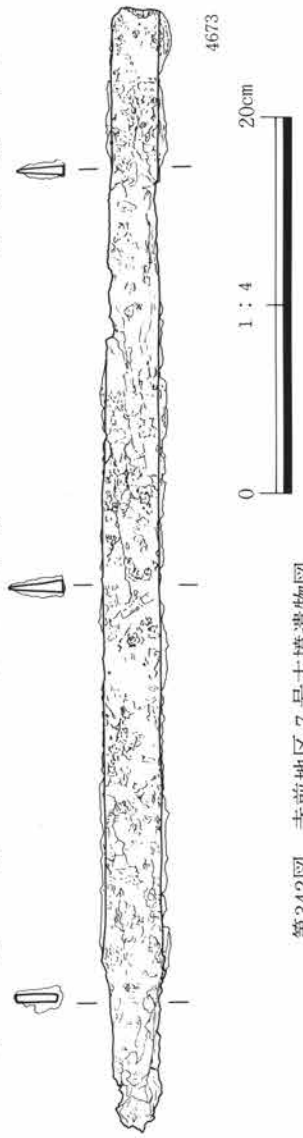
この古墳は、上毛古墳総覧に群馬郡佐野村第20号墳として登載されている。上毛古墳総覧によれば、上佐野字寺前乙513番地に所在する前方後円墳で、明治30年に発掘された。しかし主体部の状況や出土遺物については、上毛古墳総覧には記載がなく、地元にも伝えられていない。現存する墳丘は、高さ3.5m・東西25m・南北13mの楕円形で、南側が大きく削られた形跡を残している。又、北側には、墳丘の裾に沿って約20cmほどの低い部分が帯状にあり、周堀と考えられる。

発掘調査においては、東側周堀の一部が確認された。７号溝・９号溝・28号溝と重複しているが、これらの溝よりも古い。周堀には、45.5mの辺があり、両端で直角に曲がっているものと推定される。確認面であるローム上面からの深さは、35cm～50cmで、北側が深く南側コーナー付近では浅くなっている。周堀底面は、ほぼ平坦に掘られ、底面から約40cm上方には、浅間Ｂ軽石が約20cmの厚さに堆積している。

本古墳の墳形については、周堀及び残存墳丘の形態から、方墳となる可能性が考えられるが、墳丘は崩されている部分が多く、又、確認した周堀も一部であることから、墳形確定には確認調査が必要と思われる。

出土遺物は、周堀確認部分のほぼ中央から、底面に密着して直刀１本が出土している。なお、土器・埴輪等の出土は皆無であった。

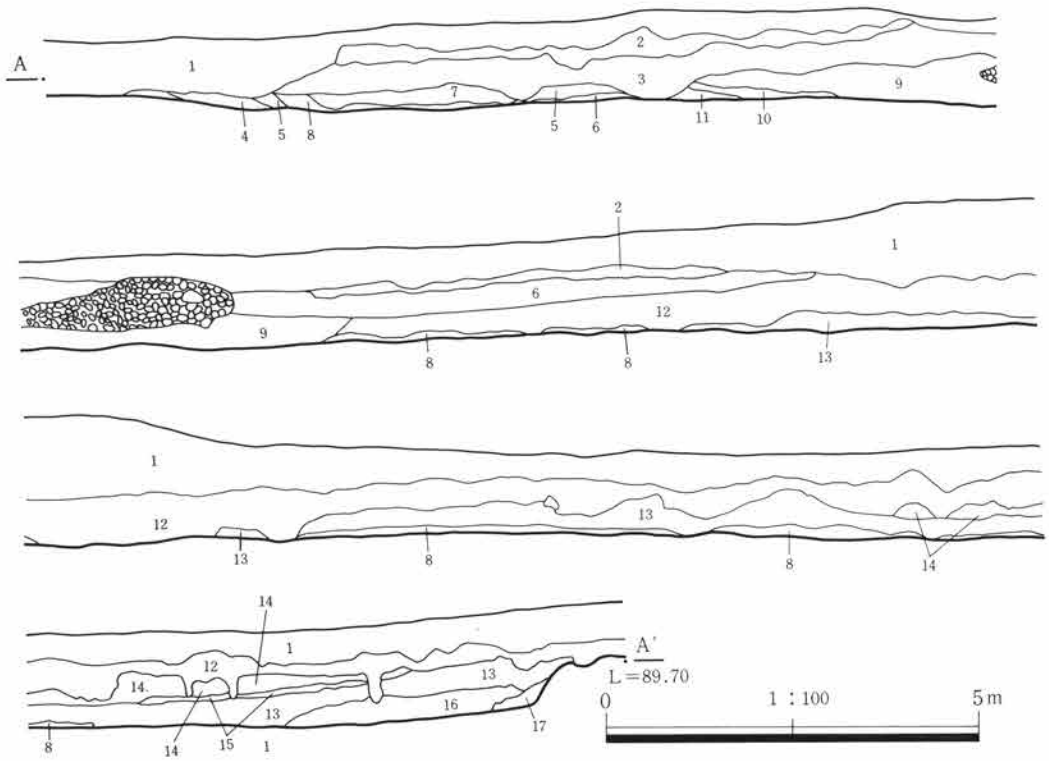
本古墳の築造時期は、年代決定の根拠となる遺物が出土していないことから、明らかにすることはできなかった。　（飯塚）



第342図　寺前地区７号古墳遺物図

第 93 表　寺前地区 7 号古墳遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4673	直　刀	切っ先及び茎部の一部欠幅:33㎜背の厚さ:7㎜			周堀底面直上。

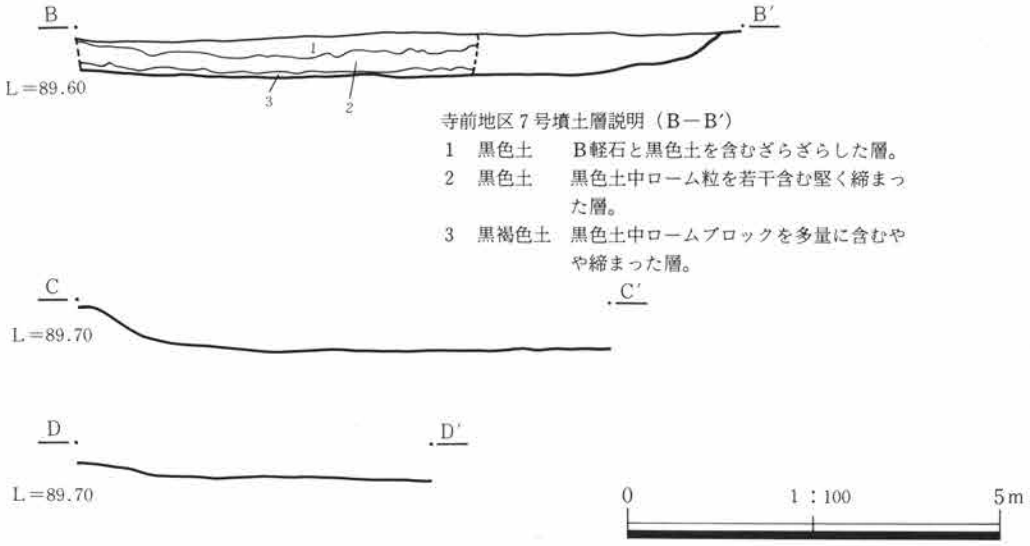


寺前地区 7 号墳土層説明（A－A'）

1　表土
2　A軽石層
3　黄褐色土　ローム粒と暗褐色土の混合第1層よりもロームが多い。
4　黄褐色土　ロームと暗褐色土の混合。
5　暗褐色土　ローム粒ローム小ブロック含む。
6　灰色がかった暗褐色土　ローム粒B軽石含む。
7　黒味がかった褐色土　B軽石を含み柔らかい。
8　ロームと暗褐色土が全体的に混合したもの、固く締まっている。
9　暗褐色土　B軽石を含んだ暗褐色土柔らかく灰色ががっている。
10　暗褐色土　B軽石とローム粒を少量含む。
11　暗褐色土　ローム粒を少量含む。
12　暗褐色土　B軽石を全体に含み、柔らかい。
13　暗褐色土　比較的堅く締まっており、ローム粒少量含む。
14　黒褐色土　B軽石を含みざらざらしている。
15　B軽石層
16　黒褐色土　粒子細かく堅く締まっている。
17　黄褐色土　暗褐色土とローム粒が全体に混合したもので締まっている。

第343図　寺前地区 7 号古墳遺構図(2)

第344図　寺前地区７号古墳遺構図（１）

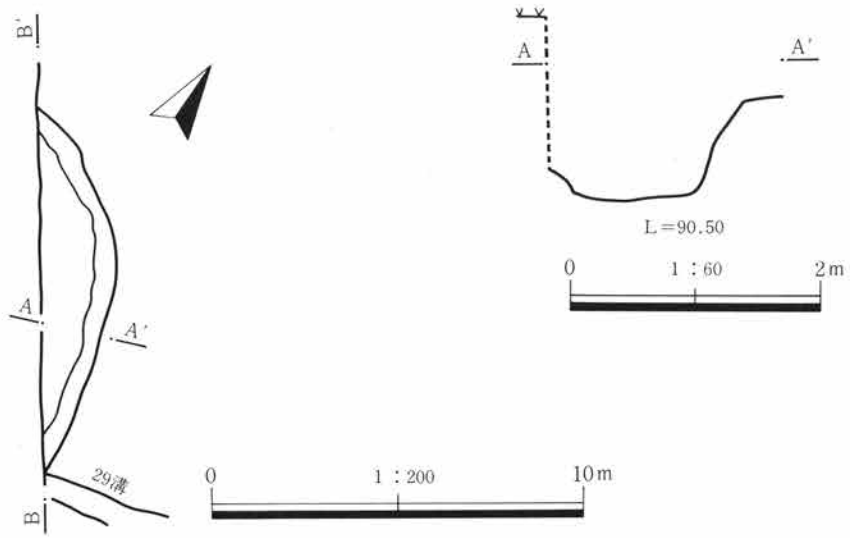


第345図　寺前地区７号古墳遺構図(3)

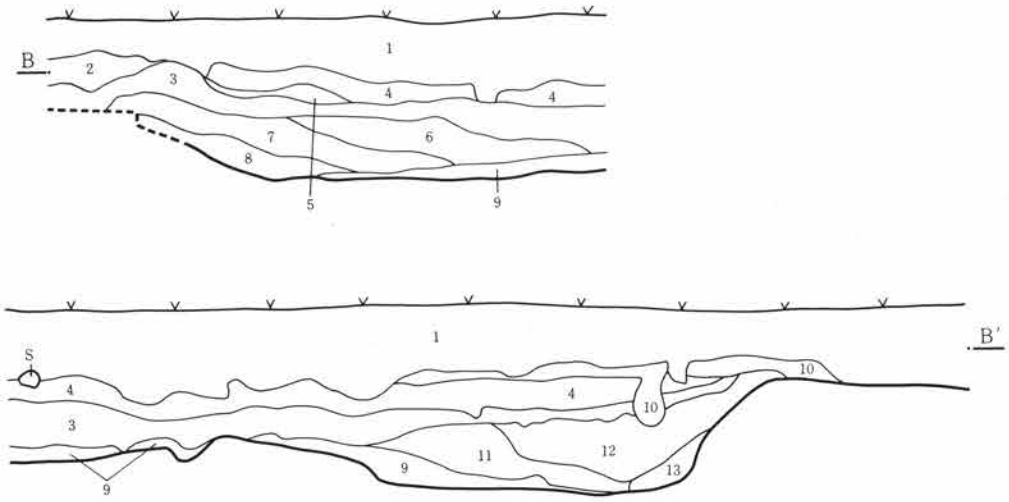
寺前地区８号古墳（第346・347図）

周堀の一部が確認された。確認された円弧から直径を推定すると、13m前後になるものと考えられる。周堀確認面であるローム層上面からの深さは、50cm前後で、底面はやや凹凸がある。出土遺物は皆無であった。

本古墳の築造時期は、年代決定の根拠となる出土遺物がないため、不明である。　（飯塚）



第346図　寺前地区８号古墳遺構図(1)



寺前地区8号墳土層説明

1　表土
2　暗褐色土　B軽石・ローム粒を少量含む。
3　ローム粒と暗褐色土の混合。
4　暗褐色土　ローム粒・軽石を全体に含む。
5　黒褐色土
6　黒褐色土　ローム粒を含む。
7　黒褐色土　ローム粒含まず堅く締まっている。
8　黒褐色土　ローム小ブロックを少量含む。
9　黒褐色土　ローム粒を多く含む。
10　B軽石主体、暗褐色土が少量混合。
11　暗褐色土　ローム粒を全体に含む。
12　暗褐色土
13　黒褐色土　ローム小ブロックを含む。

第347図　寺前地区8号古墳遺構図(2)

寺前地区9号古墳（第348～350図、第94表）

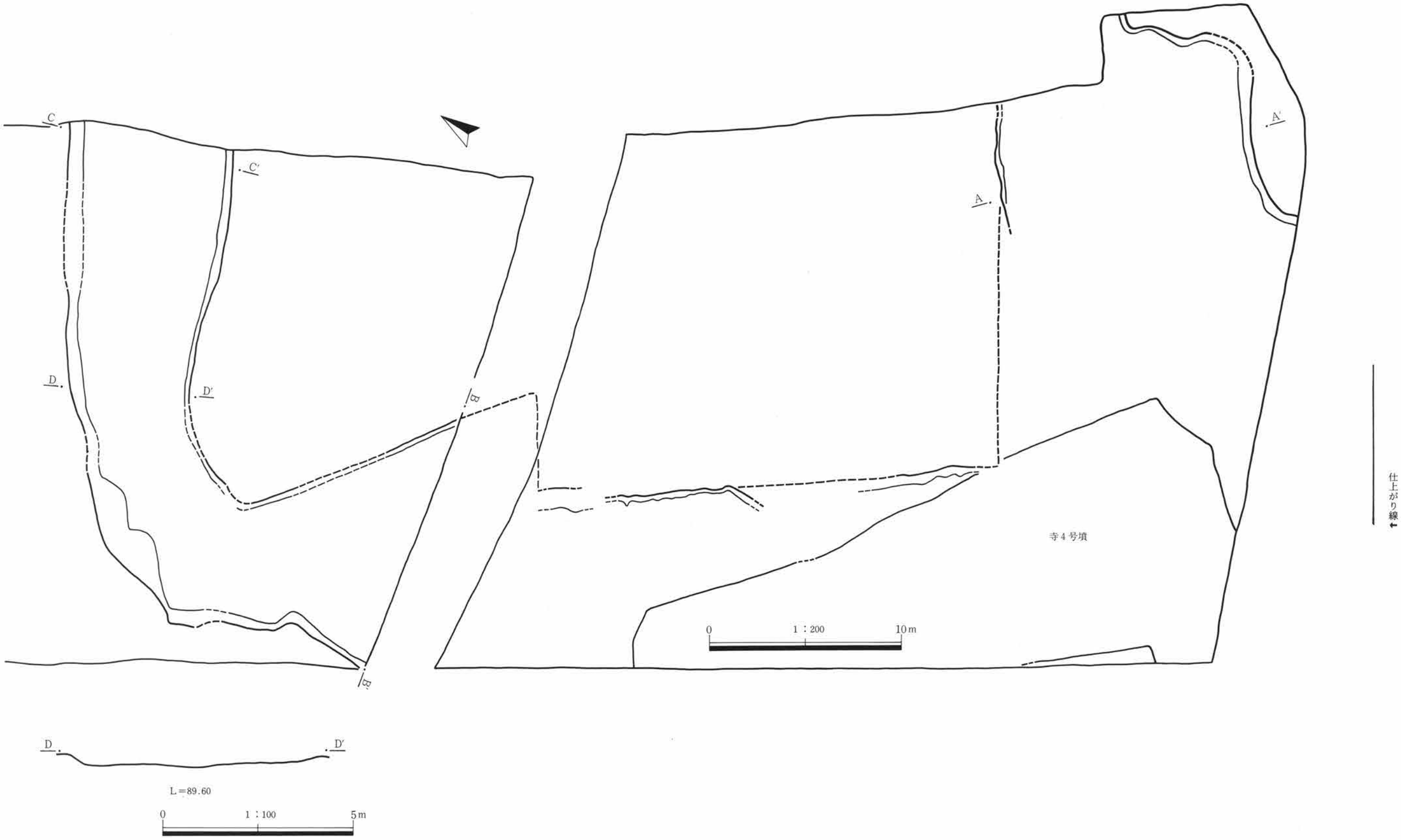
この古墳は、寺前地区7号古墳（長山古墳）に周堀の一部を切られている。墳丘は存在せず、数条の溝及び多数の土坑が、嘗て墳丘が存在した部分にも造られている。このことから、本古墳の墳丘は、これらの溝や土坑群が造られる中世末～近世初頭までには、消滅していたものと考えられる。

本古墳は、墳丘全長42mの前方後方墳である。後方部の長さと幅、前方部前端幅、縊部幅については、調査区域外に墳丘部が連続していること、道路部分が未調査であること等により、明らかではない。

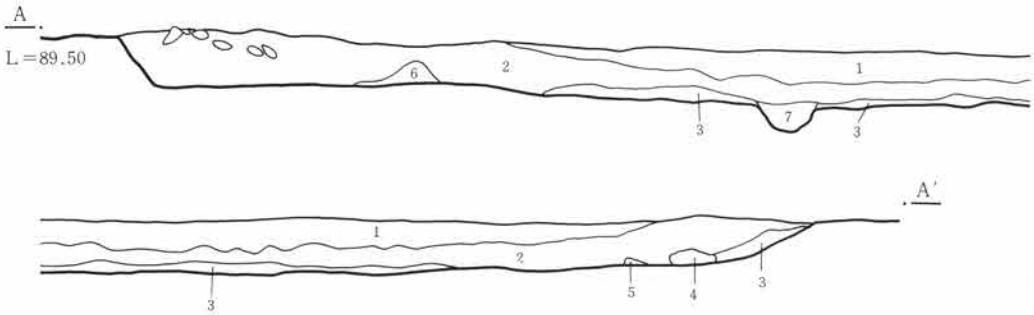
周堀は、未調査部分を多く残しており、平面形を明らかにすることはできなかった。しかし、調査区域内で観察すると、後方部後方の幅が約6mであるのに対して、前方部前方の周堀は、3～4mとやや狭くなっており、周堀は、前方部が狭く、後方部が広くなっていることがわかる。周方の深さは、確認面であるローム面から15cm～35cmで、底面はほぼ平坦である。

出土遺物は、全て周堀内からの出土で、中小の破片である。出土位置については、周堀全域から出土しているが、後方部右側周堀にやや集中して見られた。

本古墳の築造時期は、古墳時代前期と考えられる。（飯塚）

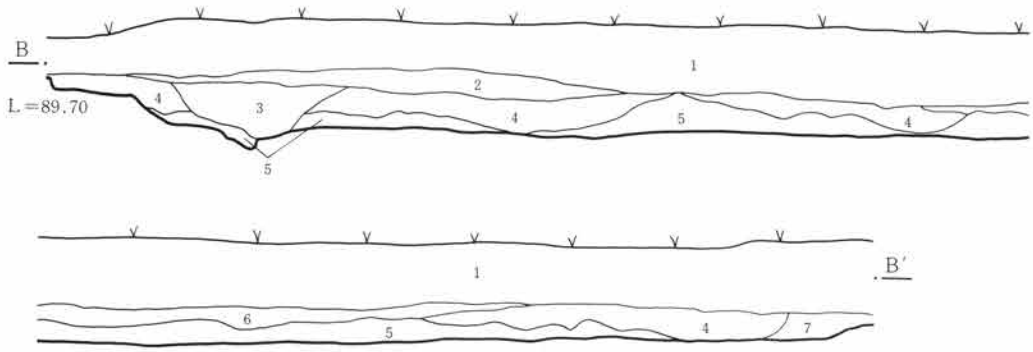


第348図　寺前地区9号古墳遺構図（1）



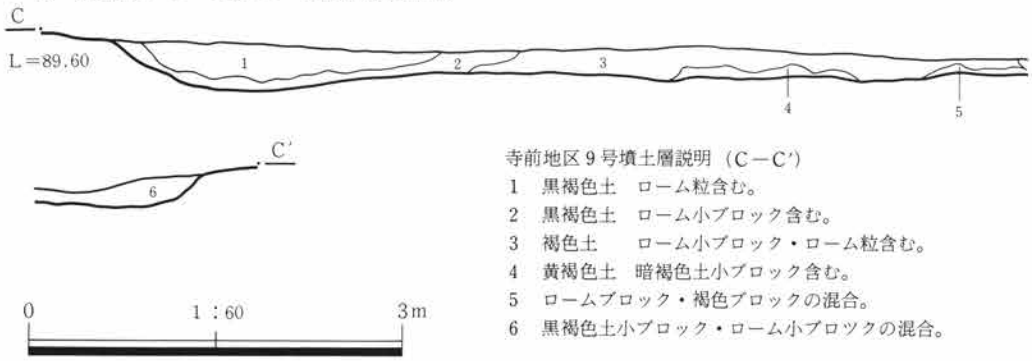
寺前地区９号墳土層説明（A－A′）

1　B軽石層
2　暗褐色粘質土　ローム小粒含む。
3　黒褐色粘質土　ロームと暗褐色土が混合したもの。
4　黒褐色粘質土
5　ロームブロック
6　灰褐色土
7　暗褐色粘質土　ロームと暗褐色土の混合、１号溝



寺前地区９号墳土層説明（B－B′）

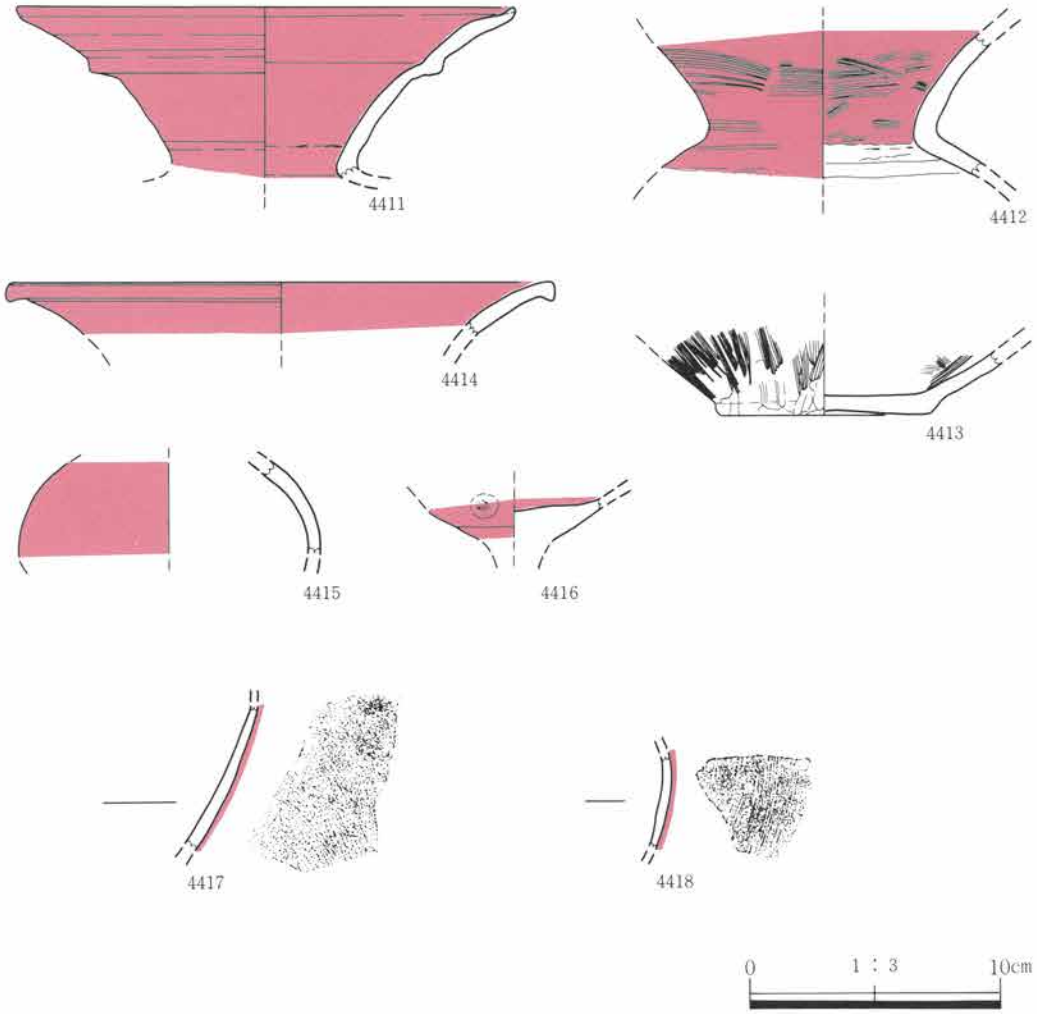
1　表土
2　暗褐色土　B軽石を含む。
3　暗褐色土　やや黒っぽい。
4　暗褐色土　ローム粒僅かに含む。堅く締まっている。
5　暗褐色土　ローム粒、ロームと暗褐色土が混合したもののブロックを多く含む。
6　暗褐色土　B軽石を多く含む。
7　暗褐色土　ローム粒、ローム小ブロックをやや多く含む。



寺前地区９号墳土層説明（C－C′）

1　黒褐色土　ローム粒含む。
2　黒褐色土　ローム小ブロック含む。
3　褐色土　ローム小ブロック・ローム粒含む。
4　黄褐色土　暗褐色土小ブロック含む。
5　ロームブロック・褐色ブロックの混合。
6　黒褐色土小ブロック・ローム小ブロツクの混合。

第349図　寺前地区９号古墳遺構図(2)



第350図　寺前地区９号古墳遺物図

第 94 表　寺前地区９号古墳遺物観察表

番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4411	壺 土師器	器高：―口径：198㎜ 底径：―最大径：―口縁部¼残	小砂粒を含む。酸化。やや硬質。内外面：赤色塗彩。	有段口縁。口縁部ラッパ状に開く。内外面：なで後、赤色塗彩。	周堀内。
4412	壺 土師器	器高：―口径：―底径：―最大径：―頸部径：91㎜頸部¼残	胎土粒子細かく、砂粒を少量含む。酸化。軟質外面及び口縁部内面：赤彩。	頸部「く」の字状。外面及び口縁部内面：赤彩後、なで。体部内面：なで。	周堀内。

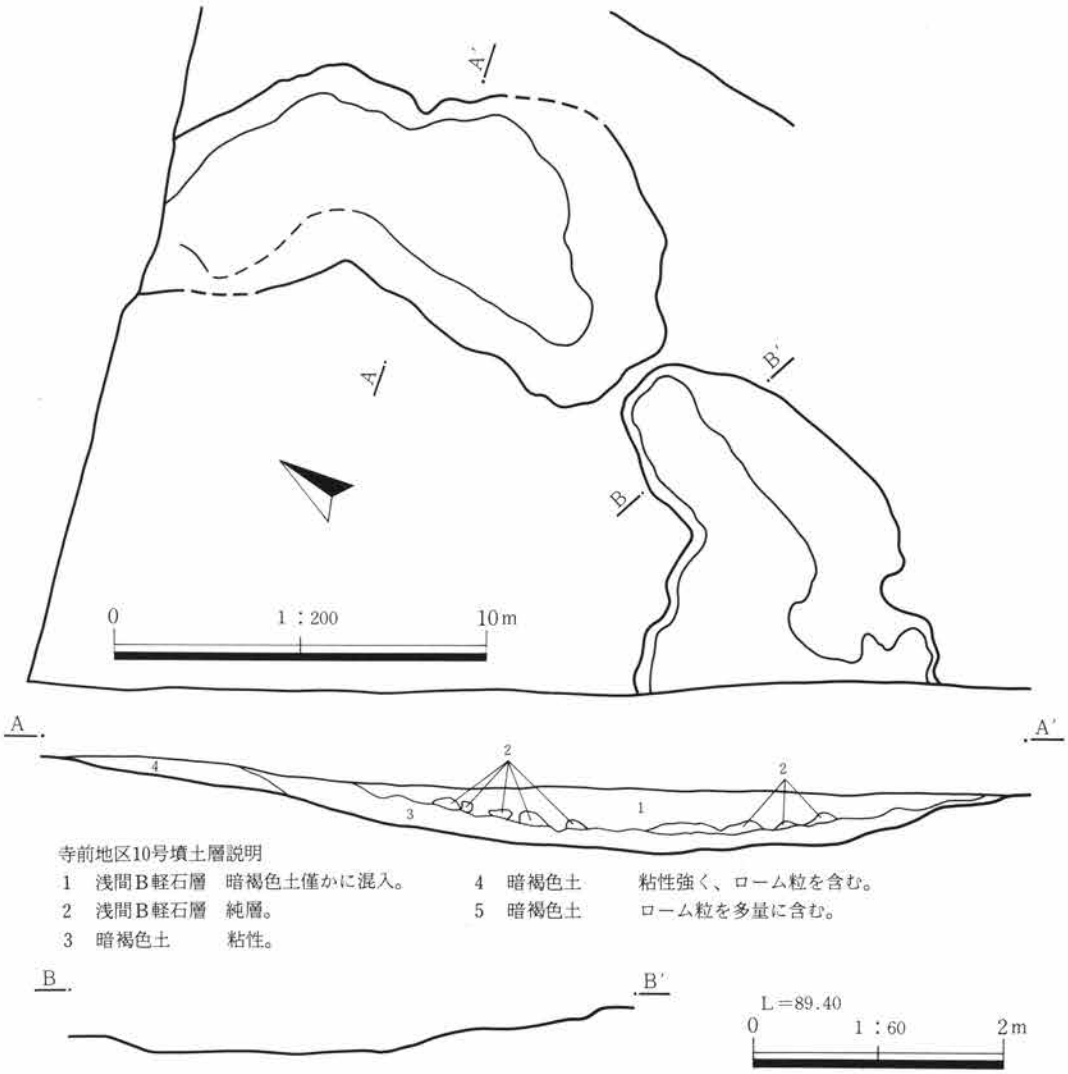
4413	壺 土師器	器高:一口径:一底部:84mm最大径:一最下部～底部のみ残	小砂粒を多く含む。酸化。硬質。赤褐。	外面:篦磨き。内面:刷毛。底部:篦削り。	周堀内。
4414	壺 土師器	器高:一口径:215mm底径:一最大径:一口縁の一部残	砂粒を含む。酸化。軟質。内外面:赤色塗彩。	口縁部大きく開く。内外面:赤彩後なで。	周堀内。
4415	壺 土師器	器高:一口径:一底径:一最大径:一体部の一部残	砂粒を含む。酸化。軟質。外面:赤色塗彩。	内外面:なで。外面:なで後、赤彩。	周堀内。
4416	高杯 土師器	器高:一口径:一底径:一最大径:一杯部の一部残	小砂粒を含む。酸化。軟質。内外面:赤色塗彩。	内外面:なで後、赤彩。杯部最下部に焼成後、穿孔。	周堀内。
4417	甕 土師器	器高:一口径:一底径:一最大径:一体部下端の一部残	小砂粒を少量含む。酸化。やや軟質。外面:赤色塗彩。	外面:縦刷毛後、赤彩。内面:なで。	周堀内。S字状口縁台付甕か。
4418	甕 土師器	器高:一口径:一底径:一最大径:一体部中央の一部残	小砂粒を少量含む。酸化。やや軟質。外面:赤色塗彩。	外面:縦刷毛後、赤彩。内面:なで。	周堀内。4417と同一個体か。

寺前地区10号古墳（第351・352図、第95表）

本古墳は、墳丘は消滅しており、嘗ての墳丘部に11溝・13溝・17溝・18溝等が造られている。墳形については、円墳となる可能性が強い。なお、寺前地区4号墳（長山古墳）の周堀と本古墳の周堀が重複する可能性が考えられるが、約4.5mの未調査の道路部分を挟んでおり、重複の有無・新旧関係等を明らかにすることはできなかった。

周堀は、幅4m～6mで、約50cmのブリッジを持つ。周堀の掘り方は、確認面であるローム面から35cm～55cmの深さで、断面は皿状を呈する。

出土遺物については、全て埴輪で、周堀内よりの出土である。本古墳の築造時期は、古墳時代後期と考えられる。（飯塚）

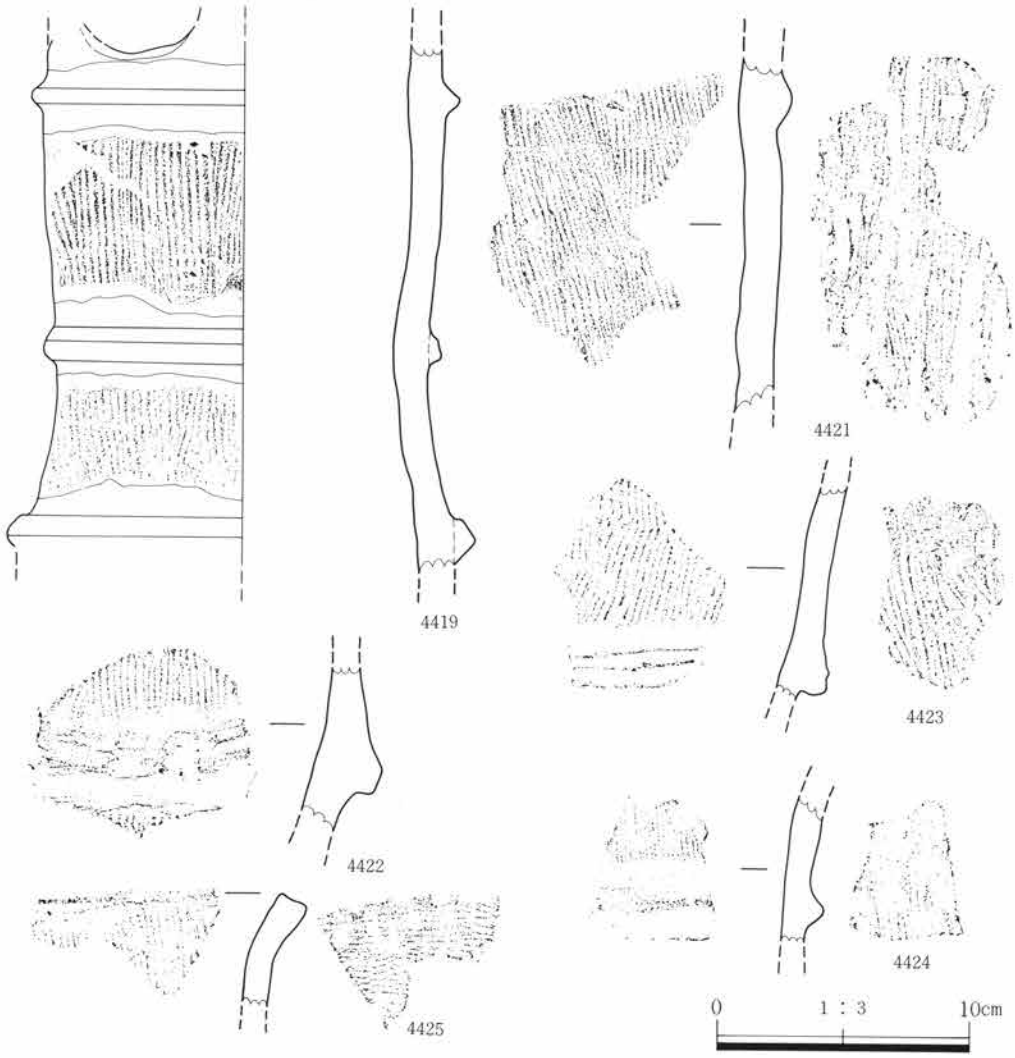


第351図　寺前地区10号古墳遺構図

第 95 表　寺前地区10号古墳遺物観察表

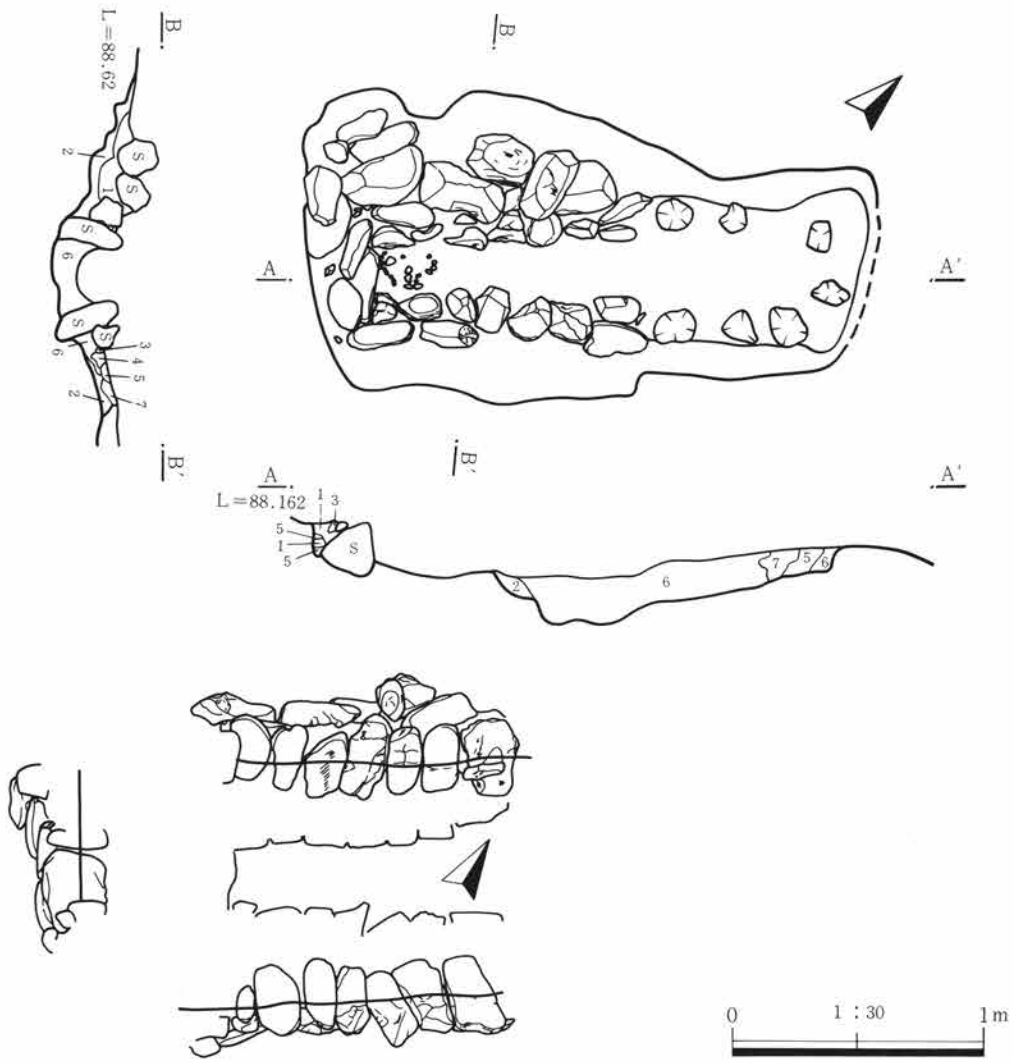
番号	器種 土器種	法量(器高・口径・底径・最大径)・遺存	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	出土状態 備考
4419	埴輪 (形象)	円筒部分の⅓	径3～5㎜の小石・片岩を含む。酸化。焼成良好。赤褐。	円筒縊れる。外面:縦刷毛目。内面:なで。残存部の第2段凸帯より上方全体に、タール状物質の付着あり。塗られていた可能性が強い。	周堀内。
4421	埴輪 円筒	破片	砂粒を含む。酸化。焼成良好。鈍い褐。	外面:縦刷毛目。内面:刷毛によるなで。	周堀内。

4422	埴輪（形象）	破片	砂粒を含む。酸化。焼成普通。赤褐。	外面：縦刷毛目。内面：なで。	周堀内。
4423	埴輪（不明）	破片	砂粒を含む。酸化。焼成普通。赤褐。	外面：縦刷毛目。内面：刷毛によるなで。	周堀内。
4424	埴輪円筒	破片	砂粒を含む。酸化。焼成良好。赤褐。	外面：縦刷毛目。内面：刷毛によるなで。	周堀内。
4425	埴輪円筒	口縁部破片	小石・砂粒を含む。酸化。焼成良好。赤褐。	外面：縦刷毛目。内面：横刷毛目。	周堀内。



第352図　寺前地区10号古墳遺物図

(6) 石　　槨



第353図　Ⅰ地区Ｂ区１号石槨遺構図

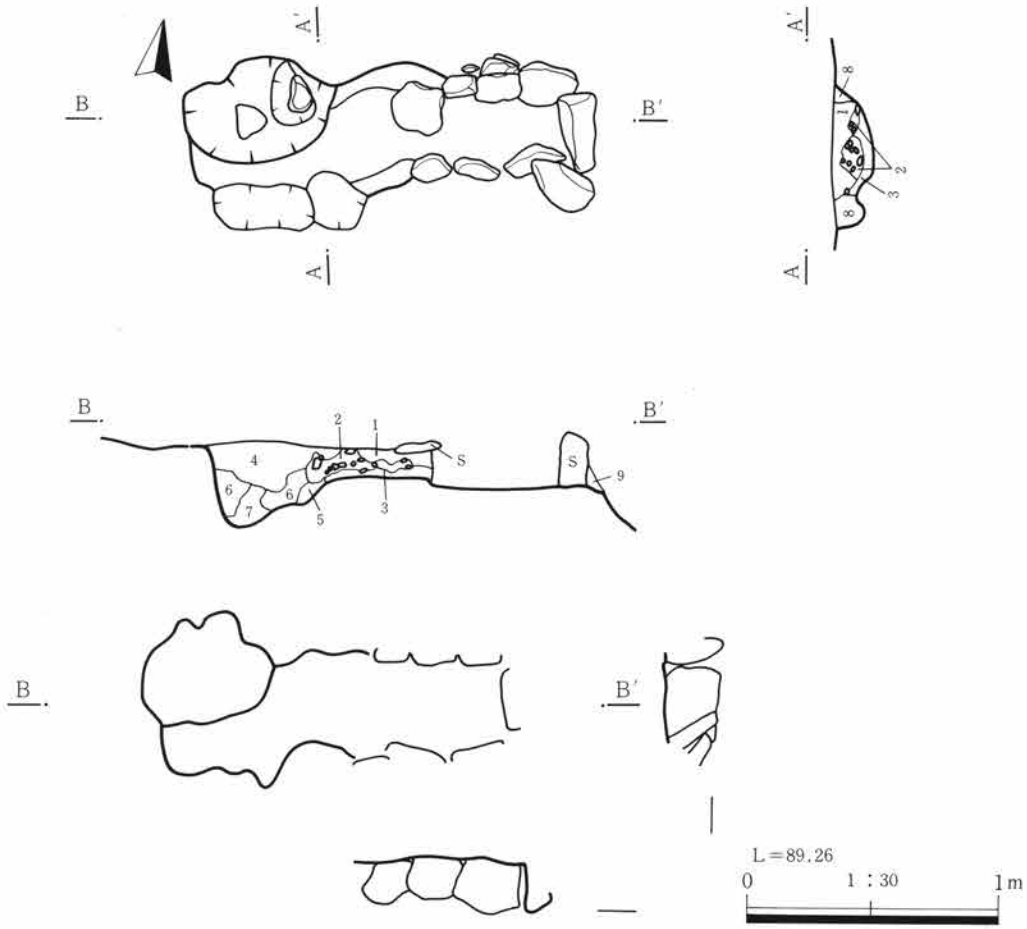
Ⅰ地区Ｂ区１号石槨（第353図、図版66）

本石槨は、Ｂ区25号住居跡の埋没後に造られている。盛土・蓋石は確認できなかった。北側には、石が抜き取られた跡が見られ、全体の半分強の残存である。主軸はＮ－43°－Ｅとなる。石槨の石の抜き取り痕から、内法を推定すると、25.5cm×172.5cmとなる。

石槨は、約1.2m×約22.5mの不整長方形の掘り方の中に、更に穴を掘り基底を据えている。側

壁は、縦長の河原石を横に並べており、約半分が埋め込まれていた。なお、石と石との間には、粘土を詰めて補強してある部分も多い。

石槨内からは、遺物は発見されなかった。従って、本石槨の時期は、B区25号住居跡の古墳時代前期よりは新しいということ以外は不明である。（飯塚）



第354図　I地区D区1号石槨遺構図

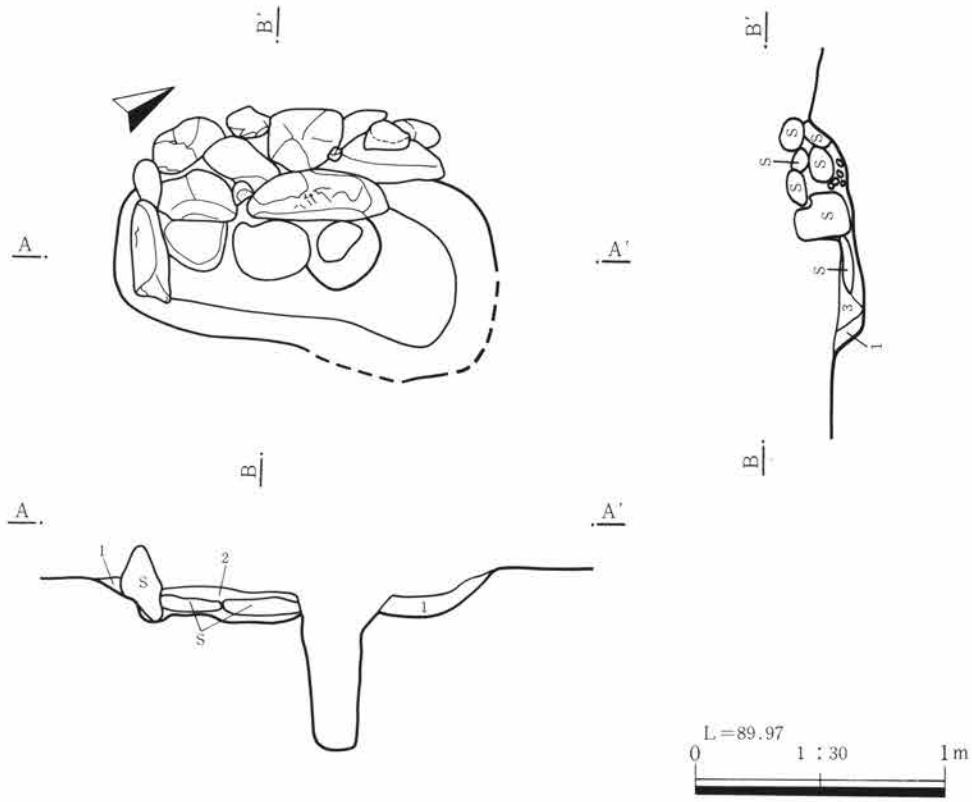
I地区D区1号石槨（第354図、図版66）

本石槨は、C区1号館跡の堀の内側6cmに存在する。堀に最も接する部分の土層断面により、C区1号館跡よりも本石槨の方が古いと判断できる。本石槨は、全体の約半分が石を抜かれているが、掘り方が残っており、規模を推定すると、内法は30cm×135cmとなる。主軸はN－72°－Eであ

る。石材は河原石で、扁平な面を内側にしており、地山を掘り凹めて据えている。石槨内部の高さは、現状で約23cmである。

出土遺物は皆無である。構築時期もＣ区１号館跡よりは古いということ以外明らかではない。

（飯塚）



第355図　寺前地区１号石槨遺構図

寺前地区１号石槨（第355図）

本石槨は、１号古墳の北側に位置している。他の遺構との重複関係では、本石槨の中央部に径25cm深さ60cmの新しいピットが存在する。本石槨は、全体の約半分が石を抜かれているものの、掘り方が残っており、内法を推定すると、約110cm×約30cmとなる。主軸は、N－27°－Eである。

掘り方は、約1.5m×約68cmの隅丸長方形を呈する。深さは約15cmで、側面には河原石の平らな面を内側に据え、底面には偏平な河原石を敷いている。石槨内からは、遺物は全く発見されなかった。

（飯塚）

第３章　調査の成果と問題点 ― 縄文・古墳時代 ―

縄　文　時　代

第１節　遺構について

下佐野遺跡からは、中期中葉阿玉台II式期からの後期前半堀之内II式期にかけての住居跡18軒、土坑42基が確認された。これらの遺構は、烏川の崖線際に沿う南北約500mの間に分布するものであるが、Ⅰ地区Ｂ区が面する烏川にむかう間口約100mの凹地形で南北２群に分けて考えられる。この２群は、凹地形で画されるだけでなく、遺構外からの遺物を加えて考えると形成時期を異にする別の集落であった可能性がある。特に、南群については、同一占地内にありながらも、加曽利ＥII式期と同ＥIII式期に各々画期をもって、地点を異にして集落を形成していたことがわかる。この時期と地点を異にした集落の形成は、本遺跡付近での倉賀野万福寺遺跡（註１）の例や県遺跡台帳登載遺跡地（註２）の存在からすると、烏川という比較的大きな河川に面した起伏に乏しい前橋台地の崖端部での遺跡立地の特徴とできよう。対岸の観音山丘陵中にある同時期の大平台遺跡（註３）でも同様な例が推定されているが、周囲が谷で画されているのに対して、本遺跡は長い崖線際を自然地形で画されることもなく半ば時期毎に地点を移動しており、対称的な例として挙げられる。

１．集落の占地

遺構の分布は、大きく南北２群に分けて考えられるが南群は、第828図に示したII地区７区からⅠ地区Ａ区までの遺構で構成されるもので、中期中葉勝坂II式頃から後期前半堀之内II式頃にかけての集落である。このうち、加曽利ＥII式期と同ＥIII式期に画期があり、地点をずらして集落を形成している点に特徴がある。一方の北群は、Ⅰ地区Ｃ区での阿玉台II式期に属す15住が唯一の遺構であるが、このほかに遺構外から時期差のある遺物が多く出土しており、南群とは占地と時期を異にする別の一群と考えられる。

両群は、崖端部のうちでも標高86.50m以上に堆積するローム層上（註４）にあり、遺跡範囲の東西幅についてもこの中に収まるものと推定される。又、両群は後代の古墳時代の遺構分布とほぼ一致するが、現在の地形でもローム層の分布する崖端部が一段高いことからすると、当時は河川に沿った島状の微高地で安定した環境にあったと言える。

２．集落の変遷

遺構数が多い南群について変遷をのべる。遺物の初現は、前期黒浜式・諸磯ｂ・ｃ式が少量あるが、安定した集落形成は中期後半加曽利ＥII式期、同ＥIII式期になってで、拡散して後期へと

移行する。変遷上の特徴は、土器の分析と一致する様に型式的に連続せず、特に加曽利ＥII式期と同ＥIII式期の様に集落の中心を移動していることが挙げられる。この様なあり方からすると、安定した環境ゆえに同一地内に、不連続的に集落が形成され４つの画期があったと考えられる。

１．勝坂式　遺構は、７区92、114土坑２基が散在している。114土坑は完形深鉢３個を入れ子状で埋設したもので、「焼町系土器」勝坂II式が共伴する。中期集落への先駆をなすが、Ｉ地区Ｃ区15住や土坑の例からすると北群に中心がある。

２．加曽利ＥII式期　遺構は、推定環状にＡ57～59、76、100住と７区11住、Ａ75、76、86、87、93、122、247土坑が分布する。住居形状は、次のＥIII式期と比較するとやや大型の円形、６本柱穴、石囲炉を基本とする。59住は、炉脇に帯状の敷石と大型深鉢を使用した伏甕がある。76住は、屋外にむかって直線的に並ぶ正位の埋甕２基があり、異系統の要素が強い。２例だが、ＥIII式期の屋外埋甕の盛行と対称的に屋内施設にこの期の特徴がある。

３．加曽利ＥII～ＥIII式期　遺構は、ＥII式期からの中心を南に移してＡ98、7区34、8区１、３住と83、100、118、143、225、7区91、98、99、100土坑等がある。全体は崖端にむかう半円状で外側に住居、内側に土坑がある。土坑の中には、逆位の屋外埋甕３基があり、その盛行期の位置付けと住居と画した中心への占地傾向が窺える、土坑は、次のＥII式期になると、崖端部に開口する小さな谷戸寄りに集中し、７区42住内土坑からは埋甕に代わる石棒、異型土器が出土しており、前代とは性格を変化していくのであろうか。住居形状も、ＥII式期と比較すると円形と楕円形に近いものが混在し、柱穴が６～８本、炉形態が石囲炉から埋甕炉へと変化する。

４．称名寺、堀之内期　遺構は、２つの時期を合わせて住居跡３軒、土坑８基がある。前代までの中心域からすると、やや外れたＡ区北寄りに集中しており、集落としての小規模化とその中での占地の継続性が窺える。遺物は加曽利Ｂ２式まであるが前期同様、遺構は確認されていない。

（女屋）

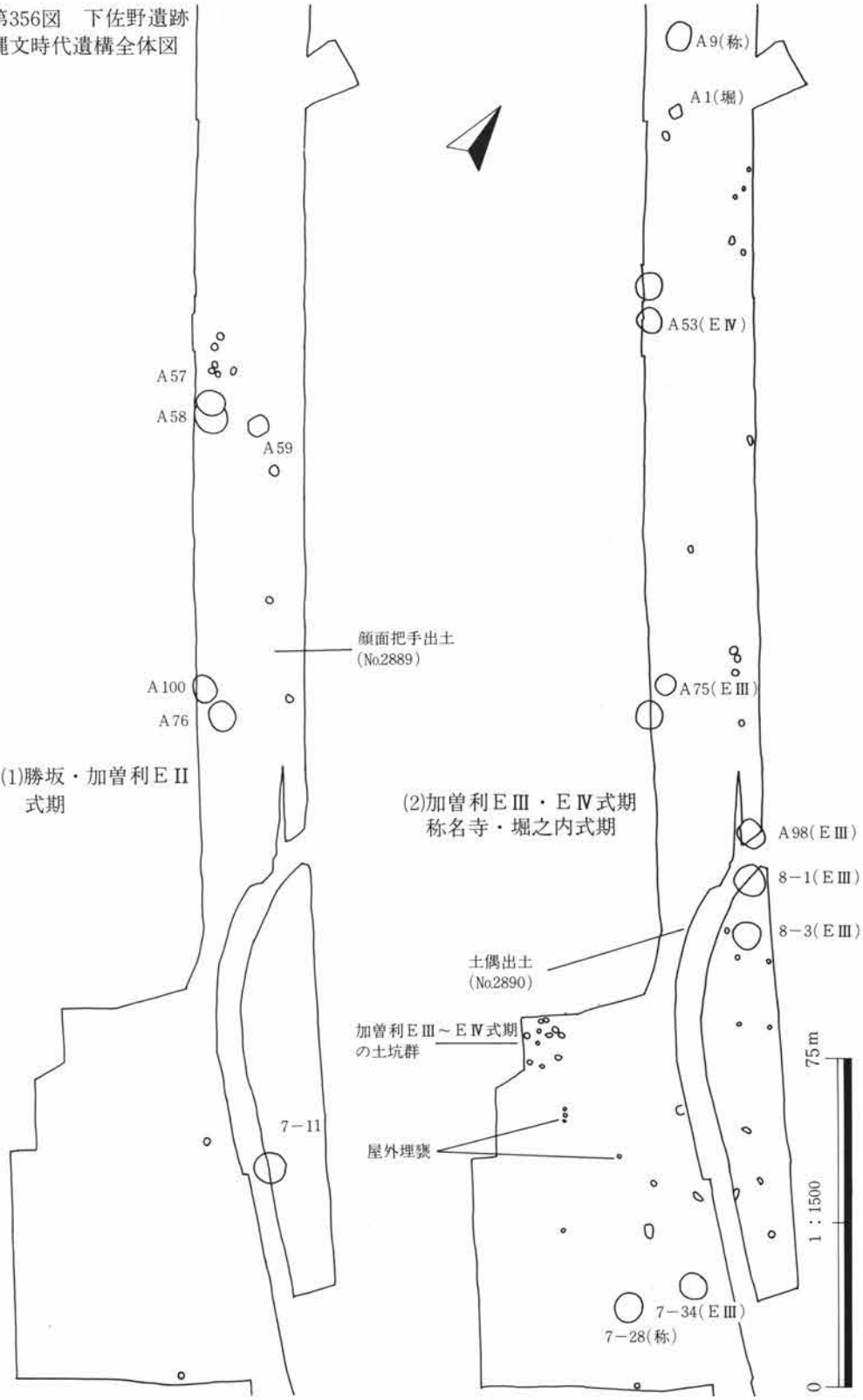
註１　倉賀野万福寺遺跡は、本遺跡の下流約２kmにあり、昭和56年９月から同57年１月にかけて調査された。古墳時代前期の方形周溝墓や住居跡、後期の古墳等が主体となるもので、墳丘下などから縄文時代の住居跡２軒、土坑４基、小ピット群１が確認されている。時期は、中期加曽利ＥII式期で台地先端寄りで土坑と共に集落を形成したと推定される。（『倉賀野万福寺遺跡』高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会　1983）

註２　県遺跡台帳には、倉賀野万福寺遺跡の西を流れる烏川の支流、粕沢川沿いに№429の遺跡地が登載されている。このほかに崖端沿いで縄文時代の遺物が表採されている。（『群馬県遺跡台帳（西毛編）』群馬県教育委員会　1972）

註３　大平台遺跡は、本遺跡の対岸観音山丘陵の一尾根上にあり、中期阿玉台、勝坂、加曽利ＥＩ～ＥVI式期の住居跡42軒等が確認されている。同一の尾根上で隣接しながらも時期と地点を異にした集落が形成されている。尚、現在、報告にむけて整理中である。（『大平台遺跡発掘調査概要』群馬県教育委員会　1974）

註４　標高86.50m以下では、粘性化が強まりクサリ礫を多く含む暗褐色土が地山となっている。遺構分布では、古墳時代以降、微高地からの拡散傾向がみられるが、９世紀前半になるとこの晴褐色土上へ集落が形成される。

第356図　下佐野遺跡
縄文時代遺構全体図



第 96 表　下佐野遺跡、縄文時代住居一覧表

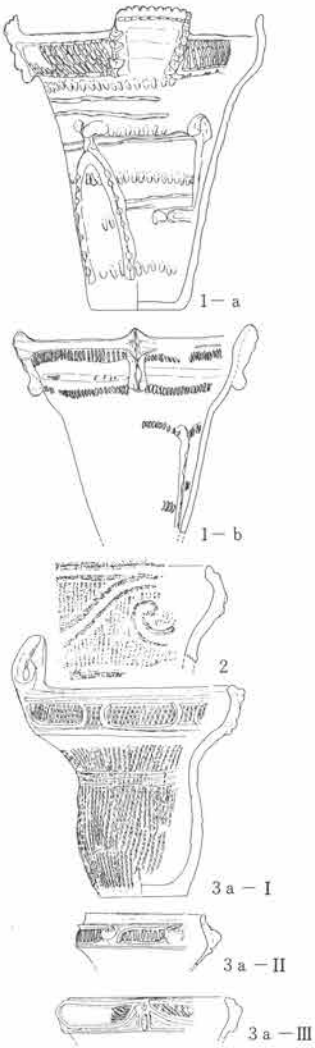
遺構番号	時期	規模（m）長径短径	形状	炉形態	柱穴本数	出土遺物	備考
A　1号	堀之内II期	2.40×1.75	不整台形状	不明		深鉢	
A　9号	称名寺II期	不明	円形か	地床炉		深鉢・多孔石・磨石	
A　53号	加曽利EIV期	4.70×4.50	円形	石囲炉	7	深鉢・土製円盤・石斧	
A　57号	加曽利EII期	4.80	円形	石囲炉	6	深鉢・浅鉢・石皿	58号より古い。
A　58号	加曽利EII期	4.50	円形	石囲炉	5	深鉢・浅鉢・石斧・磨石・石製垂飾	57号より新しい。
A　59号	加曽利EII期	4.80×4.40	円形	石囲炉	6	深鉢・浅鉢・石斧・磨石	炉脇に帯状敷石、伏甕1基がある。
A　75号	加曽利EII期	5.40×4.70	円形	石囲炉	6	深鉢・丸石	柱穴脇に丸石がある。
A　76号	加曽利EII期	6	円形	石囲炉	6	深鉢・浅鉢・石斧・礫器・石皿・磨石	集石3基、埋甕2基がある。
A　98号	加曽利EIII期	5	円形	埋甕炉	6	深鉢（炉体）	
A 100号	加曽利EII期	6.10×5.20	楕円形	不明	6	深鉢・鉢・浅鉢・有孔鍔・付土器石斧・礫器	75、76号と隣接し、100号が最も古い。
7区11号	加曽利EII期	6.40	円形	埋甕炉	(5)	深鉢（炉体）	
7区28号	称名寺II期	5.73	円形	埋甕炉	6	深鉢・浅鉢	
7区34号	加曽利EII期	不明	円形か	埋甕炉	不明	深鉢・石斧・掻器	
7区35号	勝坂期	不明	円形か	不明	不明	深鉢・石斧	
7区42号	加曽利EIV期	6	円形か	地床炉	5 ～ 7	深鉢・石斧・石棒・多孔石	大型土坑5基がある。
7区58号	加曽利EIII期						逆位の屋外埋甕か
8区1号	加曽利EIII期	6	円形	埋甕炉	6 ～ 8	深鉢・石斧	
8区3号	加曽利EIII期	不明	円形か	埋甕炉		深鉢（炉体）	

註１　上記のうちＡ１号からＣ15号までがＩ地区で確認された遺構で、７区11号から８区３号までがII地区のものである。
註２　規模、形状については、上面をほとんど削平され、壁面を残したものが少ないことから推定要素が強い。
註３　Ｉ地区には、上記のほかに２基の埋甕があり、この中で１号については炉体土器の可能性が高い。又、これら埋甕の様に明確な遺物、あるいは削平を受けてほとんど遺構としての形状をなさないが、住居跡と推定されるものが６個所ある。しかし、不明確であることから本表からは除外した。

第２節　出土土器について

下佐野遺跡の該期遺物は、多量の出土がみられたが、その大半が後代の遺構埋没土中からのものである。ここでは、該期遺構の時期の把握を目的とするため、遺構内出土のものを主体的に扱う。時期設定の方法は、器形・文様の明確な深鉢をもとに、ある程度器形及び文様変化の方向性を念頭において分類をおこなう。さらに、各群の共伴関係を当遺跡及び県内遺跡から求め、その検討から段階の設定を行い、次に県内遺跡報告で時期設定の行われている例と対比させ、時期の位置付けを行いたい。また、土器自体から導きだされた問題について、若干の提起をしておきたい。

１．分　類



第357図　分類（１）

１群　器形は、逆台形状の胴部にやや内湾し張りのある口縁部を有するもので、断面三角形の隆帯で文様施文する。また、胎土中に金雲母片を顕著に含むことを特徴としている。

a　文様構成要素に結節沈線を用いるものであり、平口縁のものと４単位の把手を有するものがある。

b　口縁部・胴部共に爪形文状の刻みを多用することを特徴としている。

２群　胴部下半にわずかに張りを有し、頸部がややくびれ、上半が強く内湾する器形のものである。文様は、基本的に口縁部文様帯と胴部文様帯の二帯構成をとるものである。

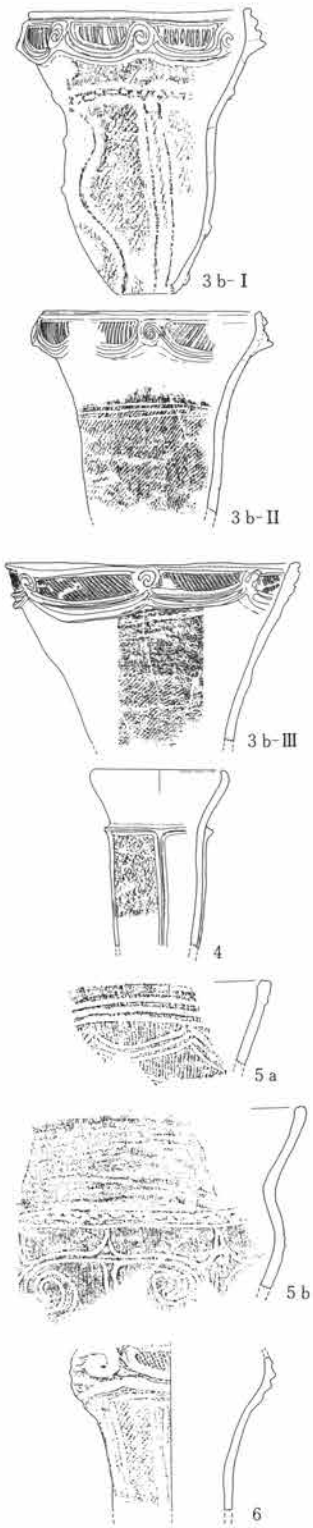
３群　口縁部文様帯・頸部無文帯・胴部文様帯の三帯構成をとるものである。

a　口縁部文様帯は、基本的に上下に隆帯を廻らして区画するもので、比較的口縁部の内湾傾向が強い。

Ⅰ　口縁部は地文施文後に隆帯で楕円区画を施す。頸部・胴部の区画は、地文施文後に３本単位の平行沈線を廻らす。

Ⅱ　口縁部文様帯は、突出する渦巻と連続する楕円状区画文がセットで構成されている。区画内は縦位平行沈線と縄文の２種がみられ、前者は区画後充填、後者は区画前の施文であり、最後に隆帯に沿って沈線を廻らせるところは共通している。

Ⅲ　口縁部文様帯の区画は、楕円状区画と渦巻でⅡと共通であるが、渦巻は突出せず平面的である。区画内は、縄文のものと縦位平行沈線のものが考えられるが、当遺跡では前者だけが検出されている。



第358図　分類（２）

b　口縁部文様帯区画は、上部に横位に隆帯を廻らし、下部は、２本単位の隆帯で渦巻部を弧状に連結しており、ａ同様楕円状区画文と渦巻がセットになっている。

Ⅰ　渦巻は突出し、楕円状区画内は縦位平行沈線を施す。頸部無文帯と胴部文様帯区画は、押圧を施した隆帯を１帯廻らしている。胴部文様帯は、地文施文後２本単位の隆帯及び波状の隆帯を交互に垂下している。

Ⅱ　渦巻は突出し、楕円状区画内は縦位平行沈線のものと縄文のものがあるが、その施文方法はａと同様である。頸部無文帯（素文帯）と胴部文様帯の区画は、３本単位の平行沈線を廻らすものと、沈線を施さない２種がある。また、胴部文様帯は地文のみのものが多い。

Ⅲ　渦巻は隆帯表現であるが平面的であり、沈線を施すことによって鮮明化している。楕円状区画内は、縦位平行沈線のものと縄文のものがみられ、その施文法はａと同様である。

４群　円筒状の胴部に内湾する無文の幅広の口縁部のつくもので、胴部との境に隆帯を廻らし、１本単位の隆帯を垂下している。地文は縄文で、隆帯貼付前の施文である。

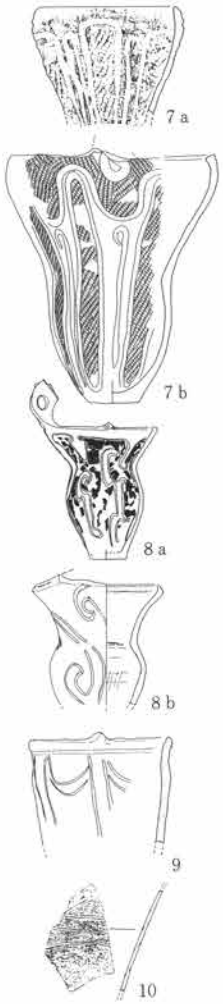
５群　胴部下半が張り、胴中位に強いくびれを有し、上半が外反ぎみに立ち上がる器形で、口縁部に沈線を廻らせるものである。当遺跡では器形・文様の完全に把握できるものはなく、類例も少ない。

ａ　条線施文後、口縁部に３本単位の平行沈線を廻らし、胴部上半に３本単位の連孤文を施す。

ｂ　条線施文後、口縁部に平行沈線を廻らし、沈線間に交互刺突を施す。胴部には、２本単位の沈線で渦巻文等の文様を描出している。

６群　口縁部文様帯と胴部文様帯の２帯構成をとるものであり、口縁部文様帯は、幅広の沈線主体で渦巻及び楕円区画文を描出し、区画内に縄文を充填施文する。胴部文様帯は、２本単位の平行沈線を垂下し、沈線間を無文帯とし、無文帯間に縄文を充填施文することを特徴としている。

７群　口縁部文様帯が消失し、胴部文様帯の１帯構成をとるものであり、充填縄文に特徴をもつ。器形は口縁部が内湾し、胴部



第359図　分類（３）

下半にも張りを有する。

a　口縁部に沿って無文帯を有し、やや幅広の沈線で逆「U」字状及び蕨手文を交互に配し、区画内に縄文を充塡する。

b　口縁部に沿って幅広の沈線を波状に廻らし、谷部に底部までおよぶ長楕円形の区画文を施し、区画文間に蕨手文を配する。波状文の口縁部側及び長楕円区画文内に縄文を充塡する。

8群　器形は、胴部下半に張りがあり、中位に強いくびれを有し、上半が直線的に開く。文様は、比較的細い沈線で区画文を施す。

a　「J」字状及び「♠」状の組み合わさった枠状文を特徴としている。

b　口縁部がわずかに内傾し、沈線を１本施文している。文様は、平行沈線で渦巻状の文様を施文する。

9群　直線的に立ち上がる単純な器形で、口縁部に小突起を有する。文様は、口縁部に沿って沈線を廻らし、下位に２本単位の平行沈線を垂下し、間に２本単位の孤状沈線を施す。

10群　明確な器形をとらえうる資料はないが、胴部中位にわずかに屈曲を有し、上半がやや外半ぎみに立ち上がる器形と思われる。文様は、沈線で幾何学的な区画文を施し、区画内に細かな縄文を充塡施文する。

以上10群19種に分類したものについて、器形・文様・技法上の上から相互の関係について再度整理すると、１群は文様の上に他との共通要素は認められず、器形は、２・３群に近似する要素が見られる。２群は、器形及び文様施文技法等の上で３群、特にａⅠとの共通性がみられるが、文様帯が２帯構成である点が相違している。３群は文様帯の構成要素等、６群との共通性を有しているが、文様帯が３帯構成である点及び胴部文様帯に無文帯を有しない点で相違する。４群は、文様施文技法上からは２・３群と共通するが、器形及び文様帯のあり方で他と相違している。５群は、器形及び文様構成要素共に他と明確に区別される。６群は、器形及び文様構成要素は３群に共通するものを有し、また、胴部文様帯中に無文帯を有する点及び縄文が充塡施文である点において７群と共通する。７群は、器形的には６群と共通し、胴部文様帯だけで構成される点が６群と相違する。８群は、器形及び文様の上での共通性は認められないが、縄文帯と無文帯で文様構成される点及び縄文が充塡施文である点で６・７群と共通する。９群は、器形の上での共通要

素を他に見いだすことはできないが、文様要素は、８群ｂに近似するものがある。10群は、器形及び文様の上では他と相違するが、縄文帯・無文帯で文様が構成され、縄文が充塡施文される点が６～８群と共通する。特に沈線がシャープで縄文原体が細かい点で、８群と比較的近い関係が想定される。これらの内、器形・文様構成の上からより共通要素の多い２・３・６・７群の関係が特に深いことがわかり、また、文様帯は、２帯→３帯→２帯→１帯という変化が、文様施文技法では、縄文施文後文様区画→文様区画後磨消し縄文→文様区画後充塡縄文という変化が考えられていることから、２群→７群という変遷が想定される。しかし、各群間の変化には比較的顕著な相違もみられることから、総てを漸移的変化として捉えることはできない。

２．共伴関係と時期の設定

先に分類したものを遺構に還元し、当遺跡内での共伴関係をみると、共伴事例が少なく明確さに欠けるが、Ａ―100住で３群内の、Ａ―53住で７群内の、Ａ－９住で８群内での共伴、及びＡ―76住で３群と４群の共伴が、また、Ａ―58住で３群と５群の共伴が認められる。その他、１・２・３・６・８・10の各群が単独の出土が見られる。

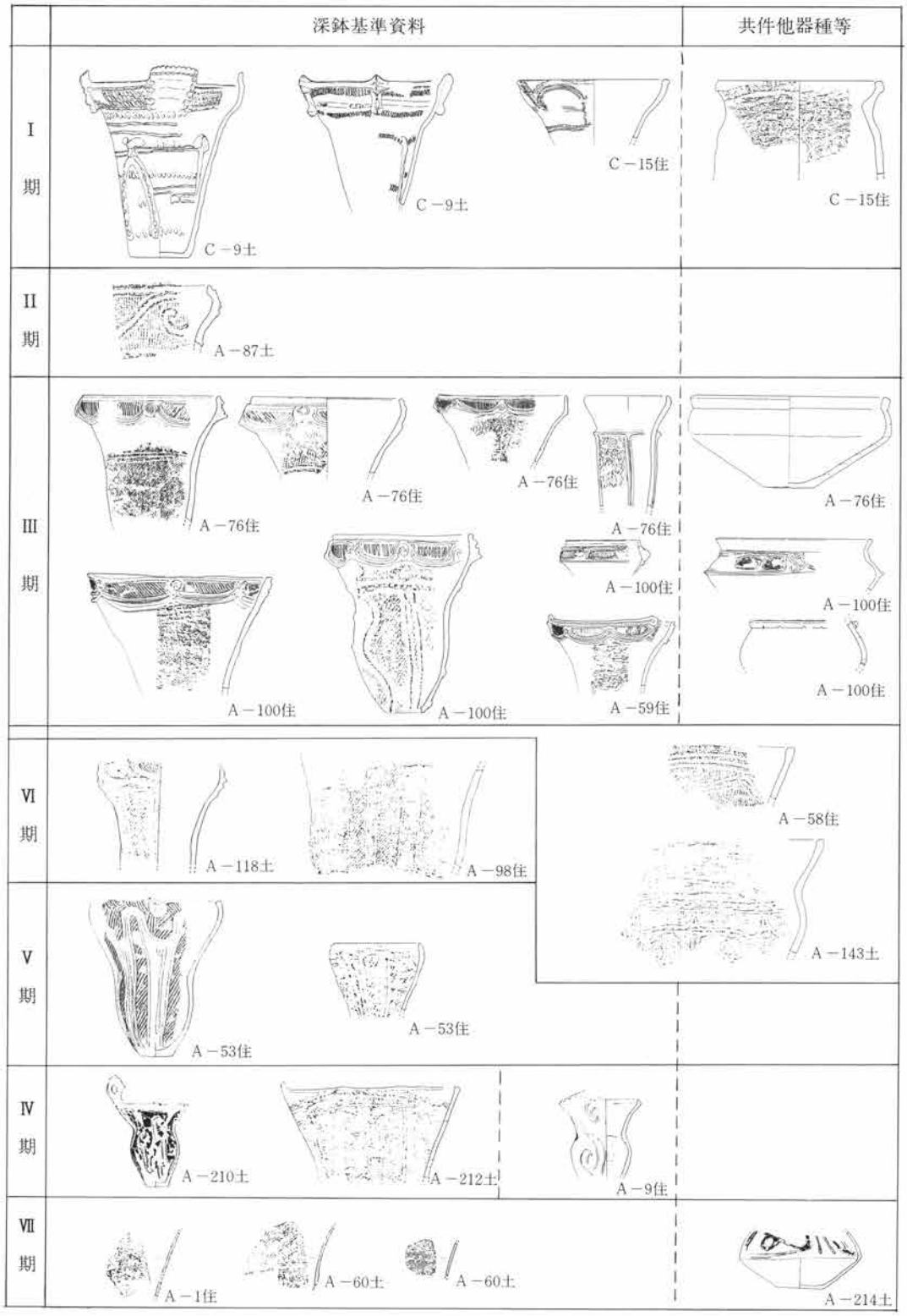
次に、県内の他遺跡において同様に共伴事例を検討すると、小町田遺跡120住で２群と３群ａII との、清里・長久保遺跡13区８住で６群と７群ａ、荒砥前原遺跡４Ｔ－１住で６群と７群ｂ、４Ｔ－２住で６群と７群ａ・ｂ、４Ｔ－４住で６群と７群ｂとの共伴が認められる。また、４・５群は、遺構内において主体的あり方を示すことはなく、１・２・３・６・８・10群は、それぞれ主体的あり方を示す例が認められる。７群については、当遺跡Ａ―53住及び上野国分僧寺・尼寺中間地域（以下国分寺中間と略）Ｂ区156址・Ｉ区156坑で単純と思われるあり方を示す例が検出されている。

以上のことから、２群～７群（４・５群を除く）において、２群と３群及び６群と７群が時間的に近い関係にあり、３群と６群には明確な共伴が見られず間にギャップが指摘できる。４群は、３群との関係が予想されるが、類例が少なく不明な点が多い。また、１群は技法的に２群に先行し、９・10群は同じく８群に後行するものと考えられる。

したがって共伴関係の検討から１群、２群、２・３群、３群（４・５群）、６群、６・７群、７群、８群、10群というまとまりがみられ、文様等の検討からそれらが時間的に推移したことが考えられる。このうち当遺跡において、２・３群、６・７群の共伴例は認められていないことから、各群を期に置き換えると、１群→Ｉ期、２群→II期、３群→III期、６群→IV期、７群→Ｖ期、８群→VI期、10群→VII期という位置づけが可能である。また、先の共伴関係のあり方から、Ｉ期とII期、III期とIV期、Ｖ期とVI期の間には段階の欠落が考えられる。

３．各期の位置付け

Ｉ～VII期の中で、II～Ｖ期としたものはいわゆる加曽利Ｅ式の範疇で捉えられるものであり、



第360図　各期出土土器

Ⅰ期は阿玉台式、Ⅵ期は称名寺式、Ⅶ期は堀之内式の中で理解されるものである。特に主体的時期であるⅡ～Ⅴ期について、小町田遺跡・荒砥前原遺跡・荒砥二之堰遺跡・国分寺中間で行った加曽利Ｅ式の細分案等との比較をし、その位置付けを行ってみたい。まずⅡ期は、小町田遺跡106坑と同時期と考えられ、この土坑が加曽利Ｅ１式に位置付けられていること、及び国分寺中間のⅠ群よりもさらに古い様相が窺えることから、加曽利Ｅ１式段階と考えられる。Ⅲ期は、小町田遺跡で加曽利Ｅ２式に位置付け、国分寺中間Ⅱ群と同時期と考えられることから加曽利Ｅ２式段階と考えられる。Ⅳ期は、荒砥前原遺跡Ⅳ・小町田遺跡で加曽利Ｅ３式後半に位置付け、国分寺中間Ⅴ群と共通すると思われることから、加曽利Ｅ３式、特に国分寺中間の加曽利Ｅ３式第３段階に位置付けられると考えられる。Ⅴ期は、荒砥前原遺跡・荒砥二之堰遺跡共に加曽利Ｅ３式の新しい段階と理解している。しかしここでは７群主体で構成されるという意味で、国分寺中間の加曽利Ｅ３式第４段階と同時期と位置付けておきたい。次にⅠ・Ⅵ・Ⅶ期は、比較する資料がなく、明確にその根拠を提示できないが、Ⅰ期を阿玉台Ⅱ式段階、Ⅵ期を称名寺Ⅰ・Ⅱ式段階、Ⅶを堀之内２式段階としておきたい。

以上のことから、Ⅰ期とⅡ期の間には２段階以上の欠落が、Ⅲ期とⅣ期との間には、加曽利Ｅ３式第１・２段階の欠落が、Ⅴ期とⅥ期との間には加曽利Ｅ４式段階の欠落が考えられる。

４．まとめ

以上のように出土遺物を10群19種に分類し、群馬県内の調査事例を元に時期の設定を行った結果、７期（阿玉台Ⅱ式～堀之内２式）に段階設定でき、これらが断続的なあり方を示すことがわかった。しかしこのあり方が当遺跡の実態を反映したものであるか、調査範囲の問題等から即断はできない。ただ他の遺跡では比較的多く検出されている連弧文系（５群ａ）・曽利系土器の出土量の少なさは、これらが顕著に共伴する時期である加曽利Ｅ３式第１・２段階が欠落していることの傍証と見ることができる。

次に、当遺跡を特徴づけている口縁部文様帯が渦巻と連結する２本単位の弧状隆帯で構成される３群ｂとしたものは、南関東においては当麻遺跡10・22住等で若干検出されているが、多くの場合渦巻の下に三角形の区画文を配置し、結果として帯状文としている例が主体を示めている。この例は県内にあっても顕著には認められないものであり、その出自をどこに求めるのか今後の問題である。また、３群ａ・ｂの口縁部文様帯構成の違いは系統差と考えられるが、共通要素である渦巻に双方共に突出するものと平面的なものの２種がみられ、平面的なものがより器形的に次の段階（加曽利Ｅ３式第１段階）に近い様相を示すことは、３群ａ・ｂ共にⅡ→Ⅲへの時間的な推移が考えられる。このことはⅢ期が少なくとも前後２段階に細分される可能性を示唆するものと思われ、加曽利Ｅ３式への変化の問題と合わせて資料の増加を待って検討をしたい。

（桜岡正信　当事業団主任調査研究員）

古　墳　時　代

第１節　古墳時代の住居跡と住居跡出土の土器について

1　はじめに

下佐野遺跡を特徴付けているのは、古墳と方形周溝墓である。浅間山古墳・大鶴巻古墳など関東を代表する大前方後円墳を控え、小鶴巻古墳・漆山古墳・御堂塚古墳などの前方後円墳など、上毛古墳綜覧に掲載されているものだけでも80基を数え、実数は100基を越えるものと考えられる。古墳は、烏川の崖線の上に築かれている。河川敷との比高差７～10mであり、この台地は、前橋台地の末端にあたる。また、この崖線際は、烏川と東の粕沢川との間の微高地に当たり、現在も集落が分布する所である。

下佐野遺跡Ｉ地区からは、54軒（７世紀を含む）、II地区からは、25軒の住居跡が検出されている。これらの住居跡も、烏川の崖線際に築かれており、住居跡の分布域と古墳の分布域は、ちょうど重なることになる。

2　住居跡の時期と遺物について

下佐野遺跡の住居跡出土の土師器を、一括遺物を中心に第361図・第362図・第363図のように、Ｉ期からIV期の時期分類を試みた。方形周溝墓・古墳出土の土師器分類は、後述の『第２節　古墳時代の墳墓について』にあるので、ここでは住居跡出土の遺物に限定した。

遺物分類の目的は、竪穴式建物の時期区分（可能であれば、竪穴式建物の同時性を把握し、集落の確定をする。）であり、竪穴建物出土の一括遺物は、ほぼ同時に存在するものと仮定して取り扱い、その組み合わせを尊重した。即ち、ここでの遺物の時期分類は、遺物自体の変化の区分とは異なる部分ができる。例えば、IV期の杯の中には、その形態だけを見ればIII期に分類される杯が含まれているが、その組み合わせの中で新しい形態の杯が含まれており、組み合わせが新しいと考えられれば、古い形態を持つ杯もIV期に分類した。坂口一は、この遺構内の一括遺物の組み合わせと、遺物の年代序列の整合性を保つために、山田水呑遺跡で用いられた「統計的な共伴の頻度」から遺物自体の年代序列を導く方法を採用している。しかし、個別遺物の変化と遺構内の組み合わせの変化及び遺構の変化は、一致するとは限らない。言い換えれば、遺物自体を中心とした分類と、遺構内のまとまりを中心とした分類が、細分されればされるほど、合致しない部分（複数の段階にまたがって出土くる遺物）が出てくるのは、当然のことであり、この細分も、住居の同時存在確定には、まだ遠いことも事実である。

Ｉ期は、「Ｓ」字状口縁を持ち、ハケ目調整された台付甕（2994・2996・3656・3657）を特徴とする石田川の時期である。当遺跡では、49軒の住居跡が検出されている。そのうち、遺物の残りの良いII地区７-45・Ｉ地区Ａ-73・Ｉ地区Ｃ-１号住居跡出土の土師器を中心に分類した。器種は、

前述の当期のメルクマールである「Ｓ」字状口縁を持つ台付甕のほか、甕・壺・坩・高杯・器台・甑等がある。壺は多種のわたっており、直線的に外反する口縁を持つ（1538・3646）物、有段を持つ（1544・1538）物、折り返し口縁を持つ（1545・2311）がある。甕は小型であり、「く」字状口縁を持つ（2301）や、「Ｓ」字状口縁を持つ（2133）を小型甕と捕らえておく。台付甕は、「Ｓ」字状口縁を持つ物の他に、「Ｓ」字状口縁の変形として口縁端部が直線的に外反する（1549）物がある。坩は、球体形でやや内湾しながら広がる大きな口縁部を持つ（1518・3647）物や、体部の下半に最大径を持つ（2303）物の他に、体部の著しく小さい（1523）がある。高杯は、体部下端で屈曲し、大きく広がり、脚部に円形の透かしのある形（2307・2308）である。器台は、直線的に広がり、脚部に二段の円形透かしがある（3665）物、口縁端部が直立ぎみになり、脚部の透かしが一段の(2304)物の他に、体部下端に凸帯を巡らし、体部～口縁部に円形の透かしの入る(1502)物がある。その他には、小型の甑（2393）などがある。下佐野遺跡Ｉ期の住居の年代は、４世紀後半と考えておく。

Ｉ期の住居跡は、軒数も多く、細分の可能性は持っている。しかし、当遺跡においては、遺構の前後関係を明確に把握することができなかった。また、遺物からの分類も、種類が多く、各住居跡から出土した土師器の中で普遍的に見られたのは、「Ｓ」字状口縁を持つ台付甕だけであった。その台付甕は、土師器自体の持つ形態から細分も試みられているが、住居跡出土の一括遺物として考えたとき、その分類に合致しない場合があり、当遺跡内では、分類不可能と判断した。台付甕以外の土師器の分類は、普遍性が小さく前後関係を断定することはできなかった。機会があれば、細分を試みたい。

II期は、Ｉ期の台付甕の特徴である「Ｓ」字状口縁の台付甕の形態が崩れて、口縁部の「Ｓ」字や体部の刷毛目がなくなる時期である。住居跡はII地区５－７Ｃ・II地区５-69住居跡の僅か２軒だけの検出であるが、比較的良好な遺物が出土している。壺（392）は、口縁部がやや外反するである。甕は、体部が膨らみ、口縁部が「く」字状に外反する(639)物と、それの小型の形の(391)がある。台付甕（386・638）は、Ｉ期の特徴である「Ｓ」字状口縁が崩れ、「く」字口縁になり、ハケ目調整が、篦削りになったものである。坩は、Ｉ期の球体形の系譜をひく（389）やそれの小型化した形の（645）の物がある。いずれも、篦磨きは少なくなっている。高杯（390・643）は、体部下端の屈曲が明瞭になり、体部～口縁部は直線的に広がり、脚部から透かしはなくなっている。その他に、「く」字状口縁の鉢がある。II期は、前期の末から中期の初頭に位置付け、４世紀末～５世紀初頭と考える。

III期は、Ｉ地区Ｂ―38号住居跡・Ｉ地区Ｂ―39ａ号住居跡の出土遺物を指標とした。甕は、長い体部を特徴とする（3386・3339）物と、球体型の（3373・3449）物がある。杯（3392・3393・3394・3397・3452・3453）は、須恵器模倣形態の杯の形が全盛であるが、その須恵器模倣の形はやや崩れてきている。また、その形態の杯が大型化（3383・3390）した物や、深くなった形態の（3376）がある。III期は、古墳時代後期の後半であり、６世紀後半と考える。

IV期は、Ⅰ地区Ｂ－３住居跡・Ｂ－34住居跡・Ⅰ地区Ｂ－38住居跡の出土遺物を指標とした。須恵器模倣形態の杯が完全に崩れてしまった時期である。甕（3023・3025・3351）は、長い体部の特徴を残している。杯は前期の須恵器模倣の形を残すもの（3028・3029・3030・3354・3363・3407)、須恵器模倣の特徴である、外面口縁部下端の稜の痕跡を残すもの(3353・3355・3356・3361)、殆ど須恵器模倣の形態が解らなくなり、半球形に近くなったもの（3327・3357・3359・3408）などがある。その他、須恵器模倣形態の杯が深くなった形の椀（3026）がある。IV期は、古墳時代の終末であり、７世紀前半と考える。

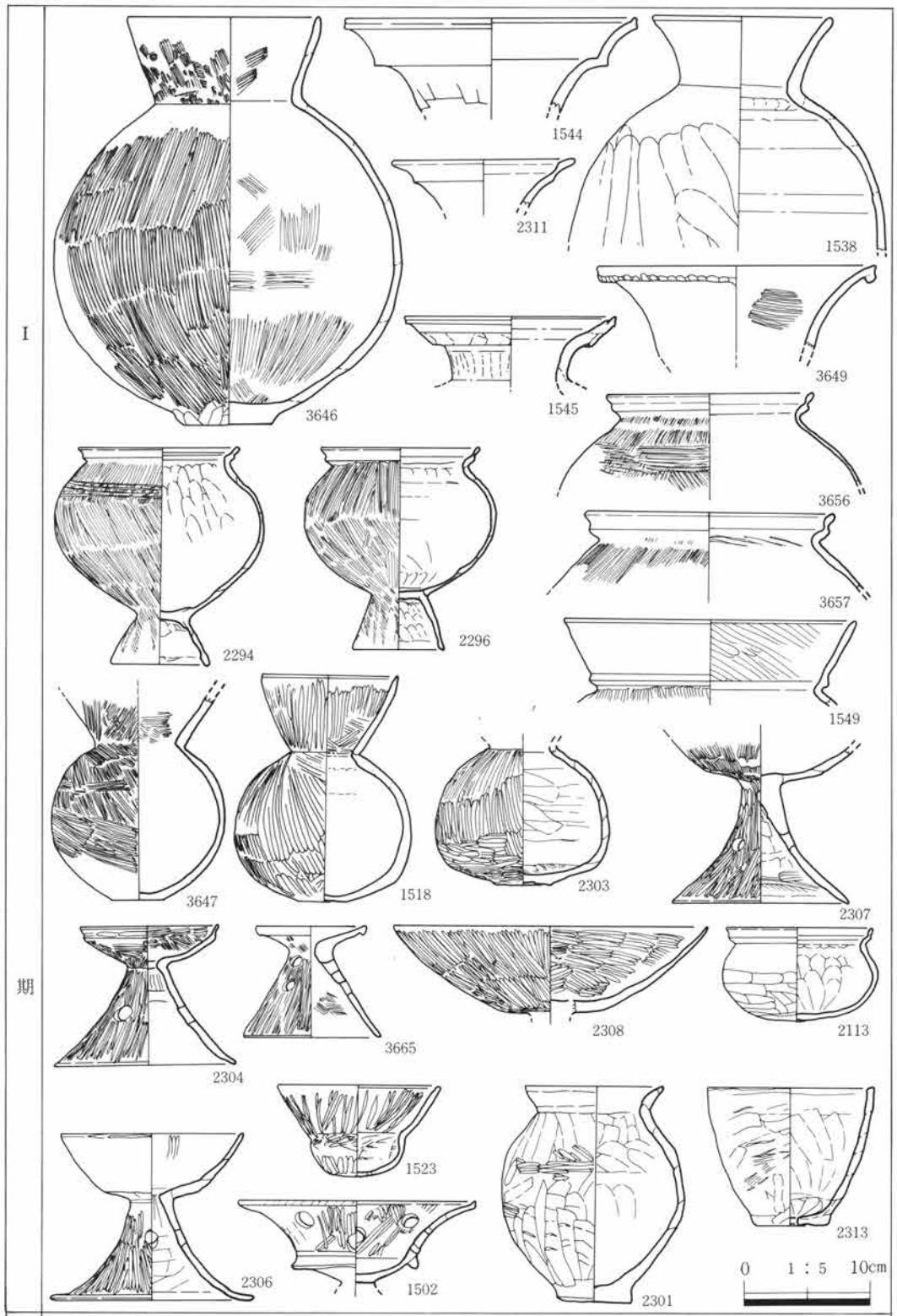
下佐野遺跡の住居跡を４期に分けて気が付くことは、Ⅰ期とII期・III期とIV期には連続性が認められるが、II期とIII期の間には、大きな時間差があることである。このII期とIII期の間の時期は、正に下佐野遺跡に古墳が築造された時期と一致するのである。即ち、方形周溝墓の時期には、同時に大きな集落が営まれ、古墳の築造開始と共に、下佐野の地から忽然と姿を消すのである。そして、古墳の終末期に再び人々が、下佐野の地に帰ってくるのである。

3　住居群の分布について

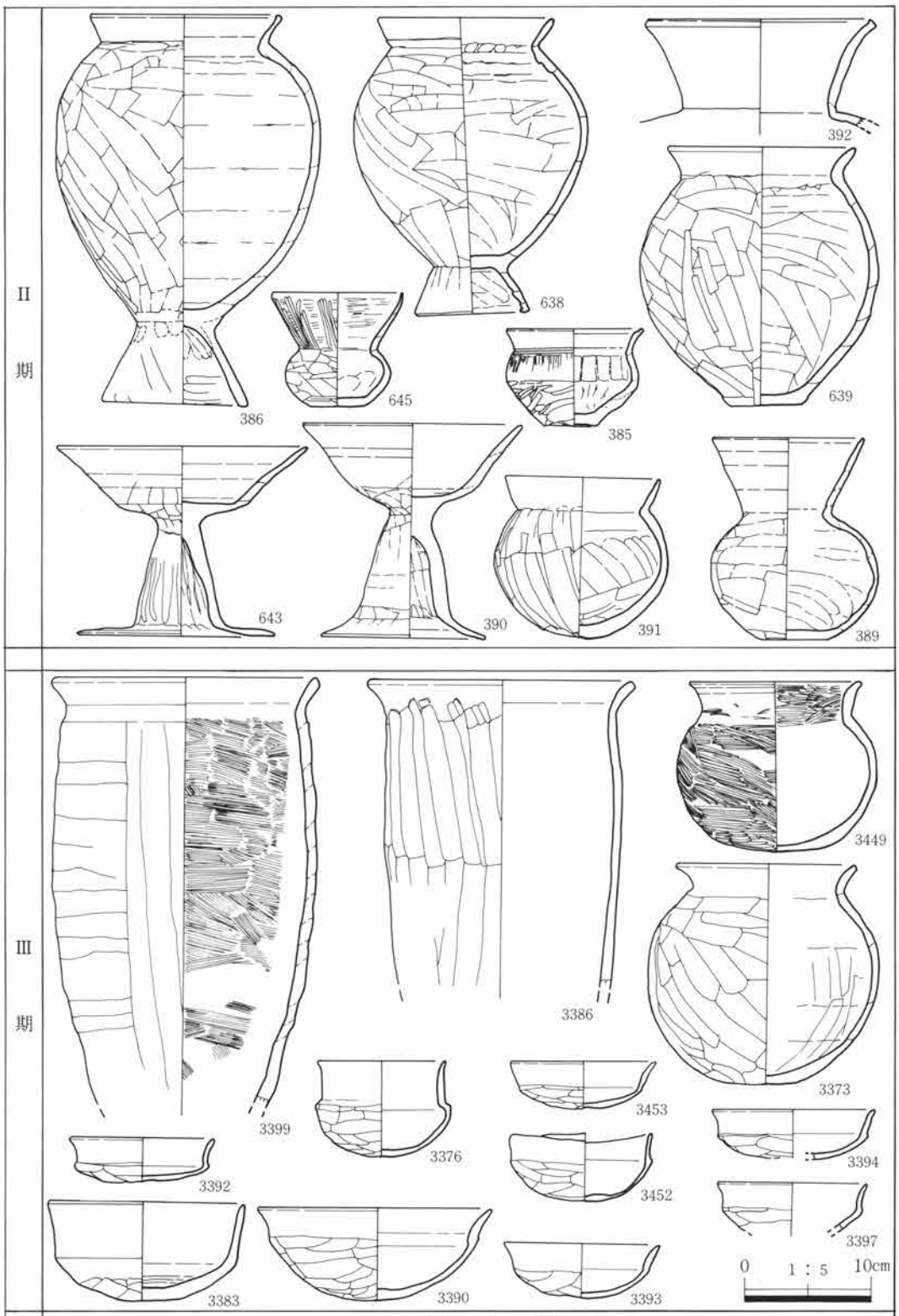
下佐野遺跡から発見された住居跡を、遺物分類で示した時期に分け（III期とIV期はあわせて、古墳時代後期後半として扱った。)、方形周溝墓・古墳の分布と重ねると、第364図・第365図の様になる。古墳時代前期の住居群と古墳の分布は見事に一致するのである。古墳時代前期の住居跡49軒のうち、古墳と重複する住居跡は35軒もあるのである。そして、方形周溝墓とはその分布域が、明確に別れるのである。ちなみに、方形周溝墓と重複する住居跡は、Ⅰ地区Ｃ-13号住居跡１軒だけである。更に、古墳と重複しない古墳時代の住居跡のうち、II地区７区の４軒のは、玉造工房跡である。また、古墳時代前期末～中期初頭の住居跡は、遺跡内住居分布域の南端近くで検出された２軒だけであり、方形周溝墓・古墳との重複はない。

古墳時代後期の住居跡で古墳・方形周溝墓と重複するものはない。古墳時代後期に集落が営まれたときには、周囲に高さのある古墳が分布していたはずである。そして、墓と認識しての宗教上の理由からか、土山を崩す労力を惜しんでか、理由は明確でないが、古墳を避けて、住居を建てたものと考えられる。

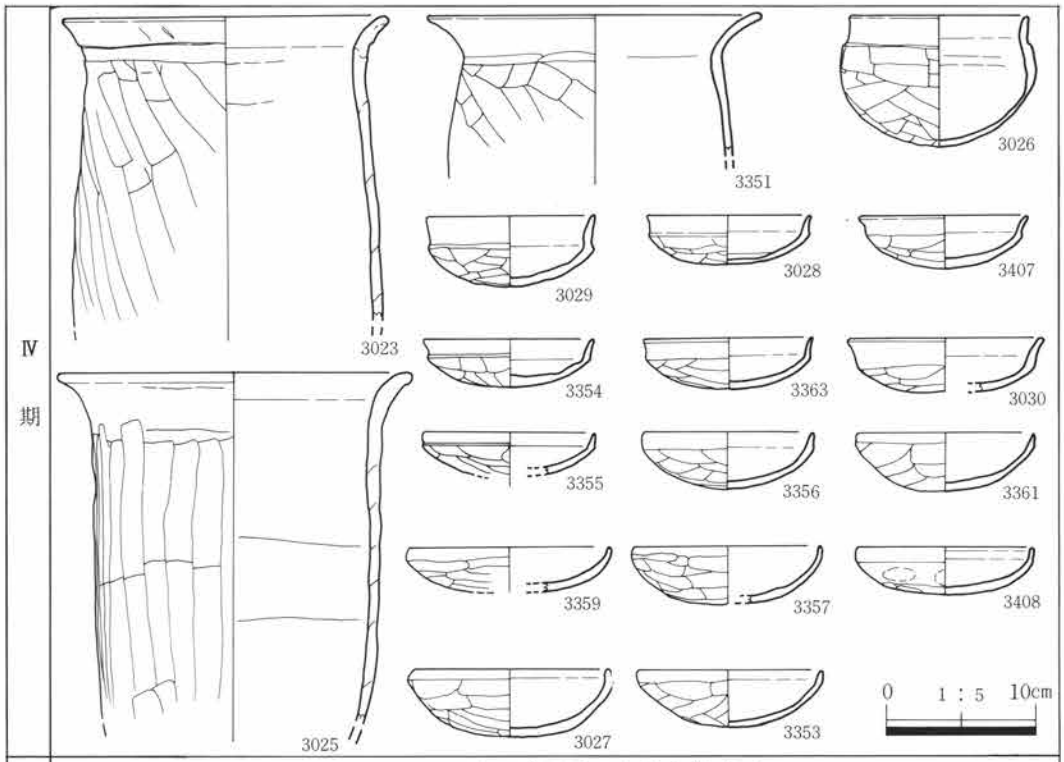
しかし、前期の住居は、何故、古墳の分布と一致するのであろうか。前述の古墳の築造と共に姿を消す前期の住居跡と、古墳と重複する前期の住居跡。この事実を見る限り、集落の営まれていた場所に、わざと古墳を築造したとしか考えられないのである。方形周溝墓を造っていた集団の後から、古墳を造る集団が来て、方形周溝墓を造る集団の集落を破壊して、墓域としたのであろうか。それとも、前の集団が立ち去った後に着た人々が、そこを墓域としたのであろうか。また、新しい墓制を採用した以前からの集団が、集落であった場所を墓域として、集落を他の場所に移したのであろうか。古墳が築造されるときには、その生産基盤を支えた人々は、どこに集落を営んでいたのであろうか。下佐野遺跡の集落を考えるうえでの問題点は、まだ多く残されてい



第361図　下佐野遺跡出土土器分類表(1)



第362図　下佐野遺跡出土土器分類表(2)



第363図　下佐野遺跡出土土器分類表(3)

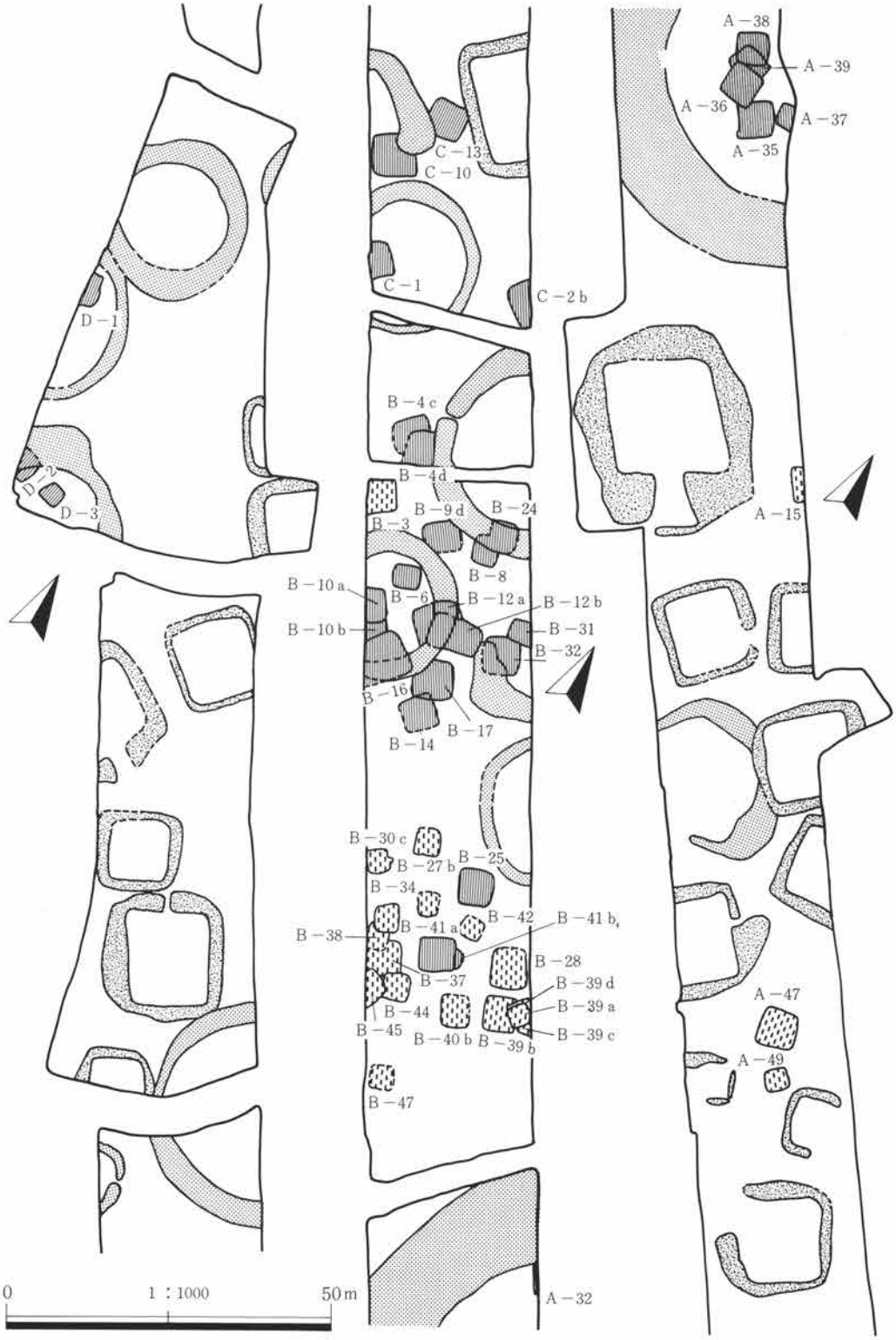
る。

古墳（特に、前方後円墳）の築造と、大和政権の問題がよく語られている。下佐野遺跡の集落の傾向は、この古墳の出現とともに途切れ、古墳の終末期とともに再び現れるのは、事実である。この集落出現・断絶の状態と古墳の築造の関係が何を意味するかは、今後の課題である。

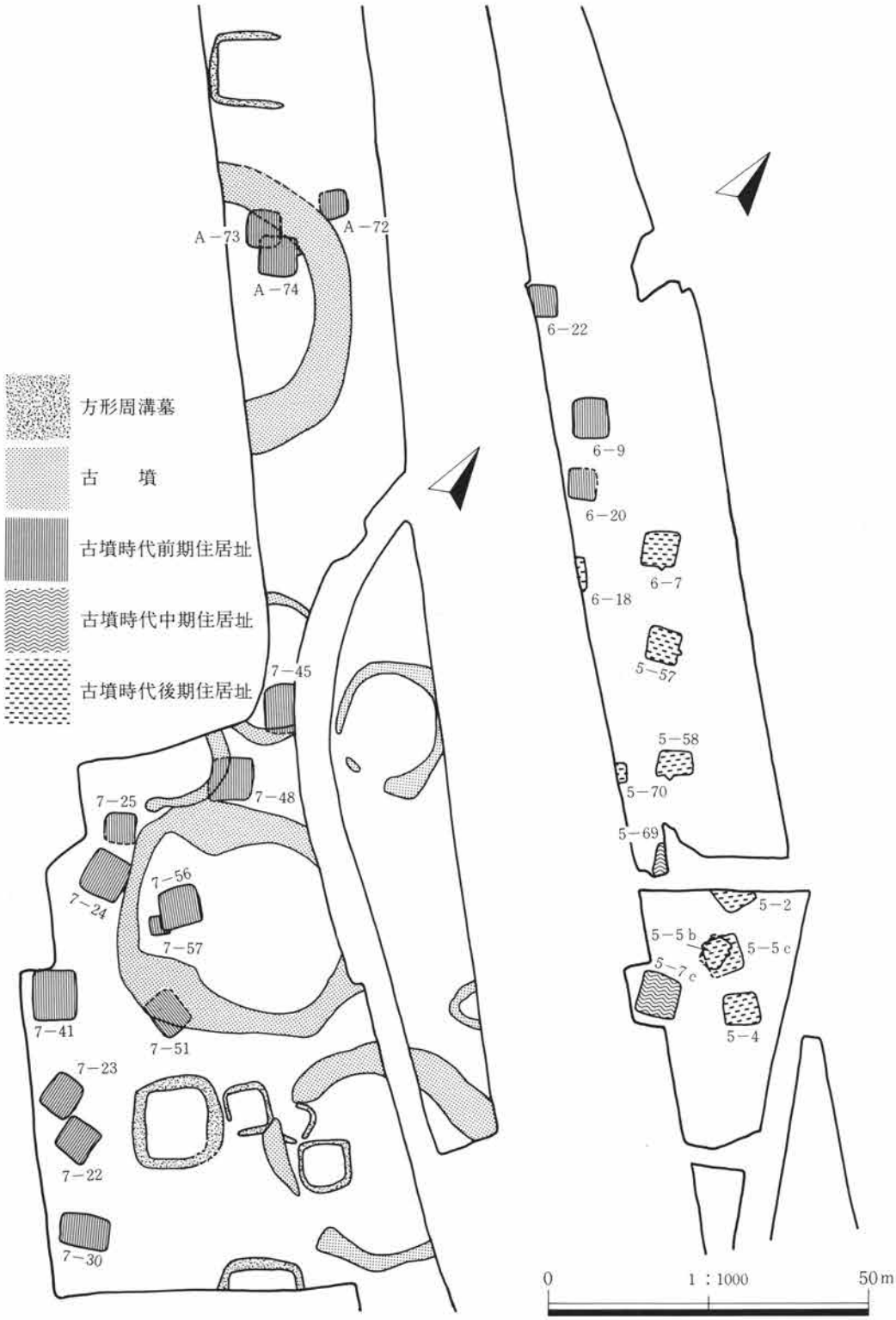
（井川）

引用・参考文献

1　坂口一「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要4』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1987
2　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『下佐野遺跡II地区』1986
3　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『新保遺跡II』1988
4　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『熊野堂遺跡(1)』1984
5　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『三ツ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』1985
6　田口一郎「遺物の検討」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会1981
7　梅沢重昭「五反田・下諏訪遺跡出土の土師式土器」『五反田・諏訪下遺跡』太田市教育委員会1978
8　志村哲「堀ノ内遺跡群出土土器の分類と編年」『堀ノ内遺跡群』藤岡市教育委員会1982
9　尾崎喜左雄・今井新次・松島栄二『石田川』「石田川」刊行会1968
10　松村恵司「出土土器の分類と編年」『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会1977
11　杉原荘介・竹内理三『古代の日本第7巻』角川書店



第364図　下佐野遺跡古墳時代住居及び周辺古墳、方形周溝墓(1)



第365図　下佐野遺跡古墳時代住居及び周辺古墳、方形周溝墓(2)

第２節　古墳時代の墳墓について

古墳時代の墳墓（ここでは７世紀代の所謂終末期古墳も含む）には、周溝墓26基、古墳34基、石槨３基がある。周溝墓は前方後方形１基を含むが、他の25基は方形である。古墳は前方後方墳２基、前方後円墳と方墳の可能性のあるものがそれぞれ１基づつ存在するが、その他は円墳ないしは円墳となる可能性が強い。なお前方後方墳２基（寺前地区６号・９号古墳）については、前方後方形周溝墓と呼ばれている墳墓の中に平面形態が類似するものも存在する。しかし前方部および前方部をめぐる周堀の形態が、Ｉ地区Ａ区４号周溝墓のような形態とは異なっており、所謂前方後方墳とは区別出来ないこと、また周堀出土の土器が、周溝墓のように埋葬時に土器を破砕し周溝内に投げ込む行為や、周溝内に据え置く行為が顕著ではなく、殆んどが墳丘から転落したと考えられること等により前方後方墳として扱った。

１、前期の墳墓について

前期の墳墓には、周溝墓26基、前方後方墳２基、円墳２基がある。分布をみると、４グループに分かれるようである。最も南に位置するグループは、II地区７区１～５号方形周溝墓で、方形周溝墓５基からなる（第１グループ）。南から２番目のグループは、２基の円墳（Ｉ地区Ａ区１・２号古墳）を含む周溝墓群で、第１グループから約100m離れている。周溝墓は、Ｉ地区Ａ区１号～12号までの11基（11号は欠番）であり、前方後方形１基を含むが、他の10基は方形である（第２グループ）。南から３番目のグループは、方形周溝墓９基（Ｉ地区Ｃ区１号～７号、Ｄ区１・２号）からなり、第２グループからは約150m北西に位置する。最も北に位置するグループは、寺前地区３号方形周溝墓と６号・９号前方後方墳で、第３グループから約160m北西に位置している（第４グループ）。これらのグループ間には、第３と第４グループの間を除いて、それぞれ古墳時代前期の集落が存在していることから、各グループ間に存在する集落と密接な関わりをもっていたことが窺える。

(1)　出土土器からみた古墳時代前期墳墓の変遷

古墳時代前期の墳墓から出土した土器は、第１節における分類のＩ期で、関東地方において五領式土器、群馬県においては石田川式土器と呼ばれている。これらの土器については、多くの研究者により編年作業も行なわれてはいるが、本遺跡の存在する烏川流域に関しては、地域性を踏まえた上での編年は皆無であり、本遺跡の各墳墓から出土した土器の編年的位置を直ちに明らかにすることは困難であると思われる。そこで極く大雑把ではあるが、本遺跡の存在する烏川流域を中心とした地域の編年図を作成し、これに本遺跡出土土器を位置づけていくという方法を試みた。なお土器の「地域編年」は、現在の行政区画単位で行なわれる場合が多いが、一歩踏み込んで考えると、それは現在の「地域」であって、考古学が対象とするそれぞれの時代の「地域」と整合するとは限らないことに気付く。従ってここでは、古墳時代当時は烏川とその支流地域であっ

た埼玉県児玉郡市を含め、また土器様相に関連が認められる群馬県赤城山南麓と、埼玉県比企地方北部を関連地域として捉えることとする。

Ⅰ－１期

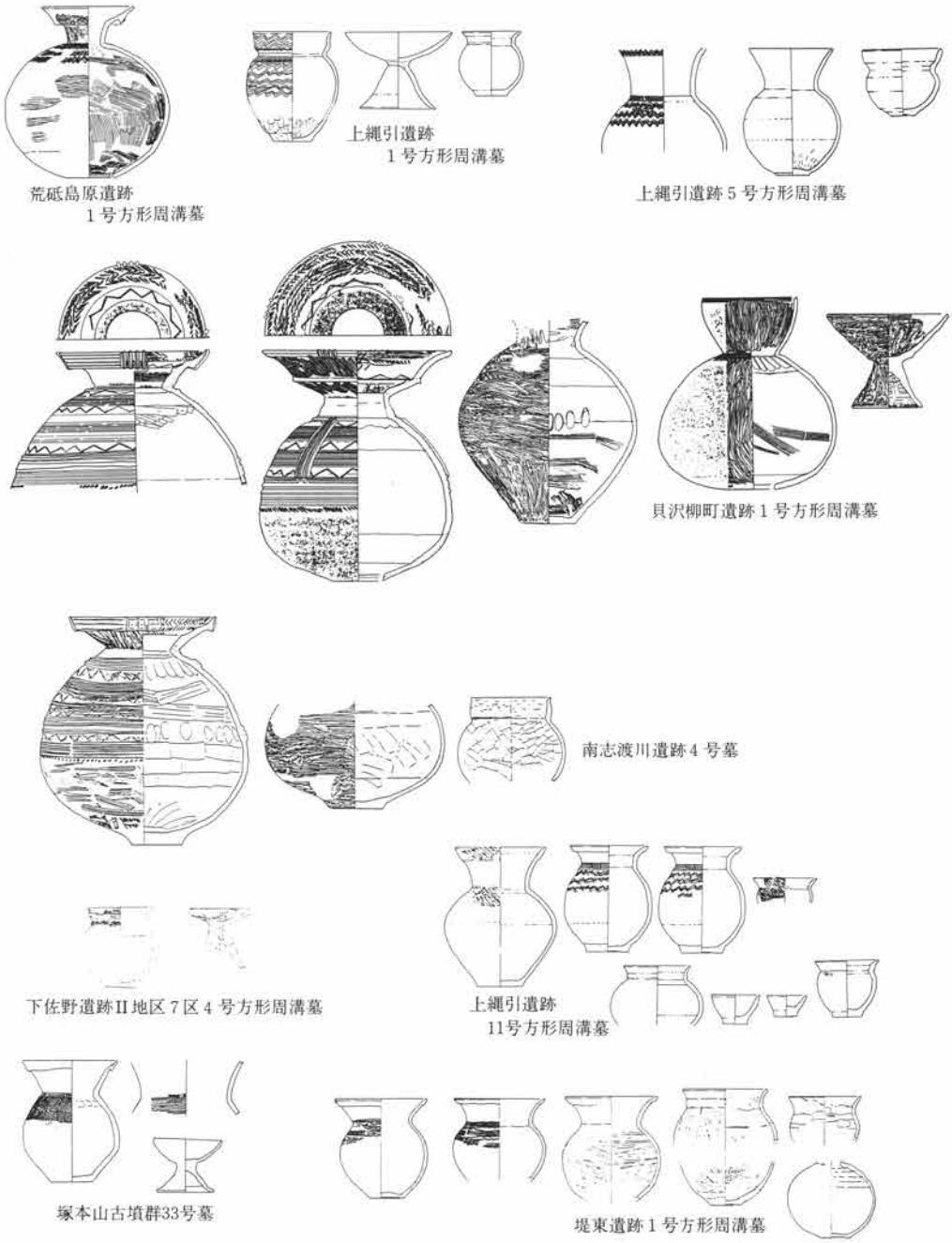
定型化した前方後円墳の出現後で、小型精製土器群のうち小型丸底坩、およびそれに類似した丸底や小さな平底をもつ小型椀形土器が共伴しない段階を１期とした。これは本地域と密接な関連が想定される伊勢湾西岸地域における「納所編年[1]」のⅡ期、埼玉県での横川好富氏編年[2]の五領Ⅰ式期に対応する。

定型化した前方後円墳が出現する時期は、奈良盆地では纒向３式期（庄内式新段階）で、東海地方西部では元屋敷期古段階に対応するとされている[3]。烏川流域において、元屋敷期古段階に位置づけられる東海地方西部系の土器は、新保遺跡141号住居跡出土Ｓ字状口縁台付甕形土器、貝沢柳町遺跡１号方形周溝墓出土パレススタイル壺形土器等がある。前者は口縁部の形態が安達厚三・木下正史氏編年[4]のⅡ期に対応するもので、庄内式土器と伴出した小墾田宮推定地出土の甕と同一段階である。また後者は、元屋敷期古段階にみられるもので[5]、長野県松本市弘法山古墳[6]からも出土している。これらの元屋敷期古段階の土器を出土した遺構は、直上ないしは20cm～30cm上方に浅間Ｃ軽石純層が堆積しており、元屋敷期古段階という時期が、浅間Ｃ軽石降下前後およびそれからやや遡る時期であることを示している。なお熊野堂遺跡においては、弥生終末期に欠山式高杯を模倣したもの（第Ⅰ地区13号住居跡[7]）や、菊川式類似の壺形土器および小形甕形土器、欠山式段階のＳ字状口縁甕形土器片が樽式土器と伴出する住居跡（第Ⅲ地区８号住居跡[8]）等があり、弥生時代終末期から東海系土器の流入が活発化していたことが窺える。

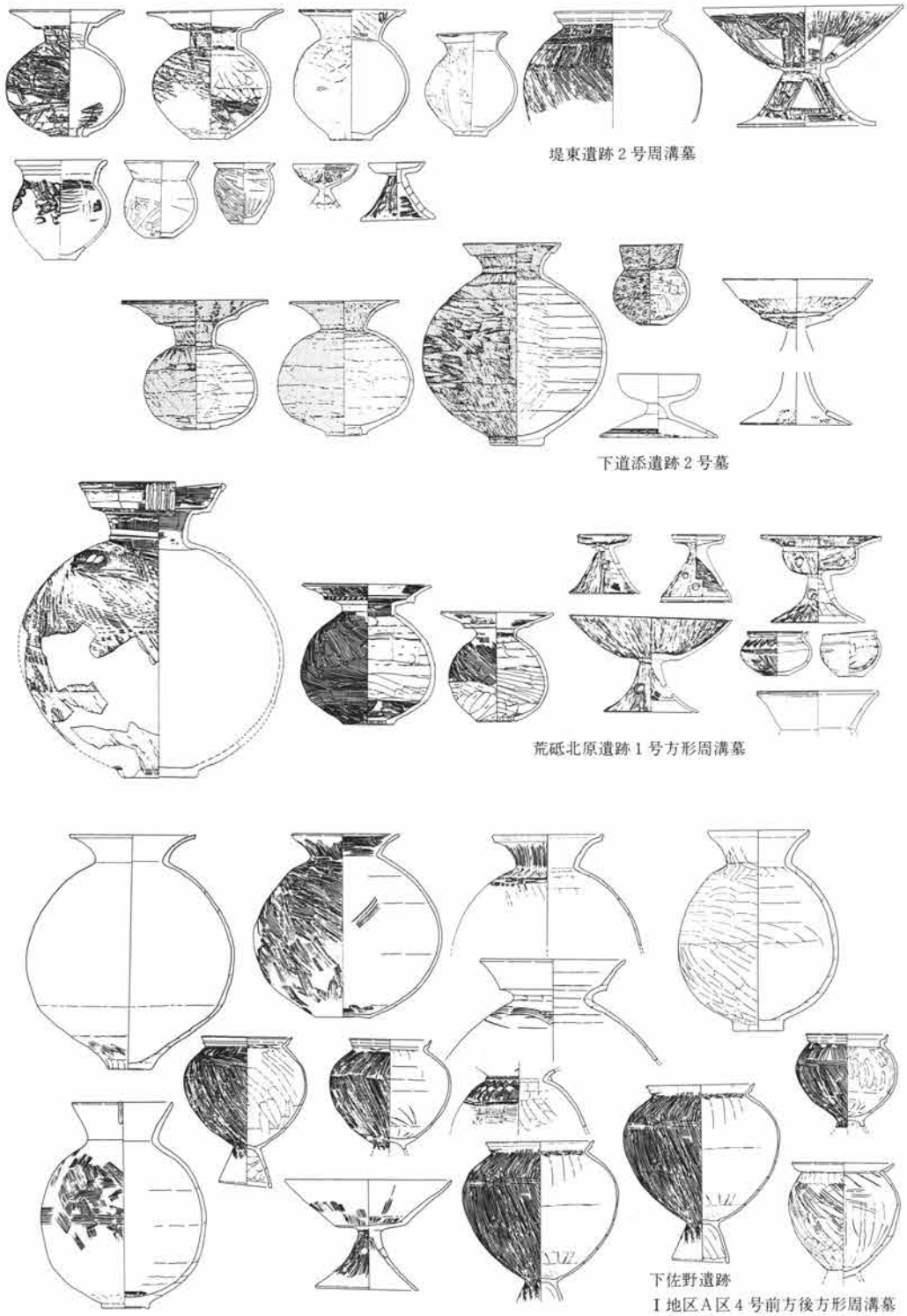
１期の浅間Ｃ軽石降下前後の時期には、貝沢柳町遺跡[9]や南志渡川遺跡[10]等の外来系土器を主体とした遺跡が存在する一方で、上縄引遺跡[11]や荒砥中屋敷Ⅰ遺跡[12]のように、器形・文様に在地の弥生土器である樽および吉ケ谷・赤井戸式土器の系譜上に位置する土器が多く含まれる遺跡も併存している。この段階はⅠ期の古段階と考えられ、荒砥島原遺跡１号方形周溝墓[13]、上縄引遺跡１号・５号方形周溝墓[14]、貝沢柳町遺跡１号方形周溝墓、南志渡川遺跡４号墓(前方後方形)、熊野堂遺跡第Ⅱ地区１号周溝墓[15]（前方後方形）等が該当する。また集落では、新保遺跡141号・155号住居跡[16]、荒砥中屋敷Ⅰ遺跡住居跡、南志渡川遺跡３号住居跡等がこの段階にあたる。

次の１期中段階は、浅間Ｃ軽石降下後まもなくと考えられる。この段階の遺構は、上縄引遺跡２号・11号・12号方形周溝墓、堤東遺跡１号（方形）・２号（前方後方形）周溝墓[17]があるが、これらの遺構から出土した土器と類似する土器は、下佐野遺跡Ⅱ地区７区４号方形周溝墓[18]や塚本山33号墓[19]（前方後方形）にみられるので、同一段階と考えられる。また下道添遺跡２号墓[20]（前方後方形）出土の壺形土器は、堤東遺跡２号周溝墓（前方後方形）出土の壺形土器とよく似ており、やはり同一段階であろう。なお１期中段階の集落では、西迎遺跡住居跡[21]等が考えられる。この中段階をもって、烏川流域においては、在地の弥生土器の残影である樽式系の櫛描文と吉ケ谷・赤井戸系の縄文は消失するものと考えられる。

1期新段階としては、荒砥北原遺跡1号方形周溝墓、下佐野遺跡Ⅰ地区A区4号前方後方形周溝墓等がある。集落遺跡としては、元島名将軍塚古墳に近接する4号溝中層[22]からの一括土器と、倉賀野万福寺遺跡7号住居跡[23]等がある。この段階の特徴としては、器受部に透孔を有する器台が出現することと、甕形土器の中においてS字状口縁の占める割合が非常に多くなることである。

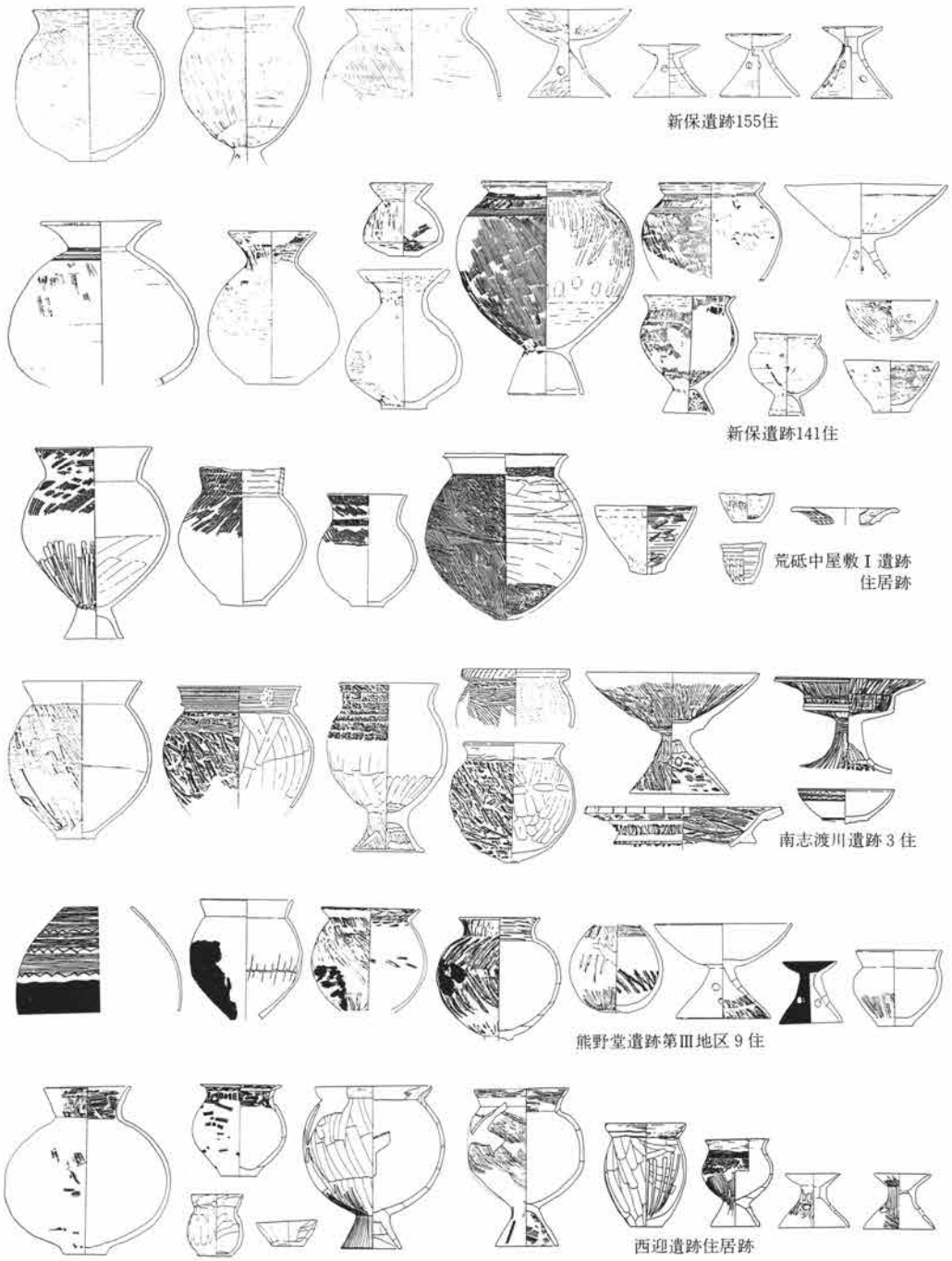


第366図　烏川水系を中心とした地域におけるⅠ－1期の墳墓出土古式土師器（1）



第367図　烏川水系を中心とした地域におけるＩ－１期の墳墓出土古式土師器（２）

なおＳ字状口縁台付甕については、１期の古段階と中段階では、新保遺跡141号住居跡・堤東遺跡２号周溝墓、下斉田遺跡２号住居跡[24]等にみられるものの、主体的には存在せず、全く含まない遺構も多い。またＳ字状口縁台付甕は、Ｉ期を通して肩部に横線を持つと考えられるが、Ｉ期終末



第368図　烏川水系を中心とした地域におけるＩ－１期の集落出土古式土師器（１）

第369図　烏川水系を中心とした地域におけるＩ－１期の集落出土古式土師器（２）

には肩部横線を持たないＳ字状口縁台付甕が出現している可能性もある。

下佐野遺跡Ｉ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓出土の土器は、伊勢湾西岸地域の弥生終末から古墳時代初頭の土器に類似したものが存在しており、彼地の土器の系譜を引くものと考えられるが、山陰系の口縁部をもつ壺形土器は、伊勢湾西岸地域を介したものと考えることが出来るかも知れない。

群馬県平野部に分布する古式土師器は、従来石田川式土器と呼ばれ、甕形土器においてはＳ字状口縁が主体を占めることがその特徴とされてきた。しかし最近の調査によって、Ｓ字状口縁台付甕が主体を占める以前に、Ｓ字状口縁を含むものの基本的には平縁口縁の甕形土器によって構成される段階が存在することが明確となった。この段階の遺構は、１期の中・古段階に併行するものであり、烏川水系以外では、荒砥前原遺跡Ｃ区２号住居跡[25]、間の山遺跡４号住居跡[26]、御正作遺跡23号住居跡[27]、重殿遺跡４・14号住居跡[28]、鹿島遺跡７号住居跡[29]、今井南原遺跡147号住居跡[30]、その他にも多くの遺構が検出されている。

下佐野遺跡の古墳時代前期墳墓は、１期中段階にII地区７区４号方形周溝墓（第１グループ）が、１期新段階にＩ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓（第２グループ）が出現する。

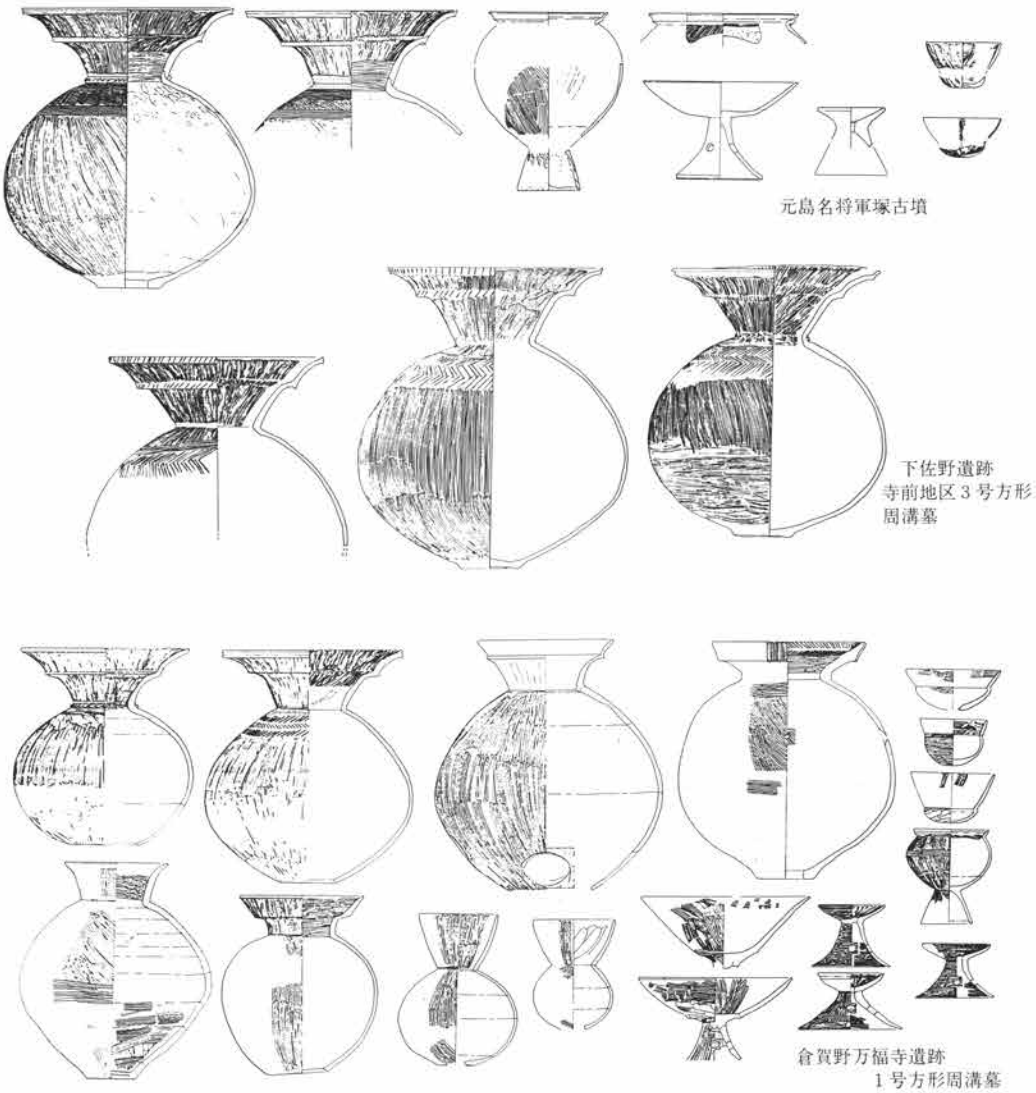
Ｉ－２期

小型丸底坩や小型丸底埦、およびそれに類似した小さな平底をもつ小型坩の出現後から、長脚化した高杯が出現するまでを２期とした。これは納所編年のIII期、横川氏編年の五領II式期に対応する。この時期の烏川流域は、甕形土器においてはＳ字状口縁が主体的となる。ここでは、Ｓ字状口縁台付甕に肩部横線を有するものと有しないものが併存する段階を古段階、肩部横線がみられなくなる段階を新段階として捉えた。

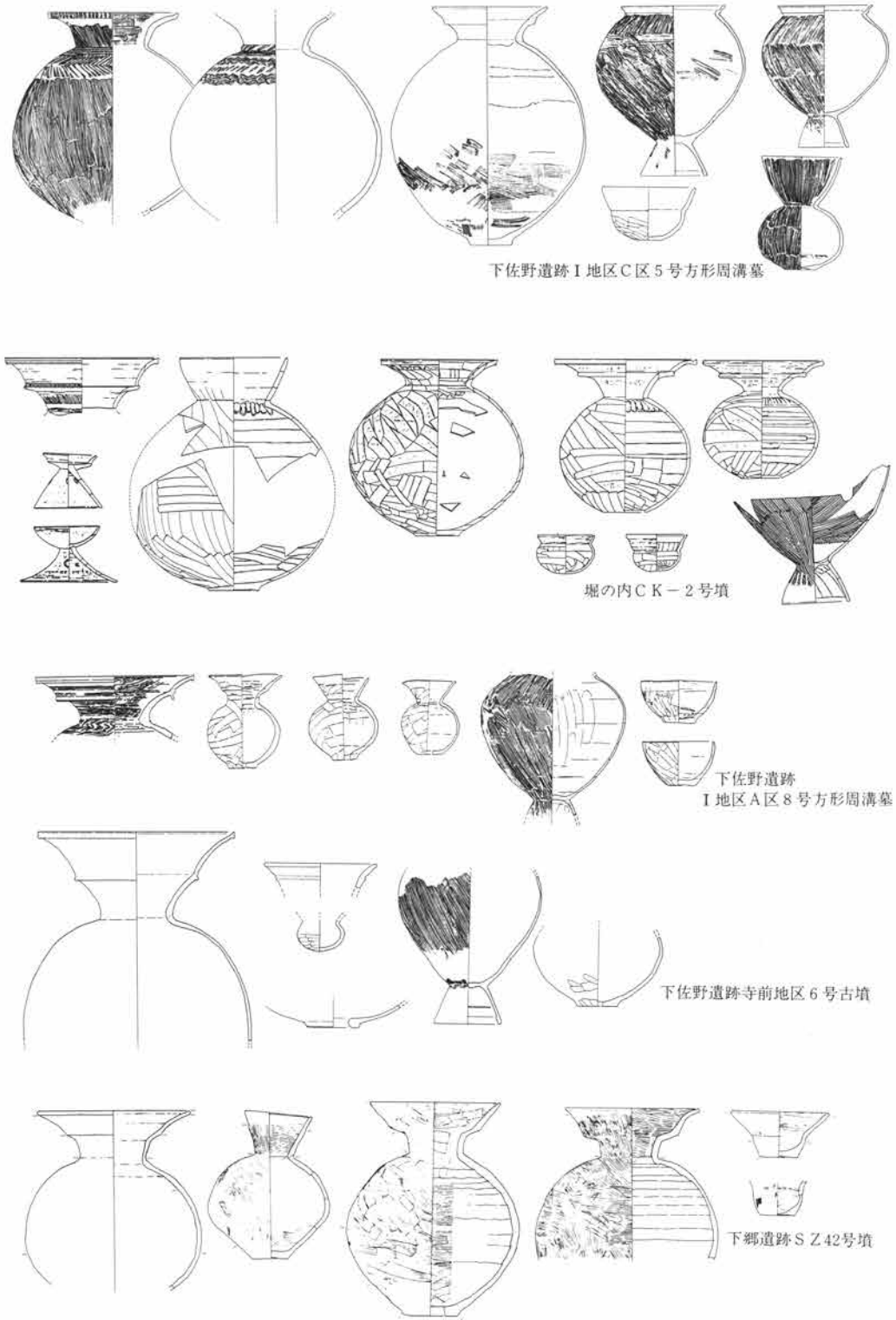
２期のうち古段階は、元島名将軍塚古墳・倉賀野万福寺遺跡１号方形周溝墓・堀の内遺跡ＣＫ

―2号墓[31]（前方後方形）等が考えられる。また集落では、綿貫遺跡住居跡[32]、諏訪遺跡25号住居跡[33]、堀の内遺跡BH―1号住居跡等がある。元島名将軍塚古墳から出土した壺形土器は、田口一郎氏により「伊勢型二重口縁壺」と呼ばれているが、同様な壺は倉賀野万福寺遺跡1号方形周溝墓や下佐野遺跡寺前地区3号方形周溝墓、八幡原遺跡[34]、五領遺跡1号住居跡[35]から出土しており、共伴した他の土器からも同時期で時間幅が殆んど無いことがわかる。なお、下佐野遺跡I地区C区5号方形周溝墓は、S字状口縁台付甕の形態からこの段階と考えられるが、赤色塗彩され口縁部中段に稜をもつ壺形土器は、高畑遺跡1号方形周溝墓[36]に同種のものがあるが、同周溝墓の伴出遺物から3期～和泉期のものであり、この段階になってから供献されたか粉れ込んだものであろう。

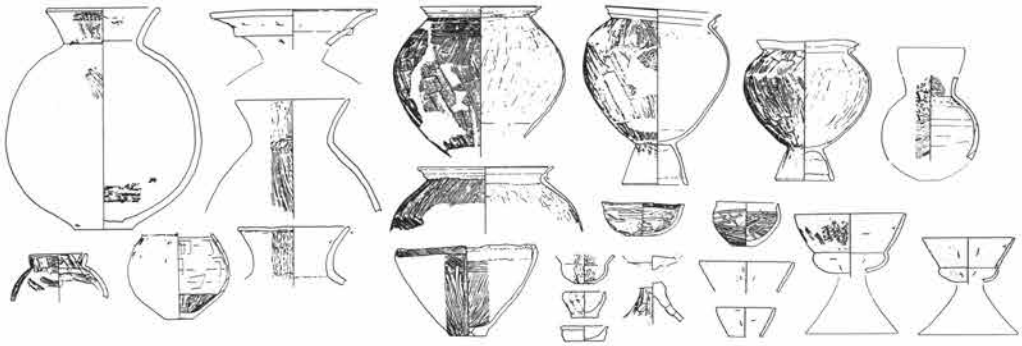
2期新段階として、I地区A区8号・5号方形周溝墓、下郷SZ42号墳、鈴の宮遺跡7号墓（前



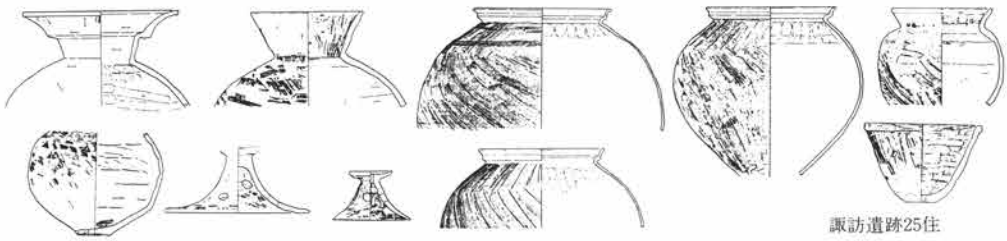
第370図　烏川水系を中心とした地域におけるI－2期の墳墓出土古式土師器（1）



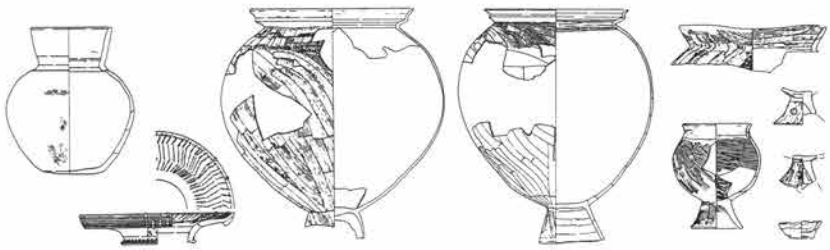
第371図　烏川水系を中心とした地域におけるⅠ－２期の墳墓出土古式土師器（２）



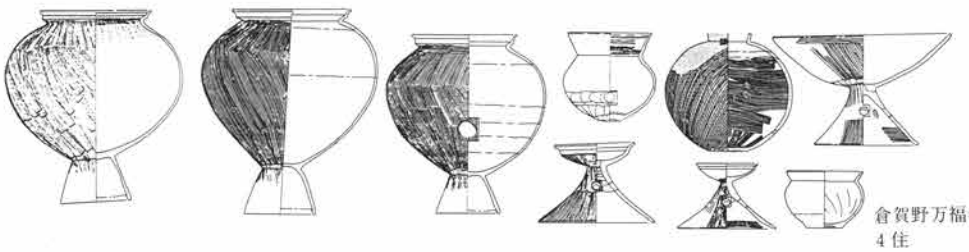
綿貫遺跡Ｓ１－2001住



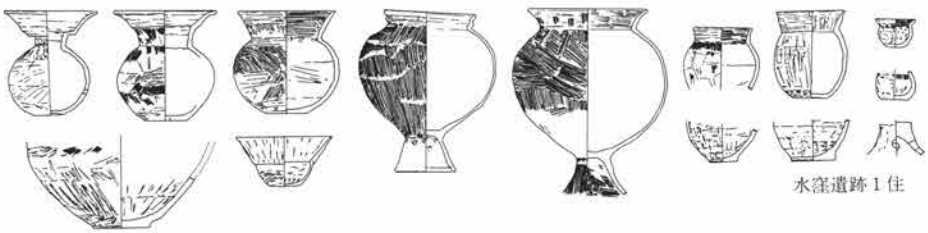
諏訪遺跡25住



堀の内遺跡
ＢＨ－１住



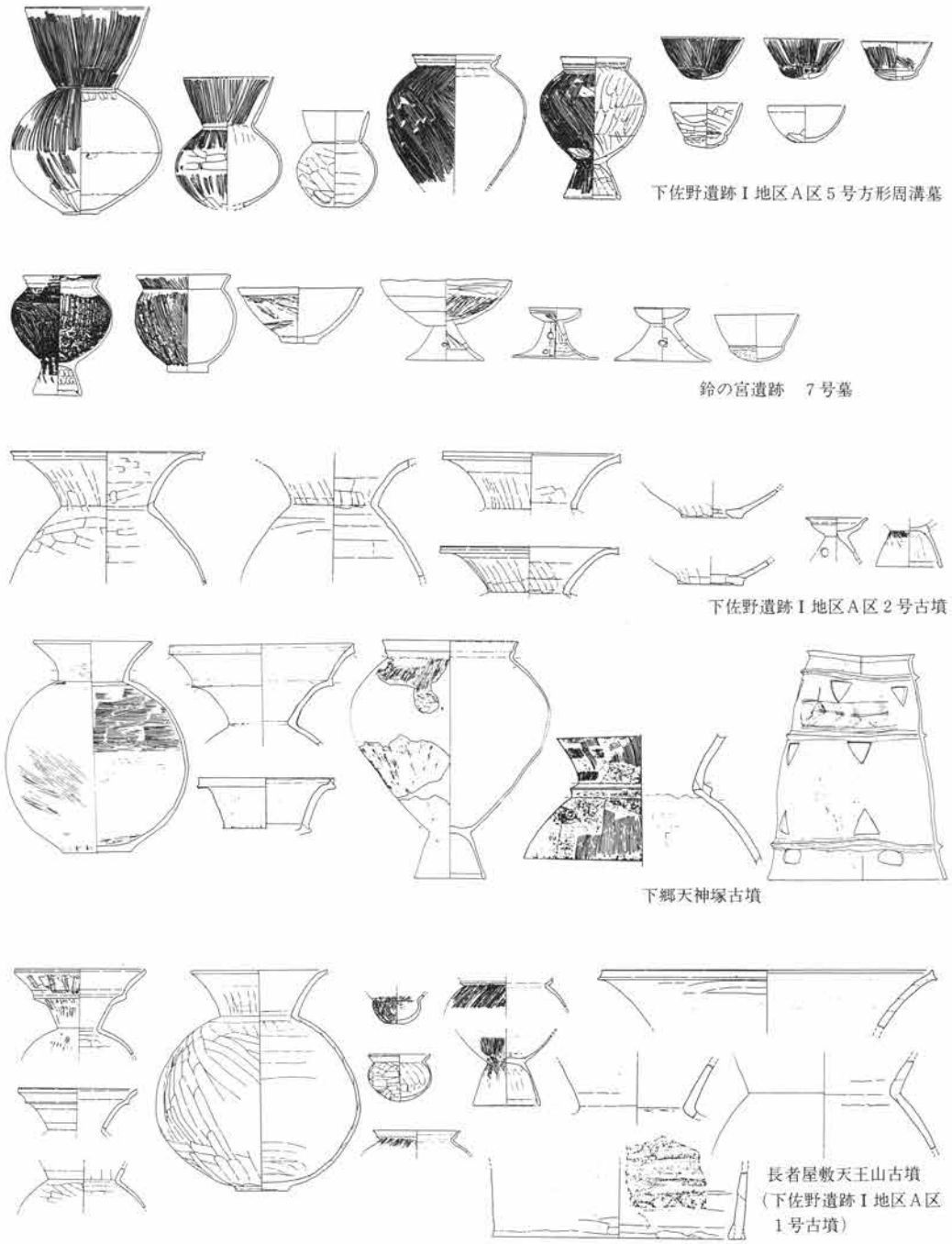
倉賀野万福寺遺跡
４住



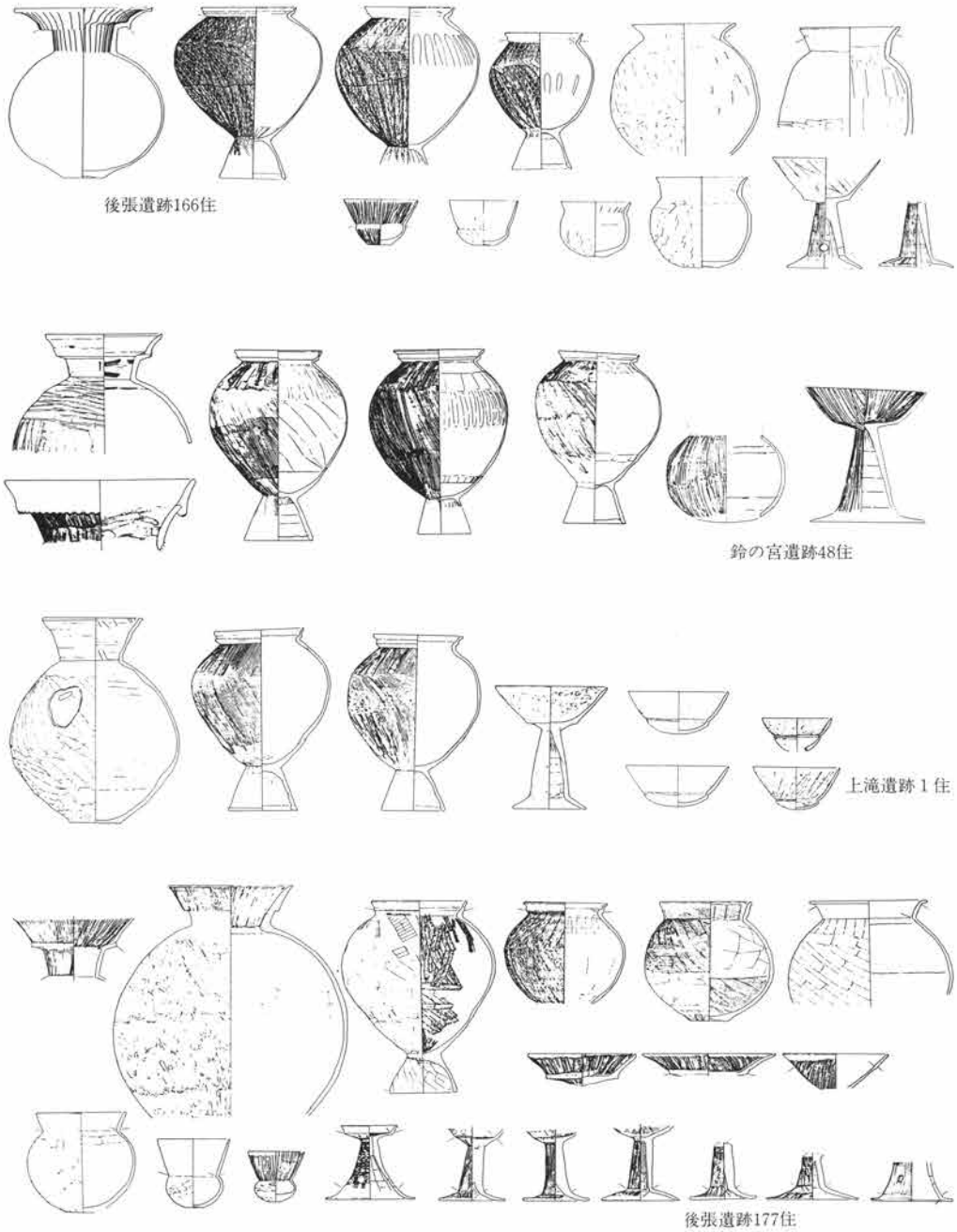
水窪遺跡１住

第372図　烏川水系を中心とした地域におけるＩ－２期の集落出土古式土師器

方後方形)等がある。また明確ではないが、可能性のあるものとして下佐野遺跡Ⅰ地区２号古墳、寺前地区６号・９号古墳がある。なお集落としては、倉賀野万福寺遺跡４号住居跡、水窪遺跡１号住居跡[注]等がある。このうち下佐野遺跡Ⅰ地区Ａ区８号方形周溝墓出土の小型壺形土器は、水窪



第373図　烏川水系を中心とした地域におけるⅠ－２(新)～Ⅰ－３期の墳墓出土古式土師器・埴輪



第374図　烏川水系を中心とした地域におけるⅠ－３期の集落出土古式土師器

遺跡の小型壺形土器と類似している。また下郷ＳＺ42号墳にも、規模は異なるが同形態の壺形土器があり、同一段階を示すものであろう。また下佐野遺跡Ⅰ地区Ａ区２号古墳、寺前地区９号古墳の壺形土器の口唇部形態は、２期に類似したものが存在しており、本時期か下っても３期の早い頃であろう。

下佐野遺跡の２期墳墓としては、前述した以外にⅠ地区Ａ区10号・12号、Ｃ区３号・５号・７

号、D区１号・２号、II地区７区３号がある。なお出土土器が少なく１期との区別が困難なものとして、II地区７区１号方形周溝墓があり、次の３期との区別が困難なものとしては、Ｉ地区Ａ区１号・３号・６号・７号・９号、Ｉ地区Ｃ区１号・２号・６号方形周溝墓がある。

Ｉ－３期

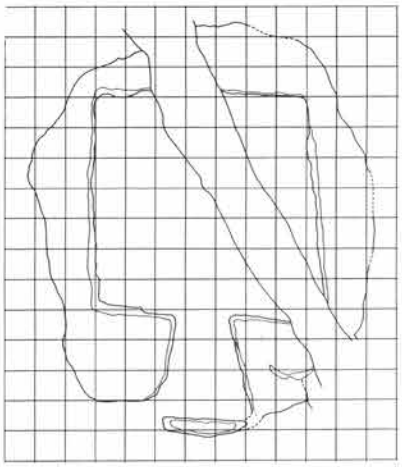
住居跡から長脚化した高杯と伴出した遺物を同時期と考え、３期とした。これと併行する時期の墳墓として、下郷天神塚古墳・長者屋敷天王山古墳（下佐野遺跡Ｉ地区Ａ区１号）、下佐野遺跡Ｉ地区Ａ区３号方形周溝墓等が考えられる。下郷天神塚古墳出土のＳ字状口縁台付甕は、後張遺跡177号住居跡[40]出土の甕と同一段階を示している。また下佐野遺跡Ｉ地区Ａ区３号方形周溝墓からは、長脚化した高杯の破片が出土している。長者屋敷天王山古墳出土の土器は、すべて周堀内からであるが、１～２期および古墳時代後期の遺物と混在する出土状態であり、本古墳に伴う遺物の特定は難かしいが、これら他時期の遺物を除外した残りのうちのいくつかを第373図に掲げた。土器は、古墳時代中期の和泉期古段階にみられるものも含まれており、３期の終末から和泉期への過渡期であろう。下佐野遺跡の３期墳墓は、出土土器が限られていることもあって、上述した以外には特定することが難かしい。

出土土器からみた古墳時代前期の墳墓は、１期の中段階から３期の終末まで連続して造営された。しかし１期は少なく、殆んどは２期から３期にかけてのものである。これを各グループ別に比較・検討する必要はあるが、幅25mという新幹線の路線のみの調査では、困難と言わざるを得ない。第１グループと第３グループにおいては、調査区内において確認されたのは方形周溝墓のみであるが、第２グループにおいては、１期新段階にＩ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓が築かれたあと、続いて方形周溝墓が築かれ、２期の新段階にはおそらく直径約30mの円墳となると思われるＩ地区Ａ区２号古墳が築かれた。そして３期の末には直径約42mの長者屋敷天王山古墳が築かれている。また北端部の第４グループでは、２期古段階に方形周溝墓（寺前地区３号）のあと、新段階には寺前地区６号古墳、ひき続いて９号古墳（共に前方後方墳）が築かれている。

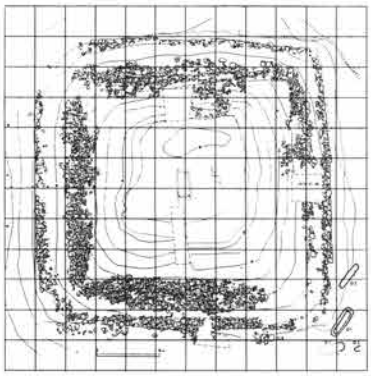
(2)　古墳時代前期墳墓の企画について

古墳時代前期の墳墓については、多くの遺跡で１尺約24cmの晋尺使用の可能性が指摘されている。ここではＩ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓と、寺前地区６号古墳についてその可能性を考えるが、類例としてほぼ同時期の築造と考えられる福岡県久留米市祇園山古墳[41]例を加えた。

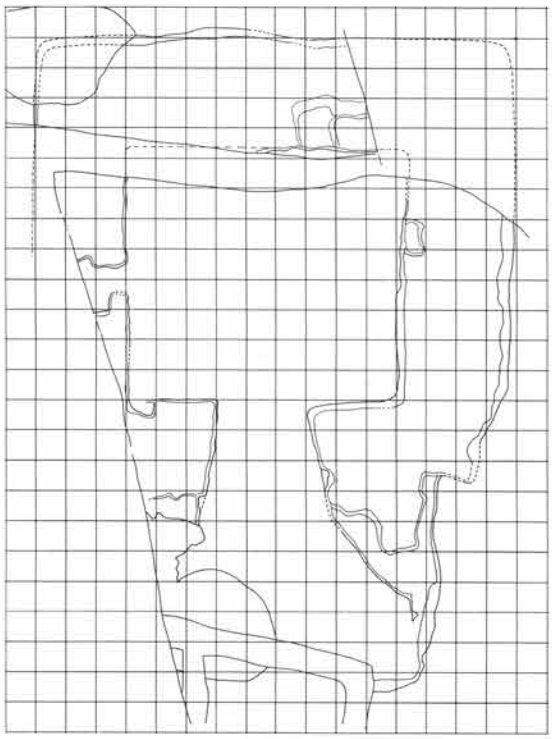
古墳時代初頭において晋尺が使用されていたと仮定して論を進めると、Ｉ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓については、方台部が70尺×70尺となる可能性が考えられる。なお、前方部に向かって右側と前方部側の辺が開く形となっているが、これは単なる誤差ではなく、当初から左右非対称に企画されたものであろう。寺前地区６号古墳については、方台部が90尺×85尺で、前方部側の辺は30尺づつに分割され、中央が前方部へと続く形となる。また前方部の周堀を含めた幅については、160尺となるものと思われる。久留米市祇園山古墳については、一辺100尺の正方形と考



下佐野遺跡Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓



福岡県久留米市祇園山古墳



下佐野遺跡寺前地区６号古墳

１マス2.4m（魏・西晉尺で10尺）

第375図　古墳時代前期墳墓の平面企画

えることが出来る。なお祇園山古墳の向かって右側の葺石は整合しないが、墳丘盛土の裾は一辺100尺となっている。

古墳時代前期墳墓の企画に用いられた尺度については、漢時代の尺が使用されたという先解や、中国の制度尺は使用されなかったとする見解がある。特に後者については、制度尺の使用を必要とするような社会では無かった[42]とするものであり、この問題は古墳時代前期社会の評価にかかわる重要な問題でもあるため、若干この点について考えてみたい。

「晋尺」と一般に称されている尺度は、西晋王朝によって使用された尺であるが、晋王朝の成立は、司馬炎による前王期の魏からの「禅譲」であり、尺については魏王朝から引き続いて同じものが使用されたと考えられる[43]。従って正確には、「魏・西晋尺」と呼称すべきものであろう。なお「隋書」律暦志によると、晋尺には「晋前尺」と「晋後尺」があり、晋前尺は楽律尺、晋後尺は晋が江南に都を遷してから（東晋）のものである。

日本列島内の政治勢力は、魏・西晋王朝とは密接な関係をもっていた。魏の景初２年（238）６月４万の兵を率いた司馬懿は遼東を攻略し、呉と結び独立の形勢を示した公孫淵を討滅する。こ

れによって遼東四郡（遼東・帯方・楽浪・玄菟）に実質的な魏の支配力が及ぶようになるが、それから1年後の景初3年6月、邪馬台国女王卑弥呼は魏へ遣使する。それは魏朝において実力№1となりつつあった司馬懿の主導のもとに計画・逐行されたとも考えられるが、ここで重要なことは、公孫政権当時は遼東と呉との海上交易が盛んであったということと、遼東四郡が魏に帰した翌年の景初3年に、呉軍の羊衡が海上から遼東を攻略していることであろう。魏と呉との戦いは毎年のように繰り返されており、遼東半島から朝鮮半島にかけての魏の商船が、魏皇帝との君臣関係が成立した日本列島(邪馬台国)に頻繁に向かったであろうことは容易に想像がつく。時として交易に必要となったであろう尺については、魏の尺が使用されたと考えることが自然であろう。邪馬台国が日本列島内のいずれに存在したにせよ、交易や当然考えられる魏からの渡来人（主として朝鮮半島か）たちを通じて、魏の尺が弥生時代後期から終末期の日本列島に入っていたと考えることは出来よう。泰始2年（266）11月、邪馬台国女王壱与は晋に遣使する。それは禅譲によって司馬懿の孫の司馬炎が帝位についた翌年であった。このタイミングの良さを邪馬台国女王家と、かつて東方と密接な関わりを持った司馬家との関係とみることも出来ようが、ともかく魏との交流は存続していたのであろう。

日本列島に定型化した前方後円（方）墳が出現するのは、3世紀後葉から4世紀初頭と考えられている。それは邪馬台国王女壱与が晋に遣使してから10年～40年後のことであるが、最初の大形前方後円墳とされる箸中山古墳（箸墓）には、「魏・西晋尺」が使用されている可能性が強い。すなわち白石太一郎氏による復原[44]値では、箸中山古墳は墳丘長276m、前方部長126m、後円部径156m、くびれ部幅60m、前方部前面幅132mで、一尺24cmとすると、墳丘長1,150尺、前方部長525尺、後円部径650尺、くびれ部幅250尺、前方部前面幅550尺となる。また梅沢重昭氏や辰巳和弘氏によって、25尺（6m）を単位とするモジュールが存在したとする説[45]も出されているが、箸中山古墳の各部はすべて25尺（6m）で割り切れる数値でもある。

魏晋南北朝時代初期の複雑な国際関係の中で成立した、君臣関係を基礎とする魏・西晋王朝との交流を通じて、「魏・西晋尺」が弥生後期から終末期にかけての日本列島で部分的であるにせよ使用されるようになり、それがやがて古墳築造にも使用されるようになったと推定したのであるが、その妥当性については、発掘調査による多くの遺構での検証と、当時の国際交流のあり方についての検討を必要としよう。

2　後期および終末期の墳墓について

この時期の墳墓としては、帆立貝型古墳であるII地区7区3号古墳、前方後円墳となる可能性のある寺前地区4号古墳(長山古墳)、方墳となる可能性の強い寺前地区7号古墳等もあるが、大部分は円墳か円墳となる可能性の強いものである。また石槨3期がある。なお古墳には、埴輪を有するものと有しないものがある。埴輪を有しない古墳については、I地区B区2号古墳・I地区D区9号古墳のように、石室または副葬遺物の一部が確認されたものもあるが、他の多くの古

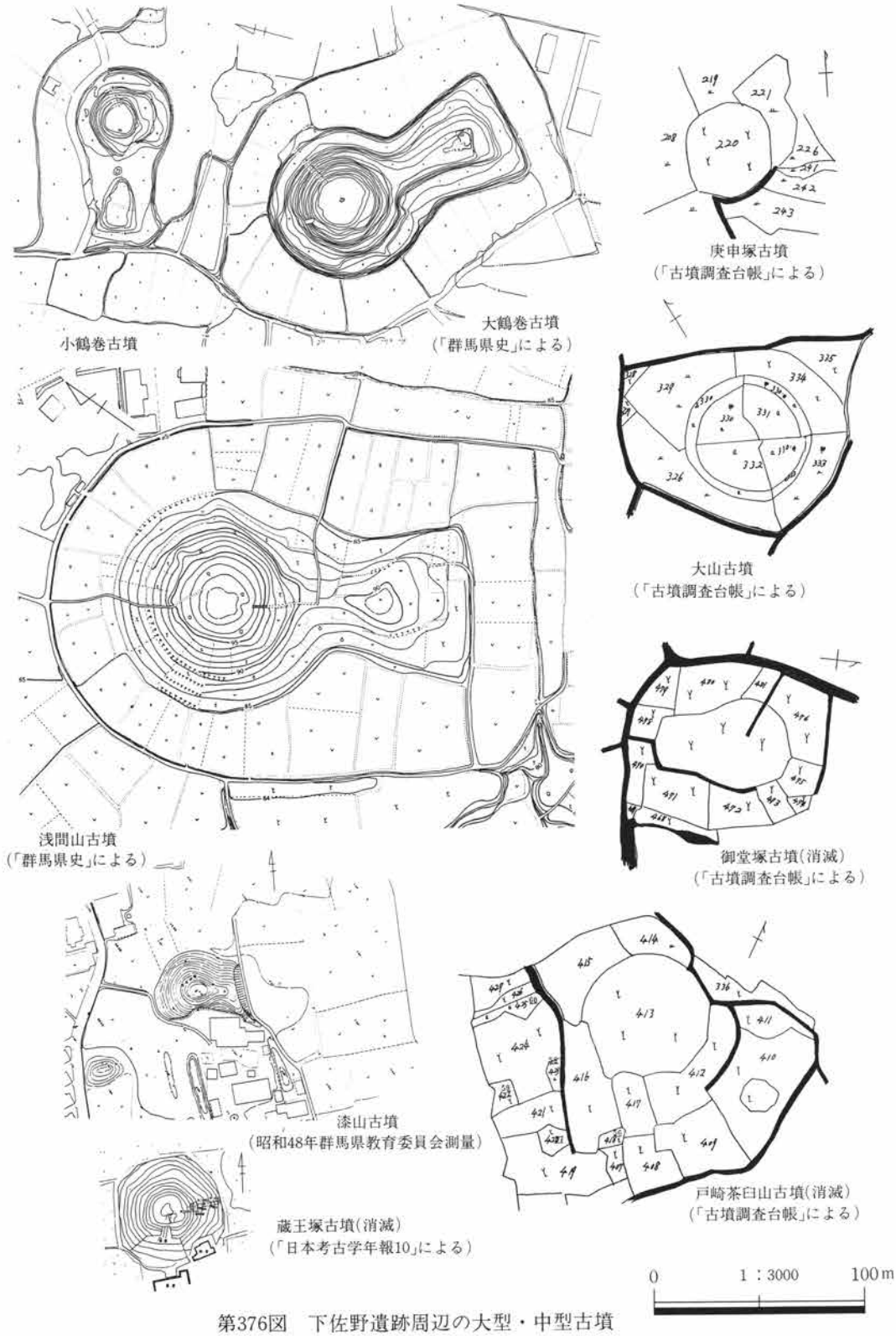
墳については周堀のみの確認であり、直接的には築造時期を示すものは見当らない。しかし埴輪を有しない古墳については、埴輪が使用されなくなった時期の古墳である可能性が強く、ここでは埴輪消滅後に築造されたものと考えておきたい。

前期末から中期への過渡期においては、直径約30mの円墳となる可能性の強いＩ地区Ａ区２号古墳や、直径約42mの円墳であるＩ地区Ａ区１号古墳（長者屋敷天王山古墳）が築かれた。しかしこれに続く時期（５世紀前半～中葉）の古墳は、調査区内においては確認されていない。調査区内において再び古墳が出現するのは、５世紀末葉を前後する時期である。それはＩ地区Ｂ区３号古墳とＩ地区Ｃ区１号古墳で、両古墳は約35mと近接して存在し、規模は共に直径約18mである。両古墳からの出土遺物に円筒埴輪があるが、いずれも横ハケをもつものが含まれており、またＣ区１号古墳の周堀内からは、後期初頭の土師器小形壺形土器が出土している。

後期の墳墓は、前期の墳墓である周溝墓や古墳の間隙に造られている。前期墳墓と重複する古墳として、II地区７区１号古墳があるが、これは重複する方形周溝墓の一辺が５～６ｍという小規模なためであろう。その他については、周溝墓の周溝と古墳の周堀の重複がみられるのみである。つまり後期の墳墓は、前期墳墓との重複を避けながら、前期墳墓の周囲へ造られていったことがわかる。調査区内においては、５世紀末葉を前後する時期から、円筒埴輪が縦ハケのみとなる６世紀中葉・後葉を経て、埴輪がみられなくなる７世紀代まで、連続して造営されたものと考えられる。

下佐野遺跡の存在する烏川左岸段丘上には、古墳が多く存在しており、佐野古墳群または下佐野古墳群と呼ばれている。ここには墳丘長60mの前方後円墳である漆山古墳が現存（前方部は消滅、寺前地区９号古墳の東方50mに存在）しているが、かつては漆山古墳の北方約100mにも墳丘長65mの御堂塚古墳が存在していた。また漆山古墳の東方約70mには、群馬大学によって調査された直径約50mの円墳である蔵王塚古墳[46]も存在していた。これらの古墳については、出土遺物や横穴式石室の存在等から６世紀代と考えられているが、この３基の古墳のうち、最初に築造されたのが前方部が剣菱型を呈するとも推定され、七鈴鏡を出土した御堂塚古墳であろう。この御堂塚古墳は、明治８年に横穴式石室が開口したが、大正11年に道路建設用の盛土として利用されたため消滅した。御堂塚古墳は、６世紀中葉を前後する時期となる可能性が強いが、続いて築造されたのが横穴式石室の形態から漆山古墳であり[47]、最も新しいのが蔵王塚古墳であろう。漆山古墳も蔵王塚古墳も埴輪をもっており、６世紀後半代に築造されたものと考えられる。

下佐野遺跡における比較的規模の大きな古墳には、前期に寺前地区６号・９号という２基の前方後方墳がある。そして前期から中期へ移行する時期には、Ｉ地区Ａ区１号・２号古墳が築かれた。しかしＩ地区Ａ区１号古墳（長者屋敷天王山古墳）が築かれたあと、後期になってから墳丘長65mの御堂塚古墳が出現するまで、比較的規模の大きな古墳は調査区内および周辺には認められない。また地籍図上においても比較的規模の大きな古墳の痕跡を発見することは難かしい。過去に何の痕跡も残さずに消滅してしまったことも考えられないわけではないが、古墳の立地する



第376図　下佐野遺跡周辺の大型・中型古墳

場所はすべて畑地と宅地であり、戦前にはかなり小規模な古墳まで残存していたことを考えると、何の痕跡も残さずに消滅した、おそらく100年前後の間に築造されたであろう数基の比較的大きな古墳の存在を想定することは、難かしいように思われる。したがって比較的規模の大きな古墳は、5世紀前葉から6世紀前葉の約100年間は造られなかった可能性もある。

5世紀初頭の時期には、遺跡の東方約500mには、大鶴巻古墳（123m）や浅間山古墳（171m）といった大型古墳が出現する。なかでも浅間山古墳は、5世紀初頭前後の時期において東日本最大の規模をもっており、毛野連合体首長墓と考えられている。この大鶴巻・浅間山古墳の粕沢川を隔てた西側には、大山古墳・戸崎茶臼山古墳（消滅）・庚申塚古墳という3基の円墳があり、出土遺物から大鶴巻古墳や浅間山古墳とほぼ同時期で、相互の密接な関連も既に指摘されている[18]。ところで、大山古墳と戸崎茶臼山古墳は直径60m、庚申塚古墳は直径42mの規模をもつ。I地区A区1号古墳（長者屋敷天王山古墳）は、庚申塚古墳と同じ直径42mであり、粕沢川両岸の古墳とほぼ同時期であることから密接な関連が想定される。すなわち長者屋敷天王山古墳の墳丘形態・規模は、大鶴巻・浅間山古墳被葬者を頂点とする政治秩序の中で成立した可能性が強いのである。

ところが5世紀前葉から中葉にかけては、毛野の連合体首墓は、大間々扇状地東側の所謂太田古墳群へと移っていく（別所茶臼山古墳168m・太田天神山古墳210m）。下佐野遺跡に比較的規模の大きな古墳がみられなくなるのは、所謂太田古墳群に連合体首長墓が移っていく時期と一致しており、下佐野遺跡を墓域とした首長層は、大鶴巻・浅間山古墳被葬者層と命運を共にして衰退した可能性も考えられる。やがて5世紀後葉になると、所謂太田古墳群の勢力は没落し、100m前後の前方後円墳が新たに出現する地域も少なくないが、下佐野遺跡に直ちに比較的規模の大きな古墳が復活することは無かった。それは如何なる理由によるものであろうか。これからの研究課題である。

（飯塚）

（注）

① 伊藤久嗣「遺物・遺構の考察」『納所遺跡』　三重県教育委員会　1980
② 横川好富「埼玉県の古式土師器」『埼玉県史研究』第10号　埼玉県　1982
③ 加納俊介「土器の交流―東日本―」『考古学ジャーナル』№252　ニューサイエンス社　1985
④ 安達厚三・木下正史「飛鳥地域の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号　日本考古学会　1974
⑤ 浅井和宏「パレススタイル」『欠山式土器とその前後』　愛知県考古学談話会　1986
⑥ 『弘法山古墳』　松本市教育委員会　1978
⑦ 『熊野堂遺跡(1)』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984
⑧ 『熊野堂遺跡第III地区・雨壺遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984
⑨ 『貝沢柳町遺跡』　高崎市教育委員会　1986
⑩ 『美里町史』通史編　埼玉県児玉郡美里町　1986
⑪ 『西大室遺跡群II』　前橋市教育委員会　1981
⑫ 松田　猛「荒砥中屋敷I遺跡」『群馬文化』第195号　1983
⑬ 『荒砥島原遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983
⑭ 『西大室遺跡群II』　前橋市教育委員会　1981
⑮ 「熊野堂遺跡・第II地区」『年報2』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983
⑯ 『新保遺跡II』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
⑰ 『堤東遺跡』　群馬県教育委員会　1985
⑱ 『下佐野遺跡II地区』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986

⑲　『塚本山古墳群』　埼玉県教育委員会　1977
⑳　『下道添遺跡』　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1987
㉑　『深津地区遺跡群』　群馬県勢多郡粕川村教育委員会　1985
㉒　『元島名将軍塚古墳』　高崎市教育委員会　1981
㉓　『倉賀野万福寺遺跡』　高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会　1983
㉔　『下斉田・滝川Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1987
㉕　『荒砥前原遺跡・赤石城址』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985
㉖　『西太田遺跡』　伊勢崎市・伊勢崎市教育委員会　1983
㉗　『御正作遺跡』　群馬県邑楽郡大泉町教育委員会　1984
㉘　『重殿遺跡』　群馬県新田郡新田町教育委員会　1984
㉙　『赤掘村鹿島遺跡』　群馬県佐波郡赤掘村教育委員会　1977
㉚　『今井南原遺跡発掘調査概報』　群馬県佐波郡赤掘村教育委員会　1980
㉛　『Ａ１掘ノ内遺跡群』　藤岡市教育委員会　1982
㉜　『綿貫遺跡』　高崎市教育委員会　1985
㉝　『下田・諏訪』　埼玉県教育委員会　1979
㉞　『八幡原遺跡』　高崎市教育委員会　1974
㉟　『土師式土器集成』本編１　東京堂出版　1971
㊱　『鴻池・武良内・高畑』　埼玉県教育委員会　1977
㊲　『下郷』　群馬県教育委員会　1980
㊳　『鈴ノ宮遺跡』　高崎市教育委員会　1978
㊴　『水窪・新井遺跡の調査』　埼玉県大里郡岡部町教育委員会　1976
㊵　『後張』　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982
㊶　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　XXVII　福岡県教育委員会　1989
㊷　石部正志ほか『巨大古墳と倭の五王』　青木書店　1981
㊸　現在、中華人民共和国で発行されている古代の尺度を扱う書籍類の殆んどが、魏と西晋は同じ尺度が使用されたとしている。
㊹　白石太一郎ほか「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第３集　国立歴史民俗博物館　1984
㊺　梅沢重昭「毛野の古墳の系譜」『考古学ジャーナル』№150　ニューサイエンス社　1978
　　辰巳和弘『日本の古代遺跡』Ｉ静岡　保育社　1982
㊻　尾崎喜左雄「群馬県高崎市蔵王塚古墳」『日本考古学年報』10　誠文堂新光社　1963
㊼　尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』　吉川弘文館　1966
㊽　金子智一ほか「烏川・井野川流域における古墳出現期の地域相」『古墳出現期の地域性』北武蔵古代文化研究会ほか　1984

第3節　高崎市東南部、倉賀野・佐野地域の古墳形成と発展

梅　沢　重　昭

1　烏川左岸沖積平野の遺跡分布

洪積世末期に浅間山の火山活動に起因する大規模な泥流層が基盤層となって形成される群馬県央部の沖積平野は、その中央部を榛名山南麓に源をもつ井野川によって東西二つの地域に地勢区分される。この東の地域は、いわゆる前橋台地で、北から東縁を旧利根川の氾濫原に境され、前橋市街地付近から東南方向に延びる河崖が伊勢崎市宮古町付近に達しており、これに対応するように、西縁を井野川によって侵蝕された河崖が高崎市島野町付近から南に延びて、八幡原町地先の烏川合流点付近に達し、南側を劃する烏川の河崖に連続する。旧利根川・井野川、そして烏川に面する前橋台地周縁の地は高燥な地形を形成し、その台地中央部に向って湿潤な沖積地が広がっている。前橋台地の遺跡分布は、概ねこの台地周縁の高燥地を中心に拡がりが見られ、それも古墳時代以後のものが主体で、弥生時代の終末期までは烏川沿いの一部を除いて、ほとんど遺跡は存在しない。井野川以東の前橋台地地域は、弥生時代の終末期ごろまで、ほとんど無住の地域だったのであり、地域形成が進むようになるのは、古墳時代の到来を待ってであった。

ところが、この前橋台地にたいして、井野川西方の地域は、その西から南縁を烏川に劃され、高崎市並榎町付近から高崎市岩鼻町に連なる河崖が発達し、これに対応するように東縁の井野川寄りには、井野川支流の粕川の河崖が高崎市柴崎町から岩鼻町台新田地区にかけて発達しており、この烏川・粕川にかこまれて台地状の地形を形成している。この台地状の地は、井野川以東の前橋台地に対して、〝倉賀野台地〟と呼ぶのが適わしいであろう。この倉賀野台地も前橋台地と同様に周縁部、特に烏川沿いに高燥な地形を形成し、内奥部に湿潤な沖積地を発達せしめている。しかし、水系的には榛名山南麓の扇状地末端に発達した網状流の一部が台地内に流入しており倉賀野台地の内奥部には各所に小規模な谷地形が分布し、なかでも、江木町付近から中居町・矢中町・栗崎町にかけて、低湿地帯が広がっており、小規模な島状の微高地形が分布している。

(1)　弥生時代の遺跡分布

このような、地形的な条件に恵まれて、倉賀野台地内の遺跡分布は、弥生時代中期後半ごろから急激に増加する傾向が認められる。竜見町期の遺跡としては、巾遺跡・日光町遺跡・江木遺跡・競馬場遺跡・頼政神社付近遺跡・城南小校庭遺跡・竜見町遺跡などが早くから知られており、近年になってからも、中居団地の造成地内や、上佐野町地内における上越新幹線地域内の調査等においても当該遺跡の存在が確認されている。これらの竜見町期の遺跡立地で共通している点は、台地内に形成された小規模な谷地に面した微高地を選んで営なまれているということである。このことは竜見町期になっての「倉賀野台地」への集落進出が、自然灌漑による谷地水田の耕作という技術的水準にあった当時の稲作農耕に適した小規模な谷地形を各所に分布せしめているという自然環境によっていたからと思われる。弥生時代中期終末から後期初頭にかけて高崎市周辺の

平野地域における農耕社会が急速に成長し、地域形成が進展したことをうかがわせるのである。この後を受けての弥生時代後期、樽期の遺跡の分布は、中居町地内に確認されているが、竜見町期に比して稀薄な感はまぬかれない。樽期の遺跡が濃密な分布を示しているのは、台地北縁の地で、烏川寄りの地域では並榎町付近を中心にしており、上佐野町付近にも散見できず、井野川、粕川寄りの地域では井野町付近に多く認められているが、下流域になるにしたがって稀薄で、南限は粕川東側の綿貫町堀米南遺跡で、樽式土器が石田川期集落地から確認されているにすぎない。台地の東部から東南部を占める柴崎町から岩鼻町にかけては、現在のところ樽期の集落遺跡は確認されていない。また、南部の下佐野町から倉賀野町にかけても明らかでなく、倉賀野台地の南半部分は前橋台地と同様に弥生時代後期には、ほとんど無住の地域であったことが推定される。弥生時代後期の遺跡は、台地の西北部を中心に榛名山南麓からの水系が取り付く付近の網状流の発達した地にほぼ限定されている。小規模な谷地などを利用した自然灌漑水田を営なみやすい土地が、弥生時代の農耕社会の基盤となっており、そこを踏み出すような状況はまだ弥生農耕社会には生れていなかったのであろう。

(2)　石田川系土器文化の進出

ところがこのような状況にあった倉賀野台地にも、弥生時代の終末期頃から、外来系の土器文化が急速に拡まっていった。いわゆる石田川式土器と呼ばれる土器群である。この石田川式土器を出土する遺跡地は、台地の周縁の高燥地を中心に分布しており、特に上佐野～下佐野町一帯や、中居町、柴崎町や岩鼻町台新田一帯に認められる。台地の弥生時代遺跡の稀薄地域に分布の主体があるかのようである。烏川寄りの上佐野町地内では、山崎病院東側隣接地でかつて田島桂男氏によって採集された複合口縁壺形土器が石田川期の土器として知られているが、この土器の出土地点は、今次の調査で、旧佐野村18号墳（前方後方墳）の前方部西方に位置する寺前地区第3号方形周溝墓の一部であることが推定された。下佐野町翁地内では、単口縁壺形土器が採集されているが、この土器は底部に籾痕を残したもので、また肩部には樽式土器の影響を強くとどめている波状文をめぐらしている。優勢な外来系の石田川式土器を母胎にしながらも、在来系の土器文化の残映が認められるものである。一方、井野川寄りの地域では粕川の河崖に接して位置した柴崎町蟹沢古墳出土と伝えるものに石田川期の複合口縁壺形土器、複合口縁台は甕形土器、高坏などの破片がある。また綿貫町地内現在の日本原子力研究所高崎研究所敷地内からも複合口縁台付甕、高坏の出土が知られている。

最近、この倉賀野台地地区でも発掘調査が各所で行なわれているが、それらのなかで、石田川期の集落遺跡のあり方を示しているものとして注意されるのに、倉賀野町万福寺遺跡と矢中町村東遺跡とがある。前者は、烏川の河崖縁に近く分布する遺跡で、大鶴巻古墳の前方部南面に分布している。縄文時代中期の住居址等も発見されているが、この地に再び集落が形成されるのは石田川期のものであり、石田川期の集落形成が他からの移住による開発型の様相をもって展開した様子がうかがえる。調査面積6,013m²の範囲内において、13軒の住居址、方形周溝墓12基が発見、

調査されている。住居址の多くは1辺が5m前後のものを普通としているが、なかには1辺が3mの小形のものも含まれる。床面プランは方形のもの4軒、長方形のもの3軒が確認されている。そこでそれらの住居址と混在し、あるものは、重複する形で方形周溝墓が分布している。方形周溝墓の規模は、小形のもので方台部が一辺6mに満たないものもあるが、7m～8m前後のものが一般的である。しかし、方台部の一辺が21mを超えるきわだって大形のものも存在し、その方形周溝墓を形成した村落社会のなかに村首長的性格をもった有力者層が出現していたことをうかがわせる。万福寺遺跡の各住居址や方形周溝墓から出土した土器数は、複合口縁壺形土器が概して個性的な特徴をとどめ、バラエティーに富んでいるが、甕形土器は南関東的な色彩をとどめている単口縁形のものが一部に存在するものの、主流は複合口縁形で、胴肩部に一周する櫛描・沈線をめぐらしたものと、めぐらさないものとに峻別できる。器台形土器や高坏形土器の器形も、前者は脚部の張りが大きく広がるものと、広がらないもの、後者は有段受け皿と椀形受け皿の形態を示すものにわけられるように、これらも2種類が存在する。これらの土器類の特徴から万福寺遺跡の土器群は、形式的には前後2期に区分でき、特に壺形土器において、東海西部地域（濃尾平野）の弥生時代終末期の土器様式の伝統を強く残しているものが認められる。東海西部地域を源流とする土器文化の進出が優勢に展開したことをうかがわせるのである。

矢中村東遺跡もこの万福寺遺跡と同様な性格を示す集落遺跡と推定される。粕川の河崖縁辺に寄った地に位置する遺跡地の一部から方形周溝墓1基が確認されており、口縁部が小さな折かえしとなっている複合口縁壺形土器や、小形台付複合口縁甕形土器等が出土している。この矢中村東遺跡においても、弥生時代終末期の遺構・遺物類は明らかでなく、石田川期になって急速に形成された外来系の集落遺跡であることが推定できる。

倉賀野台地における石田川期の集落遺跡の分布は、その西南部から南部の烏川沿いの地や東南部の粕川沿いの地に、極めて独自性の強い様相、すなわち、無住地への入植・開拓という性格をもって出現した集落遺跡という色合いをうかがわせるのである。石田川期の外来系集落は、弥生時代後期からの在地的な農耕社会との間に一線を保っており、その農耕社会を独自に形成していったものと考えられるのである。こうした石田川期の農耕社会が成立したことを契機として、台地内奥部の在地的農耕社会はその影響を強く受け、変ぼうしていったものと推定される。

このような展開をみた倉賀野台地地域の石田川期の集落社会の実相をより具体的にうかがわせる一つに、今次の調査において明らかにされた上佐野町～下佐野町に所在する遺跡がある。

2　下佐野遺跡の石田川期集落

第2章で詳述しているところであるが、今次の調査で明らかにされた遺跡地は、下佐野町地内の烏川沿いに面した約1200mにわたり分布している。上越新幹線地域内に限定された調査であることから、その広がりは推定の域を出ない。烏川左岸の河崖縁に広がる高燥地は、広いところで約350m、狭いところで約250m、長さ1500mにわたって延びている。この高燥地に面して東方には

湿潤な沖積地が広がり、上佐野町東方から下之城町・中居方面に連なり、台地の内奥に延びている。そしてその沖積地を北から南に延び烏川に流出する小谷・粕沢川が位置している。倉賀野万福寺遺跡は、この沖積地の東南端から東方に延びる烏川左岸河崖縁の高燥地の西端に近く分布する遺跡である。粕沢川流域の沖積地を囲むように石田川期集落が形成されたことが推定される。

今次の調査で明らかにされた石田川期の遺跡の分布は、南北1200mの範囲にあって、ほぼ２地区に大別できる。その一は、Ⅰ地区Ａ区とⅡ地区との境界付近を中心に分布し、発掘区内では17軒が確認されている。その二はⅠ地区Ａ区北端からⅠ地区Ｂ区を経てⅠ地区Ｃ区南端にいたる約200mの範囲で、下佐野地域での石田川期集落は、この地区に集中しているかの感がある。29軒が発掘区において確認された。これらの住居址の分布状況は、下佐野長者屋敷天王山古墳を南限とし、その墳丘下から重複する５軒の住居址が少し離れて位置していたが、住居址分布の主体はⅠ地区Ｂ区の南半に４軒、北半約70mの一部からⅠ地区Ｃ区にまたがり19軒が集中して分布していた。Ⅰ地区Ｃ区南半部には、Ⅰ地区Ｂ区群より30m近く離れて４軒が存在していた。発掘区内の所見では、石田川期の集落分布の中心は、Ⅰ地区Ｂ区、すなわち、下佐野長者屋敷天王山古墳の北方約200mの範囲に集中しており、南北に分れ、２支群を構成しているかの様相がある。そしてその南方に約230m離れてⅡ地区・Ⅰ地区Ａ区の境界付近に他の集落を構成する住居址群の分布が推定される。このことを根拠にあえて、推論するならば、下佐野地区の石田川期の集落形成は、烏川左岸の河崖縁の高燥地に少くとも２つの地に分れて展開した様相がうかがえる。そうしたなかで、Ⅰ地区Ａ区～Ｃ区の分布のあり方は、南北に分れて２つの小群を形成しているかのように看取できるのである。

これらのⅠ地区Ａ区～Ｃ区に分布する住居跡、29軒について、その重複関係を見ると、天王山古墳墳丘下の住居址５軒のうち、Ａ区39号住居跡、Ａ区38号住居跡、Ａ区36号住居跡は継起的関係をもって位置していることが明瞭で、石田川期の存続期間にＡ区39号住居跡を最初に次にＡ区38号住居跡、最後にＡ区36号住居跡と少くとも３回の竪穴式住居の建て替えがなされていることが指摘できる。このような３回にわたって建て替えがなされている住居跡群は、Ｂ区10ｂ号住居跡→Ｂ区16号住居跡→Ｂ区10ａ号住居跡という一群も推定できる。一方、前後２回にわたる重複関係を示しているのは、41ｂ号住居跡→41ａ号住居跡、12ｂ号住居跡→12ａ号住居跡、８号住居跡→24号住居跡、４ｄ号住居跡→４ｃ号住居跡である。建て替えが３回におよんでいるのは４カ所、前後２回にわたって重複しているのも４か所において存在している。このことは、石田川期の期間が住居の建て替えが多くて３回、少くて２回はなされなければならない年月にわたっていたことをうかがわせる。単純な計算ではあるが、このことから推計して、石田川期の集落規模は、実際に発見される住居跡数の３分の１から２分の１程度で、年月の経過とともに漸増の方向をたどったものと推定される。

ところで、各住居跡の規模についてみると、床面積が44m²以上の大形住居跡は、Ⅰ地区Ｂ区16号住居跡と12ａ号住居跡である。これに次ぐ規模の住居跡は床面積が35m²～40m²前後のもので、

Ⅰ地区B区4ｃ号住居跡、25ａ号住居跡、17号住居跡、32号住居跡等4軒が該当する。これらの住居跡の分布状況を見ると、ほぼ2地区に分れて集合する傾向が見られ、10ａ号住居跡、17号住居跡、32号住居跡のグループ、28号住居跡、37号住居跡、41ａ号住居跡のグループが存在する。これらの床面積35㎡～40㎡に較べるとやや小形で、25㎡～35㎡の面積を有する住居跡は、A区35号・A区36号・A区38号・A区74号・B区10ａ号・B区39号・B区32号・B区14号・B区28号・B区41ａ号・C区1号・C区13号住居跡等12軒が該当する。これらのうち集合状況を強く示しているのは、天王山古墳墳丘下に存在した重複関係にあるA区35号住居跡、A区36号住居跡、A区38号住居跡、A区39号住居跡の4軒である。床面積15㎡～21㎡の住居跡は、B区6号住居跡、B区8号住居跡、B区24号住居跡、A区72号住居跡、A区73号住居跡、A区4ｄ号住居跡等6軒が該当する。これらの住居跡は2地区に分れて分布する傾向がうかがえ、B区4ｄ号住居跡・B区6号住居跡、B区8号住居跡、B区24号住居跡は、Ⅰ地区B区に存在するこのクラスよりも小形の15㎡未満のものは、A区37号住居跡、B区31号住居跡、B区41ｂ号住居跡等3軒が存在するが、最小規模のB区31号住居跡は9.0㎡前後の面積を推定できる。

このような住居跡の床面積の相違が、同一集落群において認められることは、石田川期の集落を構成する村人のあいだに家族間の較差が生まれていたことをうかがわせる。石田川期の集落は開拓者集団の営なんだ村落として、村首長を中心とする村落社会の秩序が成立していたのであろう。

このことを如実に示しているのは、集落隣接地に分布する周溝墓群である。

3　下佐野遺跡における周溝墓群と前方後方墳

下佐野遺跡において発見された周溝墓は、Ⅰ地区A区と、Ⅰ地区C区とに集中的に分布していた。この他、Ⅱ地区や、寺前地区からも発見されたが、これらの地区では発掘区が狭く、一部が明らかにされたにすぎない。しかし、その分布状況から見て、Ⅱ地区にはⅠ地区A区、C区とは別の周溝墓群の存在が推定されるものの、寺前地区でのあり方は6号古墳に付随する位置にあり、地形的にも他に多くの周溝墓群の存在を認められるような条件にない。寺前地区には約60mの間隔を置いて占地する寺前地区6号古墳、寺前地区9号古墳という前方後方形の大形墳墓が位置しておりⅠ地区A区・C区や、Ⅱ地区の周溝墓群とは性格を異にする墳墓群の存在が認められる。

このような下佐野遺跡における周溝墓群の分布は、まず、Ⅰ地区A区・C区のものが、その間にⅠ地区B区を中心に分布する石田川期住居跡群を挟んで、その南北に位置していることが注意される。前述したようにⅠ地区B区の住居跡群の分布も南北に二分される構成がうかがわれ、Ⅰ地区A区の周溝墓群はその南半部を中心に位置する住居跡群と、Ⅰ地区C区の周溝墓群はその北半部を中心に位置する住居跡群との関係が濃厚である。いずれにしてもⅠ地区A区・C区の周溝墓群がⅠ地区B区を中心に分布する住居跡群、すなわちその石田川期集落の墳墓として形成されたものであることは間違いないであろう。

ところで、下佐野遺跡Ⅰ地区、および寺前地区における周溝墓・前方後方形墳墓の規模は、次

表のごとく分類される。Ⅰ地区Ａ区の周溝墓で最大のものは、前方後方形を呈する第４号周溝墓で、全長25m、主体部分は辺16.5mで、前方部はくびれ部幅4.5m、前方部幅7.5mである。周溝の幅は4.0～5.0mで主体部分をめぐり、前方部前面は1.2m内外と狭まっている。この第４号周溝墓を除けば、いずれも方形プランを示すもので一辺が12.0～14.0mにおさまる規模のものが４基と多く、それを中心に、一辺が5.0m以上、16.0m以下という範囲におさまっている。前方後方形周溝墓の第４号墓は周溝墓群の中核的な地位を占めていることが推定される。一方、Ⅰ地区Ｃ区を中心に、一部はＤ区南端にかかる周溝墓群は、いずれも方形周溝墓で、一辺が8.0～10.0mにおさまるものが３基、10.0～12.0mが２基、12.0～14.0mのものが２基で、8.0m以上、14.0m以下のものが多くを占めている。最大のものは16.0～18.0mにおさまる規模で、Ⅰ地区Ａ区の第４号周溝墓と主体部分のみの規模はほぼ同じである。このことは16.0～18.0mの規模の方形周溝墓がⅠ地区Ｃ区の周溝墓群の中核的地位を占めていたことが推定され、それらのなかからⅠ地区Ａ区第４号周溝墓のように、前方後方形周溝墓を採用するものが出現していたことがうかがえる。そして、それぞれの周溝墓の間にこのような規模の違いが存在することは周溝墓を営なんだ集落内の家族間に家族構成や生産力の上での格差が生じており、その格差を踏えた集落内においての社会的秩序が成立していたことを示しているものと思われる。

こうした傾向は、最近の調査において、いくつかの遺跡においても認められる。玉村町下郷遺跡では、前方後方形周溝墓とされるものが、前方後円墳の天神塚古墳に先立って出現しているがそのＳＺ42号周溝墓は全長42m、後方部は１辺22.6mである。その規模から見れば、下佐野遺跡寺前地区９号古墳に匹敵する。下郷ＳＺ42号墓には、周囲に方形周溝墓が分布し、それらのなかでも、前方部前面（南位）に位置するＳＺ03号墓は１辺12mの規模、ＳＺ18号墓は１辺17mの規模で並設している。また、くびれ部左側（東南位）にも１辺10mの規模のＳＺ19号墓が位置している。これらの周溝墓の位置関係を見ると、その方向などに整合性が認められる。主墓とその付設墓という関係が認められよう。

高崎市元島名町鈴ノ宮遺跡においても、周溝墓群のなかに前方後方形周溝墓が存在する。その第７号墓は全長25.5m、後方部が１辺12.5mという規模で、同群を構成する方形周溝墓のうち最大の第１号墓の１辺21.6mという規模に比べると、後方部規模は飛躍的に大形化しているともいえない。大形の方形周溝墓を営なむ集落内の家族のなかに、前方後方形周溝墓を採用するものが出現したものと推定され、それは、下佐野遺跡Ⅰ地区Ａ区の第４号周溝墓と同じ様相を示している。

こうした周溝墓群の形成は、集落同体の変質を意味するものと考えられ、集落内に新しい社会秩序が成立していったことを示しているものといえよう。前方後方形周溝墓は集落共同体の族長的性格を有する有力家族長が、外的な影響のもとに、集落の首長としての性格を保持するようになり、採用することになったものと考えられるのである。それにたいして大形の前方後方形周溝墓ないしは前方後方墳は、そうした集落を統合し、地域形成を進めた地域首長のものと推定される。大首長のもとに集落社会を主導するいくつかの村落首長が集まり、地域社会を形成するとい

うヒエラルヒーが、その当初から確立していたことをうかがわせ、下佐野遺跡における寺前６号墳、寺前９号墳は、烏川左岸の高崎市東南部地域に君臨した地域首長の墳墓であろう。下郷遺跡では、下郷ＳＺ42号墳の周辺部に方形周溝墓が分布し、その分布のあり方には盟主墓とその従属墓としての関係が推定できる。高崎市元島名町鈴ノ宮遺跡においても、前方後方形周溝墓と方形周溝墓とが混在する。前方後方形周溝墓の第７号墓は全長25.5m、後方部辺11.6～12.5mであり、方形周溝墓に比して規模は大形である。しかし前方後方形周溝墓の後方部規模をもって方形周溝墓の規模と比較すれば、方形周溝墓の大形のものといちぢるしい差は認められない。下佐野遺跡Ｉ地区Ａ区の第４号前方後方形周溝墓と同じように、大形の方形周溝墓を造営する家族のなかに前方後方形周溝墓を採用するものが出現したものと推定される。

こうした、前方後方形周溝墓のあり方を見ると、他のものに比べて大形ではあるものの、それが位置するグループ内にあって、特に抽んでた大きさではなく、前方後方形という形態を採用したものと、下郷遺跡のＳＺ42号墓のように抽んでた大形墓で、それも前方後方形という形態を採用しているものとが存在することが注意される。後者の場合、高い墳丘を構成するものであったのか、その辺は明らかでないが、これに近い規模の下佐野遺跡寺前地区６号古墳・同９号古墳が墳丘を構成する前方後方墳であった可能性は強く指摘されるところである。前方後方形周溝墓は、前方後方墳の形態を、集落共同体内における族長的性格を有する地位にあったものが採用することになったものであろう。前方後方墳の被葬者は、集落共同体を統合、支配した地域首長の地位を確立していたものであろう。その意味では、下佐野地域にあっては前方後方墳の被葬者を盟主とする地域のヒエラルヒーは、石田川期集落が形成される初期の段階から整っていたとすべきであろう。高崎市東南方の倉賀野台地の沖積平野地域においても、前橋南部の前橋台地の沖積平野

下佐野遺跡の周溝墓・前方後方墳

	規模	Ｉ地区Ａ区		Ｉ地区Ｃ区・Ｄ区		寺前地区		II地区７区		計
		個所	計	個所	計	個所	計	個所	計	
方形	4.0～8.0	８号、９号	2					１号、２号、５号	3	5
	8.0～10.0	12号	1	Ｃ区３号・Ｃ区６号 Ｄ区２号	3	３号	1			5
	10.0～12.0	１号、２号、６号	3	Ｃ区２号・Ｃ区８号 Ｄ区１号	3			３号、４号	2	8
	12.0～14.0	５号、７号、10号	3	Ｃ区５号、Ｃ区７号	2					5
	14.0～16.0	３号	1							1
	16.0～18.0			Ｃ区１号	1					1
	不詳			Ｃ区４号	1					1
前方後方形	16.0～18.0	４号(全長25m)	1							1
						◎６号(全長約38m)	1			1
						◎９号(全長42m)	1			1
計			11		10		3		5	29

地域と同じように地域形成の動きが、まさに雨後の筍のように展開されたが、その一つの拠点に下佐野地区を中心とする烏川左岸の地域があったのである。そして、その地域首長の地位に就いたのが、寺前地区６号古墳・同９号古墳の被葬者と考えられる。その墳丘形態から見て、６号古墳が先行し、９号古墳が後出するという継続的関係をもって出現したものと推定される。

４　下佐野長者屋敷天王山古墳の性格

下佐野遺跡Ⅰ地区Ａ区に存在した長者屋敷天王山古墳からは、明治45年（1912）３月15日、副葬品が発見され、それらは一括で、発見者により帝室博物館（現東京国立博物館）に寄贈されている。今、同博物館に収蔵されている当該資料は、内行花文鏡１面、変形珠文鏡１面、滑石製勾玉10個、碧玉製管玉13個、ガラス製小玉８個、水晶製算盤玉２個、滑石製臼玉一括、軟玉製石釧２個、滑石製刀子２個、滑石製斧２個、滑石製鑿１個等である。これらの遺物類のうち、鏡類は２面とも仿製で、内行花文鏡は径8.0cm、内区は六花文、鈕の摩滅が顕著であり、朱が一部に残っている。珠文鏡も径8.0m、包んだ布が錆化して表面を覆っているが、Ｘ線写真によると内区は６分割し、その各区に珠文座乳を配している。現在、県内で発見されている内行花文鏡は、次表のとおりであり、舶載とされるものは、４点、他は仿製鏡で、内区は六花文のものが５点と、圧倒的に多いことが注意される。これらの仿製六花文内行文鏡を出土した古墳について見ると、時期的にさかのぼるものと推定されるのは、高崎市紫崎蟹沢古墳や太田市新野越巻所在とされるものであり、最近では、本古墳の南側に隣接するⅠ地区Ａ区の第４号周溝墓、渋川市行幸田山所在周溝墓等がある。仿製六花文内行花文鏡は、古墳時代初期の石田川期の村落共同体の族長の一部が所持する鏡であったことが推定される。一方、赤堀茶臼山古墳（南槨）や白石稲荷山古墳（東槨）にも副葬されており、５世紀中葉期の地域首長の墳墓の副葬品を特徴づけている。

県内における仿製内行花文鏡の副葬例は、石田川土器文化の成立した古墳時代初期の段階から地域首長勢力の支配機構が確立し、各地に前方後円墳・帆立貝型古墳が出現する和泉期、すなわち、４世紀後半から５世紀中葉に集中している。このことは、石田川期の地域形成期以来、その中心的地位を占めた村首長層と、その系譜に連なり、勢力を拡大した地域首長層が、彼等の職能を保持する祭祀・神宝の器として内行花文鏡を保持するようになったことを意味していよう。

長者屋敷天王山古墳は、発掘調査の結果、径42mの円墳の可能性が強い、周堀幅は10m～14mである。このような規模の墳丘をもった円墳は、下佐野遺跡区内からは明らかでない。天王山古墳の南方約250mの地に発見された古墳跡、Ⅰ地区Ａ区の第２号墳が径30mの円墳で、幅６m～８mの周堀をめぐらしている。周堀内埋没の土器類は石田川期であり、天王山古墳とほぼ同時期である。前方後方墳、方形周溝墓や前方後方形周溝墓を除くと、石田川期の土器類を伴なう古墳は、天王山古墳と第２号墳の２基のみである。周溝墓群を形成した村落社会のなかから、このクラスの円墳を採用するものが出現することになったことをうかがわせる。彼等は、おそらく、方形周溝墓群を形成した村落社会にあって、首長的性格をより強固にし、地域政権のセカンダリクラス

の地位についたものだったと思われる。

天王山古墳出土の遺物とされるものを検討すると、より古代の様相を示しているのは、仿製内行花文鏡のほか、軟玉製石釧と碧玉製管玉である。これらのものは共伴したものと推定して不思議はないが、他の遺物は、それらに比べると、時代的に後出する性格をもっている。石製模造品としての滑石製刀子・斧・鑿・勾玉などはつくりも具象的であり、石製模造品としては時期的に古式の様相である。軟玉製石釧・管玉とはあまり時期の離れたものでなく、継起的に位置づけられる時期のものであろう。天王山古墳の遺物の出土状態は明らかでないが、県内はおろか、東日本の古式古墳の代表格ともいえる前橋・天神山古墳にも石製模造品の出土例がある。天神山古墳ではくびれ部南面周堀縁に近い墳丘葺石間に残存した滑石製刀子が発見されている。祭祀用具の一つとして、古墳築造後ある年月を経て供献されたもののようである。天王山古墳の石製模造品も、そうした性格を有するものであった可能性は無視出来ない。他の滑石製臼玉や水晶製算盤玉などは、更に時代は下るものでその共伴関係は否定されるべきものであろう。いずれにしても、長者屋敷天王山古墳の成立年代は、石田川式土器がまだ使用されていたが、その石田川式土器を使用した社会にあって、階層的分化が進展し、村社会の新しい支配秩序が形成される5世紀前半も、第1四半期に近い時期に位置づけるのが妥当ではないだろうか。

このような、5世紀代前半も比較的早い時期に位置づけられる中規模古墳は、烏川中流の左岸地域、すなわち、高崎市東南部の平野地域にあっては、長者屋敷天王山古墳の東南方約1200m、下佐野町字戸崎から字翁前の地内に分布する茶臼山古墳（佐野村第53号墳）や大山古墳（佐野村第52号墳）が注意される。茶臼山古墳は、現在は削平されてしまって跡方もないが、径60m内外の円墳、あるいは帆立貝形墳と推定され、副葬品のなかに古式古墳の様相を示す琴柱形石製品がある。大山古墳は、茶臼山古墳の北約100mの地にある円墳で、現存する。墳丘は径60m、高さ7m、頂上部平坦面径10mで、墳丘は円錐台状を呈しており、葺石・埴輪円筒類も存在する。鏡と石製品が出土したという伝承があるが、墳丘の形態は古式古墳の様相をもっており、5世紀前半期に位置づけられる古墳であることは間違いない。そして、ここで注意したいのは、長者屋敷天王山古墳と、下佐野I地区2号古墳というアツセンブリッジにたいして、茶臼山古墳と大山古墳というアッセンブリッジが対応し、約1000m離れ、しかも、その間は生産のフィールドとなった低湿な沖積地が横たわっており、古墳群形成としては二地域に分れるということである。大山古墳の北方約500mの字亀甲地内には、鏡、刀類、土器などを出土した庚申塚古墳（佐野村第62号墳）が、沖湿地の東側に延びる微高地上に位置している。古墳群形成の上では後者の茶臼山古墳、大山古墳、庚申塚古墳というアッセンブリッジをなしていたと思われる。そして、天王山古墳群形成には下佐野遺跡群の村を形成した石田川期集落が深くかかわっていることは明らかであるが、大山古墳群は、それとは別の村を形成した石田川期集落が深くかかわって成立したものであろう。大山古墳の東方約350mには倉賀野万福寺遺跡がある。あえて云うならば、万福寺遺跡は大山古墳群を形成した首長層と直接かかわりをもった集落と、その周溝墓群であったのではないかと推定したい。

このことは、石田川系土器文化を担った烏川左岸の倉賀野台地の沖積平野に入植した村人達は村首長の指導のもとに結成された単位集団であり、この単位集団の村は、灌漑水利等で地域的に利害を共有する他の単位集団の村々と寄り集まる形で、一つの地域圏を形成したものであったことをうかがわせる。その地域圏の形成の頂点に位置したのが、その初期にあっては、下佐野第４号のごとき前方後方形周溝墓を造営した首長層であり、その支配権を継承発展させた天王山古墳や大山古墳のごとき大形円墳を構築した首長層であったのであろう。とにかく前方後方形周溝墓から円墳へという展開が見られるのである。このことは、一体何を意味しているのであろうか。下佐野、倉賀野地区の古墳形成を考える上で無視出来ないのは、倉賀野浅間山古墳、同大鶴巻古墳である。前者は全長168m、後円部径102m、前方部幅75mという規模であり、後者も全長120m、後円部径72m、前方部幅54mという規模である。両古墳とも周堀を有し、埴輪円筒列を配列した古墳である。その墳丘の形態は古式の様相を示しており、五世紀初頭から前半代に位置づけられるものであろう。

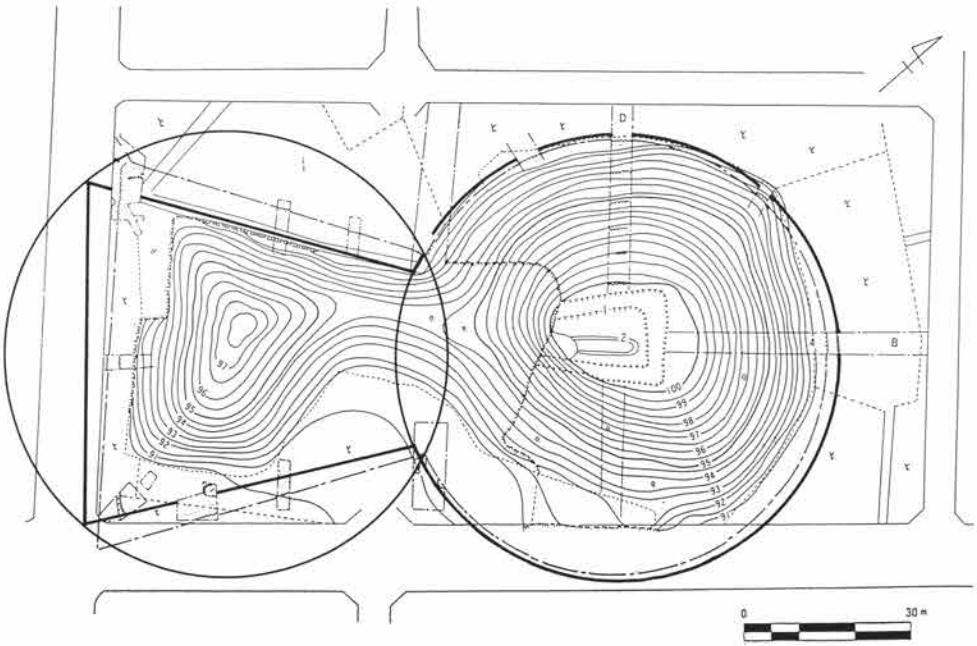
県内における前方後円墳として、初現的な様相をもっているものは、前橋天神山古墳が注意される。全長129m、後円部径75m、前方部幅68mで、周堀を設けており、墳丘部は葺石を施設しているが、埴輪類は存在しない、後円部墳頂部に底部穿孔丹塗壺形土器が配列されていた。主体部は、方形の土坑を後円部頂部から設け、その底部に墳丘主軸方向にあわせて内側の長さ7.8m、巾1.4mという長大な粘土槨を置いており、鏡５面、紡錘車４点、素環頭大刀１点、大刀４点、剣12点、銅鏃30点、鉄鏃78点やりかんな８点、のみ３点、斧４点、釣針５点、坩１点などが副葬品にある。群馬県内における最も充実した内容を示しており、前方後円墳の初現を飾るにふさわしい古墳である。この前橋天神山古墳が利根川（現広瀬川筋）の右岸に広がる前橋台地の沖積地を開拓した入殖者集落を統合し、その頂点に位した豪族の古墳であることは、誰も疑わないと思う。４世紀後半から終末期に位置づけられ、隣接して位置する全長130mの前方後方墳、前橋八幡山古墳に引き続いて構築されたものと推定される。前橋八幡山古墳の主体部副葬品は明らかでないが、これに対応する出現期の様相をもつ高崎市元島名将軍塚古墳では、小形獣形鏡１点、石釧１点、鉄剣片、やりかんな片等である。小形仿製鏡１面を中心として小量の構成である。このことは、東国における前方後方墳に見られる普通的な傾向であり、前橋八幡山古墳もそうした性格をもつ古墳と推定される。いずれにせよ前橋台地寄りの地域にあっては、古墳時代初期において地域に君臨した大首長の墳墓に前方後方墳から前方後円墳という形態的変遷があり、前方後円墳の造営段階になって、副葬品の性格が畿内大和政権と極めて結びつきの強い様相に変質しているのである。すなわち、前方後円墳は開拓期から地域統合への新たな進展をみるなかで、畿内、大和政権とのかかわりを強化し、それを梃子に地域統合を進めた首長によって採用されたものであったのであろう。

烏川寄りの倉賀野台地においては、初期に下佐野遺跡寺前地区６号墳、９号墳の２基の前方後方墳が前後して出現し、その後を受けて、浅間山古墳・大鶴巻古墳が継起的に出現したものと推

定される。前方後方墳から前方後円墳へというその展開を契機に5世紀代初頭に飛躍的な発展のあったことがうかがえるのである。

ところで、前橋台地や倉賀野台地地域における前方後円墳の変遷についてたどってみると、まず、前橋台地においては、前橋天神山古墳に後続する大規模古墳は明らかでない。前橋市文京町から東南方向に延びる広瀬川（旧利根川）の右岸河崖縁に沿っては山王町にかけて、「上毛古墳綜覧」によれば、149基の古墳が存在した、そのうち、前方後円墳とされるものは、八幡山古墳、天神山古墳を含め、15基としている。しかし、確実に前方後円墳として把握できるのは8基にしかすぎない。そして、5世紀代に位置づけられるのは、八幡山古墳西北方に存在した全長80mの規模をもち、竪穴系主体部で石製模造品、馬具類を出土した鶴巻古墳である。しかし、副葬品の性格から見てその構築年代は5世紀末をさかのぼるものではないであろう。他は、いずれも6世紀に位置づけられるものであり、全長104mの天川二子山古墳のごときは6世紀後半のものと考えられよう。前橋天神山古墳の出現以降、それを凌駕する規模の前方後円墳は存在せず、また、前橋天神山古墳に継起する大規模前方後円墳は、前橋台地からは姿を消しているのである。前橋天神山古墳の被葬者首長が確立した首長権を継承した首長は、前橋台地にその墳墓を営なむことはなかったといえる。他の地域に移るか、前橋台地を包括するより広い地域統合が進み、他の地を墳墓造営の地を定めたのではないかと推定される。前橋天神山古墳の後に出現する大規模前方後円墳は、倉賀野浅間山古墳と考えられ、その墳丘形態は、規模こそ異なるものの同一の設計法にもとづいて企画された墳丘である。すなわち、倉賀野浅間山古墳は前橋天神山古墳の系譜にあるものであり、5世紀初頭において、前橋台地、倉賀野台地という利根川本流と烏川とにはさまれた広大な地域を統合し、毛野政権の形成に成功した首長の墳墓と推定されるのである。前橋天神山古墳の首長によって確立した毛野政権の宗主権は、倉賀野浅間山古墳の首長に継承され、最終的には太田天神山古墳の首長に帰すものとなったのであろう。4世紀後半から5世紀前半にかけては、大筋において、以上述べたような毛野政権形成の動きがあったのである。

こうした毛野政権形成の推移するなかで、長者屋敷天王山古墳は、毛野政権内にあって盟主として君臨した浅間山古墳あるいは大鶴巻古墳の被葬者首長の支配下に組み入れられていった地域首長の墳墓と推定されるのである。



第377図　前橋天神山古墳と倉賀野浅間山古墳の墳丘平面企画模式図の対比
（実線が浅間山古墳墳丘プラン）

墳丘の実際の規模は天神山古墳＝130m
浅間山古墳＝168mでその比率は１：1.29

第4節　小形内行花文鏡について

― 下佐野遺跡出土鏡について ―

小　林　三　郎

〔1〕

我が国における仿製鏡の成立が、いつのことであったかは、いまだに結論がない。弥生時代の、とりわけ後期後半に於いて北部九州地方を中心にみられる「小形仿製鏡①」あるいは「小銅鏡②」が、その原鏡や母型が比較的把握し易い仿製鏡として認識されている。それらは、その出土状況、伴出遺物に共通点の多いことなどから、その製作年代についても、又、大陸や半島との関係についても検討が進められつつある。しかしながら、古墳時代の古墳副葬鏡にみられる諸仿製鏡と弥生時代にみられる「小形仿製鏡」との間には、年代的な問題だけでなく、製作技法や原鏡の同定作業の中でいくつかの検討事項を含んでいることは確かである。

古墳の副葬鏡が、中国製三角縁神獣鏡を中核として方格規矩四神鏡・内行花文鏡と画文帯神獣鏡の一部がそれに加わるという組み合わせで、古墳の成立当初は出発したと考えられてきた。事実、初期の古墳の中では副葬鏡を持たないグループの編年作業が困難を極めていた時期もあった位である。古墳の編年に、古墳出土の土師器編年が応用されるようになってからは、まだ日が浅い。墳丘出土の土器、内部主体に副葬品として土師器が加わる段階の認識など、ようやく集落跡出土土器と古墳とが―それでもなお間接的であるが―結びついてきた。しかしながらそこから出発する古墳編年の作業上の矛盾が改めて提示されることにもなった。即ち、古墳出土土器の年代が古墳の年代を素直に表現しているのか否かの問題である。古墳の副葬鏡の年代が、即ち古墳の年代を表現しえないのと同様に古墳出土土器も古墳を構成する一要素にすぎず、そのまま年代を表しえないという見方をすれば、古墳構成要素の総合的理解を深めることが古墳編年を進める上で先決の問題となることは必然である。

弥生時代の仿製鏡と直接的に関連しないだろうと推測される古墳時代の仿製鏡のもつ歴史的な意味は、弥生時代社会から古墳時代社会へと変化する中で、鏡を媒介とする権力構造の有無を検証し、三角縁神獣鏡を代表とする権威の象徴的古墳と、そうでないものとの区別をしながら、古墳発生当初における政治的・社会的重層構造を導き出すところにある。ことに古墳出土土器に導き出される古墳の年代観は、従来の年代観よりもはるかに溯るものを想定するようになり、各地における弥生時代との接点について種々な問題を投げかけるに至った。古墳の発生が、極めて重大な意義をもつ故は、この社会変革の原点の解明という一点にかかっていると云ってもよいだろう。

〔2〕

下佐野遺跡の前方後方形周溝墓から検出された鏡は、小形の八花文内行花文鏡である。面径が比較的小さいことと、鋳上りが不鮮明なこと、内区八花文以外の文様構成が中国鏡のそれの中に

みられないことなどから、これを古墳時代の仿製鏡と判断している。古墳時代の仿製鏡とする見方が的を射ているとすれば、仿製鏡の中では類例が少ないものということができる。中国製内行花文鏡のほとんどが八花文を表現しているから、それを模倣したとすれば八花文の仿製鏡ができ上がるとみるのは当然であろう。弥生時代にみられる小形仿製鏡の中に、内行花文を表現しているものがあるが、花弁数も異なるし原鏡となった中国鏡も異なっていることが指摘される。弥生時代の仿製鏡と古墳時代のそれとが流れを異にしていると考える原因はそこにある。

古墳の副葬鏡の中に仿製鏡がいつから加わるかという問題はかねてから論ぜられてきた。古墳副葬鏡の中の、いわゆる伝世鏡類が最初に模倣の対象となったとする梅原末治氏の見解から脱して、三角縁神獣鏡がいち早く模倣の対象となったと指摘した小林行雄氏の見解[③]は、現在でもおおくの支持を得ている。小林氏の一連の三角縁神獣鏡の同笵鏡論の中でもそれは生命を保っているし、後続の近藤喬一氏らの論考[④]の中でもそれを傍証する部分がある。しかし、仿製鏡全体の流れの中では、いくつかの解決しなければならない問題が介在する。たとえば、伝世鏡類の模倣と考えられる仿製鏡と中国製三角縁神獣鏡との伴出関係はしばしば見られるし、中国製の伝世鏡類と仿製三角縁神獣鏡との伴出関係もよく知られるところである。ところが、古墳時代の仿製小形鏡の出土例についてみると、伝世鏡類や三角縁神獣鏡類との伴出例が、極めて少ないことに気付くのである。単に製作年代が違うからというだけでは説明のつかないことである。

1986年に京都府城陽市で発見された芝ケ原古墳出土鏡[⑤]は、その模倣の原鏡は不確定ながら、おそらく我が国における仿製鏡とみてよいものである。内部主体の墓坑上面に敷き詰められた礫の中から、いわゆる庄内式土器（壺形土器・高杯形土器）が検出されたというから、芝ケ原古墳の年代や出土鏡の年代について重要な示唆が含まれていることになろう。古墳の開始を庄内式土器の時代に直ちに比定することには大きな問題があるにしても、その伝統が色濃く残存する時期のものという解釈はできるかも知れない。その段階ですでに伝世鏡類や三角縁神獣鏡以外の模倣鏡が出現していたとすれば、仿製鏡全体に関する年代観を大きく変更せざるをえなくなる。しかし、弥生時代の鋳鏡技術との差は大きく、その系譜に連続する要素を検出できないのが現状ではなかろうか。

〔3〕

全国的視野でみると、古墳時代初期の段階では、古墳副葬鏡以外に小形の仿製鏡が集落跡などから検出される例がいくつか存在する。いずれも面径5cm位から7～8cm位の小形のもので、重圏文鏡であったり内行花文鏡であったりする。これらについては筆者がかつて論じたことがある[⑥]。しかし、今までのところ類例が古墳の副葬品となっている例は極めて少ない。と同時に、古墳時代初期の周溝墓の副葬品となっていることもその例を知らない。そういう意味では、下佐野遺跡出土例は、極めて特殊な例と考えざるを得ない。関東地方では、東京都八王子市宇津木遺跡の方形周溝墓の溝中から、素文小形鏡の出土例[⑦]が知られる以外はまだ類例を見ない。下佐野例にしても宇津木例にしても、あるいは他の当該時期の集落跡出土例をも含めて、弥生時代小形仿製

鏡群と直接的に系譜をたどることのできる材料はないと云ってよい。又、京都府芝ケ原古墳出土例を、古墳時代に於ける最初期の仿製鏡としても、その間における鏡背文様の系統や技術的な面での差違をみとめなければならないのが現状である。筆者はかつて古墳時代の小形仿製鏡を論ずる中で、仿製鏡の系譜には2つの流れがあるのではないかと指摘したことがある[6]。すなわち、古墳時代における三角縁神獣鏡類・伝世鏡類の如き大形鏡の模倣によるものと、系譜的には連続しないが、弥生時代の小形仿製鏡を基盤とする小形鏡の仿製鏡との2者である。前者は本格的な古墳の副葬品として前期古墳の中核的部分を構成し、後者は政治的社会構造の基礎的な部分で、言い換えれば全国各地に残る農業協業体の祭祀的媒介物としての役割を堅持させられたものとして遺存したのではないかと推定した。それ故に、集落跡から脱却しえない小形仿製鏡に社会的な意味あいを与えようとしたのであった。

下佐野遺跡では、溝中の出土とは云え、前方後方形周溝墓に付随するものであり、同時に伴出した土器群があって、その埋置時期の判断に容易なものがある。まして、周溝墓と呼ばれるすべてが「墓」であるとは断じ切れないという意見すらある。又、周溝部がいわゆる共同墓地の埋葬部分ではないかとする意見もある。いずれにしても周溝墓全体は、その周溝を含めて一つの墓域を形成しているという理解は妥当なものであろう。そこで、鏡の出土位置が大きな問題となろう。すなわち、下佐野遺跡では、出土鏡が墓の埋葬品ではなく、共同墓の墓域内に埋置された祭祀的性格の濃いものと理解した場合に、他の当該期のたとえば集落跡の出土例と同じような性格のものとして扱いうることになりはしないだろうか。周溝墓が、いわゆる古墳と違って独立的な性格を示していないが故の解釈の仕方ということもできる。

下佐野遺跡の周溝墓出土土器の中心は石田川式土器であり五領式土器である。現在のところその年代は西暦4世紀代に比定されている。同地には他にも周溝墓があるが鏡の出土はない。又、周溝墓に隣接する集落跡からも鏡の出土はないという。調査の区域に限定があって全体を見ることができなかったので、詳細はなお不明というべきであろう。

下佐野地区を含めて現在の高崎市周辺、井野川、烏川流域での初期古墳は、芝崎・蟹沢古墳と元島名将軍塚古墳が挙げられよう。殊に将軍塚古墳は、前方後方墳という墳形を持つ点で下佐野方形周溝墓との関連が論ぜられるべきであろう。元島名将軍塚古墳の調査報告[8]によれば、出土土器の面での共通性が認められ、両者の年代が極めて近接していることが伺われる。元島名将軍塚古墳には仿製四獣文鏡が副葬鏡としてあり、古墳時代の小形仿製鏡としてはその原鏡を推定しやすい鏡式のものである。面径7.1cmというから同式鏡の中でも小形の部に属している。下佐野鏡と軌を一にする仿製鏡という見方が出来そうである。

墓としての性格の相違の中で、鏡式こそ違え同類の小形仿製鏡を埋置したり副葬したりという行為は、古墳の成立という歴史的事象の中でどのように位置づけられるであろうか。それはおそらく集落内共同祭祀からより広い地域を含めた政治的共同祭祀への変革を意味するものであろう。

(註)

① 高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」考古学雑誌58－3　1972年
② 杉原荘介『日本青銅器の研究』1972年　中央公論美術出版
③ 小林行雄「古墳の発生の歴史的意義」史林38－1　1955年
④ 近藤喬一「三角縁神獣鏡の仿製について」考古学雑誌59－2　1973年
⑤ 近藤義行「芝ケ原古墳」城陽市埋蔵文化財調査報告書16　1987年
⑥ 小林三郎「古墳時代初期倣製鏡の一側面」駿台史学46　1979年
⑦ 大場磐雄他『宇津木遺跡とその周辺』　1973年
⑧ 田口一郎他『元島名将軍塚古墳』高崎市文化財調査報告書22　1981年

〔参考文献〕

梅沢重昭「群馬県地域における初期古墳の成立」群馬県史研究2・3　1978年

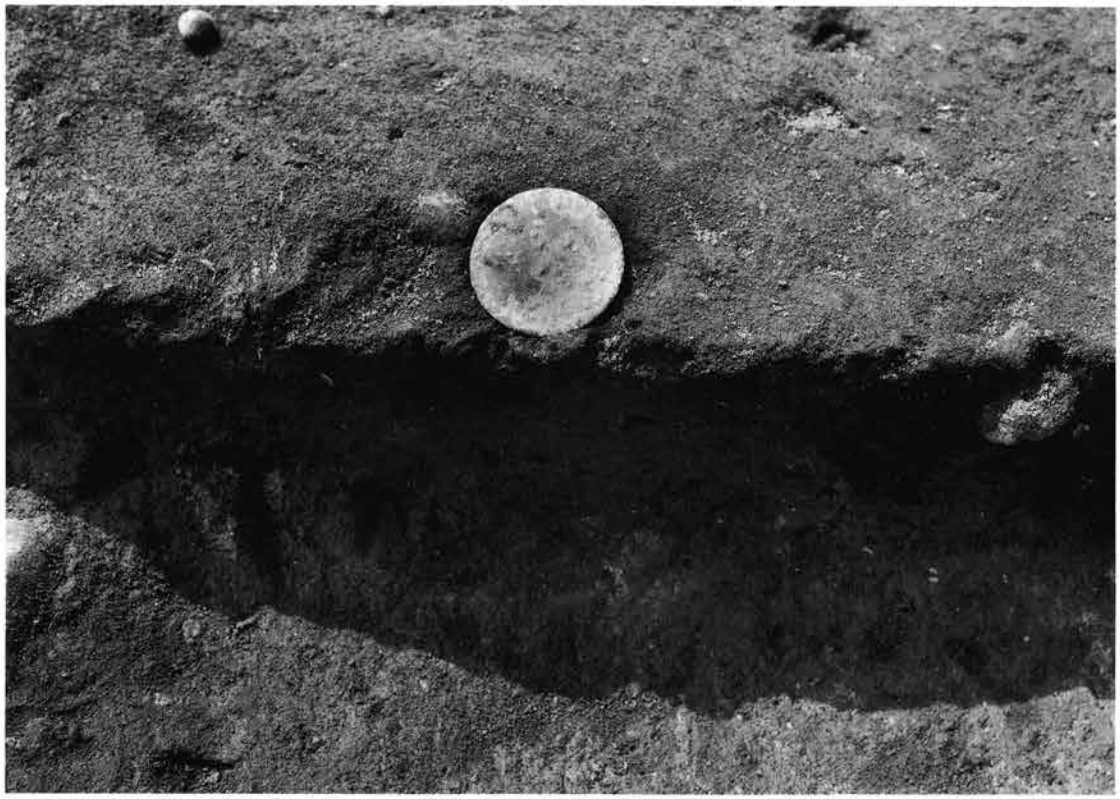
写　真　図　版

Ⅰ地区A区1号方形周溝墓

Ⅰ地区A区1号方形周溝墓周溝内土坑

Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓（後方部より）

Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓（前方部右側周溝）



Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓小形仿製鏡出土状況

Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓遺物出土状況(後方部後方)

Ⅰ地区Ａ区７号方形周溝墓

Ⅰ地区Ａ区８号方形周溝墓遺物出土状況

Ⅰ地区Ｃ区１号方形周溝墓

Ⅰ地区Ｃ区２号方形周溝墓

Ⅰ地区Ｃ区５号方形周溝墓

Ⅰ地区Ｃ区５号方形周溝墓遺物出土状況

Ⅰ地区Ｃ区６号方形周溝墓

Ⅰ地区Ｃ区７号方形周溝墓遺物出土状況

寺前地区３号方形周溝墓遺物出土状況

2659

2196

2637

Ⅰ地区Ａ区１号・４号周溝墓出土遺物

2633

2636

2634

2635

2644

2648

Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓出土遺物

2645

2646

2647

2649

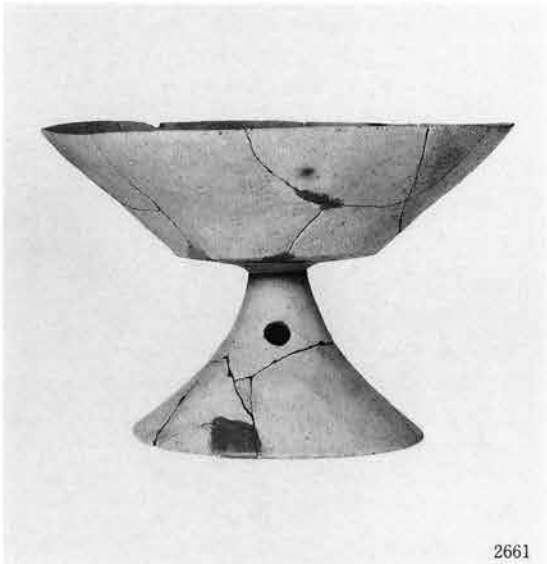
2650

2651

Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓出土遺物

2642

2660


2661

2697

3605

3605

Ⅰ地区Ａ区４号前方後方形周溝墓出土遺物

2663

2664

2665

2666

2667

2668

2669

2672

2670

2671

Ⅰ地区Ａ区５号方形周溝墓出土遺物

2673

2675

2674

2677

2676

2679

2680

Ⅰ地区Ａ区６号・７号方形周溝墓出土遺物

2681

2682

2687

2689

2690

2684

2685

2686

2684

2685

2691

Ⅰ地区Ａ区８号・９号方形周溝墓出土遺物

2693

3795

2694

3796

3798

3799

Ⅰ地区Ａ区12号・Ｃ区１号・２号・３号方形周溝墓出土遺物

3800

3802

3803

3805

3808

3807

3809

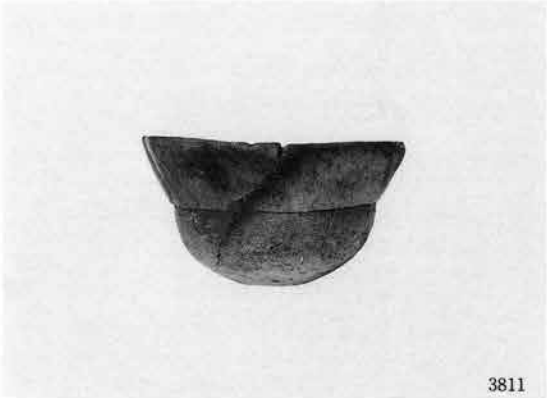
3810

Ⅰ地区Ｃ区３号・５号方形周溝墓出土遺物

3816

3817

3818


3811

3812

3814

3813

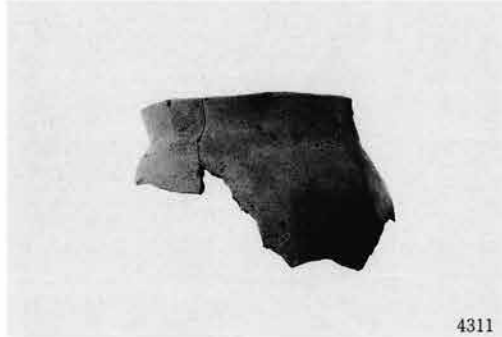
Ⅰ地区Ｃ区５号・６号・７号方形周溝墓出土遺物

3819

3821

3820

3824


4311

3823

3822

Ⅰ地区Ｃ区７号・Ｄ区１号方形周溝墓出土遺物

4310

4314

4315

4316

4317

4319

Ⅰ地区Ｄ区１号・２号方形周溝墓出土遺物

4318

4320

4427

4426

4757

Ⅰ地区Ｄ区２号・寺前地区３号方形周溝墓出土遺物

Ⅰ地区Ａ区１号古墳

Ⅰ地区Ａ区１号古墳南側周堀

Ⅰ地区Ｂ区２号古墳石室

Ⅰ地区Ｂ区４号古墳

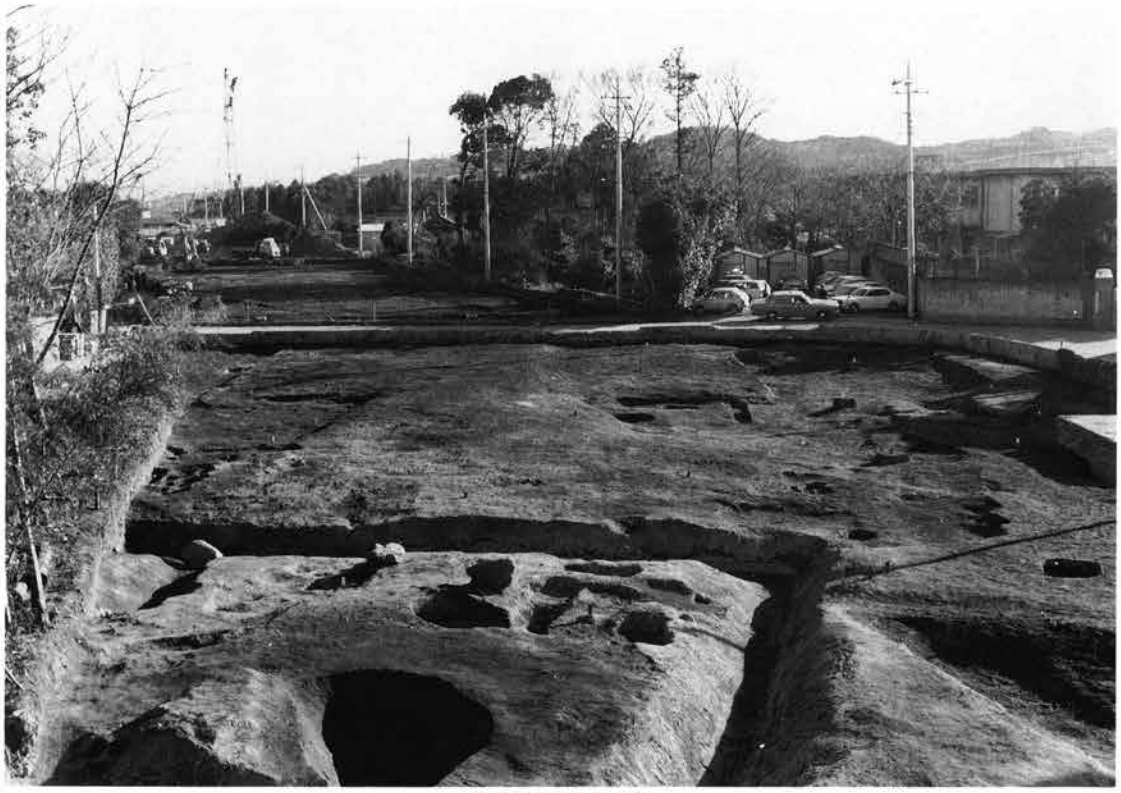
Ⅰ地区Ｄ区９号古墳

Ⅰ地区Ｄ区９号古墳石室

Ⅰ地区Ｄ区９号古墳遺物出土状況

Ⅰ地区Ｄ区９号古墳石室

寺前地区５号古墳石室



寺前地区６号古墳

2562

2563

2564

2565

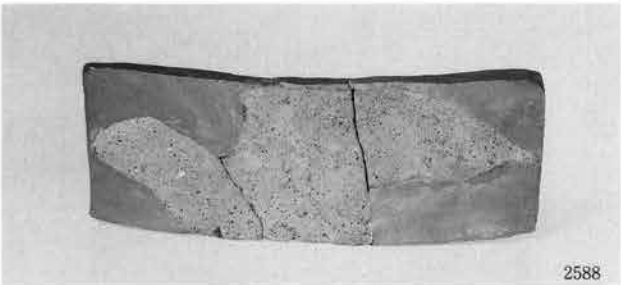
2566

2567

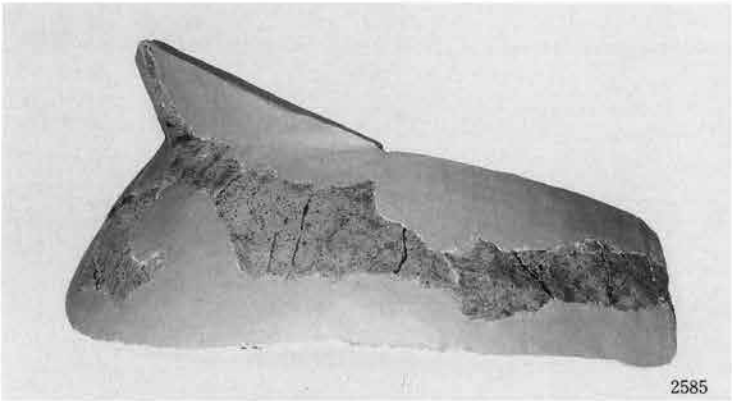
2575

2583

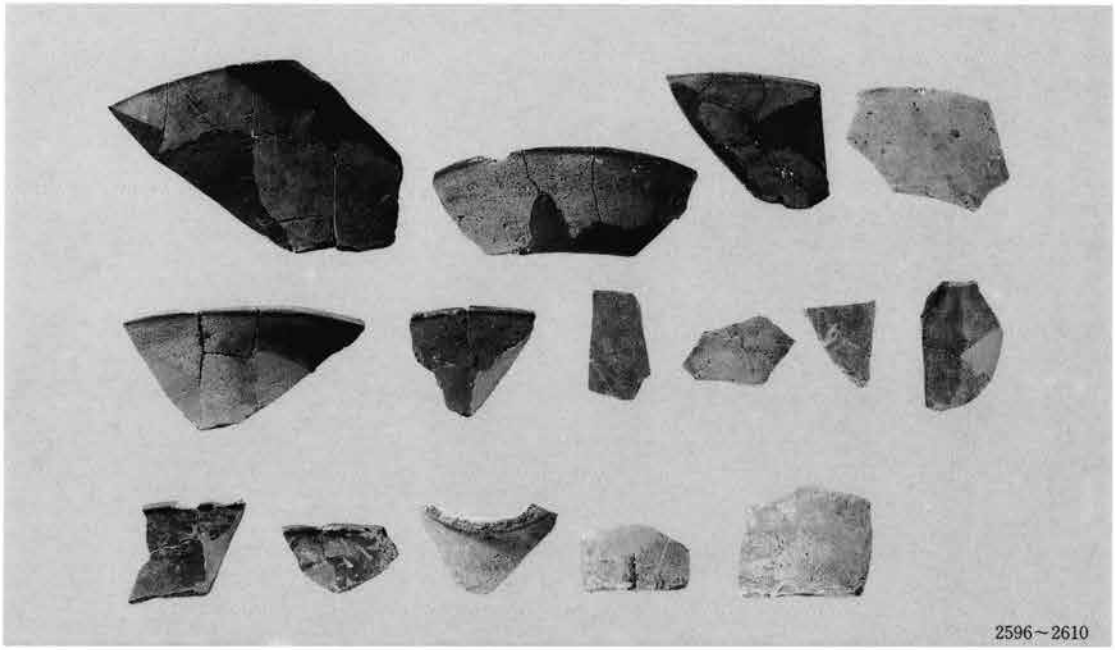
2576


2588

Ⅰ地区Ａ区１号古墳出土遺物


2585

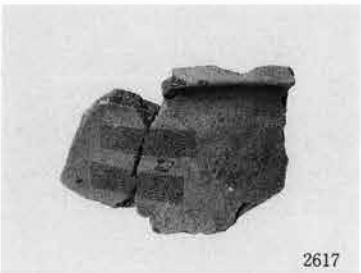
2586


2596～2610

2613

2618

2615


2617

2621

Ⅰ地区Ａ区１号・２号古墳出土遺物

2612

2614

2616

2622

2619

2622

2620

2626

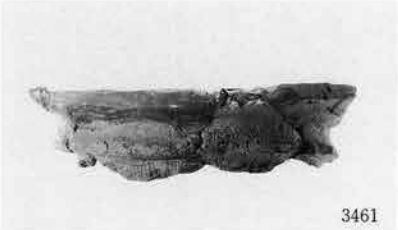
2627

2623

2624

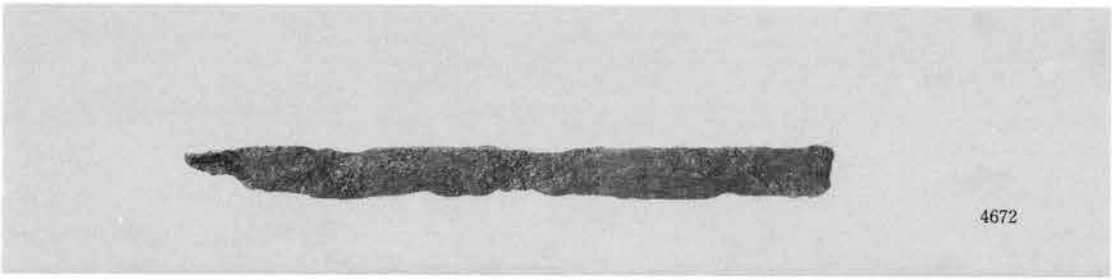
2625

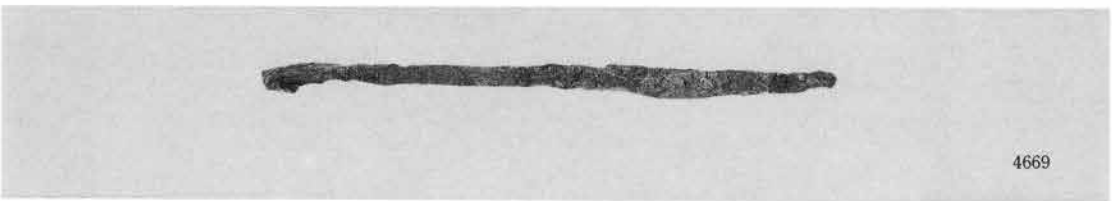
2628

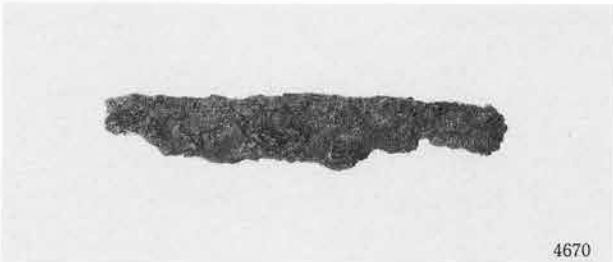

3461

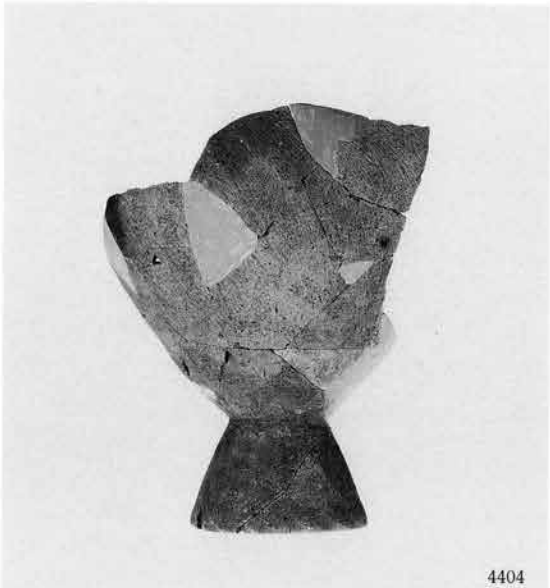
3462

Ⅰ地区Ａ区２号・Ｂ区３号古墳出土遺物









寺前地区５号・６号古墳出土遺物

Ⅰ地区Ｂ区１号石槨

Ⅰ地区Ｄ区１号石槨

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第77集

下佐野遺跡

Ⅰ地区・寺前地区(2)
縄文時代・古墳時代編②
—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第11集—

平成元年2月25日　印刷
平成元年2月28日　発行

編　集／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52－2511(代表)

発　行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52－2511(代表)

印　刷／朝日印刷工業株式会社